山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 290 集

三ノ側遺跡

さんのがわいせき

山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告書

２０１３年３月

山梨県教育委員会

山梨県産業労働部

三ノ側遺跡

（さんのがわいせき）

山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告書

２０１３年３月

山梨県教育委員会
山梨県産業労働部

正誤表　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第290集「三ノ側遺跡」

頁・図版番号等	誤	正
P.9　1号竪穴建物跡	遺構：第26図	遺構：第4図
P.17　3．溝状遺構	一覧表（第_表）	一覧表（第1表）
P.19　4．土坑・ピット	一覧表（第_表）	一覧表（第2表）
P.21　5．遺構外出土遺物	（第_55図）	（第54・55図）
P.58　第33図（図中遺構名）	1号竪穴建設跡	1号竪穴建物跡
P.60　第35図（図中遺構名）	2号竪穴建設跡	2号竪穴建物跡
P.61　第36図（図中遺構名）	3号竪穴建設跡	3号竪穴建物跡
P.62　第37図（図中遺構名）	4号竪穴建設跡	4号竪穴建物跡
P.69　第44図（図中遺構名）	5号竪穴建設跡	5号竪穴建物跡
P.96　（2）土器胎土と器種	（図65）	（図64）
抄録　所在地ふりがな	やまなしけんつるぐんかみやごちょうめ	やまなしけんつるしかみやごちょうめ
抄録　所在地	山梨県都留郡上谷五丁目	山梨県都留市上谷五丁目

三ノ側遺跡上空から東側を望む

三ノ側遺跡全体写真（合成写真）

甲斐型の土師器甕

1 号竪穴建物跡

9 号竪穴建物跡

13 号竪穴建物跡

堀之内原タイプ・相模系の土師器甕

4 号竪穴建物跡

11 号土坑

駿東型の土師器甕

7 号竪穴建物跡

12 号竪穴建物跡

三ノ側遺跡のあらまし

三ノ側遺跡は、山梨県都留市田原から上谷にかけて存在する大規模な遺跡です。1981（昭和56）年と2001・2002（平成13・14）年には、今回の調査区よりも西側の地点で都留市教育委員会によって発掘調査が行われ、 奈良・平安時代の竪穴住居跡（竪穴建物跡）などが発見されています。特に1981（昭和56）年に行われた発掘調査では、皇朝十二銭の和同開珎や富寿神宝と呼ばれる銅銭、銅製の小壺などが出土しています。

調査地点上空から遺跡西側を望む

古代（奈良・平安時代）の山梨県は甲斐国と呼ばれていました。甲斐国の中には、「山梨」「八代」「巨麻」「都留」の４つの郡があり、三ノ側遺跡のある現在の山梨県都留市周辺は、当時の都留郡に含まれます。また、都留郡の中には、「相模（さがみ）」「古郡（ふるごおり）」「福地（ふくち）」「多良（たら）」「加美（かみ）」「征茂（せも）」「都留（つる）」の７つの郷が置かれていました。三ノ側遺跡周辺は、この内の多良郷にあたるとされ、都留市教育委員会による調査で当時の貴重品が出土していることから、多良郷の中でも中心的な役割を持った集落が存在したのではないかと考えられています。

７号竪穴建物跡のカマド

今回の発掘調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴うもので、工事に先立って、2011（平成23）年６月から12月にかけて行われました。調査を行った場所は、県立谷村工業高等学校の西側に隣接する水田として利用されていた区画で、それまで考えられていた三ノ側遺跡の範囲の中でも最も東側の地点にあたります。

９号竪穴建物跡の土師器甕出土状況

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡13軒、掘立柱建物跡４棟、溝状遺構７条、奈良時代から中世にかけての土坑129基などが発見されました。また、

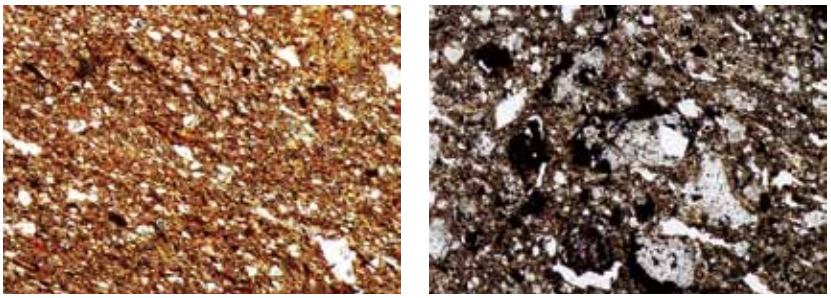
４号竪穴建物跡

４号竪穴建物跡から出土した土師器甕

竪穴建物跡のカマドを中心に、土師器や須恵器などの土器、刀子などの鉄製品が出土しました。この中でも、土師器の甕には、甲斐国（甲府盆地）で作られた甲斐型土器の他に、都留郡内に多く見られる堀之内原タイプ、現在の神奈川県にあたる相模地方で作られた相模型、静岡県東部で作られた駿東型といった様々な地域のものが見られました。このことは、三ノ側遺跡周辺の地域が、甲斐国だけでなく周辺の国々と強い結びつきを持っていたことを示していると考えられます。

今回の発掘調査で出土した土師器の産地を特定するために、４号竪穴建物跡から出土した土師器を試料として、胎土（土器の原材料となる土）の分析を行い、土器の産地の特徴を示す基礎的なデータが得られました。また、上杉陽先生（都留文科大学名誉教授）による調査地点の地層の観察によって、縄文時代早期（約8,500 年前※猿橋溶岩流出期）から現代に至るまでの詳細な地層の堆積状況のデータを得ることができました。

2011・2012（平成 23･24）年に谷村工業高校の敷地内で行われた試掘調査の結果から、三ノ側遺跡の範囲はさらに東側へ広がることがわかりました。今回の調査で得られたデータを含め、今後の調査研究の進展とともに三ノ側遺跡および都留郡多良郷の全体像が明らかにされていくことが期待されます。



胎土分析の顕微鏡写真（パリノ・サーヴェイ株式会社撮影）

地層の堆積状況

序　文

本書は、2011（平成 23）年度に発掘調査が行われた三ノ側遺跡の発掘調査報告書です。三ノ側遺跡は、山梨県都留市田原から上谷にかけて立地する遺跡で、今回の調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設工事に伴い実施しました。

三ノ側遺跡は、今回の調査が実施される以前から、東西約 540 m、南北約 170 mに渡って分布すると推測される大規模な遺跡でしたが、今回の調査に先立って行われた試掘調査や、2011・2012（平成 23・24）年度に行われた県立谷村工業高等学校敷地内における試掘調査の結果、従来よりもさらに東側へ遺跡の範囲が広がることが確認され、現在では、東西約 860 mの範囲が遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）として登録されています。

三ノ側遺跡の範囲内においては、過去に都留市教育委員会による発掘調査が２回実施されており、奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物、土坑などが発見されています。特に、1981（昭和 56）年に今回の調査地点から西へ 100 mほど離れた地点での発掘調査では、皇朝十二銭の和同開珎・富寿神宝や銅製の小壺といった県内でも希少な遺物が出土しました。遺跡周辺は古代の甲斐国都留郡に置かれた７つの郷の内、多良郷にあたる地点と推定されており、三ノ側遺跡には多良郷の中でも中心的な役割を担った集落が存在したのではないかと考えられております。

本発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡 13 軒、掘立柱建物４棟、溝状遺構７条、奈良時代～中世の土坑 129 基などを検出しました。遺物は、竪穴建物跡を中心に出土し、甲府盆地で生産された甲斐型の土師器や在地産の堀之内原タイプの他、相模型、駿東型といった周辺地域から持ち込まれた土師器甕が見られます。このような土師器甕の多様性から、当時の三ノ側遺跡周辺の地域が、甲斐国だけでなく周辺の国々と強い結びつきを持っていたことが窺えます。また、４号竪穴建物跡から出土した土師器の一括資料について胎土分析を実施し、それぞれの土器型式における産地について興味深いデータが得られました。

本書が、古代甲斐国における都留郡・多良郷の実態や甲斐国と周辺国との情勢を考える上で、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたって御指導・御協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2013 年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　八 巻 與 志 夫

例　　言

1　本書は、山梨県都留市上谷に存在する三ノ側遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、山梨県産業労働部から山梨県教育委員会が依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。

3　発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。

4　本書の執筆･編集は、依田幸浩、加々美鮎実が行った。また、第４章は自然科学分析を委託したパリノ･サーヴェイ株式会社の報告書を掲載した（第１節　胎土分析の薄片観察表は割愛）。

5　発掘調査・整理作業及び本書の刊行にあたり、測量基準点及びグリッド杭設置を株式会社イビソクに、遺跡の空中写真撮影及び写真測量・図化を株式会社シン技術コンサルに、金属製品の保存処理を公益財団法人　山梨文化財研究所に委託した。

6　遺構の測量及び図化には電子平板「遺構くん」を使用した。

7　遺構・遺物の写真については、依田、青木真一が撮影した。胎土分析試料の写真はパリノ・サーヴェイ株式会社撮影の写真を、また遺跡の空中写真は株式会社シン技術コンサル撮影の写真を使用した。

8　本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

9　調査にあたり、次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。（順不同・敬称略）
上杉　陽、奈良泰史、守屋雅幸、都留市教育委員会

凡　　例

1　遺構・遺物図面の縮尺は図中に示した。原則として、遺構は竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・ピット：1/60、溝状遺構：1/150・1/60、カマド：1/30、遺物は土器：1/3、鉄製品：1/2 である。

2　遺構番号は、本調査における調査区全体の通し番号とした。

3　調査区内には世界測地系座標に基づく５m四方のグリッドを設置し、全体図におけるＸ・Ｙ軸延長線上の数字は座標線の数値である。よって南北のグリッド線および図中の方位マークは真北を指す。

4　遺構図版中のドットマークや出土遺物に付した番号は、遺物図版の番号に対応している。

5　遺構断面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。

6　遺構図版中の網点は焼土・灰白色粘土範囲を表す。遺物のドットは●が土師器、▲は須恵器、■は青磁、◆は金属製品、◇は炭化物を示し、番号はそれぞれ遺物図版の番号と対応している。遺物図版中の遺物断面は、黒塗りが須恵器、網点が灰釉陶器・青磁を表す。

7　遺物観察表に記載した色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』1990 版による。

8　本報告書中遺跡分布図には、国土地理院発行の 1/25,000 地図を利用した。

目　　次

巻頭写真図版
あらまし
序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の目的と課題……1
　第３節　発掘調査の経過……1
　第４節　室内調査等の経過……2
　第５節　調査組織……2
　　三ノ側遺跡発掘調査にかかる法的手続きおよび報告事項……2

第２章　遺跡の位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の方法と成果……6
　第１節　発掘調査の方法……6
　第２節　調査地点の基本層序……6
　第３節　発見された遺構と遺物……9
　　溝状遺構一覧表……22
　　土坑・ピット一覧表……23
　　遺構図版……26
　　遺物図版……58
　　遺物観察表……82
　　金属製品観察表……90

第４章　自然科学分析……91
　第１節　胎土分析……91
　第２節　放射性炭素年代測定・樹種同定・土壌理化学分析……109

第５章　総括……118

写真図版

図版目次

第１図　三ノ側遺跡と周辺の遺跡位置図……4
第２図　三ノ側遺跡周辺詳細図……5
第３図　三ノ側遺跡全体図・基本土層図……７・８
第４図　１号竪穴建物跡……26
第５図　２号竪穴建物跡……27
第６図　３号竪穴建物跡……28
第７図　４号竪穴建物跡（１）……29
第８図　４号竪穴建物跡（２）……30
第９図　４号竪穴建物跡（３）……31
第10図　５号竪穴建物跡……32
第11図　６号竪穴建物跡……33
第12図　７号竪穴建物跡……34
第13図　８号竪穴建物跡……35
第14図　９号竪穴建物跡（１）……36
第15図　９号竪穴建物跡（２）・10号竪穴建物跡（１）……37
第16図　10号竪穴建物跡（２）……38
第17図　11号竪穴建物跡（１）……39
第18図　11号竪穴建物跡（２）・12号竪穴建物跡（１）……40
第19図　12号竪穴建物跡（２）……41
第20図　13号竪穴建物跡……42
第21図　１号掘立柱建物跡……43
第22図　２号堀立柱建物跡・３号堀立柱建物跡……44
第23図　４号堀立柱建物跡……45
第24図　１号溝状遺構・２号溝状遺構・４号溝状遺構……46
第25図　３・５～７・Ⅱ層１～５号溝状遺構・32・116号土坑・１号ピット……47
第26図　Ⅱ層６・８～11・15・17～19・24・26～29号溝状遺構、35・135号土坑……48
第27図　１～24・26号土坑、Ⅱ層２号溝状遺構……49
第28図　25・27～31・33・34・39・41・48～60号土坑、Ⅱ層14号溝状遺構……50
第29図　61～65・67～73・75～82・84号土坑……51
第30図　85～92・94～107号土坑……52
第31図　108～115・117・119～129号土坑……53
第32図　130～134・136～140、Ⅱ層２～６号土坑……54
第33図　１号竪穴建物跡出土遺物（１）……58
第34図　１号竪穴建物跡出土遺物（２）……59
第35図　２号竪穴建物跡出土遺物……60
第36図　３号竪穴建物跡出土遺物……61
第37図　４号竪穴建物跡出土遺物（１）……62
第38図　４号竪穴建物跡出土遺物（２）……63
第39図　４号竪穴建物跡出土遺物（３）……64
第40図　４号竪穴建物跡出土遺物（４）……65

第41図　４号竪穴建物跡出土遺物（５）……66
第42図　４号竪穴建物跡出土遺物（６）……67
第43図　４号竪穴建物跡出土遺物（７）……68
第44図　４号竪穴建物跡（８）・５号竪穴建物跡（１）出土遺物 ……69
第45図　５号竪穴建物跡（２）・６号竪穴建物跡（１）出土遺物 ……70
第46図　６号竪穴建物跡（２）７号竪穴建物跡（１）出土遺物……71
第47図　７号竪穴建物跡（２）出土遺物……72
第48図　７号竪穴建物跡（３）８号竪穴建物跡（１）出土遺物……73
第49図　８号竪穴建物跡（２）・９号竪穴建物跡出土遺物 ……74
第50図　９号竪穴建物跡（２）・10号竪穴建物跡出土遺物 ……75
第51図　11号竪穴建物跡（１）出土遺物……76
第52図　11号竪穴建物跡（２）・12号竪穴建物跡出土遺物 ……77
第53図　13号竪穴建物跡、１～４号堀立柱建物跡、１号溝状遺構出土遺物……78
第54図　７号溝状遺構、11・23・24・79・115号土坑、遺構外（１）出土遺物 ……79
第55図　遺構外（２）出土遺物……80
第56図　鉄製品……81
第57図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その１）……98
第58図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その２）……99
第59図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その３）…… 100
第60図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その４）…… 101
第61図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その５）…… 102
第62図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その６）…… 103
第63図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その７）…… 104
第64図　胎土中の砂の粒径組成散布図…… 104
第65図　砕屑物・基質・孔隙の割合…… 105
第66図　腐植含量とリン酸含量の相関図…… 114

表　目　次

第１表　溝状遺構一覧表……22
第２表　土坑一覧表……23
第３表　出土遺物観察表……82
第４表　金属製品観察表……90
第５表　試料一覧および胎土分類結果……91
第６表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果…… 110
第７表　樹種同定結果…… 111
第８表　土壌理化学分析結果…… 113
第９表　三ノ側遺跡竪穴建物跡一覧表…… 121

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

今回の三ノ側遺跡における埋蔵文化財発掘調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパスの建設事業に伴うものである。山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパスは、職業能力開発促進法に基づき山梨県の富士・東部地域のニーズに応じた技術系人材の育成を目的として、山梨県立谷村工業高等学校の西側に隣接する水田地に建設が計画され、平成 25 年 4 月に開校予定である。

三ノ側遺跡は山梨県都留市田原から上谷にかけて存在する遺跡で、過去には今回の調査地点周辺において都留市教育委員会による発掘調査が行われている。その結果、昭和 53 年の詳細分布調査では土器片が、昭和 56 年、平成 13．14 年に行われた発掘調査及び平成 20 年の試掘調査では、奈良･平安時代の竪穴住居跡（竪穴建物跡）などが発見されている。

県立産業技術短期大学校都留キャンパスの建設予定地が三ノ側遺跡の分布推定範囲に隣接していることから、平成 23 年 5 月に埋蔵文化財を確認するための試掘調査が行われ、予定地のほぼ全域から奈良･平安時代の遺構･遺物が検出された。この結果を受け、それまでの三ノ側遺跡の範囲が東側へ拡大変更されるとともに、本格的発掘調査が実施されることとなった。

第２節　調査の目的と課題

本格的調査に先立って実施された試掘調査において、奈良・平安時代の竪穴建物跡や土坑が確認されていることから、これらの遺構・遺物を記録保存することを目的とする。

三ノ側遺跡は、東西約 860 mにわたる範囲に遺跡が存在すると想定される大規模な遺跡であることから、これまでに調査が行われた他の地点と遺構の分布状況を比較し、遺跡の推定範囲の精度を上げることを課題とする。また、三ノ側遺跡周辺は、古代甲斐国都留郡多良郷にあたると推定されるため、国府の置かれた甲府盆地や周辺地域とどのような関わりを持っていたのかを捉えることを課題とする。

第３節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成 23 年 6 月 29 日から 12 月 26 日まで実施した。調査における排土場所の確保や、調査の終了した地点から段階的に工事を行う計画のため、調査区を３地点に分割して調査を行ったが、整理作業の段階で調査区を一つにまとめた。

６月６日　発掘調査に先立ち､県産業人材課､県教育庁学術文化財課､埋蔵文化財センターの三者による現地協議。
６月29日　調査区へ入るための谷村工業高校敷地内からの通用路を整備。
６月29日～７月14日　第１地点（調査区南側）表土剥ぎ。
７月５日　発掘作業員出勤開始。
７月14日　第１地点測量基準点・グリッド杭設置。
９月30日　第１地点空撮・全体図写真図化用測量。
　　第１地点調査終了（竪穴建物跡７軒、掘立柱建物跡２棟、溝状遺構18条、土坑・ピット54基）。
10月１日　第１地点一部埋戻し。
10月３日～ 10月17日　第２地点（調査区北側西）表土剥ぎ作業。
10月17日　第２地点測量基準点・グリッド杭設置。
11月17日　第２地点空撮・全体図写真図化用測量。
11月28日　第２地点調査終了（竪穴建物跡５軒、掘立柱建物２棟、溝状遺構11条、土坑・ピット64基）。
11月28日～ 12月７日　第２地点埋戻し・第３地点（調査区北側東）表土剥ぎ。

12月12日　第３地点測量基準点・グリッド杭設置。
12月19日　上杉陽氏現地指導。
12月21日　第３地点空撮・全体図写真図化用測量。
12月26日　第３地点調査終了（竪穴建物跡１軒、溝状遺構５条、土坑23基）。撤収作業。

第４節　室内調査等の経過

今回の発掘調査での遺物出土量は、プラスチック収納箱にして 14 箱になり、平成 23 年度には室内における基礎的整理作業として、遺物の注記・接合復元を平成 24 年１月６日から３月 23 日まで、平成 24 年度には本格的整理作業として、遺物の実測・トレースを平成 24 年７月２日から 12 月 26 日、遺物・写真の整理を２月４日から３月中旬まで行った。また、これに並行して、遺構・遺物図版の作成、原稿執筆を進め、本報告書を刊行した。

また、発掘調査・整理作業の段階で抽出した資料について自然科学分析・保存処理を行い、平成 23 年度には、炭素年代測定・樹種同定・土壌理化学分析、金属製品の保存処理、平成24年度には、胎土分析の業務委託を行った。

第５節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
所　　長　平賀孝雄（平成 23 年度）　　八巻與志夫（平成 24 年度）
次　　長　八巻與志夫（平成 23 年度）　福島一雄（平成 24 年度）
調査研究課長　高野玄明（平成 23 年度）　米田明訓（平成 24 年度）
資料普及課長　山本茂樹
調査担当者　資料普及課資料第一担当　依田幸浩　青木真一（平成 23 年度発掘調査・基礎的整理作業）
　　資料普及課資料第二担当　依田幸浩　加々美鮎実（平成 24 年度本格的整理作業・報告書刊行）
作業員
発掘調査　天野美津子　有賀国男　石井　昇　石倉千春　奥脇光夫　長田泰彦　斧田文雄　片岡和子　小林正彦
　　三枝俊貴　佐藤　専　鈴木英夫　高尾和美　高部清晴　忠見千穂　田中憲一　田中奈津代
　　椿　孝二　遠木常久　三井孝明　森田晋二　山田正之　横田夏江　渡辺久美子　渡辺めぐみ
　　渡邊洋一　渡邊　亮
整理作業　新谷和美　小林奈苗　流石利枝子　佐藤文子　佐野眞雪　依田和美

三ノ側遺跡発掘調査にかかる法的手続等

・平成 23 年６月 16 日　山梨県立産業技術短期大学校分校整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県産業労働部と山梨県教育委員会で締結。
・平成 23 年６月 29 日　文化財保護法第 99 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。（教埋文第 323 号「産業短期大学校建設に伴う三ノ側遺跡の発掘調査報告・実施について」）
・平成 23 年 12 月 26 日　山梨県教育委員会教育長へ発掘調査の終了を報告。（教埋文第 921 号「山梨県立産業技術短期大学校分校整備事業に伴う発掘調査終了報告について」）
・平成 24 年１月 13 日　文化財保護法第 100 条第２項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教委幾委員会教育長へ提出し、大月警察署への通知を依頼。（教埋文第 323 号 － １「埋蔵文化財の発見について（三ノ側遺跡）」）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

三ノ側遺跡は山梨県都留市田原から上谷にかけて立地している。都留市は山梨県の東南部に位置し、東は上野原市・南都留郡道志村、西は南都留郡富士河口湖町・西桂町、南は富士吉田市・南都留郡忍野村・山中湖村、北は大月市に接している。周囲を山に囲まれ、富士五湖の一つである山中湖を水源とする桂川が南西から北東へ流れている。桂川は下流では相模川と名前を変える。都留市の大半は御坂山地と道志山塊による山間地が占め、桂川とその支流である鹿留川、杓子流川、大幡川、菅野川、朝日川などによって形成された河岸段丘上の平坦面に市街地が展開している。主要な交通網としては、桂川に沿う形で市内を走る国道 139 号、中央自動車道、鉄道の富士急行線があげられる。

三ノ側遺跡は桂川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査地点は、県立谷村工業高校の南西側に接する元は水田として利用されていた区画である。調査地点の標高は約 494 mで、調査着手前は水田の小区画ごとに段差が設けられ、全体としては北側へ緩やかに低くなっていた。発掘地点から北へ約 300 m離れた地点を桂川が流れる。南側は道志山塊の御正体山から生出山へ尾根が伸びている。発掘地点から南側の山裾までの距離は 250 mほどである。また、寛永 16 年（1639）に完成した十日市場大堰（谷村大堰）から流れる家中川と寺川が調査地点を南北に挟むように南西から北東方向へ流下している。

第２節　歴史的環境

三ノ側遺跡は東西約 860 mにわたる範囲に遺跡が分布すると推測される大規模な遺跡である。昭和 56 年（1981）には、今回の調査地点から西へ 100 mほど離れた地点で都留市教育委員会による発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡（竪穴建物跡）が発見されている。この調査では、皇朝十二銭の和同開珎や富寿神宝、銅製の小壺が出土している。さらに平成 13・14 年（2001・2002）の都留市教育委員会による発掘調査において、今回の調査地点から西へ 300 mほど離れた地点で奈良・平安時代の竪穴建物跡が発見され、平成 20 年（2008）に行われた試掘調査では、竪穴建物跡のカマド部分が確認されている。

三ノ側遺跡の周辺には、縄文時代～中世の遺跡が存在し、集落跡の遺跡の多くは、桂川やその支流沿いに発達した河岸段丘上に立地している。

縄文時代では、縄文時代早期の竪穴建物跡が発見された玉川金山遺跡や生出山山頂遺跡、縄文時代前期後半から中期後半の竪穴建物跡が発見された美通遺跡、縄文時代中期末の大環状配石遺構が発見され全国的に注目された牛石遺跡などが存在する。

弥生時代では、玉川金山遺跡、生出山山頂遺跡、美通遺跡、牛石遺跡、宮原遺跡などが認められる。

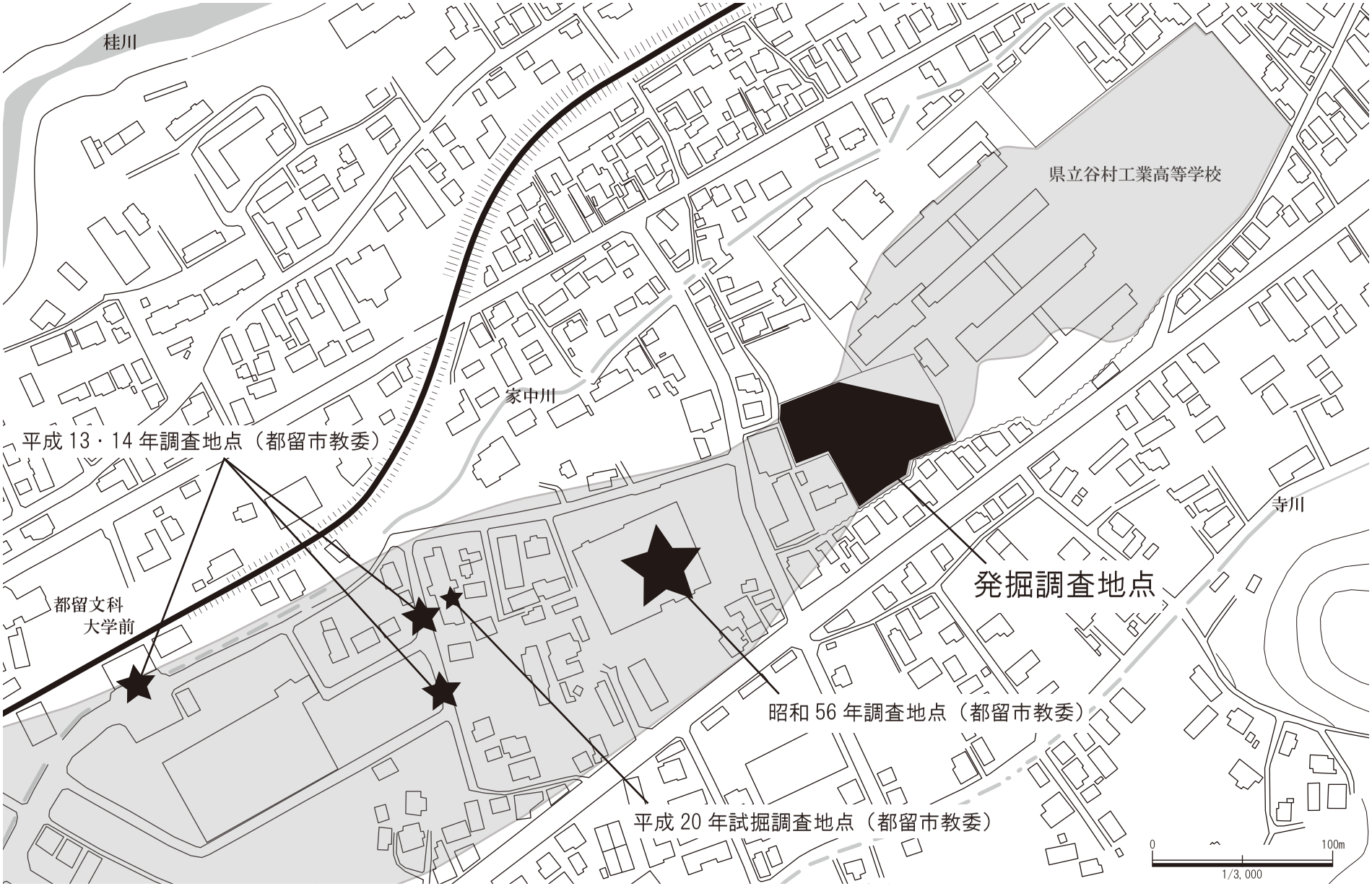
都留市域では、弥生時代中期以降、特に古墳時代を通じて遺跡がほとんど見られない状況にあるが、平成 23 年（2011）に、三ノ側遺跡から北へ２km ほど離れた城ノ腰第２遺跡の中で山梨県埋蔵文化財センターによる試掘調査が行われ、古墳時代の土器片が出土している。他に古墳時代の遺跡として、散布地ではあるものの十二割海戸遺跡がある。

８世紀に入ると遺跡の数は再び増加し、奈良・平安時代には桂川沿いに大規模な遺跡が現れるようになる。三ノ側遺跡を含め、竪穴建物跡群が発見された牛石遺跡や美通遺跡、小溝と土坑・ピットが入り組んだ畠に関わると想定される遺構が検出された鷹の巣遺跡、玉川金山遺跡などがある。三ノ側遺跡周辺は、古代甲斐国の都留郡多良郷にあたるとされ、三ノ側遺跡の立地する都留市田原の地名は「多良」に由来すると考えらえている。

中世になると、小山田氏によって勝山城や谷村城が築かれ、近世にかけて領主が変遷する。江戸時代初期の秋元氏治世下では、十日市場大堰の開削によって新田の開墾と石高の増加が図られた。三ノ側遺跡周辺は谷村城下町に近い水田地帯であったと推測される。

1 三ノ側遺跡（奈良・平安・中世）
2 美通遺跡（縄文・弥生・奈良・平安～近世）
3 生出山山頂遺跡（縄文・弥生・平安）
4 鷹の巣遺跡（縄文・奈良・平安）
5 牛石遺跡（縄文・奈良・平安）
6 城ノ腰第２遺跡（古墳・平安）
7 勝山城跡（中世・近世）
8 谷村城跡（中世・近世）
9 玉川金山遺跡（縄文・弥生・奈良・平安）
10 宮原遺跡（縄文・弥生）
11 十日市場大堰（近世）
12 十二割海戸遺跡（古墳・奈良・平安）

第１図　三ノ側遺跡と周辺遺跡位置図（S ＝ 1 ／ 25,000）



第２図　三ノ側遺跡周辺詳細図（S ＝１／3,000）　※ は 2013 年３月時点の遺跡推定範囲

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

発掘調査は、調査区域内に排土置き場を確保する必要があり、また、産業技術短期大学校の建設工事着工との兼ね合いから、調査区内において３回の反転を行った。まず調査区の南側半分を調査した後、残る北側のさらに西側半分、最後に北側の東側の半分という手順である。調査区を地点ごとに分けずに整理作業の段階で、一つの調査区にまとめてある。このため、遺構番号は調査区の南側から北側の西寄り、さらに北側の東の順で大きくなっていく。

調査区内には世界測地系座標に基づく５m四方のグリッドを設定した。調査区の南北方向に南からアラビア数字で１・２・３・・、東西方向に西からアルファベットの大文字でＡ・Ｂ・Ｃ・・の順で記号を付し、それぞれが交差する地点をＡ－１グリッド、Ｂ－１グリッドのように表す。

表土層の除去は重機によって行い、事前の試掘調査で確認されていた奈良・平安時代の遺物包含層または遺物確認面の直上まで表土を除去した。表土層除去後は、人力で遺物包含層及び遺構確認面の精査を行い、発見された遺構については、土層観察用のベルトを設けるか、半裁して確認しながら掘削した。各遺構は、平面図・土層断面図などを作成し、出土遺物の位置を記録した。また、出土した遺物については、微細なものを除きトータルステーションを用いて位置の記録を取った。調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の状況は、小型一眼レフカメラやデジタルカメラで撮影し記録した。また、土坑内から検出した溶岩礫の平面図や調査区全体図の作成には、トータルステーションによる測量と手持ちデジタルカメラの写真および空中写真撮影による写真からの図化を利用した。

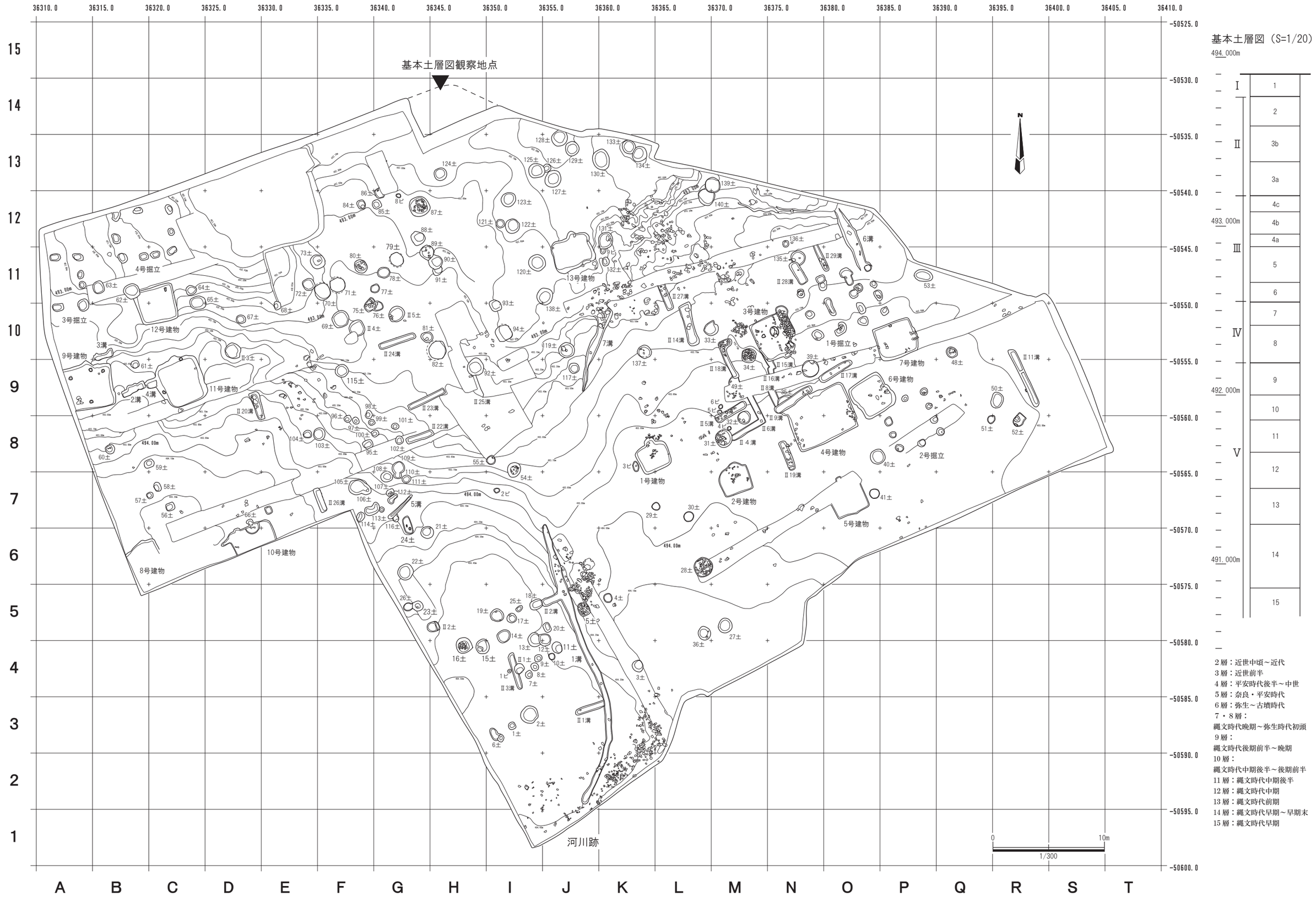
第２節　調査地点の基本層序

本格的発掘調査の事前に行われた試掘調査では、現地表である水田の作土層と鋤床層（第Ⅰ層）の下層にスコリア及び砂礫を含んだ褐色土層（第Ⅱ層）、やや粘性の強い黒褐色土層（第Ⅲ層）、黄褐色土層（第Ⅳ層）、赤色・黒色スコリアを多く含む暗褐色～黒褐色土層（第Ⅴ層）の順で各層が確認された。第Ⅱ層から下層は、調査区の中央部分から北側にかけて厚く堆積するようになり、北側へ低く傾斜していることから、調査区の中央部に地形の変換点があったことがわかる。特に第Ⅱ層が厚く堆積しているので、第Ⅱ層期に多くの土壌の流入があったことがわかる。土層の堆積状況は調査区内の地点によってやや異なり、調査区の南側では、第Ⅱ層と第Ⅲ層が第Ⅰ層によって削平されている。また、第Ⅳ層は元々の地形が低くなる調査区の北側周辺に堆積している。

この内、奈良・平安時代の遺物包含層は、第Ⅲ層にあたる。また、第Ⅱ層から掘り込まれる土坑及び溝状遺構が確認されたため、奈良・平安時代の遺構よりも新しい時期の遺構として遺構番号の頭に「Ⅱ層」を付けて区別している。

本格的調査の中では、もっとも地形が低くなる調査区北側の調査区壁付近を掘り下げ、上杉陽氏に土層の細分・時期比定をして頂いた。これにより、第Ⅱ層の上部から掘り込まれる土坑及び溝状遺構が江戸時時代中期以降に比定されることがわかった。

試掘調査による土層（第Ⅰ～Ⅴ層）と上杉氏による土層細分（第１～15層）を併記し、第３図に示す。ただし、表土層（第Ⅰ層）を除く各層の厚さは地点ごとに異なり、調査区の南側へ向かうほど、相対的に薄くなっている。



第３図　三ノ側遺跡全体図（S＝１／300）・基本土層図（S＝１／20）

※「建物」：竪穴建物跡、「掘立」：掘立建物跡、「溝」：溝状遺構、「土」：土坑、「ピ」：ピット

第３節　発見された遺構と遺物

１．竪穴建物跡

１号竪穴建物跡（遺構：第26図、遺物：第33・34図）

〔位置〕調査区ほぼ中央のＫ－７・８、Ｌ－８グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西 2.87 m×南北 2.25 m。やや東西方向が長い隅丸長方形。

〔検出状況〕竪穴の深さは遺構確認面から 33cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。竪穴外西側にピット（３号ピット）があるが、１基のみであり、本建物跡に伴うものかは不明である。

〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。明確な火床面は検出できなかったが、燃焼部と推定される地点でわずかに焼土化した地山を検出したので、火床面は竪穴の床面とほぼ同じ高さになると思われる。奥壁も床面とほぼ同じ高さから竪穴の壁を 60cm ほど外側へ掘り込み、斜めに立ち上がる。左袖にあたる部分から径 20cm ほどの溶岩礫を一つ検出したが、カマド前面から竪穴の中央部周辺にも溶岩礫が散乱して検出されており、人為的に破壊された印象を受ける。カマド部分の覆土には灰白色粘土が混入しており、カマドは溶岩と粘土で構築されていたと考えられる。

〔遺物出土状況〕カマドを中心に土師器甕の破片が出土し、駿東型の甕が多く見られる（２・３・７～14）。カマドの前面右側からは、甲斐型の土師器甕の胴部から底部にかけての破片（６）が出土した。この破片は、２号竪穴建物跡出土の破片と接合することから、建物廃棄時のカマド祭祀に使用された土器である可能性も考えられる。竪穴南東側の床面からは完形の須恵器坏（15）が出土した。竪穴東側の覆土上層からは、端部に穴の開けられた手鎌（第 56 図１）が出土した。

〔その他〕本建物跡の東側では、10 ～ 20cm ほどの溶岩が多量に含まれた地山が調査区の南北方向へ帯状に分布しており、本建物跡のカマドから北東コーナー周辺の地山にも溶岩が多く見られた。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

２号竪穴建物跡（遺構：第５図、遺物：第35図）

〔位置〕１号竪穴建物跡から南東へ５ｍほど離れたＭ－７・８グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西 2.75 m×南北 2.45 mの隅丸方形。

〔検出状況〕竪穴の深さは遺構確認面から 19cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側の壁は溶岩を多く含んでおり、掘り方を正確に捉えられなかった。床面は全体的に地山が固く締まっていた。竪穴のやや北西コーナーに寄った西壁沿いから直径20cm、深さ20cmほどのピットが１基確認された。竪穴の周辺でピットは確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。床面と同じ高さから竪穴の壁を 45cm ほど外側へ掘り込み、奥壁は斜めに立ち上がる。カマドの覆土中には径 10cm ほどの溶岩礫が散乱し、焼土と灰白色粘土が混ざって検出されただけであったが、地山が焼土化した火床面は明確に残っていた。１号竪穴建物跡と同様にカマドの前面から竪穴中央にかけて溶岩礫が散乱しており、人為的に破壊された可能性が高い。カマドは溶岩と灰白色粘土で構築されていたと考えられる。

〔遺物出土状況〕カマド中心に土師器甕の破片が出土した。駿東型の甕（８・９）の他、小型のロクロ甕（３）や在地の堀之内原タイプの胎土によく似たハケメ調整の小型甕（４・７）などが見られる。また、１号竪穴建物跡の項でも触れたが、本建物跡出土の甲斐型の土師器甕の破片と１号竪穴建物跡出土の破片が接合している（１号竪穴建物の６）。カマドに近い竪穴北壁沿いの覆土上層からは、須恵器高台付坏（11）が出土した。覆土上層からは刀子（第 56 図２）が出土した。

〔その他〕本建物跡の西側に溶岩を多く含む地山が南北方向へ帯状に分布しており、本建物跡の床面や西側の壁

面にも溶岩が多く見られた。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

３号竪穴建物跡（遺構：第６図、遺物：第36図）
〔位置〕調査区東側のＭ－ 10、Ｌ－９・10 グリッドに位置する。
〔形状・規模〕東西 2,76 m×南北 3.78 m。南北方向が長い隅丸長方形。竪穴の東側をⅡ－ 12 号溝に切られる。南西コーナーのあたりをⅡ－ 15 溝に切られる。
〔検出状況〕竪穴の深さは遺構確認面から 48cm。東壁を除いて壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁からは径 10 ～ 30cm ほどの溶岩が多量に検出された。本建物跡はもともと溶岩を多く含む地山に構築されており、竪穴を掘る際に出た溶岩を東壁にまとめたものと考えられる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。竪穴中央北西寄りの床面から直径30cm、深さ20cmほどのピットが１基確認された。竪穴の周辺でピットは確認されなかった。
〔カマド〕竪穴の東壁中央やや南寄りに設けられる。東壁の溶岩礫に接するように竪穴の床面とほぼ同じ高さで地山が焼土化した火床面を検出した。火床面の両側には袖石を設置していた痕跡と思われる窪みがある。背面の東壁から火床面上層にかけて溶岩礫が検出されたため、カマドの構築材か東壁から崩れてきたものか判別できなかった。このため、カマドの奥壁や煙道の形状を捉えることができなかった。
〔遺物出土状況〕カマドや覆土中を中心に土師器甕の破片が出土したが、小破片が多く、個体として捉えることのできるものは見られない。また、ごく少量であるが、土師器坏（１）や須恵器（18 ～ 19）の破片も出土した。土師器甕には、堀之内原タイプが多く見られ、体部外面にヘラ削りを施すもの（７・８・14）とナデを施すもの（３～６・12）がある。他には、ロクロ整形の甕（15）や駿東型の甕（９・11・13・16・17）が見られるが、いずれも小破片である。
〔その他〕竪穴のほぼ中央にある土坑状の窪みは、近年の掘削による攪乱であり、覆土から電線に用いられる碍子やビニール片が出土した（当初はⅡ層 13 号溝としたが、後に欠番）。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

４号竪穴建物跡（遺構：第７～９図、遺物：第37 ～ 44図）
〔位置〕調査区東側のＮ・０－８・９グリッドに位置する。
〔形状・規模〕東西 5.82 m×南北 4.47 m。東西方向が長い隅丸長方形の大型の竪穴建物跡である。北西コーナー部分を 35 号土坑に切られる。北壁中央のカマドの煙道付近をⅡ層９号溝に切られる。西壁沿いの覆土上層ではⅡ層 10 号溝に切られる。
〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 56㎝。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていたが、西側の壁際は軟弱で、周囲の床面に比べてやや深くなり、地山に含まれる溶岩礫が多く見られた。竪穴内や竪穴周辺からピットは検出されず、柱穴は確認できなかった。
〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。火床面は竪穴の床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 80cm ほど外側へ掘り込み、斜めに立ち上がる。奥壁上部および煙道部はⅡ層９号溝によって失われていた。袖部は検出されなかった。火床面の上層には焼土粒子と灰白色粘土を多量に含む暗褐色土が堆積しており、焼土粒子と灰白色粘土はカマド前面から竪穴の北東コーナー周辺にかけて床面上に広く堆積していた。カマドおよび竪穴内から礫は検出されず、灰白色粘土を主体としてカマドを構築していたか、カマド廃棄時に持ち去られたと思われる。カマド構築材（灰白色粘土）の分布状況から、カマドが人為的に破壊された状況が窺える。
〔遺物出土状況〕遺物はカマド周辺を中心に竪穴内全体から多く出土した。他の竪穴建物に比べて土師器坏の点数も多い。土師器甕は、後の甲斐型甕につながっていくと思われる赤褐色で胎土に花崗岩類を多く含むもの（15・

25)、堀之内原タイプもしくは相模型、駿東型といった一見して特徴の異なる様々な産地のものが見られるが、堀之内原タイプ・相模型の甕が比較的多い。須恵器は土師器に比べると極端に少ないが、坏や蓋、甕などが出土した。覆土中からは、刀子が４点出土（第 56 図３、５～７）し、１号建物跡でも出土した端部に穴のある鉄製品（手鎌）が１点（第 56 図４）出土した。また、竪穴中央付近の覆土上層からはフイゴの刃口（107）の破片が出土した。

４号竪穴建物跡出土の土師器一括資料について胎土分析を実施し、肉眼による遺物観察における産地推定と類似する結果が得られた。詳細な分析結果は、第４章に掲載してある。

〔その他〕カマドから検出した炭化材の樹種同定を実施し、クヌギ節との結果が出ている。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

５号竪穴建物跡（遺構：第10図、遺物：第44・45図）

〔位置〕調査区東側、４号竪穴建物跡から南へ３ｍほど離れたＯ－７グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西 3.2 ｍ、南北不明。カマドの奥壁部分を除いて北側の約 1/3 が試掘トレンチによって失われているが、隅丸の方形と推測される。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 30cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。火床面は床面と同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を方形に掘り込み、斜めに立ち上がる。袖部周辺の状況は試掘トレンチにより失われているため不明である。カマドの覆土からは径 10cm 前後の溶岩礫を少量検出したが、構築材として用いられたものかは判断しかねる。

〔遺物出土状況〕カマドから甲斐型の土師器甕（９・12）が比較的多く出土した。土師器や須恵器の坏は小破片で量も少ない。また、試掘調査の際にもカマド周辺を中心に土師器甕が出土した。破片の中には、わずかであるが駿東型の土師器甕（10）も見られる。

〔時期〕奈良時代～平安時代（８世紀後半）。

６号竪穴建物跡（遺構：第11図、遺物：第45・46図）

〔位置〕調査区東側のＯ－８・９、Ｐ－９グリッドに位置する。４号竪穴建物跡の東側に隣接している。

〔形状・規模〕東西 3.29 ｍ×南北 3.43 ｍの隅丸方形。竪穴西壁の北西コーナー付近は歪に外側へ膨らんでいるが、埋没段階で壁面が崩落したためと思われる。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 57cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は南壁際の部分を除いて全体的に地山が固く締まっていた。南壁際はやや軟弱で、地山を明確に検出するまで掘削したため結果的に周溝状に窪んでいるが、土層断面から周溝の存在は確認されなかった。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴東壁のほぼ中央に設けられる。溶岩礫を組んだ両袖が残る。火床面は竪穴の床面と同じ高さにあり、地山が焼土化していたが、焼土の範囲はまばらで量も少なかった。奥壁は竪穴の壁を掘り込まず、東壁と同様にほぼ垂直に立ち上がる。カマド覆土は竪穴の覆土と大差なく、やや灰白色粘土や焼土ブロック・焼土粒子が多く見られる程度であった。両袖石周辺の覆土にも少量ではあるが灰白色粘土が混入していたことから、溶岩礫と灰白色粘土を用いて構築されていたと推測される。

〔遺物出土状況〕遺物は竪穴内全体から出土したが、覆土中からのものが大半である。カマドからは、堀之内原タイプの土師器甕の破片が多く出土した。また、カマド前面の床面からは、甲斐型の土師器甕（13）が出土した。覆土上層からは、刀子（第 56 図８）が出土した。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

７号竪穴建物跡（遺構：第12図、遺物：第46 ～ 48図）

〔位置〕調査区の東側、６号竪穴建物跡のから北東へ１ｍほど離れたＯ－ 10、Ｐ－９･10 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西 3.55 ｍ×南北 3.21 ｍのやや東西方向が長い隅丸長方形。竪穴の南側を試掘トレンチが南北方向に通過しているため上部が一部失われている。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 46cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。西側の床面から径 15 ～ 20cm ほどの溶岩礫が３つ並んで検出されたが、建物の施設に関わるものか不明である。

〔カマド〕竪穴東壁のほぼ中央に設けられる。溶岩礫を組んだ両袖が残り、両袖ともに最上部の礫だけ扁平な砂岩を縦方向に配置している。今回の調査で検出したカマドの中では、構築材に溶岩礫以外の礫が使用されている唯一の例である。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 10cm ほど外側へ掘り込んで、やや傾斜して立ち上がる。燃焼部の焼土の上層に灰白色粘土ブロックを多く含む土壌が堆積しており、礫と灰白色粘土を用いて構築されていたと推測される。

〔遺物出土状況〕カマドを中心に土師器甕の破片が出土した。駿東型甕（６・７・11 ～ 13）が多く見られる。竪穴北壁際の床面上から甲斐型の土師器坏（５）が逆位で出土した。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

８号竪穴建物跡（遺構：第13図、遺物：第48・49図）

〔位置〕西側の調査区壁に接するＢ・Ｃ－６グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西不明、南北約３ｍ。東西方向の規模は竪穴西側が調査区外に伸びているため不明である。竪穴の南側は後世の耕作等によって攪乱を受けているため、壁の立ち上がりが不明瞭であるが、調査区壁の断面で壁の立ち上がりを確認し、規模を判断した。形状はおそらく隅丸方形になると思われる。

〔検出状況〕残存する壁面の高さは 42cm であるが、壁面上部が耕作によって削平されていることが、調査区壁断面から確認された。壁面は上部が開き気味に立ち上がるが、スコリアを多く含む地山が脆いために埋没の段階で崩落したものと思われる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁に設けられる。正確な位置は不明であるが、北壁の中央やや東寄りにあたると思われる。奥壁から火床面両脇にかけて溶岩礫を検出した。これらの礫は元位置から移動していると思われるが、袖部の名残と考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、焼土化した地山が検出された。奥壁は竪穴の壁を 15cm ほど掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド覆土に灰白色粘土が多く含まれており、溶岩礫と灰白色粘土で構築されていたと考えられるが、攪拌された状況からカマドが人為的に破壊された可能性が高い。

〔遺物出土状況〕カマドを中心に甲斐型の土師器甕が出土した。竪穴の北東コーナー付近からは底部に「キ」と刻書された甲斐型の土師器坏（１）が出土した。

〔その他〕カマドから検出した炭化材の樹種同定を実施し、ブナ属との結果が出ている。

〔時期〕平安時代（９世紀前半）。

９号竪穴建物跡（遺構：第14・15図、遺物：第49・50図）

〔位置〕西側の調査区壁に接するＡ･Ｂ－９グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。

〔形状･規模〕東西不明、南北 3.82 ｍ。東西方向の規模は竪穴西側が調査区外に伸びているため不明であるが、隅丸方形になると思われる。

〔検出状況〕調査区壁断面の観察から壁面の高さは南壁で 62cm､北壁で 30cm。緩斜面に構築されているため、高低差がある。床面は全体的に地山が固く締まっていた。南西側床面には溶岩礫が露出している。壁面はやや開きながら立ち上がる。柱穴は確認されなかった。竪穴北東コーナー付近の外側に３号溝があり、溝の両端がピッ

ト状に窪んでいるが、この他に竪穴の周囲を巡るピットなどは検出されなかった。
〔カマド〕竪穴北壁に設けられる。正確な位置は不明であるが、北壁の中央もしくは中央やや東寄りにあたると思われる。右袖部は構築材の灰白色粘土と心材の溶岩礫が残っているが、左袖部は灰白色粘土が周囲に崩れて形状を留めていない。溶岩礫も左袖周辺からは検出されなかった。人為的に破壊された可能性が高い。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 40cm ほど外側へ掘り込み斜めに立ち上がる。カマドの右袖先端周辺から竪穴の中央やや東寄りにかけて、床面から 10cm ほど上層の覆土中にまとまった径 10 ～ 40cm ほどの溶岩礫を検出した。また、小規模ながら竪穴の西側からもまとまった溶岩礫を検出した。これらの溶岩礫はカマドの構築材としては、巨大なものが多く、量が多すぎるため、建物廃絶後に外部から持ち込まれたものと考えられる。このような溶岩礫は 12 号竪穴建物跡にも見られる。
〔遺物出土状況〕カマド右袖部の右側、北壁際の床面から５～ 10cm ほど上層で土師器甕が２点出土し、甲斐型甕（４）とやや小型の駿東型甕（８）が押しつぶされた状態で重なっていた。竪穴南東側からは須恵器の蓋（14）が出土した。カマド内部の遺物は小破片が多く、量も少なかった。
〔その他〕調査区壁の断面からは、本建物跡の上層に表土の直下から掘られた後世の溝状遺構が確認されたが、建物跡の覆土までは達していなかったため、平面では検出されなかった。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

10号竪穴建物跡（遺構：第15・16図、遺物：第50図）
〔位置〕調査区西側の調査区南壁に接するＤ・Ｅ－６・７グリッドに位置する。
〔形状･規模〕東西 3.99 m、南北不明。南北方向の規模は竪穴南側が調査区外に伸びているため不明であるが、隅丸方形になると思われる。北壁にあるカマド部分が 66 号土坑を切っている。北西コーナーの辺りで突出している部分は、掘削の際に地山が検出されなかったため掘り進めたが、漸移的に地山に変わり明確な掘方の形状が捉えられなかったため、本建物跡に伴う施設等ではないと判断した。
〔検出状況〕残存する壁面の高さは 15 ～ 25cm であるが、表土より１層下の褐色土層（建物跡セクション図第２層）に削平されている。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていたが、東壁際からは多量の溶岩礫を検出した。周辺の地山の中にも溶岩礫が多く含まれており、地山から一部が露出しているものも多いため、人為的に組まれたものではないと考えるが、多少は竪穴を掘る際に出た礫を寄せているのかもしれない。柱穴は確認されなかった。
〔カマド〕竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。灰白色粘土を多く含んだ覆土を検出したが、袖部は形状を留めていなかった。火床面は床面より 10cm ほど低い位置にあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 30cm ほど外側に掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド前面からは赤化した 20cm 前後の溶岩礫を検出しているので、灰白色粘土と溶岩礫でカマドを構築していたと考えられ、人為的に破壊されたと推測される。
〔遺物出土状況〕遺物は非常に少なかった。カマド内部からは甲斐型の土師器甕の底部（４）が出土した。また、北東コーナーに近い床面からは、ほぼ完形の土師器坏（１）と土師器甕の口縁部破片（３）が出土した。いずれも甲斐型である。
〔その他〕本建物跡のカマドと北西コーナー付近にある突出部から検出した炭化材の樹種同定を実施し、カマドの炭化材がクヌギ節、突出部がムラサキシキブ属との結果が出ている。
〔時期〕平安時代（９世紀前半）。

11号竪穴建物跡（遺構：第17・18図、遺物：第51・52図）
〔位置〕調査区西側、９号竪穴建物跡から東へ４ｍほど離れたＣ－９・10、Ｄ－９グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。

〔形状・規模〕東西 4.33 m×南北 4.23 mのやや南北に長い隅丸長方形。竪穴西壁の北西コーナーに寄った辺りで４号溝と重複するが、新旧関係は不明である。
〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 52cm。壁面はやや開きながら立ち上がり、東西の壁面では上部が崩落し、段状になっている。床面は全体的に地山が固く締まっていた。西壁の途中段状になった角の部分に壁外柱穴と思われるピット状の窪みが２カ所ある。残存している部分で推測される直径は、上部が 45cm 前後、底部が 25cm 前後で、遺構確認面からピットの底部までの深さは、北側のピットで 47cm、南側のピットで 38cm である。この他に柱穴は確認されなかった。
〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。灰白色粘土を大量に検出し、内部には溶岩礫を組み合わせた両袖が残っていた。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を掘り込まずにやや傾斜して 40cm ほど立ち上がってから一旦ピット状に 15cm ほど窪み、そこから斜めに立ち上がる。灰白色粘土は竪穴中央部の床面上まで広がっていたが、埋没段階の自然流出の範囲に収まると思われ、人為的な破壊の痕跡は認められなかった。
〔遺物出土状況〕カマドを中心に土師器甕の破片が多く出土した。甲斐型の土師器甕が大勢を占めるが、少数ながら駿東型の小型土師器甕（７）も見られる。床面上からは、甲斐型の土師器坏（１）や比較的大型の須恵器甕（23 ～ 25）の破片が出土した。
〔時期〕平安時代（９世紀前半）。

12号竪穴建物跡（遺構：第18・19図、遺物：第52図）
〔位置〕調査区の北西側、11 号竪穴建物跡から北へ３ mほど離れたＢ・Ｃ－ 10・11 グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。
〔形状・規模〕東西 3.49 m、南北 3.17 mの隅丸方形。北西コーナーを 62 号土坑に切られる。
〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 48cm。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。北壁を除く壁際は軟弱になり、覆土と床面の境界が不明瞭になる。土層断面から周溝の存在は確認されなかった。柱穴は確認されなかった。
〔カマド〕竪穴北壁の東寄りに設けられる。袖部を中心に灰白色粘土を多く検出したが、基部のあたりがかろうじて形状を留めている。右袖には心材の溶岩礫が奥壁から並んで検出されたが、左袖からは奥壁の近くで１点だけ検出された。人為的に破壊された可能性が高い。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 15cm ほど外側へ掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド前面から竪穴の中央にかけて、径 10 ～ 50cm ほどの溶岩礫を大量に検出した。ほとんどの礫が覆土中層から検出されており、カマド前面では床面上に達するものもあるが、９号竪穴建物跡と同様にカマドの規模に対して、巨大なものが多く、量も多すぎることから、住居廃絶後に外部から持ち込まれたものと考えられる。
〔遺物出土状況〕カマドから駿東型の土師器甕（１）と堀之内原タイプの土師器甕（２・３）が出土したが、建物跡全体としては遺物が少なかった。竪穴の北東コーナーに近い床面から、砂岩の扁平な礫を検出した。加工痕は見られなかったが、上面がほぼ平らになるように置かれた状態で検出されているので、台石として使用されたものかもしれない。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

13号竪穴建物跡（遺構：第20図、遺物：第53図）
〔位置〕調査区北側のＪ－ 11・12 グリッドに位置する。南から北へ低くなる傾斜面に構築されている。
〔形状・規模〕東西 3.69 m、南北 2.79 m。東西方向が長い隅丸長方形。
〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは 31cm。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山

が固く締まっていたが、壁際は軟弱になり、東壁と南壁付近では地山から溶岩礫の露出が見られる。南東コーナーと南西コーナー際の床面から柱穴と考えられるピットを検出した。いずれもスコリアを多く含む地山が崩れて形状が不明瞭であるが、ピットの直径は 15cm 前後で、床面からの深さは５～ 10cm ほどである。北東コーナーと北西コーナーでピットは検出されなかったが、両コーナーともに周囲に比べて５cm 程度低く窪んでいるので、柱穴が存在したことが推測される。

〔カマド〕竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。袖部に灰白色粘土が集中して残っているが、心材と思われる溶岩礫はカマド前面やカマドの覆土上層に浮いた状態で検出されており、人為的に破壊されていると推測される。火床面は竪穴の床面より５cm ほど低い位置にあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を 20cm ほど外側へ掘り込み斜めに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕やや東に寄った南壁際の床面から甲斐型の土師器坏（１）が出土した。カマドから甲斐型の土師器甕（２）が出土した。駿東型土師器甕の胴部破片（３）も出土しているが、全体的に遺物の量は少なかった。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

２．掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（遺構：第21図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区東側、３号竪穴建物跡と７号竪穴建物跡に挟まれたＮ～Ｐ－ 10・11 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約６ｍ×南北約４ｍの東西に長い長方形。全体としては、南北方向２間、東西方向３間となる総柱型の掘立柱建物跡であるが、西側を除いて梁間の建物内部に配置される柱が２本（４間）になる。柱間距離は２ｍであるが、梁間は変則的に配置され、１～２ｍとなる。柱穴の遺構確認面からの深さは約 25 ～ 50cm。

〔検出状況〕建物内部の柱が２本になる部分の柱間は均等でなく、pit ７～ 10 間は不規則であるものの、基本的には内部の柱同士がより近い距離になるよう配置され、側柱との柱間が 1.5 ｍ、内部２本の柱間が１ｍの間隔で配置されている。本来中間に１本配置するものを２本に分けているような印象を受ける。柱穴の掘方は、地山が崩落して不整形の平面形となっているものがほとんどであるが、pit ４・７などは方形の形状を留めており、他の柱穴も方形の掘方であった可能性が高い。

〔遺物出土状況〕pit １から甲斐型の土師器坏の底部破片（１）が、pit14 から堀之内原タイプの土師器甕の口縁部破片（２）が出土した。

〔その他〕調査区反転して調査を行ったため、北側の柱穴列の一部は測量データを合成してある。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

２号掘立柱建物跡（遺構：第22図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区東側、６号竪穴建物跡南東側のＰ・Ｑ－８・９グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約４ｍ×南北約４ｍの方形。北西隅の柱穴部分が６号竪穴建物跡と重複しているが、建物跡の覆土中に柱穴を確認することはできなかった。しかし覆土が酷似しているため新旧関係は不明である。東西方向２間、南北方向３間の側柱型になるであろう。柱間距離は東西方向が約２ｍ、南北方向が約 1.2 ～ 1.3 ｍ。柱穴の遺構確認面からの深さは約 15 ～ 30cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方はすべて不整円形であった。円形の掘方と推測される。

〔遺物出土状況〕pit ２から駿東型の土師器甕の口縁部破片（１）が、pit ３から堀之内原タイプの土師器甕の口縁部破片（２）が出土した。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

３号掘立柱建物跡（遺構：第22図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区北西隅の調査区西壁に接するＡ－ 10・11 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西不明、南北約 4.5 m。東西方向は調査区外へ伸びているため正確な規模は不明であるが、２間以上となる。南北方向は柱間を数えれば３間となるが、内側の２本の距離が短く配置されている。１号掘立柱建物跡に見られる状況に似ているが、こちらは側柱型という点が異なる。柱間距離は、東西方向が約 2.1 ～ 2.2 m、南北方向が南から約 1.8 m、約 0.9 m、約 1.8 m。柱穴の遺構確認面からの深さは約 35 ～ 65cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方は pit １と pit ２が東西にやや長い隅丸の長方形となり、他の柱穴は不整円形であるが、本来は方形の掘方であった可能性が高い。

〔遺物出土状況〕pit ５から甲斐型の胎土に似た土師器甕の口縁部破片（）が出土した。この他に複数の柱穴から駿東型土師器甕の小破片が出土した。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

４号掘立柱建物跡（遺構：第23図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区北西隅の調査区北壁に接するＢ・Ｃ－ 11・12 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約 4.8 ～ 5.0 m×南北約４m。やや東西方向に長い長方形。pit ２～ pit ７間がやや長く西側に膨らむ。東西方向は北側が２間、南側が３間、南北方向２間の側柱型。東西方向南側の配置は１号掘立柱建物跡や３号掘立柱建物跡でも見られる内側２本の柱の距離を短く配置するタイプである。pit １と pit ４が調査区北壁に接しているが、柱穴が pit １・４・７よりもさらに北側に配置されることはないであろう。柱間距離は東西方向の北側が西から約 1.8 m、約 3.0 m、南側が約 1.9 m、約 1.2 m、約 1.7 m。南北方向は概ね 1.8 m前後になる。柱穴の遺構確認面からの深さは、約 35 ～ 60cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方は pit ５が隅丸の方形、pit １・４・８が隅丸の長方形となるが、pit １と pit ８は長軸が東側へ傾く。他の柱穴の本来は方形もしくは長方形であった可能性が高い。pit ３・５・６・８などでは、柱穴底部の柱が設置されていた地点が５～ 15cm ほど沈んでおり、土層断面でも柱の部分と根固めの埋め土部分が確認された。これらの状況から柱の直径は 15 ～ 20cm ほどと推測される。

本遺構の確認面より 20cm 上層で 10 ～ 40cm ほどの溶岩礫がまとまって検出されたが、遺物を伴わず、本遺構に関係するものか不明である。

〔遺物出土状況〕pit １の覆土上層から溶岩礫を加工した筒状の破片（１）が出土した。この他に複数の柱穴から甲斐型や駿東型土師器甕の小破片が出土した。

〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

３．溝状遺構

溝状遺構は全体で 34 条発見した。この内、奈良・平安時代の包含層から掘り込まれたものは７条あり、ここで個別に報告する。

残りの 27 条は表土の耕作土直下の基本土層第Ⅱ層から掘り込まれるものである（Ⅱ層７・13 号溝状遺構は欠番）。北側を除く調査区全体から検出されている。北側で検出されない理由は、現在の地表付近に比べて遺構確認面（奈良・平安時代の地表面）が北側に向かって低くなっていることから遺構の掘り込みが達していないためと推測される。このため、９号竪穴建物跡の調査区西壁と接する部分の土層断面では、遺構確認面よりも上層で溝状遺構の底部を確認している。平面の規模は幅が 50 ～ 60cm ほどで統一されるが、長さがおおよそ 200 ～ 600cm まで様々である。溝の方向は東西方向と南北方向の２種類に分かれ、いずれも軸線が 20 ～ 30 度ほど方位から反時計回りに振れている。遺構確認面からの深さは 50cm ほどであるが、９号竪穴建物跡の土層断面では、75cm ほどの深さを確認している。側面と両端をほぼ垂直に掘り込む箱掘りで、その形状から水を流す溝ではな

く、土坑に近い性質の遺構ではないか（もしくは溶岩などを確認するための試掘溝か）と考えられる。遺物はほとんど出土せず、流れ込みと思われる土師器の小破片程度である。時期は基本土層から判断して江戸時代中期以降と推測される。同様の遺構は都留市の山梨原遺跡や鷹の巣遺跡でも発見されている。Ⅱ層の溝状遺構については一覧表（第表）にして掲載する。

なお、Ⅱ層から掘り込まれる遺構は、溝状遺構と土坑が確認されており、いずれも全体図等の遺構番号の前に「Ⅱ」を付して表記した。

１号溝状遺構（遺構：第24図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区南側のＪ－２・４～６、Ｋ－３・４グリッドに位置する。

〔形状・規模〕調査区南端を西から東へ流れていた旧河川に接続し、Ｋ－３グリッドの辺りで北北東から北北西へ曲がり調査区の中央付近Ｊ－６グリッドまで伸びる。幅は 30 ～ 90cm ほどで、遺構確認面からの深さは 10 ～ 32cm。断面形状はＵ字型の毛抜掘りと思われる。Ｋ－３・Ｊ－５グリッドでⅡ層から掘り込まれる溝状遺構に切られる。長さは約 23.5 m。

〔検出状況〕覆土に流水の痕跡を示す砂などの堆積は見られなかったが、調査区南側を流れていた河川から取水するための溝と推測され、さらに北側へ伸びていたと考えられる。また、旧河川が検出された調査区の南側境界には現在も西から東へ流れる水路が存在している。この水路を上流へたどると、家中川と寺川が分岐する地点のやや下流で寺川から取水されている。十日市場大堰が開削された江戸時代初期以前の奈良・平安時代から現在の水路の通るあたりに河川が存在した可能性が高い。

〔遺物出土状況〕堀之内原タイプの土師器甕の口縁部破片（１）や灰釉陶器の碗（２）が出土した。また、旧河川の覆土中からは奈良時代（８世紀後半）（３）の甲斐型土師器坏が出土した。

〔時期〕奈良･平安時代（８世紀後半～）。出土遺物に時期差があることから､長期間機能していたと推測される。

２号溝状遺構（遺構：第24図）

〔位置〕調査西側の９号竪穴建物跡と 11 号竪穴建物跡に挟まれたＢ－９グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長さは 220cm。長軸は東西方向を向き、東から北へ 27 度ほど振れる。幅は 46 ～ 80cm と一定しない。底面も歪で中間地点の北側にピット状の窪みがある。遺構確認面からの深さは 50 ～ 56cm で、ピット状の窪み部分は 68cm。

〔検出状況〕溝の両端が若干深くなり、土層断面でも両端が分かれることから、複数の土坑間の地山が崩落している可能性も考えられる。時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

〔時期〕時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

３号溝状遺構（遺構：第25図）

〔位置〕調査区西側、９号竪穴建物跡の北東コーナーに近いＢ－ 10 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長さは 184cm。長軸はほぼ東西方向を向き、東から北へ 16 度ほど振れる。幅は両端が広がり最大で 71cm。底部は両端が土坑状に窪み、中間部分は浅くなっている。遺構確認面からの深さは東側が 63cm、西側は 54cm。

〔検出状況〕土層断面からも両端が分かれるので、２基の土坑の間の地山が崩落している可能性も考えられる。

〔遺物出土状況〕甲斐型土師器甕の小破片が少量出土した。

〔時期〕時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

４号溝状遺構（遺構：第24図）

〔位置〕調査区西側、11 号竪穴建物跡の北西コーナーに近い西壁周辺、Ｃ－９グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長軸は東西方向を向くと思われるが、東側で 11 号竪穴建物跡と重複しているため長さは不明である。覆土が酷似しているため、11 号竪穴建物跡との新旧関係も確認できなかった。幅は 80cm で、遺構確認面からの深さは 49cm。断面形状は垂直に掘り込まれているが、底部は凹凸があり、北西隅が低くなる。

〔検出状況〕土坑の可能性も考えられるが、土層断面では、11 号竪穴建物跡に接する部分で一旦立ち上がり、さらに東側へ伸びる状況が窺えるため、溝状遺構と判断した。

〔遺物出土状況〕甲斐型の土師器坏と土師器甕の小破片が少量出土した。

〔時期〕時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

５号溝状遺構（遺構：第25図）

〔位置〕調査区中央西寄りのＧ－７グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長さは 298cm。長軸は南西北東方向を向く。幅は南西側で 38cm と最も広く、北東側では狭くなる。遺構確認面からの深さは南西側が最も深く 32cm、北東端部は次第に浅くなっている。断面はやや開きながら立ち上がる。南西側の端部付近で 116 号土坑と重複し、切られている。

〔検出状況〕溝底部付近には砂礫を多く含む土壌が堆積しており、流水の痕跡と見られる。

〔遺物出土状況〕溝底部付近の砂礫層中から甲斐型の土師器坏や土師器甕、須恵器壺の小破片が少量出土した。

〔時期〕時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

６号溝状遺構（遺構：第25図）

〔位置〕調査区の北東壁に近いＯ－ 11・12 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長軸は南北方向を向き、北から西へ 26 度ほど振れる。掘り込みが確認できた範囲での長さは 577cm であるが、さらに南北に伸びていたと思われる。幅は最大で 122cm、北側へ進むほどが細くなる。遺構確認面からの深さは 12cm であるが、やはり北側へ進むほど浅くなる。断面は底部が広く平坦で、緩やかに立ち上がる。

〔検出状況〕底部の立ち上がり付近に砂礫を多く含んでおり、流水の痕跡と見られる。南側の延長線上にある１号掘立柱建物跡や７号竪穴建物跡周辺の地山上部にも砂礫が見られたが、明確なプランを捉えることができなかった。洪水時などの自然流路の可能性も考えられる。

〔遺物出土状況〕須恵器の甕や駿東型と見られる土師器甕の小破片が少量出土した。

〔時期〕時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

７号溝状遺構（遺構：第25図、遺物：第54図）

〔位置〕調査区中央やや北寄りのＪ－９・10、Ｋ－ 10 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕長軸は南北方向を向き、北から東へ 16 度ほど振れる。掘り込みが確認できた範囲での長さは 775cm であるが、南側は調査区反転時の遺構確認面の高低差で失われたと思われ、北側は地山に溶岩礫が大量に含まれてプランが捉えられなくなる。おそらくさらに南北へ伸びていたと推測される。幅は 30 ～ 95cm ほどで定まらないが、全体的には南から北へ進むほど広がっている。断面はＵ字状の毛抜掘りと思われる。遺構確認面からの深さは、15cm ～ 20cm ほどである。

〔検出状況〕覆土下層にやや砂礫が含まれており、流水のあった可能性が高い。南側の延長線上には１号溝状遺構があり、つながっていた可能性も考えられる。

〔遺物出土状況〕駿東型の土師器甕の口縁部（１）、甲斐型の土師器甕の口縁部（２）、須恵器の壺の底部（３）

などが出土した。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。１号溝状遺構につながっていたとすれば、平安時代まで機能していた可能性もある。

４．土坑・ピット

土坑は全体で 134 基発見した（37 ～ 39・42 ～ 47・74・83・118 号土坑は欠番）。この内、覆土が褐色土で構成され明確に基本土層第Ⅱ層から掘り込まれたと判断される土坑を６基確認した。残る 129 基は覆土が奈良・平安時代の遺物包含層である基本土層第Ⅲ層と同様の黒褐色土で構成されており、概ね該期に含まれる遺構と考えられるが、30・40・41 号土坑など遺構確認面からの深さが 10cm 未満の土坑や青磁片が出土した土坑もあり、奈良・平安時代以降になるものもいくらかは含まれていると推測される。

土坑は、直径 100 ～ 200cm ほどの円形の平面形状となるものが大半を占め、中でも直径 130cm 前後の土坑が多く見られる。調査区の中央部を南北に縦断するようにまとまって分布する傾向が窺える

ピットは７基を発見したが、覆土から全て奈良・平安時代のものと推測されるものの、遺物は出土せず、規則的な配列も見られなかった。

ここでは、時期の特定できる遺物が出土した土坑や、土壌理化学分析を実施した土坑について個別に報告し、それ以外の土坑やピットについては一覧表（第表）にして掲載する。

５号土坑（遺構：第27図）
〔位置〕調査区南西側のＪ－５グリッドに位置する。
〔形状・規模・検出状況〕平面はほぼ円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺構確認面から 13cm ほどで中央部に溶岩礫が現れ、36 ～ 52cm の深さで底面のほぼ全てが溶岩礫で埋めつくされる。底面のごく一部で地山の土を検出したが、溶岩礫は地山のさらに下層にまで入り込んでいたので、地山に含まれるものと考えられる。長軸 125cm、短軸 117cm、遺構確認面からの深さ 52cm。
〔遺物出土状況〕遺物は出土しなかった。
〔その他〕覆土中から検出した炭化材２点の炭素 14 年代測定と樹種同定を実施し、年代測定で７世紀末～８世紀後半および８世紀前半～９世紀中頃、樹種同定で２点ともヤマグワ近似種との結果が出ている。
〔時期〕奈良・平安時代。周辺の遺構の年代から７世紀末までは遡らないと思われる。

11号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）
〔位置〕調査区南西側のＪ－４グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面はほぼ円形で、断面形状は箱型である。長軸 105cm、短軸 89cm、遺構確認面からの深さ 59cm。
〔遺物出土状況〕遺構確認面から覆土上層の北側を中心に堀之内原タイプの土師器甕（１・２）が出土した。内外面をナデ調整する胴張型の甕である。細かい破片となって出土し、形状を留めていなかったが、接合作業により上半部が復元された。また、接合はしなかったが、同一個体と思われる底部も出土した。
〔その他〕土坑墓ではないかと考えられたため、土壌理化学分析を実施したが、遺体埋納を支持する結果は得られなかった。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）。

15号土坑（遺構：第27図）
〔位置〕調査区南西側のＨ・Ｉ－４・５グリッドに位置する。

〔形状・規模・検出状況〕平面はほぼ円形で、断面形状は底面が平坦なＵ字型である。南西側の底面を半裁の段階でやや掘りすぎたが、底面より下層の地山に溶岩礫が多く含まれる状況を確認した。長軸 137cm、短軸 118cm、遺構確認面からの深さ 49cm。
〔遺物出土状況〕遺物は出土しなかった。
〔その他〕土坑の形状から土坑墓の可能性が考えられたため、土壌理化学分析を実施した。地山に比べて腐植含量とリン酸含量がやや高い傾向を示したが、遺体埋納を支持する結果には至らなかった。
〔時期〕不明。

16号土坑（遺構：第27図）
〔位置〕調査区南西側のＨ－４・５グリッドに位置する。20cm ほど離れた東側に 15 号土坑がある。
〔形状・規模・検出状況〕平面はほぼ円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺構確認面から 40cm ほどの深さで底面全体に径 10 ～ 20cm ほどの溶岩礫が現れる。溶岩礫を検出した当初は集石遺構の類ではないかと考えたが、溶岩礫が土坑の壁面よりも外側に広がって堆積している状況が看取できたため、地山に含まれる溶岩礫と判断した。長軸 150cm、短軸 140cm、遺構確認面からの深さ 53cm。
〔遺物出土状況〕遺物は出土しなかった。
〔その他〕土坑の形状から土坑墓の可能性が考えられたため、土壌理化学分析を実施した。15 号土坑と同様に地山に比べて腐植含量とリン酸含量がやや高い傾向を示したが、遺体埋納を支持する結果には至らなかった。
〔時期〕不明。

23号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）
〔位置〕調査区南西側のＧ－５グリッド位置する。
〔形状・規模〕平面はやや不整な円形。底面は凹凸があり、北側がやや低くなる。壁面は開きながら立ち上がる。西側を除いて壁面上部を試掘トレンチで失っている。西側で 26 号土坑を切っている。長軸 97cm、短軸 86cm、遺構確認面からの深さ 50cm。
〔遺物出土状況〕土坑底面より 10cm ほど上層から駿東系の土師器甕の底部（１）が出土した。器壁が非常に薄く、不鮮明であるが内外面をナデ調整していると思われ、両面に輪積みの痕跡が残る小型甕である。典型的な駿東型の甕とは異なるものであるが、緻密で橙色の明るい色調の胎土から駿東系の土師器と考えられる。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）

24号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）
〔位置〕調査区中央西寄りのＧ－６・７グリッドに位置する。
〔形状・規模〕平面は南北に細長いやや不整な楕円形。長軸は南北方向を向き、北から西へ 19 度振れる。断面形状は底面がほぼ平らで、壁面はやや開きながら立ち上がる。長軸 165cm、短軸 74cm、遺構確認面からの深さ 24cm。
〔遺物出土状況〕土坑全体の覆土上層から中層にかけて甲斐型の土師器坏（１）や堀之内原タイプの土師器甕の底部（２）が破片となって出土した。
〔その他〕土坑の形状や遺物の出土状況から土坑墓の可能性が高いが、本調査においてこのように平面が楕円の土坑は他に発見されなかった。
〔時期〕奈良時代（８世紀後半）

79号土坑（遺構；第29図、遺物：第54図）

〔位置〕調査区中央北側のＧ－ 11 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面はやや卵形の円形。断面形状は底面の平坦な袋状となる。長軸 128cm、短軸 115cm。遺構確認面からの深さ 62cm。

〔検出状況〕壁面上部は溶岩礫を多く含むためにくびれていると推測され、初めから袋状の断面形状を意識して土坑が構築されたものではないと思われる。

〔遺物出土状況〕覆土上層から陽刻鎬連弁文の青磁碗（１）の破片が出土した。この破片は 115 号土坑出土の破片と接合した。

〔時期〕中世（13 ～ 14 世紀）

115号土坑（遺構：第31図、遺物：第54図）

〔位置〕調査区中央東寄りのＦ－９グリッドに位置する。79 号土坑から約 10 m南西方向に離れた地点である。

〔形状・規模〕平面はほぼ円形。底面からは溶岩礫が露出している。壁面はやや開きながら立ち上がる。長軸 121cm、短軸 113cm、遺子確認面からの深さ 48cm。

〔遺物出土状況〕覆土中層から青磁碗（１）の破片が出土し、79 号土坑出土の破片と接合した。

〔時期〕中世（13 ～ 14 世紀）

５．遺構外出土遺物（第55図）

遺構外からも奈良・平安時代の遺物が出土している。調査区南側や東側では、現地表の耕作土によって遺物包含層が削平されているため、遺構外の遺物の量は少ないが、遺構確認面が北側へ向かって低く傾斜していく調査区の北側では、包含層が厚く堆積しており、遺物も多く出土した。小破片のものがほとんどであったが、墨書が見られるものや器形がある程度把握できるものについて図示した。

墨書土器は非常に少なく、竪穴建物跡などの遺構からは全く出土していない。遺物包含層から出土した墨書土器も３点のみである。墨書は甲斐型の土師器坏（１）と土師器皿（２・３）に見られた。坏は外面体部に「人」が、皿は外面の体部から底部にかけて「長」と書かれたものと、底部に判読不能の文字が書かれたものがある。いずれも平安時代の 10 世紀前半の土器である。「長」の文字が書かれた土器は昭和 56 年の都留市教育委員会の発掘調査でも多く出土している。

墨書土器の他には、甲斐型の土師器坏（４・５）・皿（６・７）・羽釜（９）、堀之内原タイプの土師器甕（８）、須恵器の甕（10）などが見られ、時期としては奈良・平安時代（８世紀後半～ 10 世紀前半）の範囲に収まる。

図示した遺物は、全て調査区の南西側から出土したもので、南側や南西側の調査区外から流れ込んだものが多く含まれていると推測される。

第１表　溝状遺構一覧表

溝№	図	位置	断面形状	長さ（m）	最大幅（m）	深さ（m）	備　　考
1	24	J-2・4～6、K-3・4	毛抜掘り	23.5	0.9	0.32	Ⅱ層１・２溝に切られる。
2	24	B-9	不定形	2.2	0.8	0.68	底面にピット状の窪み。
3	25	B-9	不定形	1.84	0.71	0.63	溝の両端が窪む。
4	24	C-9	不定形		0.8	0.49	11 号建物跡と重複。
5	25	G-7	毛抜掘りか	2.98	0.38	0.32	116 号土坑に切られる。
6	25	O-11・12	底面が広く平坦	5.77	1.22	0.12	
7	25	J-9・10、K-10	毛抜掘り	7.75	0.95	0.2	
Ⅱ 1	25	J・K-3	箱掘り	2.7	0.573	0.278	１号溝を切る。
Ⅱ 2	25・27	J-5	箱掘り	2.199	0.651	0.394	１号溝、18 号土坑を切る。
Ⅱ 3	25	I-4	箱掘り	3.402	0.549	0.217	Ⅱ層１号土坑を切る。
Ⅱ 4	25	M-8	箱掘り	3.43	0.629	0.349	31 号土坑を切る。Ⅱ層６号溝と重複する。
Ⅱ 5	25	M-8・9	箱掘り	3.154	0.715	0.434	
Ⅱ 6	26	M-8・9	箱掘り	2.29	0.493	0.406	Ⅱ層４号溝と重複する。
Ⅱ 7	—	(M-10)					攪乱と判明したため欠番
Ⅱ 8	26	N-9	箱掘り	1.426	0.675	0.157	35 号土坑を切る。Ⅱ層９号溝と重複する。
Ⅱ 9	26	N-9	箱掘り	3.621	0.822	0.538	４号建物跡・35 号土坑を切る。
Ⅱ 10	26	N-8	箱掘り	2.033	0.551	0.128	４号建物跡を切る。
Ⅱ 11	26	R-9・10	箱掘り	5.702	0.53	0.505	
Ⅱ 12	—	N-10	箱掘り	4.17	0.528	0.454	３号建物跡を切る。
Ⅱ 13	—	(N-10)	箱掘り				碍子等が出土したため欠番
Ⅱ 14	28	L-10・11	箱掘り	3.796	0.838	0.674	深さは土層断面で確認
Ⅱ 15	26	M・N-10、N-9	箱掘り	2.318	0.569	0.144	３号建物跡を切る。Ⅱ層 16 号溝と重複する。
Ⅱ 16	—	N-9	箱掘り	0.51	0.532	0.049	Ⅱ層 15 号溝と重複する。試掘トレンチで一部失われている。
Ⅱ 17	26	N・O-9	箱掘り	3.144	0.712	0.447	試掘トレンチで一部失われている。
Ⅱ 18	26	M-9・10	箱掘り	2.88	0.506	0.46	49 号土坑を切る。攪乱（Ⅱ層７号溝）に切られる。
Ⅱ 19	26	N-8	箱掘り	2.829	0.69	0.414	
Ⅱ 20	—	D・E-8・9	箱掘り	2.589	0.546	0.383	溶岩礫の多い地山を掘り込んでいる。
Ⅱ 21	—	G・H-7・8	箱掘り	3.543	0.711	0.592	
Ⅱ 22	—	G・H-8	箱掘り	2.501	0.607	0.253	
Ⅱ 23	—	G・H-9	箱掘り	3.531	0.566	0.184	
Ⅱ 24	26	G-10	箱掘り	3.402	0.537	0.217	
Ⅱ 25	—	H・I-9	箱掘り	2.15			92 号土坑を切る。試掘トレンチで一部失われている。
Ⅱ 26	26	E・F-7	箱掘り	2.206	0.665	0.449	
Ⅱ 27	26	L-10・11	箱掘り	2.28	0.655	0.217	
Ⅱ 28	26	N-11	箱掘り	2.218	0.847	0.237	135 号土坑を切る。
Ⅱ 29	26	N-11・12、O-11	箱掘り	2.52	0.497	0.202	

第２表　土坑一覧表

（単位：m）

土坑 No.	図	位　置	平面形状	長　径	短　径	深　さ	備　　考
1	27	Ⅰ－３	円形	0.64	0.625	0.269	
2	27	Ⅰ－３	円形	1.576	1.444	0.45	
3	27	Ｋ－４	円形	1.054	0.94	0.37	試掘トレンチと重複
4	27	Ｋ－５	円形	0.826	0.811	0.257	
5	27	Ｊ－５	楕円形	1.252	1.171		試掘トレンチと重複
6	27	Ⅰ－３	不整形	1.549	0.78	0.293	
7	27	Ⅰ－４	円形	0.746	0.635	0.4	
8	27	Ⅰ－４	円形	0.72	0.699	0.589	
9	27	Ⅰ－４	楕円形	0.731	0.685	0.325	
10	27	Ｊ－４	円形	0.695	0.607	0.35	
11	27	Ｊ－４	円形	1.045	0.888	0.608	
12	27	Ⅰ・Ｊ－４，Ⅰ・Ｊ－５	円形	1.176	1.172	0.417	13 土と重複
13	27	Ⅰ－４・５	円形	1.323	1.086	0.342	12 土と重複
14	27	Ⅰ－４・５	円形	1.342	1.293	0.37	
15	27	Ｈ－４・５，Ⅰ－４	円形	1.366	1.177	0.49	
16	27	Ｈ－４・５，Ⅰ－４	円形	1.504	1.395		
17	27	Ⅰ－５	円形	0.972	0.862	0.432	
18	27	Ⅰ－５	楕円形	1.384	0.931	0.543	Ⅱ層２溝と重複
19	27	Ⅰ－５	円形	1.277	1.174	0.235	
20	27	Ｊ－５	楕円形			0.4	
21	27	Ｇ－６・７，Ｈ－６・７	円形	1.16	1.061	0.75	
22	27	Ｇ－６	円形	1.44	1.323	0.369	
23	27	Ｇ－５	円形	0.973	0.86	0.5	26 土と重複
24	27	Ｇ－６・７	楕円形	1.653	0.737	0.244	
25	28	Ⅰ－５	楕円形	0.708	0.48	0.3	
26	27	Ｇ－５	円形	0.792	0.758	0.262	23 土と重複
27	28	Ｍ－５	円形	1.325	1.279	0.254	
28	28	Ｌ・Ｍ－６	円形	1.848	1.77		試掘トレンチと重複
29	28	Ｋ・Ｌ－７	円形	0.707	0.603	0.106	
30	28	Ｌ－７	円形	0.911	0.875	0.038	
31	28	Ｍ－８	円形	1.607	1.568	0.42	Ⅱ層４溝、４ピットと重複
32	25	Ｍ－８・９	円形	1.256	1.161	0.259	
33	28	Ｌ・Ｍ－10	楕円形	1.365	1.246	0.15	
34	28	Ｍ－９・10	円形	1.331	1.296		
35	26	Ｎ－９	楕円形	1.841	1.54	0.343	Ⅱ層８溝と重複、Ⅱ層９溝と重複
36	—	Ｌ－５	円形	1.241	1.102	0.242	
37	—						欠番
38	—						欠番
39	28	Ｎ－９	円形	1.617	1.526	0.303	試掘トレンチと重複
40	—	Ｏ・Ｐ－８	円形	1.324	1.288	0.127	
41	28	Ｏ－７	円形	0.934	0.896	0.073	
42	—						欠番
43	—						欠番
44	—						欠番
45	—						欠番
46	—						欠番
47	—						欠番
48	28	Ｑ－10	円形	1.078	1.03	0.432	
49	28	Ｍ－９	楕円形			0.3	Ⅱ層 18 溝、試掘トレンチと重複
50	28	Ｑ・Ｒ－９	楕円形	1.422	1.141	0.278	
51	28	Ｑ・Ｒ－８	楕円形	0.794	0.713	0.156	
52	28	Ｒ－８・９	楕円形	1.283	1.05	0.397	

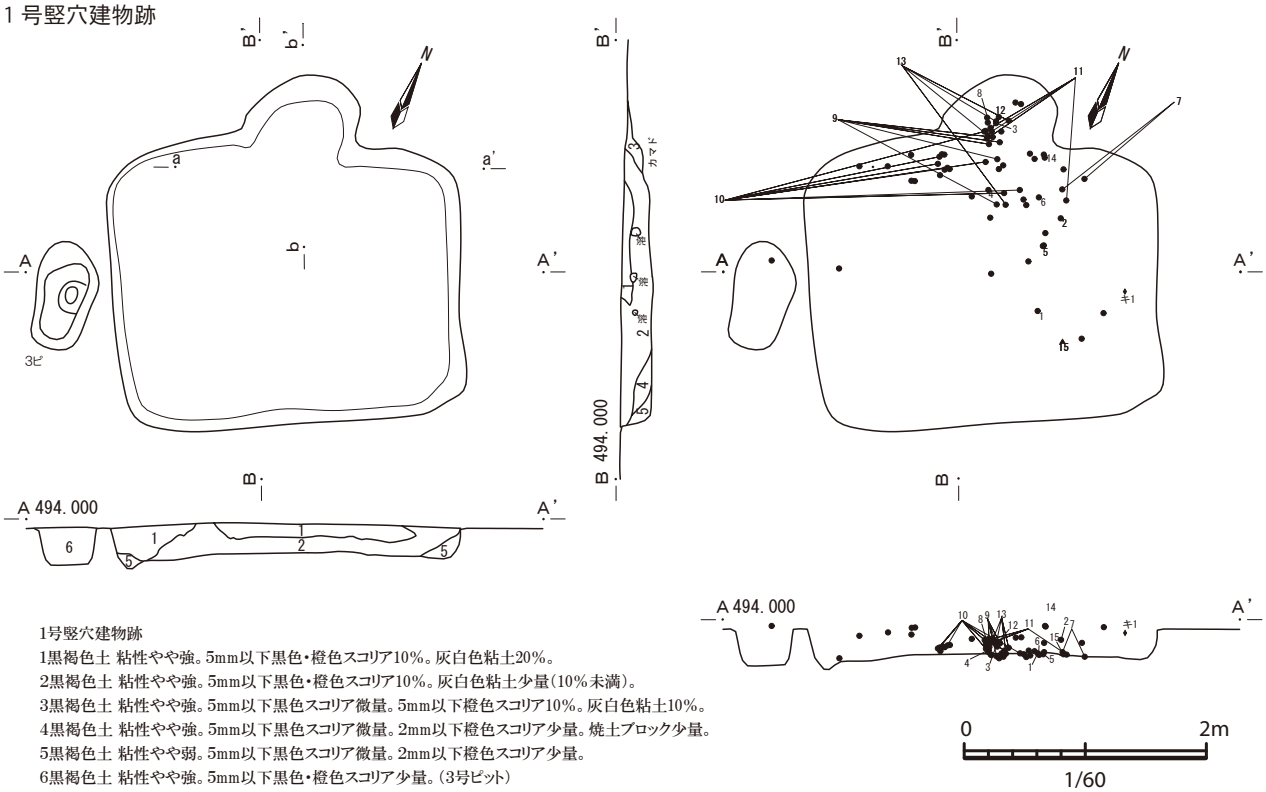
（単位：m）

土坑 No.	図	位　置	平面形状	長　径	短　径	深　さ	備　　考
53	28	P－11	楕円形	1.649	1.079	0.838	
54	28	I－7・8	楕円形	1.369	1.166		
55	28	I－8	円形	0.826	0.79	0.214	
56	28	C－7	楕円形	0.887	0.776	0.396	
57	28	B・C－7	円形	0.604	0.576	0.247	
58	28	C－7	楕円形	0.897	0.633	0.443	
59	28	B・C－8	楕円形	1.004	0.798	0.437	
60	28	B－8	円形	0.863	0.83		
61	29	B－9	円形	0.745	0.681	0.416	
62	29	B－11	円形	1.436	1.3	0.548	12 号建物と重複、試掘トレンチと重複
63	29	B－11	楕円形	1.255	1.13	0.274	試掘トレンチと重複
64	29	C－11	楕円形	0.962	0.833	0.286	
65	29	C・D－10・11	楕円形	1.442	1.23	0.278	
66	15	D－6・7	楕円形	0.634	0.532	0.246	10 号建物と重複
67	29	D－10	円形	0.847	0.777	0.194	
68	29	E－10・11	楕円形	0.741	0.694	0.492	
69	29	F－10	円形	1.534	1.471	0.473	
70	29	E・F－11	円形	1.502	1.493	0.47	72 土と重複
71	29	F－11	円形	1.387	1.293	0.51	
72	29	E－11	円形	1.102	1.098	0.246	70 土と重複
73	29	E・F－11	円形	1.313	1.261	0.887	
74	—						欠番
75	29	F・G－10・11	楕円形	1.349	1.094		76 土と重複
76	29	F・G－10，G－11	円形	1.056	0.789	0.119	75 土と重複
77	29	F・G－11	円形	0.884	0.781	0.173	
78	29	G－11	円形	1.086	1.024	0.1	
79	29	G－11	円形	1.28	1.153	0.615	
80	29	F－11	円形	1.244	1.101	0.356	
81	29	G・H－10	円形	0.983	0.918	0.107	
82	29	G・H－10	円形	1.668	1.577	0.798	
83	—						欠番
84	29	F－12	円形	0.837	0.746	0.24	
85	30	F・G－12	円形	0.839	0.804	0.142	
86	30	G－12・13	楕円形	1.025	0.765	0.125	試掘トレンチと重複
87	30	G－12	円形	1.886	1.823		
88	30	G－12	円形	1.274	1.141	0.978	試掘トレンチと重複
89	30	G・H－11・12	円形	1.396	1.292	0.591	90 土、試掘トレンチと重複
90	30	G・H－11	円形				89 土、90 土と重複
91	30	H－11	円形	0.955	0.801	0.379	90 土と重複
92	30	H－9・10	円形	1.548	1.464	0.55	試掘トレンチと重複
93	—	I－10・11	円形	1.255	1.024	0.427	第２地点調査区壁にかかる
94	30	I－10	楕円形	1.581	1.312	0.752	第２地点調査区壁にかかる
95	30	F－8	楕円形	0.923	0.849	0.261	試掘トレンチと重複
96	30	F－8	円形	0.68	0.604	0.236	
97	30	F－8	円形	0.648	0.584	0.324	
98	30	F－8・9	楕円形	0.736	0.628	0.286	
99	30	F・G－8	円形	0.592	0.5	0.178	
100	30	F・G－8	円形	0.639	0.621	0.396	
101	30	G－8	円形	0.68	0.498	0.364	
102	30	G－8	円形	0.755	0.709	0.356	試掘トレンチと重複
103	30	E・F－8	円形	1.122	1.028	0.305	
104	30	E－8	円形	0.767	0.74	0.359	

（単位：m）

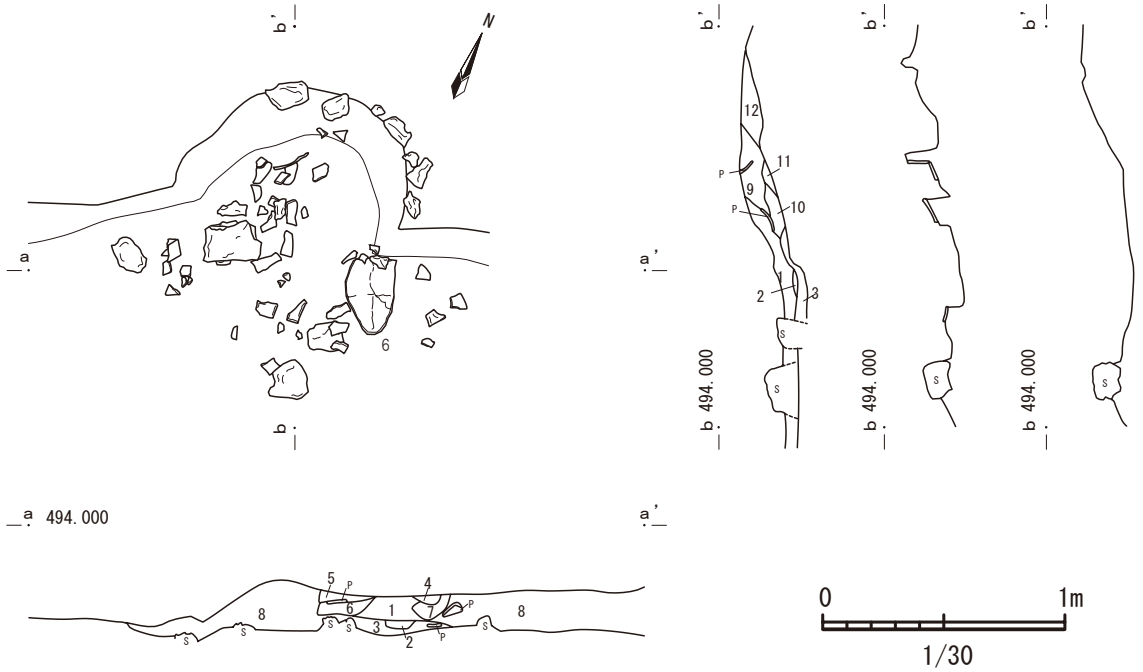
土坑 No.	図	位　置	平面形状	長　径	短　径	深　さ	備　　考
105	30	F－7	円形	1.546	1.356	0.51	106 土と重複
106	30	F－7	円形	1.054	0.847	0.5	105 土と重複
107	30	G－7	円形	0.76	0.659	0.399	112 土と重複
108	31	G－7	円形	1.07	0.947	0.46	110 土と重複
109	31	G－7・8	円形	1.18	1.107	0.39	110 土と重複
110	31	G－7	円形			0.4	109 土と重複
111	31	G－7	円形	0.806	0.701	0.136	
112	31	G－7	不整形	1.047	0.613	0.316	107 土と重複
113	31	F・G－7	不整形	1.429	0.924	0.322	
114	31	F－7	楕円形	0.92	0.698	0.422	
115	31	F－9	円形	1.207	1.13	0.48	
116	25	G－7	楕円形	0.702	0.554	0.183	5 溝と重複
117	31	J－9	円形	0.921	0.858	0.175	
118	—						欠番
119	31	J－10	円形	1.34	1.268	0.365	
120	31	I・J－11	円形	1.339	1.254	0.422	
121	31	I－12	円形	0.942	0.878	0.094	122 土と重複
122	31	I－12	円形	1.278	1.209	0.494	121 土と重複
123	31	I－12	円形	1.227	1.11	0.358	
124	31	H－13	円形	1.117	1.092	0.216	
125	31	I・J－13	円形	1.607	1.507	0.92	126 土と重複
126	31	J－13	円形				125 土、127 土と重複
127	31	J－13	円形	1.556	1.449	0.691	126 土と重複
128	31	J－13・1 4	円形	1.428	1.312	0.757	
129	31	J－13	円形	1.229	1.14	0.217	
130	32	J・K－13	楕円形	1.816	1.419	0.552	
131	32	K－11・12	楕円形	1.553	1.218	0.382	9 ピットと重複
132	32	K－11	楕円形	0.791	0.602	0.337	
133	32	K－13	円形	1.197	1134	0.164	134 土と重複
134	32	K－13	円形	1.376	1.307	0.274	133 土と重複
135	26	N－11	円形	1.38	1.258	0.129	Ⅱ層 28 溝と重複
136	32	N－12	円形	0.608	0.545	0.232	試掘トレンチと重複
137	32	K－10	円形	1.272	1.134	0.18	第３地点調査区壁にかかる
138	32	I・J－10・11	円形	1.542	1.5	0.584	
139	32	L・M－12・13	円形	1.412	1.29	0.259	140 土と重複
140	32	L・M－12・13	円形	1.547	1.464	0.376	139 土と重複
Ⅱ 1	25	I－4	不整形	0.959	0.787	0.438	Ⅱ層３溝と重複
Ⅱ 2	32	G・H－5	円形	1.128	0.975	0.469	
Ⅱ 3	32	D－10	円形	1.429	1.485	0.444	
Ⅱ 4	32	F－10	円形	1.448	1.413	0.298	
Ⅱ 5	32	G－10	円形	1.524	1.348	0.282	
Ⅱ 6	32	H－11		1.165		0.19	
1 p	25	I－4	円形	0.375	0.362	0.155	Ⅱ層３溝と重複
2 p	—	I－7	円形	0.57	0.53	0.492	
3 p	—	K－8	楕円形	0.898	0.513	0.5	深さは断面図で確認
4 p	28	M－8	円形	0.42	0.404	0.182	31 土と重複
5 p	25	M－9	円形	0.416	0.4	0.179	Ⅱ層５溝と重複
6 p	25	M－9	円形	0.464	0.389	0.232	
7 p	—						欠番
8 p	—	G－12	楕円形	0.519	0.4	0.066	試掘トレンチと重複
9 p	32	K－11	楕円形	0.548	0.506	0.184	131 土と重複

1 号竪穴建物跡



1号竪穴建物跡
1黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア10%。灰白色粘土20%。
2黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア10%。灰白色粘土少量(10%未満)。
3黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア微量。5mm以下橙色スコリア10%。灰白色粘土10%。
4黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア微量。2mm以下橙色スコリア少量。焼土ブロック少量。
5黒褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア微量。2mm以下橙色スコリア少量。
6黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア少量。(3号ピット)

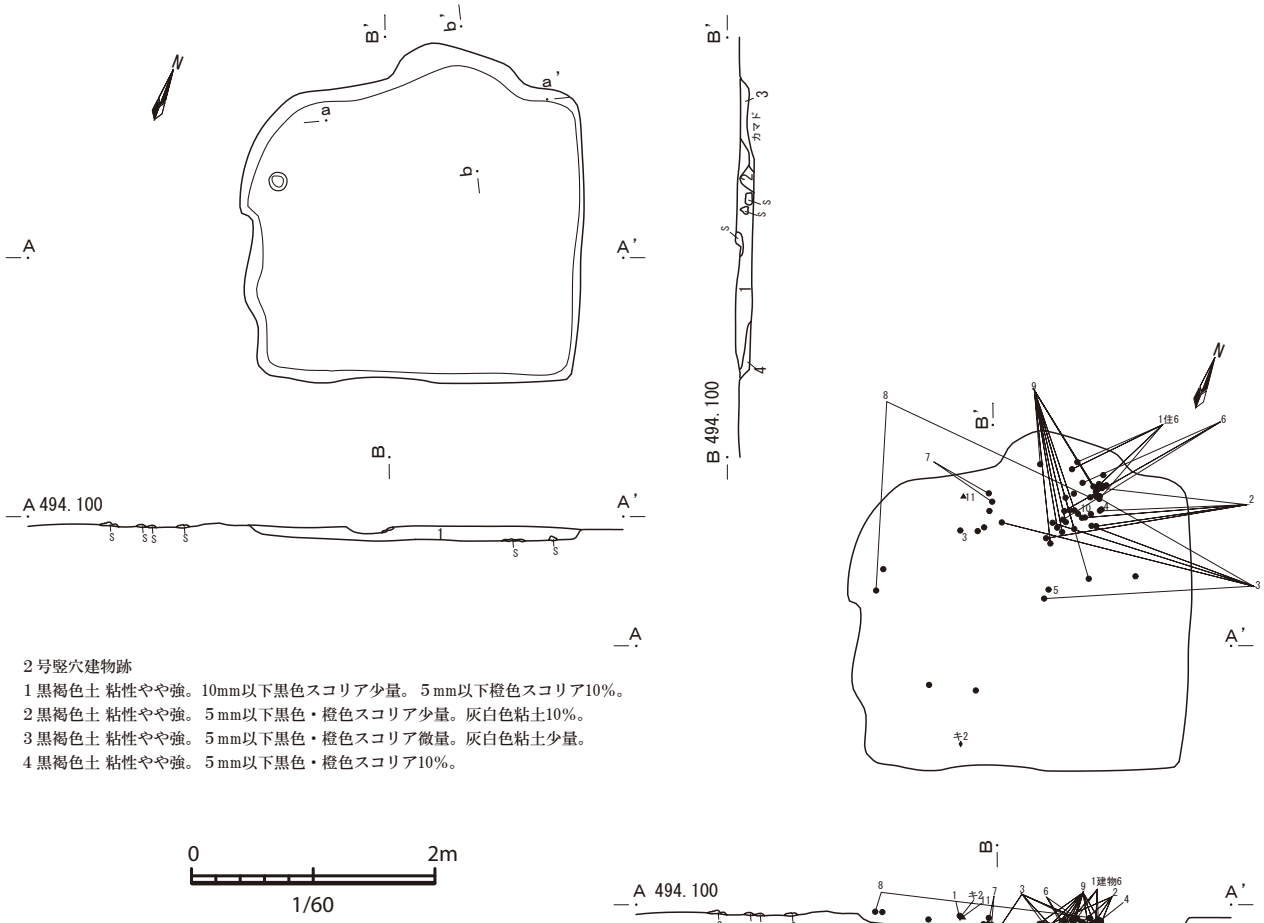
1 号竪穴建物跡カマド



1号竪穴建物跡カマド
1黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土ブロック30%。5mm以下橙色スコリア少量。
2黒褐色土 粘性やや強。焼土ブロック30%。
3黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒・橙色スコリア20%。
4黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア少量。灰白色粘土粒子微量。
5黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土ブロック20%。
6黒褐色土 粘性やや強。焼土粒子20%。
7黒褐色土 粘性やや強。焼土粒子30%。
8黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア30%。灰白色粘土ブロック微量。
9黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土ブロック10%。
10黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア少量。焼土ブロック30%。
11黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘子微量。
12黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・5mm以下橙色スコリア10%。灰白色粘土ブロック少量。

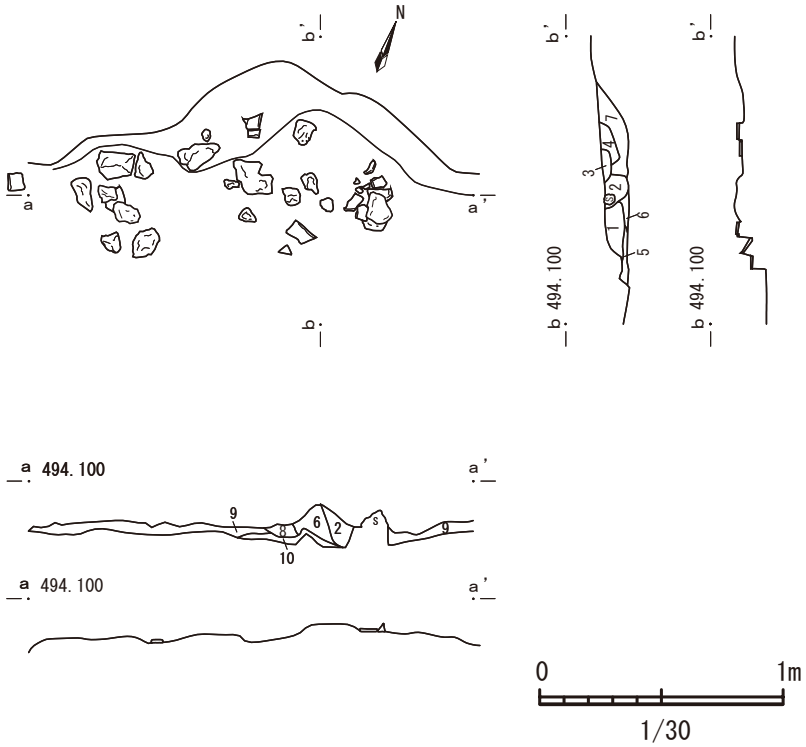
第 4 図　1 号竪穴建物跡

2号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡
1黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア少量。５mm以下橙色スコリア10%。
2黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア少量。灰白色粘土10%。
3黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。
4黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア10%。

2号竪穴建物跡カマド



2号竪穴建物跡カマド
1黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア30%。焼土ブロック30%。
2黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア30%。焼土・灰白色粘土ブロック10%。
3黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア20%。灰白色粘土ブロック20%。
4黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色・橙色スコリア20%。焼土粒子10%。炭化材・灰白色粘土少量。
5焼土
6焼土 灰10%。
7黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色スコリア20%・橙色スコリア少量。焼土粒子少量。
8焼土 黒褐色土ブロック10%。
9黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色スコリア20%・橙色スコリア少量。焼土・灰白色粘土微量。
10黒褐色土 黒褐色土 粘性やや強。５mm以下黒色スコリア20%・橙色スコリア少量。焼土粒子少量。

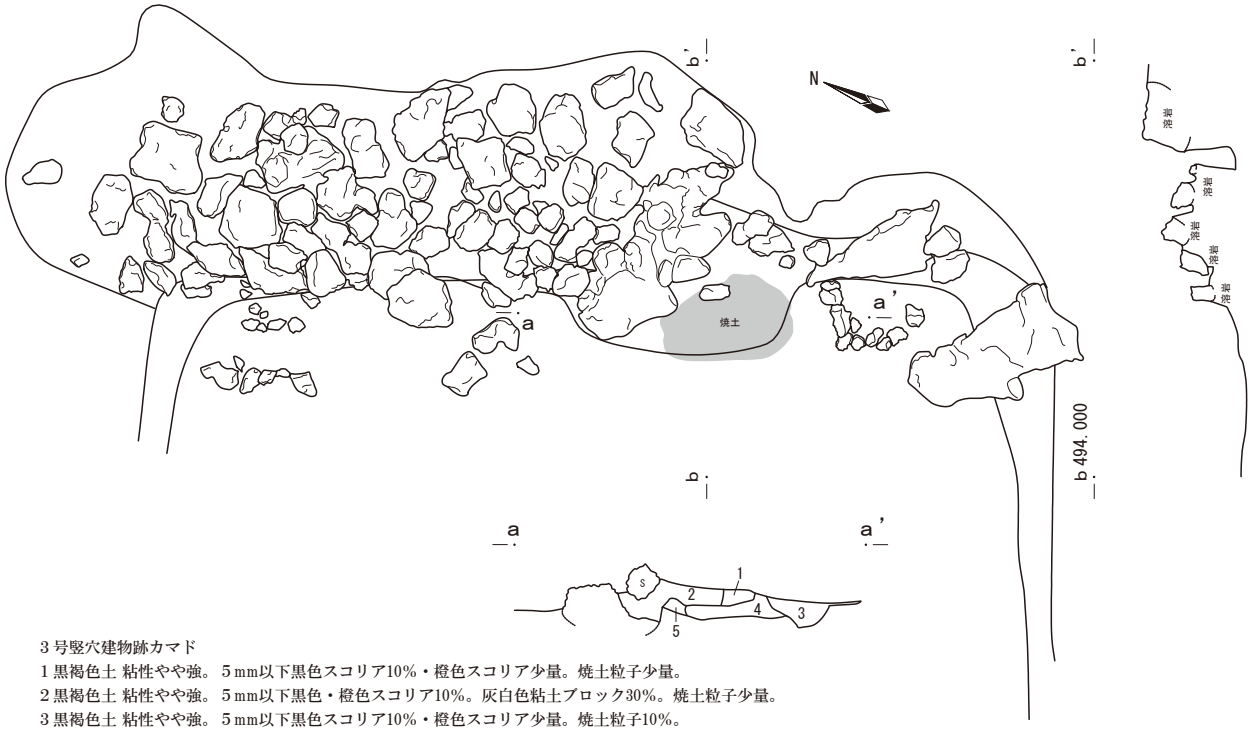
第５図　２号竪穴建物跡

3号竪穴建物跡

3号竪穴建物跡
1 黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土微量。
2 黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土10%。
3 黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア微量。
4 黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土少量。
5 暗褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア少量（Ⅱ層12溝）。
6 暗褐色土 粘性やや強。5mm以下橙色スコリア少量。
7 黒褐色土 粘性弱。5mm以下黒色スコリア20%。3mm以下橙色スコリア10%。地山。

0 2m
1/60

3号竪穴建物跡カマド

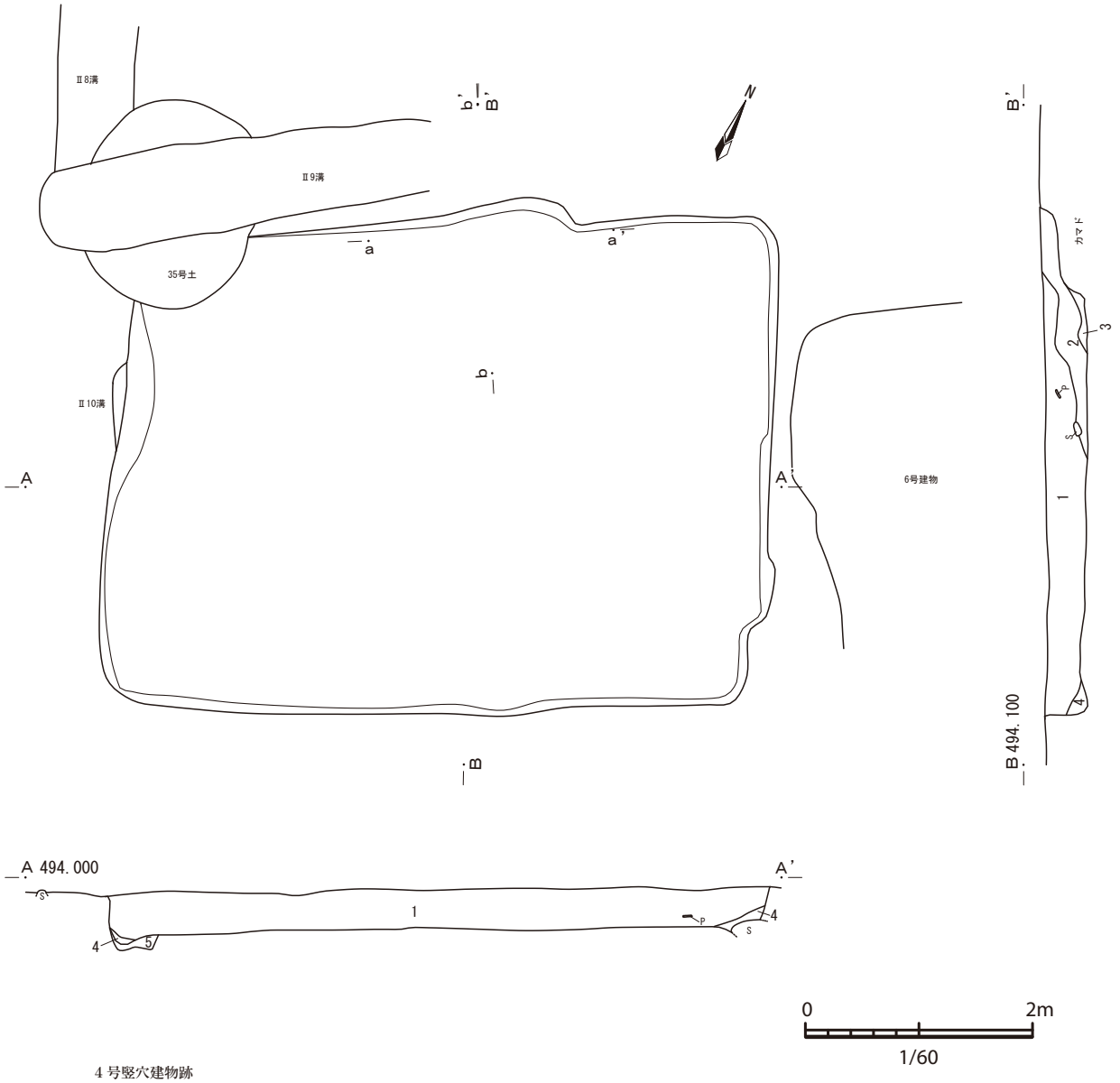


3号竪穴建物跡カマド
1 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア10%・橙色スコリア少量。焼土粒子少量。
2 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・橙色スコリア10%。灰白色粘土ブロック30%。焼土粒子少量。
3 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア10%・橙色スコリア少量。焼土粒子10%。
4 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア10%・橙色スコリア少量。焼土ブロック10%。
5 焼土 5mm以下黒色スコリア少量。

0 1m
1/30

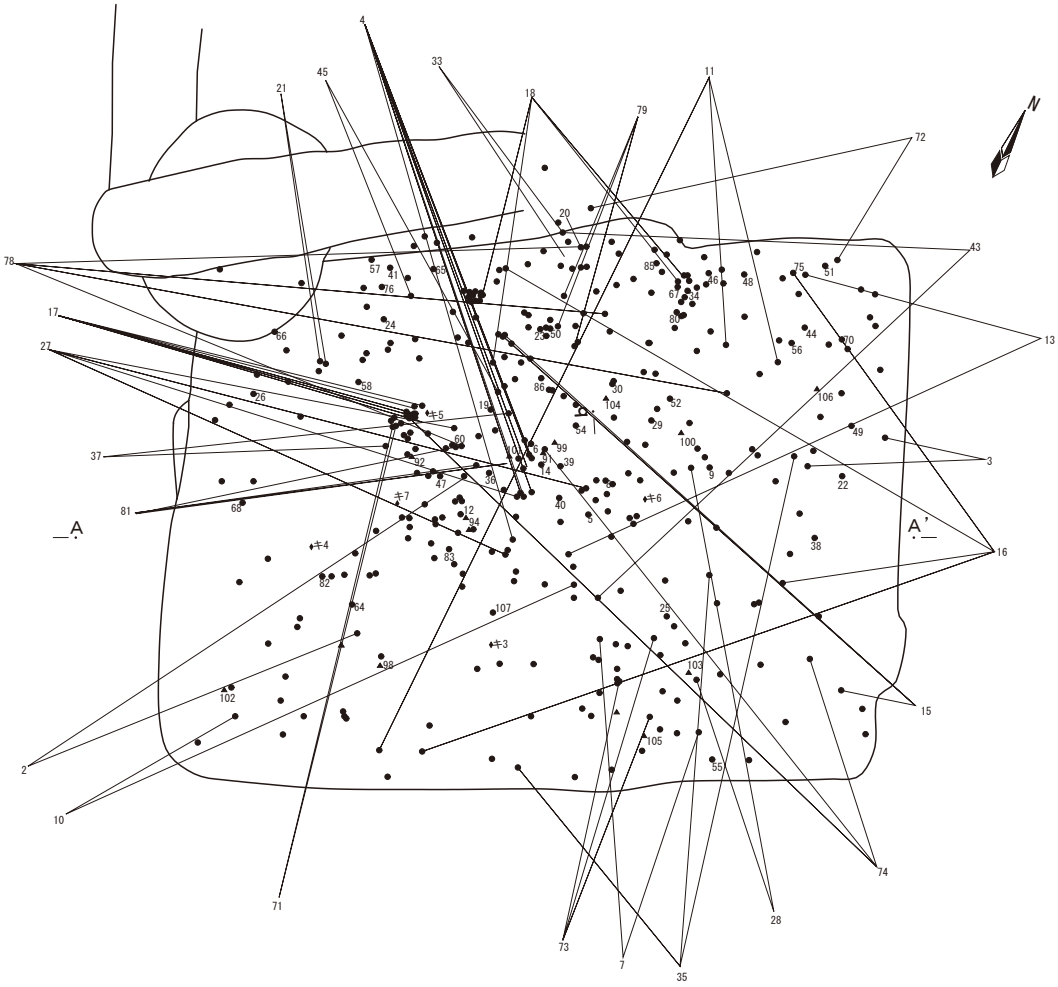
第6図　3号竪穴建物跡

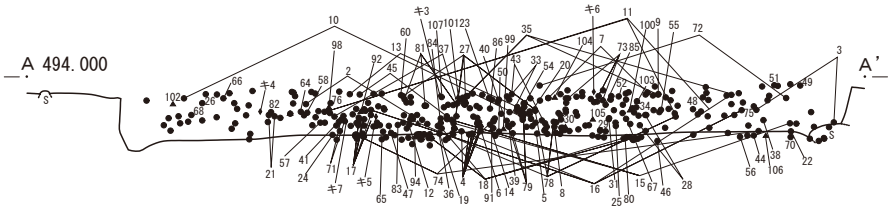
4号竪穴建物跡



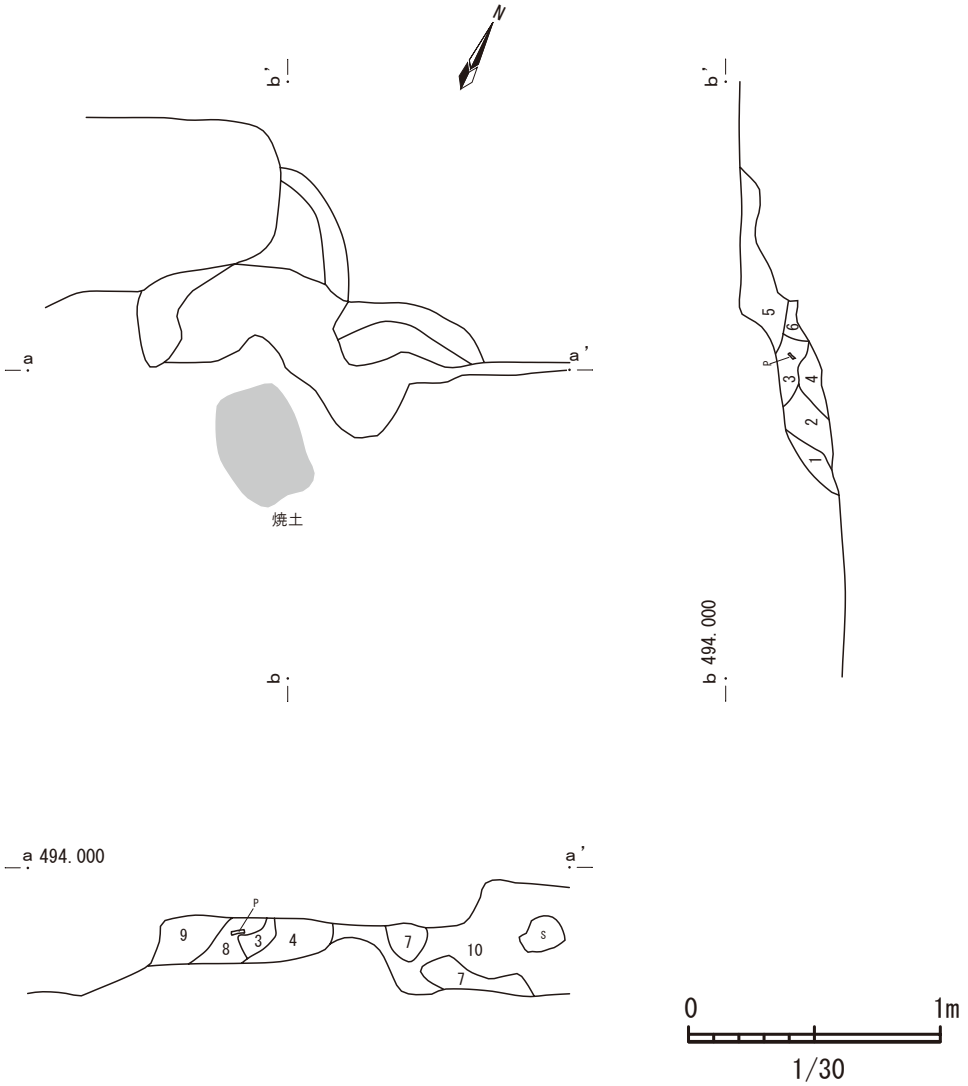
4号竪穴建物跡
1黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・5mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土微量。
2黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・5mm以下橙色スコリア少量。灰白色粘土20%。焼土少量。
3黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・5mm以下橙色スコリア・灰白色粘土少量。焼土10%。
4黒褐色土 粘性やや弱。10mm以下黒色スコリア10%。5mm以下橙色スコリア微量。
5黒褐色土 粘性やや弱。10mm以下黒色スコリア10%。5mm以下橙色スコリア少量。

第7図　4号竪穴建物跡（1）





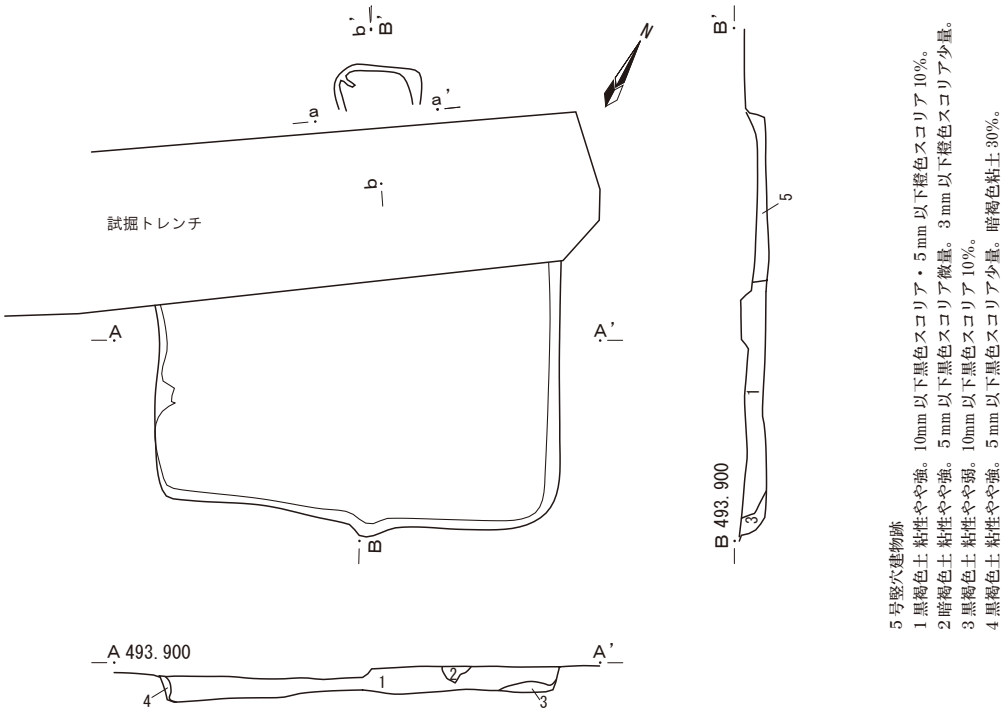
第８図　４号竪穴建物跡（２）



４号竪穴建物跡カマド
１暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 10%。焼土微量。
２暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 30%。焼土少量。
３暗褐色土 粘性強。灰白色粘土 30%。焼土 10%。
４暗褐色土 粘性やや強。焼土 30%。灰白色粘土少量。
５暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土 20%。10mm 以下黒色スコリア少量。
６焼土 暗褐色土 30%。
７暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土 10%、
８暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 20%。焼土 10%。
９暗褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土 20%。
10 黒褐色土　粘性弱。５mm 以下黒色スコリア 30%。２mm 以下橙色スコリア微量。地山。

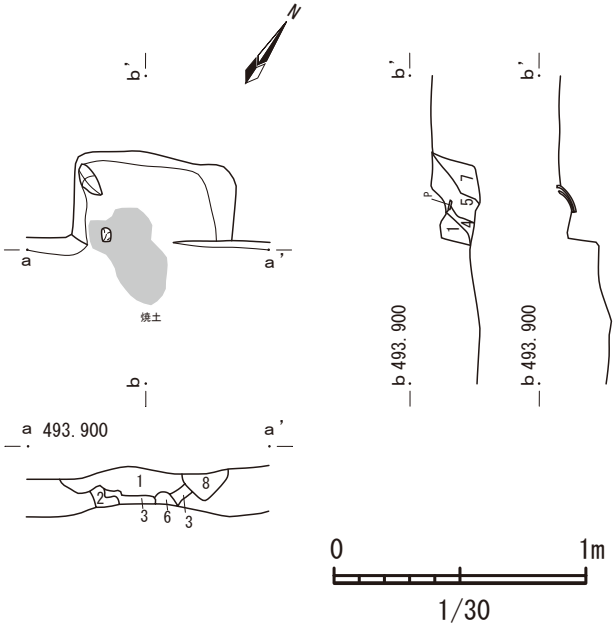
第９図　４号竪穴建物跡（３）

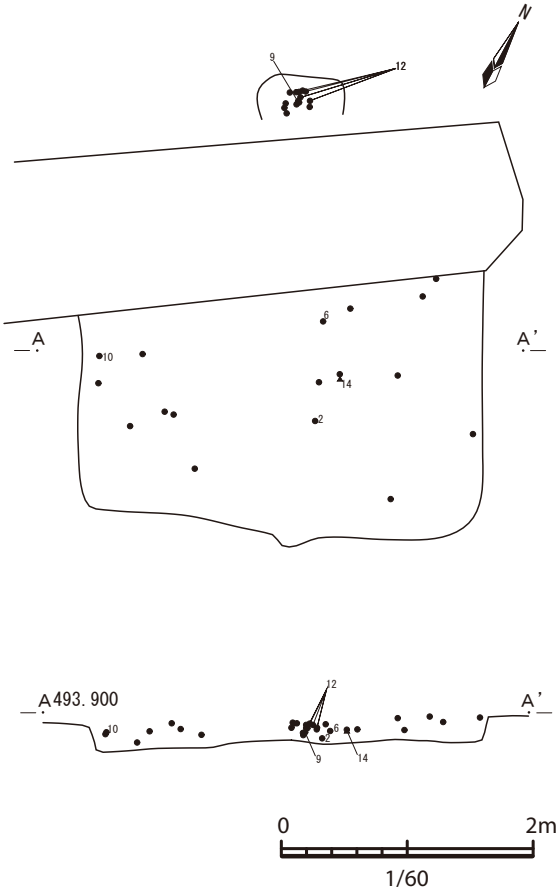
5号竪穴建物跡



5号竪穴建物跡
1黒褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア・5mm以下橙色スコリア10%。
2暗褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア微量。3mm以下橙色スコリア少量。
3黒褐色土 粘性やや弱。10mm以下黒色スコリア10%。
4黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア少量。暗褐色粘土30%。

5号竪穴建物跡カマド

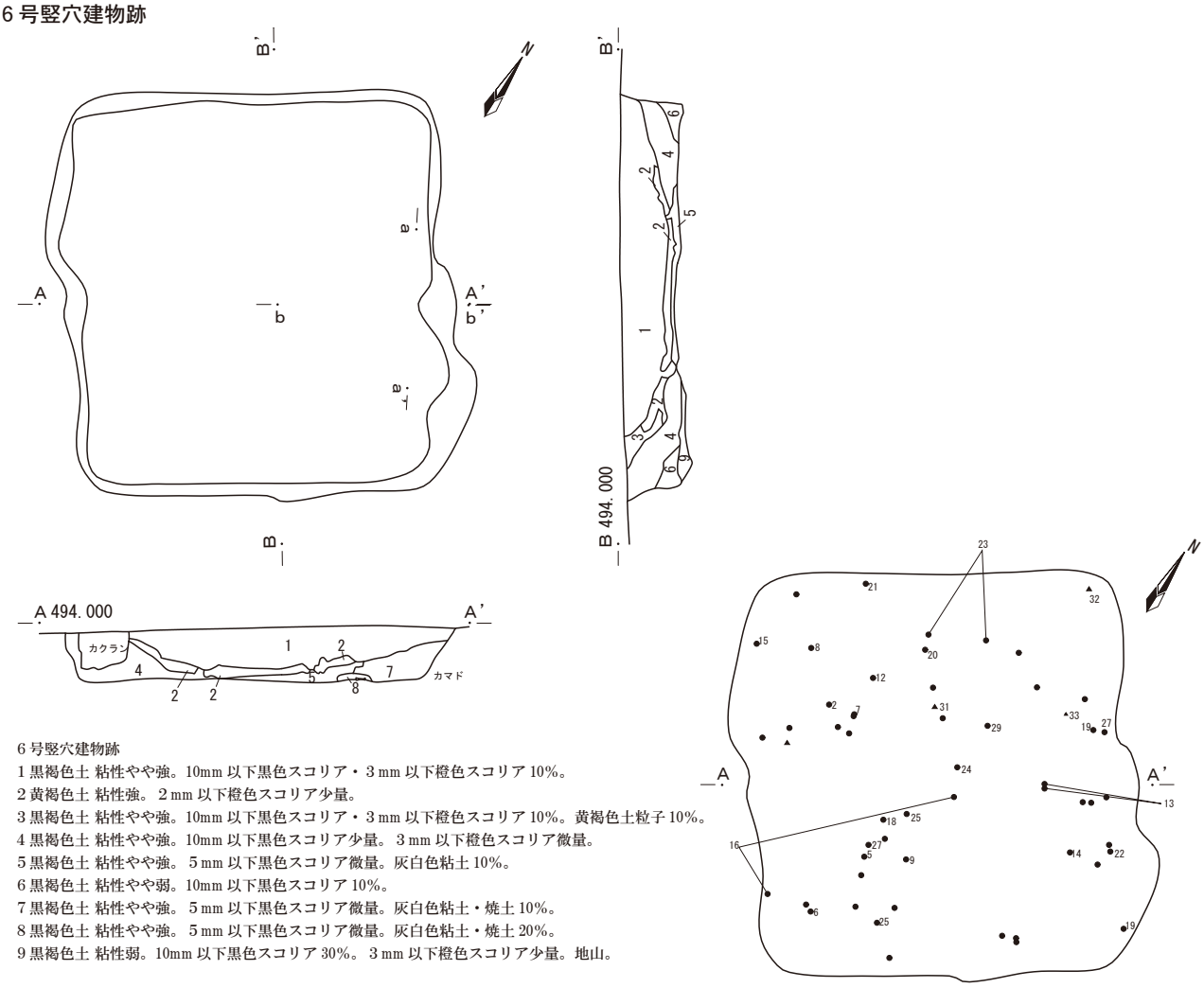




5号竪穴建物跡カマド
1暗褐色土 粘性やや強。焼土30%。灰白色粘土10%。
2暗褐色土 粘性やや強。焼土30%。灰白色粘土少々。
3焼土
4暗褐色土 粘性やや強。焼土30%。灰白色粘土10%。
5暗褐色土 粘性やや強。焼土10%。灰白色粘土20%。
6暗褐色土 粘性やや強。焼土・灰白色粘土少量。
7黒褐色土 粘性弱。10mm以下黒色粒子30%。
8試掘埋土

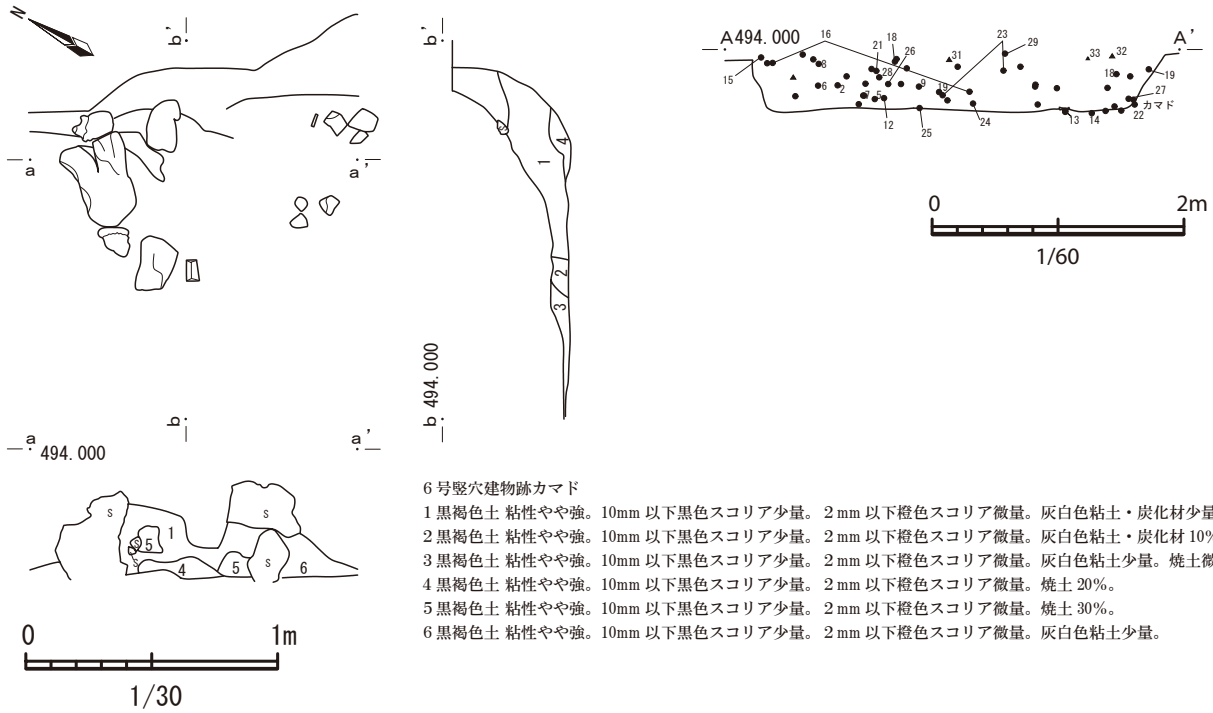
第10図　5号竪穴建物跡

6号竪穴建物跡



6号竪穴建物跡
1 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。
2 黄褐色土 粘性強。2mm 以下橙色スコリア少量。
3 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。黄褐色土粒子 10%。
4 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。3mm 以下橙色スコリア微量。
5 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア微量。灰白色粘土 10%。
6 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア 10%。
7 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア微量。灰白色粘土・焼土 10%。
8 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア微量。灰白色粘土・焼土 20%。
9 黒褐色土 粘性弱。10mm 以下黒色スコリア 30%。3mm 以下橙色スコリア少量。地山。

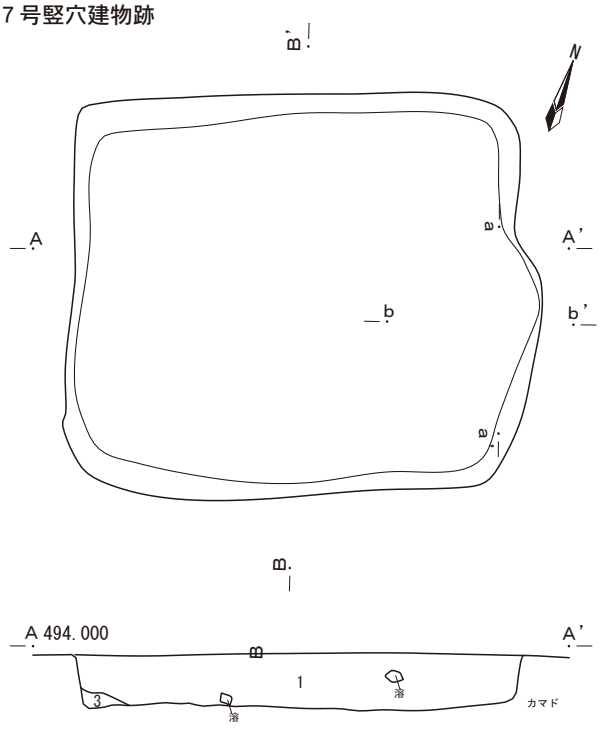
6号竪穴建物跡カマド



6号竪穴建物跡カマド
1 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土・炭化材少量。
2 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土・炭化材 10%。
3 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。焼土微量。
4 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。焼土 20%。
5 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。焼土 30%。
6 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア少量。2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。

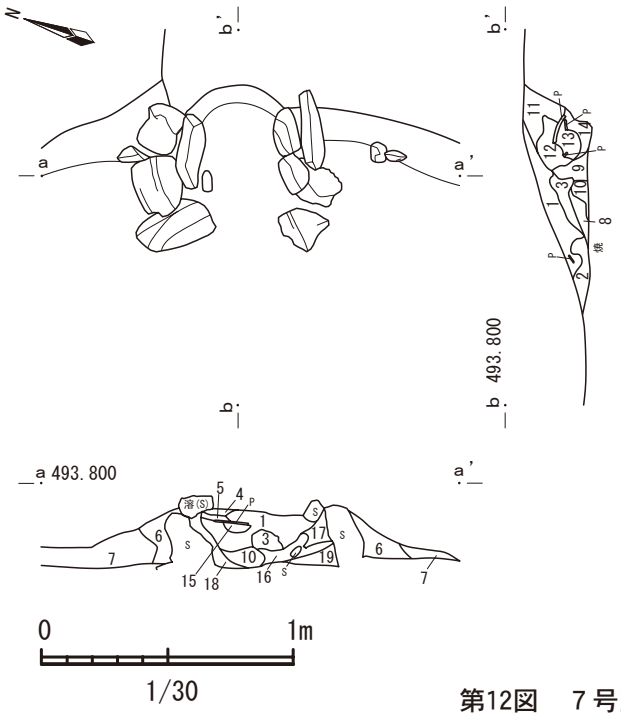
第11図　6号竪穴建物跡

7号竪穴建物跡



7号竪穴建物跡
1 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
2 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア 10%。
3 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。
4 黒褐色土 粘性弱。10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア 30%。地山。

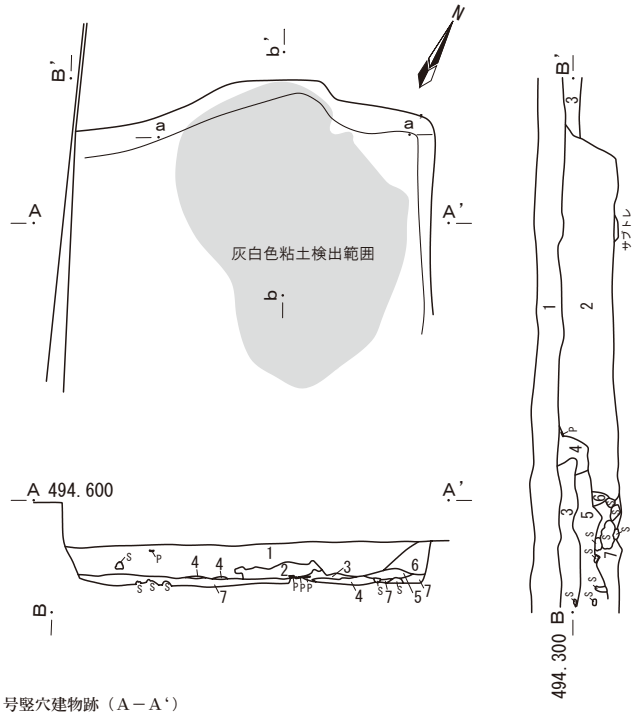
7号竪穴建物跡カマド



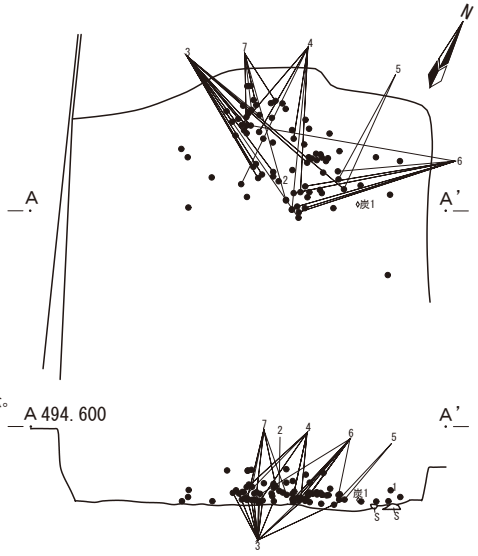
7号竪穴建物跡カマド
1 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 10%。焼土少量。
2 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 20%。焼土 10%。
3 灰　粘性やや弱。黒褐色土少量。
4 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土少量。
5 灰　粘性やや弱。
6 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 30%。
7 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・炭化材少量。
8 焼土
9 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。灰微量。
10 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。灰・焼土微量。
11 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 20%。
12 黒褐色土 灰白色粘土 30%。焼土少量。
13 黒褐色土 焼土 20%。灰少量。
14 黒褐色土 5mm 以下黒色スコリア 30%。焼土微量。
15 灰
16 焼土・灰
17 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色・橙色スコリア、焼土少量。
18 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色・橙色スコリア、灰白色粘土・炭化材少量。
19 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 10%。

第12図　7号竪穴建物跡

８号竪穴建物跡

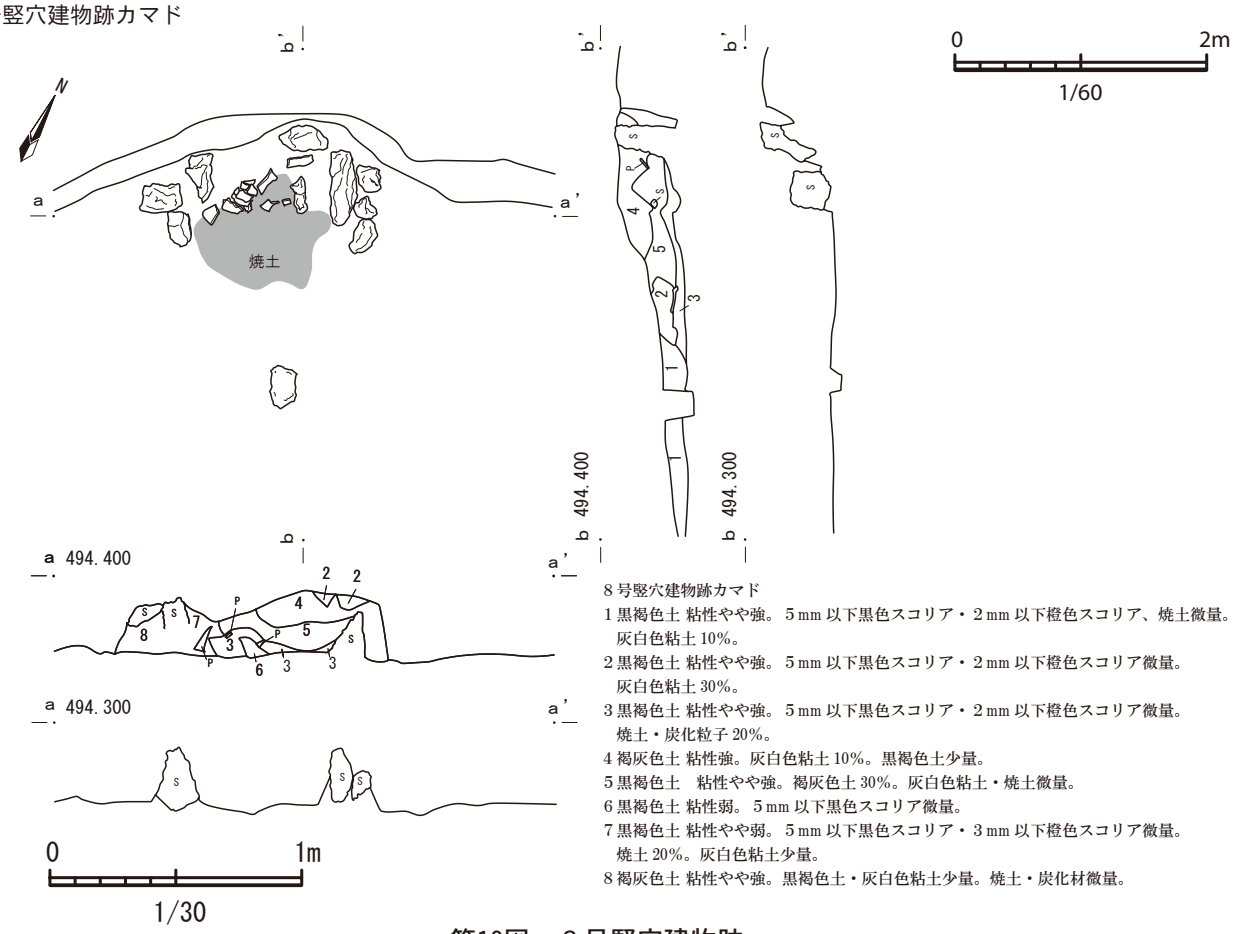


８号竪穴建物跡（Ｂ－Ｂ‘）
１灰色土 粘性強。作土・鋤床層。
２黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。灰微量。
３褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア微量。
４褐色土 粘性やや強。５～８cm 溶岩礫。黒褐色土 20%。
５黒褐色土 粘性やや弱。２～５cm 溶岩礫。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア 10%。
６黒褐色土 粘性やや弱。黄褐色粘土 30%。
７黄褐色土 粘性やや強。５～30cm 溶岩礫多量。



８号竪穴建物跡（Ａ－Ａ‘）
１黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア 10%。灰微量。
２黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土 30%。焼土微量。
３黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土 10%。
４灰白色土 粘性やや強。黒褐色土 30%。
５黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア 10%。灰白色粘土 10%。
６黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下橙色スコリア・３mm 以下橙色スコリア 10%。褐色土 10%。
７黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア 30%。地山。

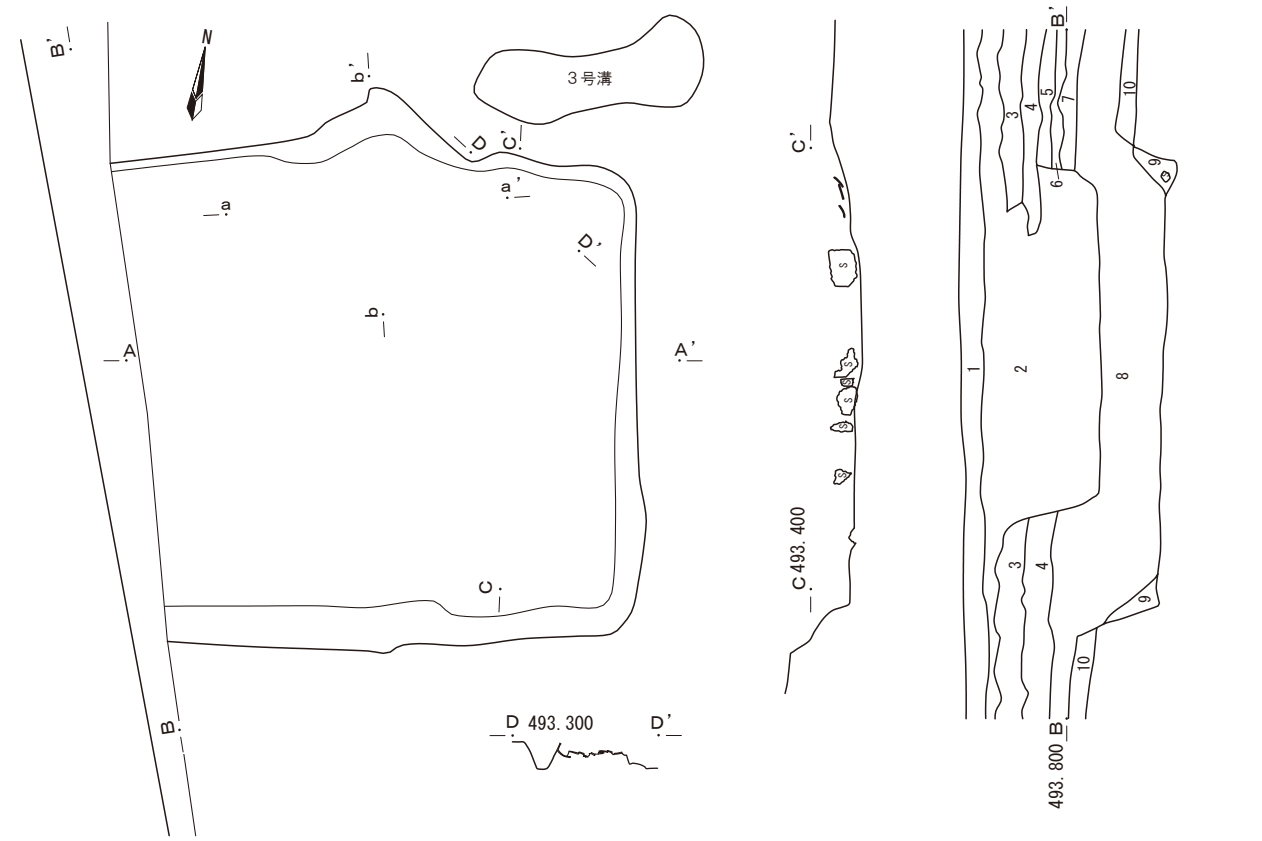
８号竪穴建物跡カマド



８号竪穴建物跡カマド
１黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア、焼土微量。灰白色粘土 10%。
２黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土 30%。
３黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア微量。焼土・炭化粒子 20%。
４褐灰色土 粘性強。灰白色粘土 10%。黒褐色土少量。
５黒褐色土　粘性やや強。褐灰色土 30%。灰白色粘土・焼土微量。
６黒褐色土 粘性弱。５mm 以下黒色スコリア微量。
７黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア・３mm 以下橙色スコリア微量。焼土 20%。灰白色粘土少量。
８褐灰色土 粘性やや強。黒褐色土・灰白色粘土少量。焼土・炭化材微量。

第13図　８号竪穴建物跡

9号竪穴建物跡



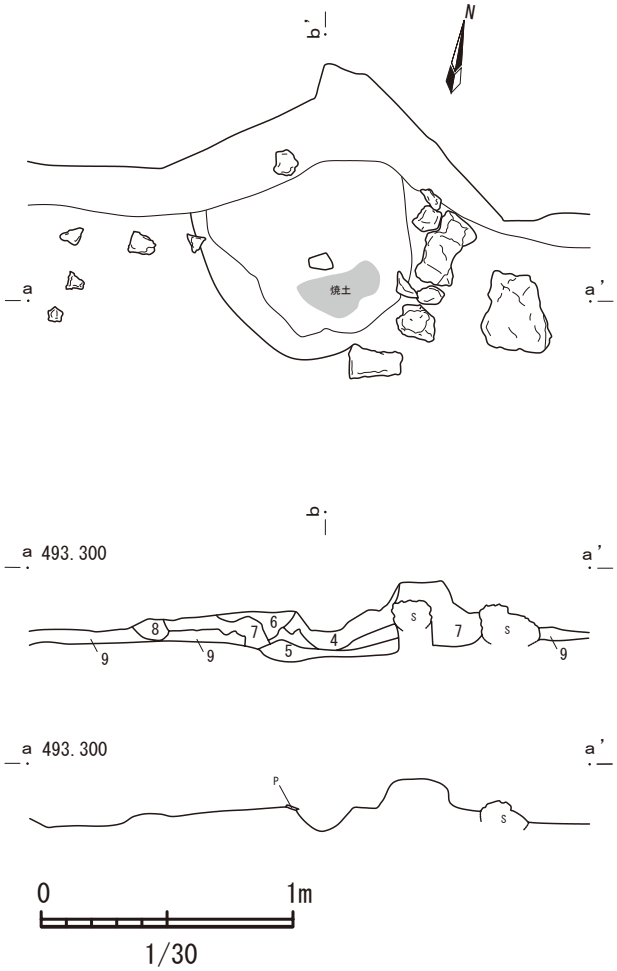
9号竪穴建物跡（A－A‘）
1 褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア少量。
2 暗褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア10%。2mm以下橙色スコリア少量。15～45cmほどの溶岩礫。
3 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア10%。2mm以下橙色スコリア少量。灰白色粒子微量。
4 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア少量。黄褐色土微量。
5 黒褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア10%。

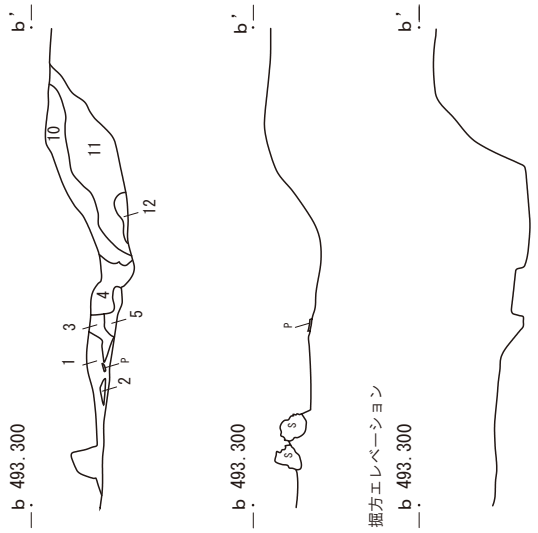
9号竪穴建物跡（B－B‘）
1 褐灰色土 作土・鋤床層。
2 褐色土 粘性やや強。15mm以下礫・5mm以下黒色スコリア少量。
3 褐色土 粘性弱。5mm以下橙色スコリア30%。
4 褐色土 粘性やや弱。砂質。5mm以下黒色・橙色スコリア微量。
5 褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。
6 褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。黒褐色土10%。
7 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。褐色土20%。
8 黒褐色土 A－A‘の3層と同じ。
9 黒褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア10%。
10 黒褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下橙色スコリア30%。地山。

0　2m
1/60

第14図　9号竪穴建物跡（1）

9 号竪穴建物跡カマド

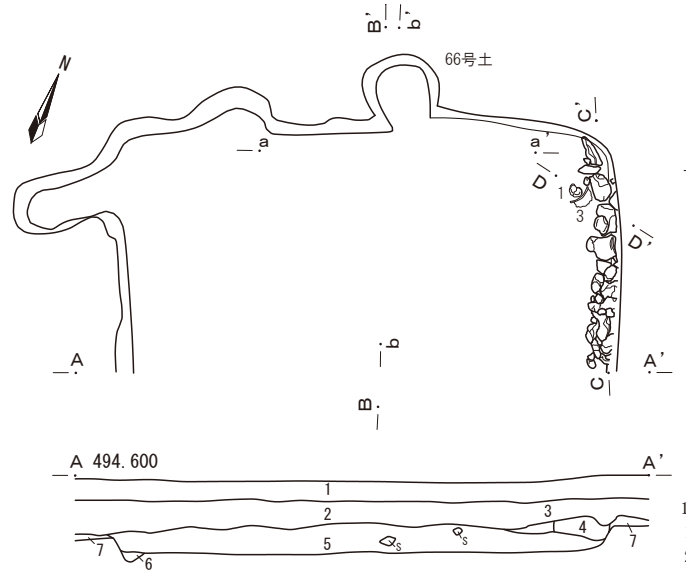


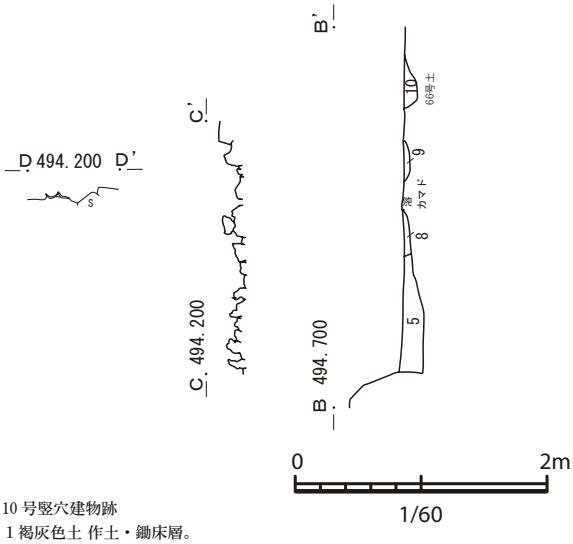


9 号竪穴建物跡カマド

1 黒褐色土 粘性やや弱。3 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア、灰白色粒子微量。
2 褐灰色土 粘性やや強。黒褐色土・焼土少量。
3 黒褐色土 粘性やや弱。灰白色粒子少量。3 mm 以下黒色スコリア微量。
4 黒褐色土 粘性やや弱。5 mm 以下黒色スコリア少量。焼土微量。
5 橙色土 粘性やや弱。焼土・灰。
6 黒褐色土 粘性やや弱。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粒子少量。
7 褐灰色土 粘性やや強。灰白色粘土 30%。焼土少量。
8 黒褐色土 粘性やや弱。2 mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粒子 10%。
9 黒褐色土 粘性やや弱。3 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粒子微量。
10 黒褐色土 粘性やや強。2 mm 以下黒色スコリア・橙色スコリア微量。灰白色粘土・焼土 30%。
11 黒褐色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア・1 mm 以下橙色スコリア、灰白色粒子微量。
12 黒褐色土 粘性やや弱。3 mm 以下黒色スコリア微量。焼土 30%。

10 号竪穴建物跡



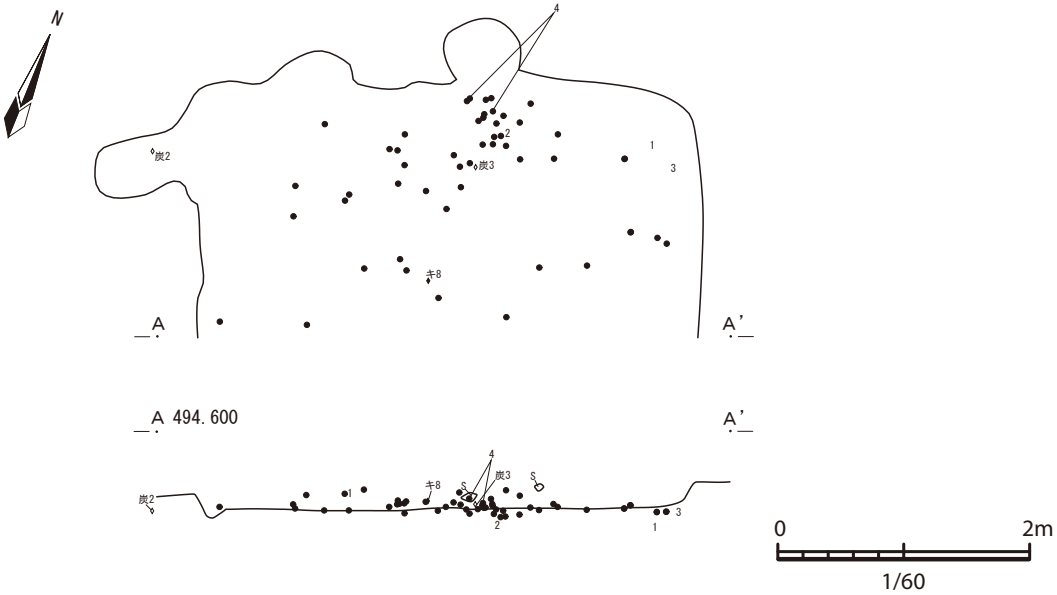


7 黒褐色土 粘性やや弱。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア 10%。褐色土少量。地山。
8 褐灰色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土 20%。
9 黒褐色土 粘性やや強。2 mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粒子微量。
10 黒褐色土 粘性やや弱。2 mm 以下橙色スコリア少量（66 号土）。

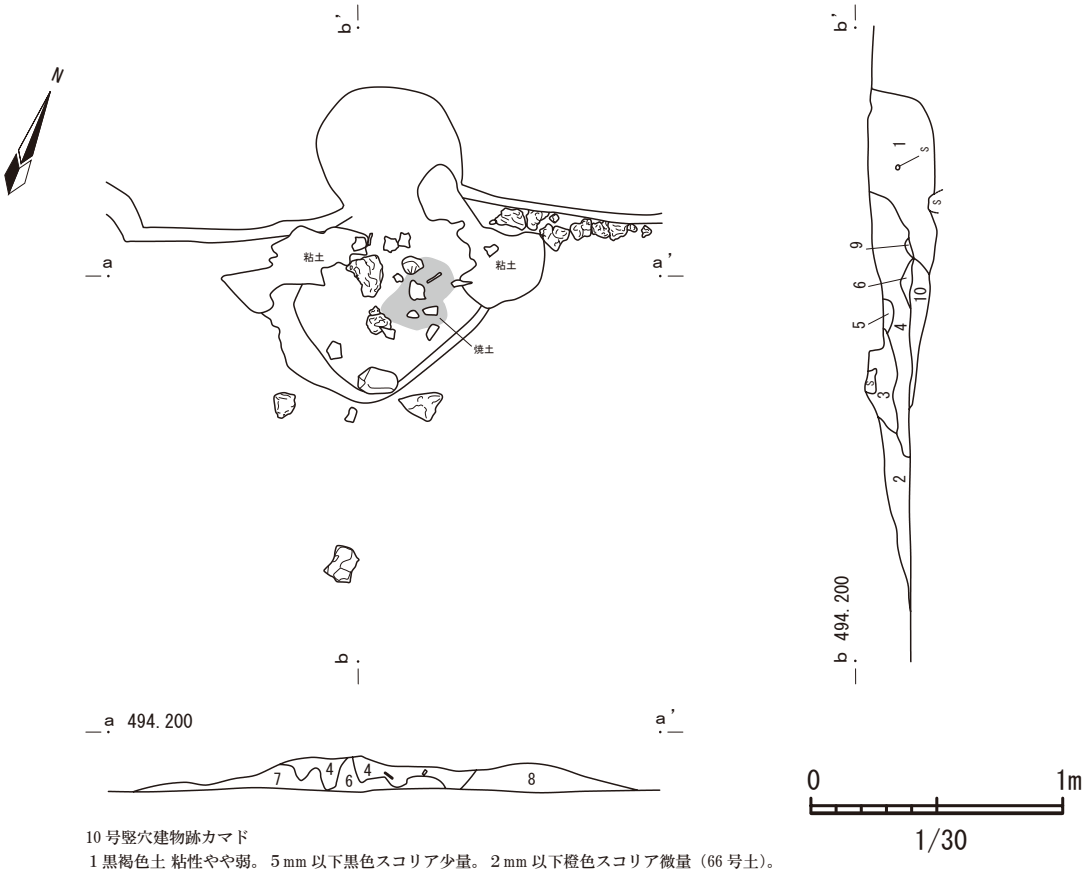
10 号竪穴建物跡

1 褐灰色土 作土・鋤床層。
2 褐色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア・3 mm 以下橙色スコリア微量。
3 黒褐色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア少量。褐色土 10%。
4 黒褐色土 粘性やや弱。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア 10%。褐色土微量。
5 黒褐色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア・2 mm 以下橙色スコリア少量。
6 黒褐色土 粘性やや強。5 mm 以下黒色スコリア少量。2 mm 以下橙色スコリア微量。

第15図　9 号竪穴建物跡（2）・10号竪穴建物跡（1）



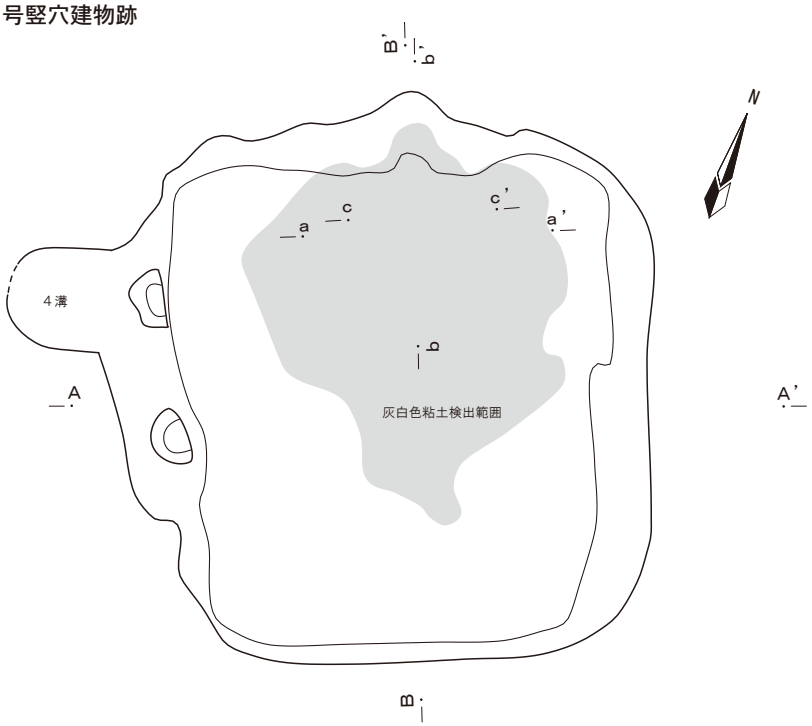
10 号竪穴建物跡カマド

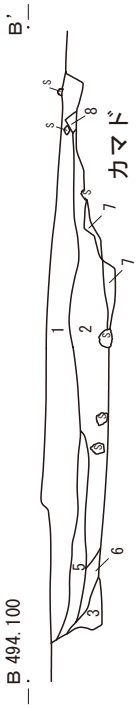


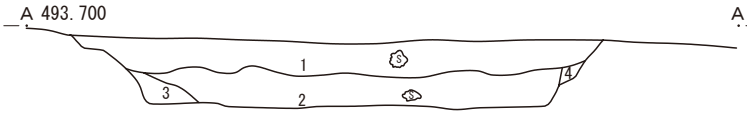
10 号竪穴建物跡カマド
1 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量。 2mm 以下橙色スコリア微量（66 号土）。
2 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。
3 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土 30%。
4 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土微量。
5 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。焼土・灰白色粘土少量。
6 黒褐色土 粘性やや弱。焼土 30%。灰少量。
7 褐灰色土 粘性強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土 30%。焼土少量。
8 褐灰色土 粘性強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土 20%。焼土少量。
9 褐灰色土 粘性強。灰白色粘土 30%。焼土微量。

第16図　10号竪穴建物跡（2）

11 号竪穴建物跡







11 号竪穴建物跡

1 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。黄褐色土少量。

2 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。灰白色粒子微量。

3 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

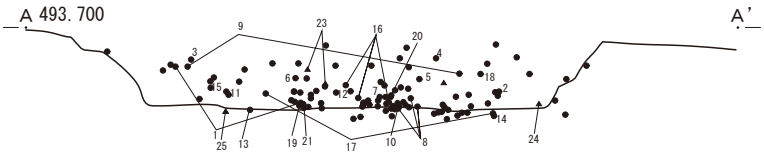
4 黒褐色土 粘性弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 20%。

5 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。焼土少量。

6 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。

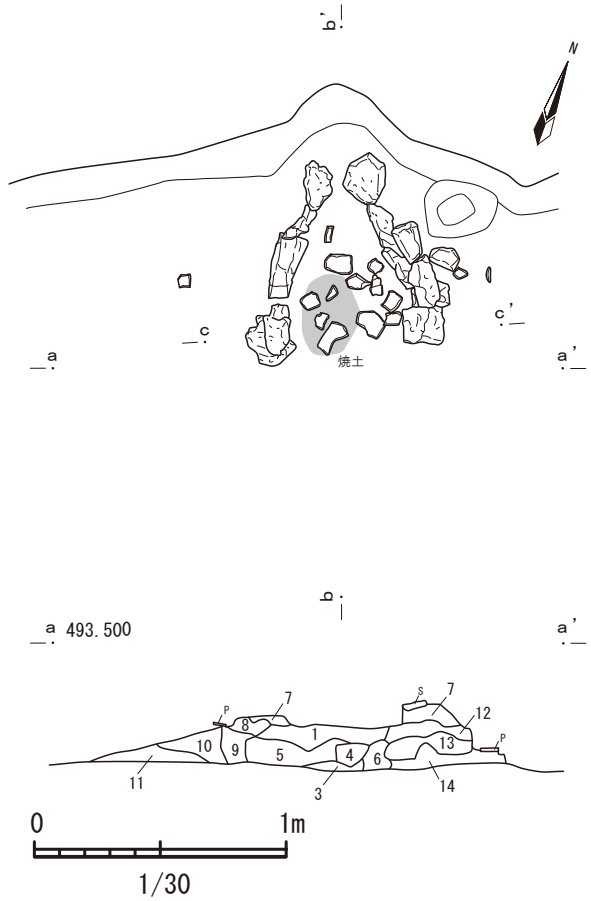
7 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。

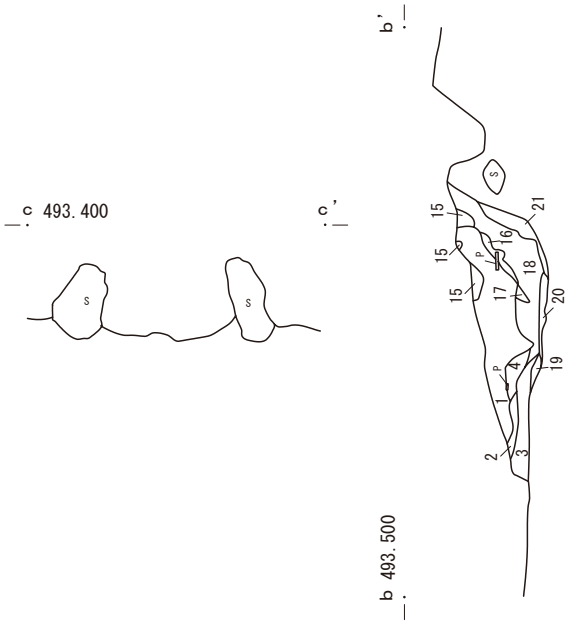
8 褐灰色土 粘性強。黒褐色土少量。灰白色粘土 20%。



第17図　11号竪穴建物跡（1）

11 号竪穴建物跡カマド

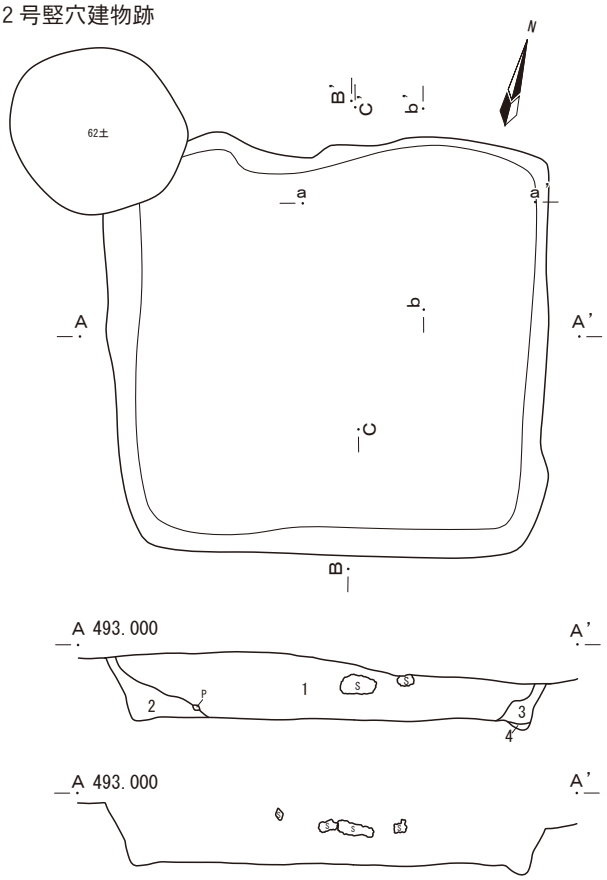


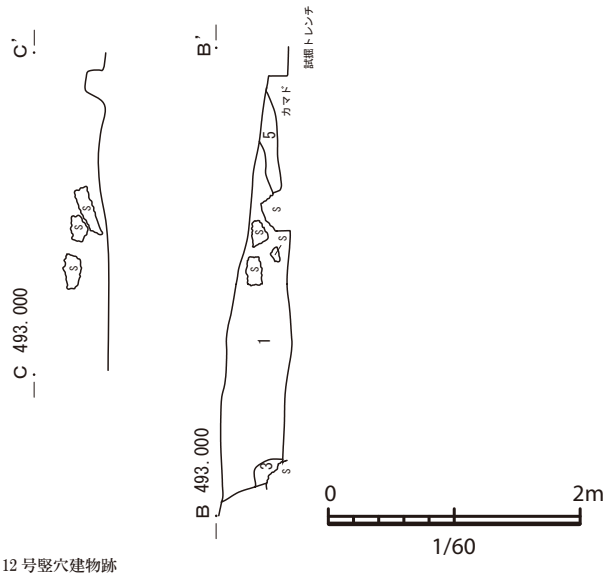


11 号竪穴建物跡カマド

1 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土少量。
2 灰白色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。焼土少量。
3 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土少量。焼土 20%。
4 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土 30%。
5 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土 20%。
6 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土少量。焼土 10%。
7 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。灰白色粘土微量。
8 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粘土 10%。焼土 20%。
9 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土 30%。焼土少量。
10 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。灰白色粘土・焼土少量。
11 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。灰白色粘土微量。焼土少量。
12 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土・焼土 10%。
13 灰白色土 粘性強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア、焼土微量。
14 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア、灰白色粘土少量。焼土 10%。
15 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。灰白色粘土微量。
16 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア、灰白色粘土・焼土少量。
17 にぶい橙色土 粘性弱。焼土・灰。炭化材少量。5mm 以下黒色スコリア微量。
18 にぶい橙色土 粘性弱。焼土・灰。5mm 以下黒色スコリア微量。
19 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下の橙色スコリア少量。焼土 20%。
20 焼土
21 黒褐色土 粘性弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 20%。地山。

12 号竪穴建物跡

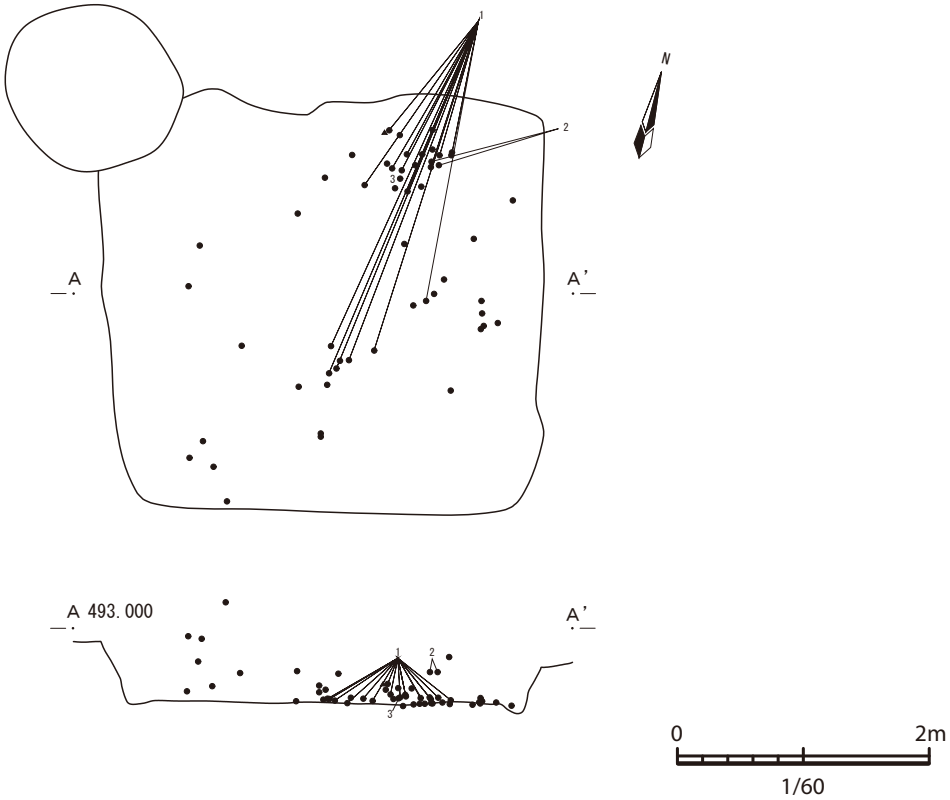




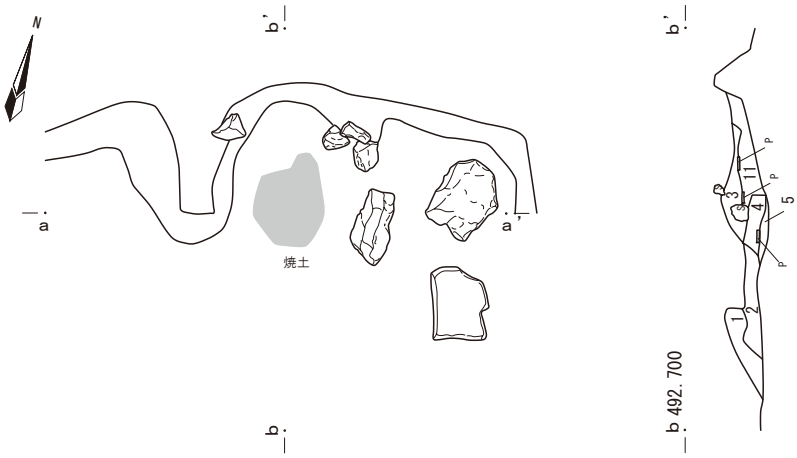
12 号竪穴建物跡

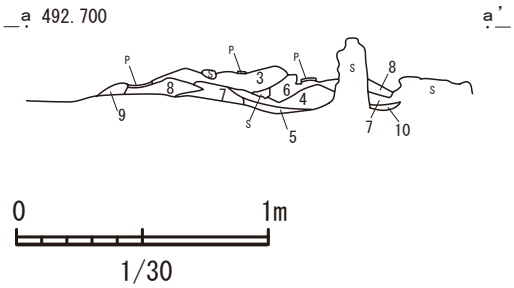
1 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。
2 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。
3 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。褐色土少量。
4 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア 10%。2mm 以下橙色スコリア微量。
5 黒褐色土 粘性やや弱。3mm 以下黒色・橙色スコリア 10%。灰白色粒子微量。

第18図　11号竪穴建物跡（2）・12号竪穴建物跡（1）



12 号竪穴建物跡カマド





12 号竪穴建物跡カマド

1 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア、灰白色・焼土粒子微量。

2 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア、焼土微量。灰白色粘土 10%。

3 黒褐色土 粘性やや強。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粒子少量。焼土 10%。

4 焼土 灰白色粒子 30%。

5 焼土

6 黒褐色土 粘性やや強。灰白色・焼土粒子 30%。

7 黒褐色土 粘性やや弱。3mm 以下黒色スコリア、灰白色・焼土粒子微量。2mm 以下橙色スコリア少量。

8 褐灰色土 粘性強。灰白色粘土 30%。焼土微量。

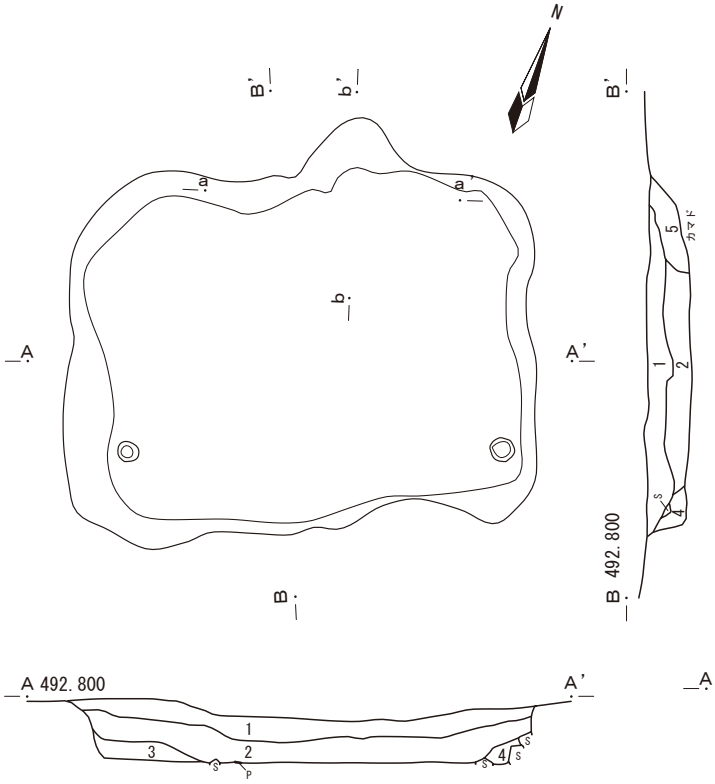
9 黒褐色土 粘性やや弱。5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。褐灰色土 10%。

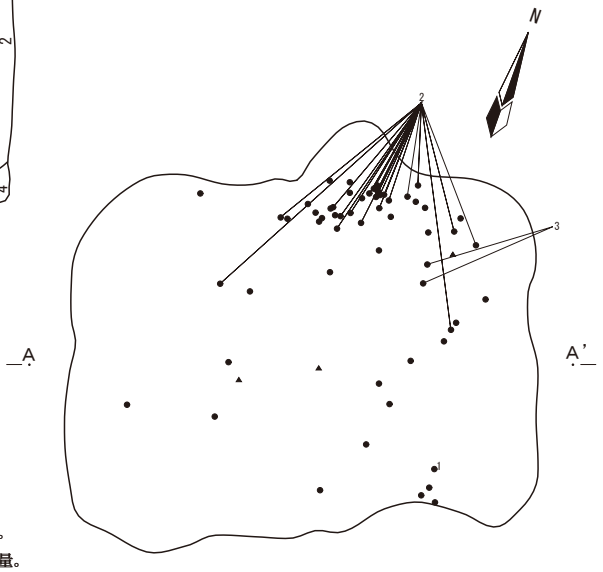
10 灰色土 粘性強。黒褐色土少量。

11 暗褐色土 粘性やや強。灰白色・炭化粒子 20%。焼土粒子少量。

第19図　12号竪穴建物跡（2）

13 号竪穴建物跡





13 号竪穴建物跡

1 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量。 3mm 以下橙色スコリア 10%。

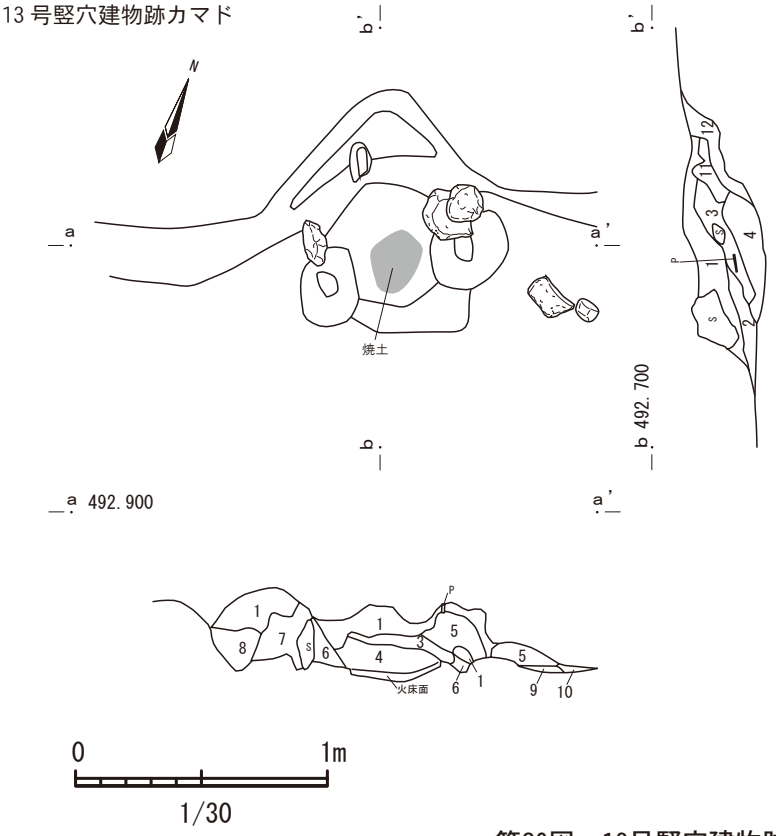
2 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 3mm 以下橙色スコリア少量。炭化材微量。

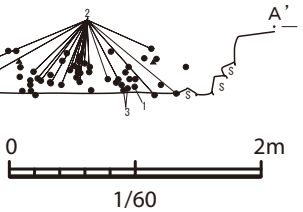
3 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・黄褐色土少量。 3mm 以下橙色スコリア微量。

4 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・ 3mm 以下橙色スコリア少量。黄褐色土微量。

5 黒褐色土 粘性強。 5mm 以下黒色スコリア・ 3mm 以下橙色スコリア微量。黄褐色土少量。

13 号竪穴建物跡カマド





13 号竪穴建物跡カマド

1 黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア・灰白色粒子微量。

2 褐灰色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量。灰白色粒子 20%。黒褐色土少量。

3 焼土　黒褐色土・褐灰色土 10%。

4 灰　焼土少量。

5 褐灰色土 粘性強。灰白色粘土 10%。焼土微量。

6 褐灰色土 粘性弱。灰白色・焼土粒子 30%。

7 褐灰色土 粘性やや強。灰白色粘土 10%。焼土少量。

8 黒褐色土 粘性やや弱。灰白色粘土 10%。焼土少量。

9 焼土　黒褐色土 10%。

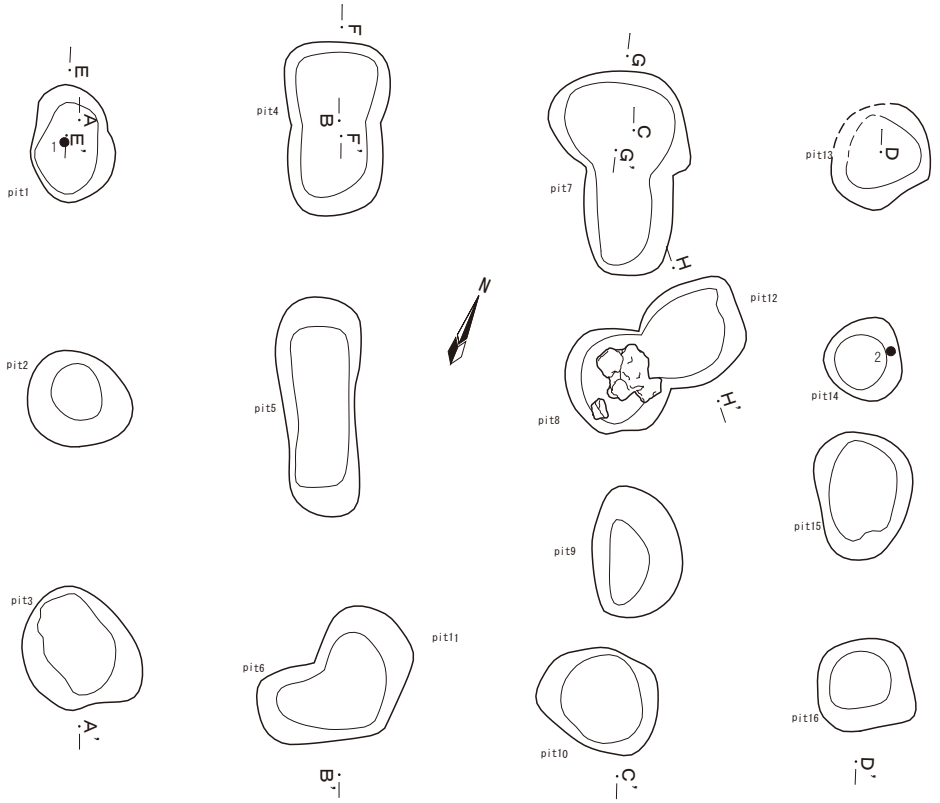
10 黒褐色土 粘性やや弱。灰白色粘土・焼土少量。

11 焼土　灰白色粒子 30%。黒褐色土 10%。

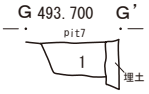
12 黒褐色土 粘性やや弱。灰白色・焼土粒子少量。

第20図　13号竪穴建物跡

1 号掘立柱建物跡

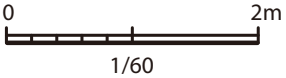


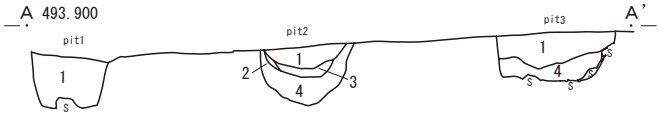
1号掘立柱建物跡 pit1（北側）
1黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量。
1mm 以下橙色スコリア・黄褐色土微量。
2黒褐色土 粘性やや弱。 3mm 以下黒色スコリア 10%。
2mm 以下橙色スコリア少量。



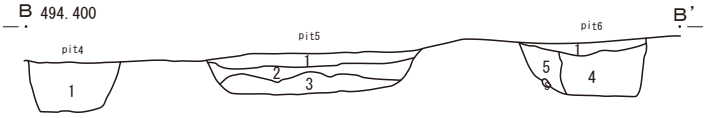
1号掘立柱建物跡 pit4・7(北側)
1黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

1号掘立柱建物跡 pit12
1黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

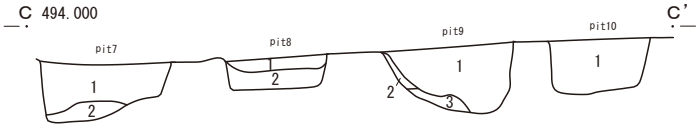




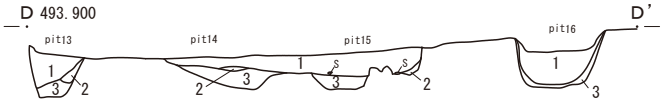
1号掘立柱建物跡 pit1～3
1黒褐色土 粘性やや強。 黄褐色土 30%。 2cm 以下の礫少量。
2黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア、 黄褐色土少量。
3黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。
4黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。



1号掘立柱建物跡 pit4～6
1黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア 10%。
2黒褐色土 粘性強。 5mm 以下黒色・橙色スコリア、 褐灰色土少量。
3黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア 20%。
4黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。
5黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 20%。



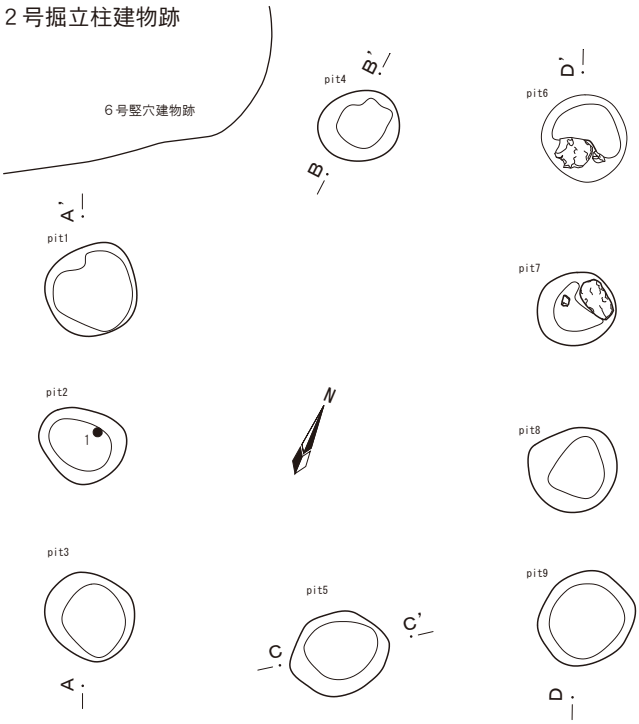
1号掘立柱建物跡 pit7～ 10
1黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色・橙色スコリア 20%。
2黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 20%。 5mm 以下橙色スコリア少量。
3黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量。 5mm 以下橙色スコリア微量。

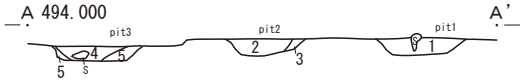


1号掘立柱建物跡 pit13 ～ 16
1黒褐色土 粘性やや強。 黄褐色土 30%。 3mm 以下礫微量。
2黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。
3黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色・橙色スコリア 30%。

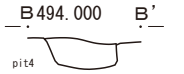
第21図　1 号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡

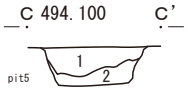




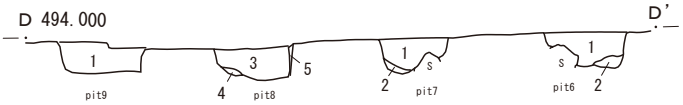
2号掘立柱建物跡 pit 1 ～ 3
1 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア 10%。
2 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。
3 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。
4 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。
5 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。



2号掘立柱建物跡 pit 4
1 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア
2mm 以下橙色スコリア 20%。焼土微量。

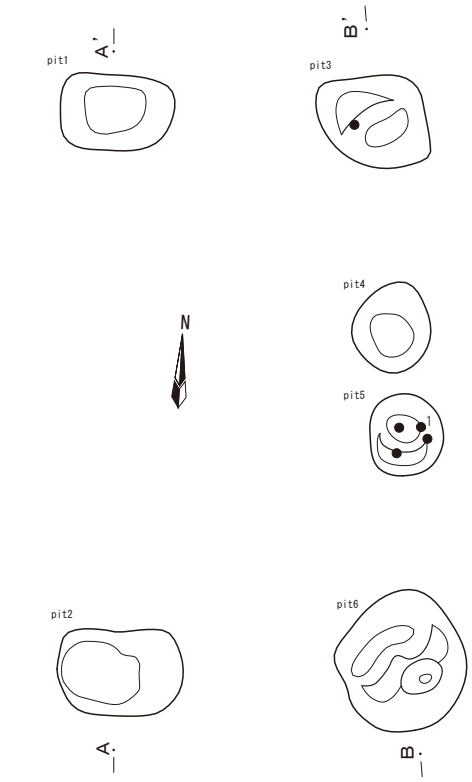


2号掘立柱建物跡 pit 5
1 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア
10%。 3mm 以下橙色スコリア少量。
2 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア
3mm 以下橙色スコリア 10%。地山。

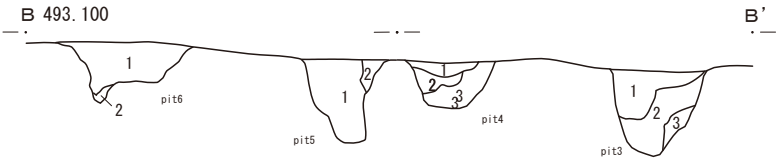


2号掘立柱建物跡 pit 6 ～ 9
1 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア 10%。 5mm 以下橙色スコリア少量。
2 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア 20%。 3mm 以下橙色スコリア微量。
3 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・ 3mm 以下橙色スコリア 10%。
4 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア 10%。 2mm 以下橙色スコリア微量。
5 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色・橙色スコリア 20%。地山。

3号掘立柱建物跡



3号掘立柱建物跡 pit 1 ・ 2
1 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア微量。
2 黒褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。

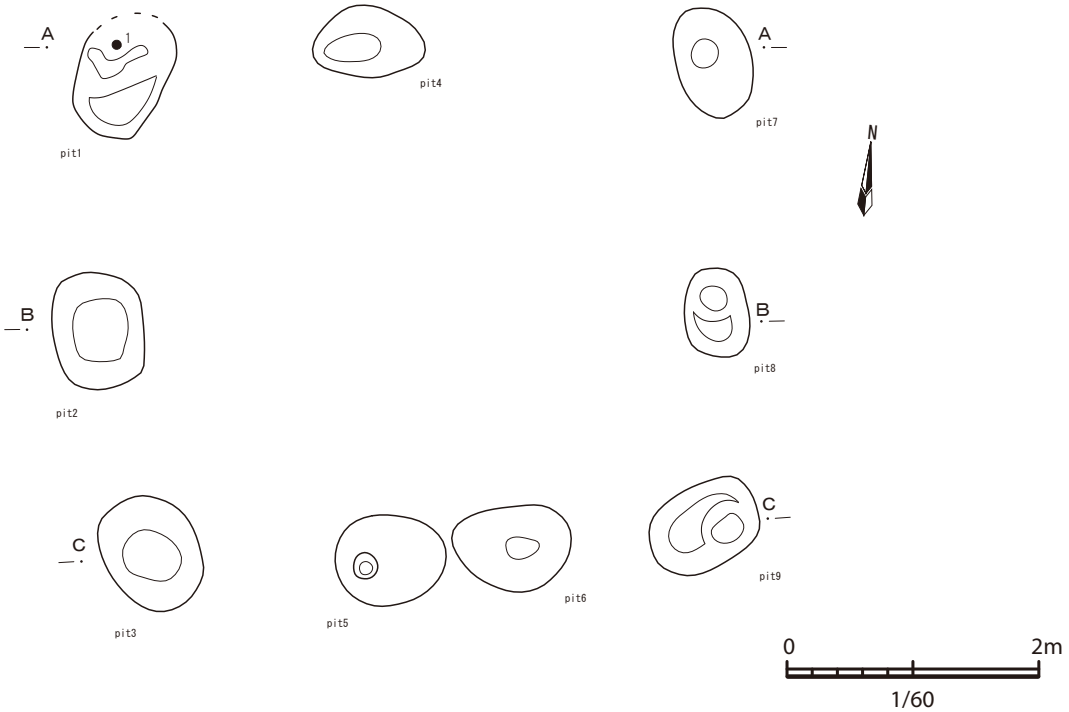


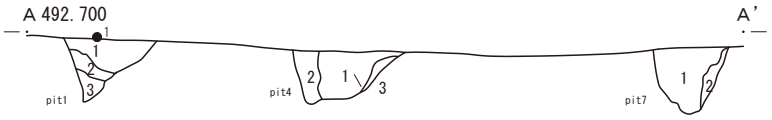
3号掘立柱建物跡 pit 3 ～ 6
1 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア少量。
2 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア 10%。黄褐色土少量。
3 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア少量。
4 黒褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%。 2mm 以下橙色スコリア少量。

0　2m
1/60

第22図　2号掘立柱建物跡・3号掘立柱建物跡

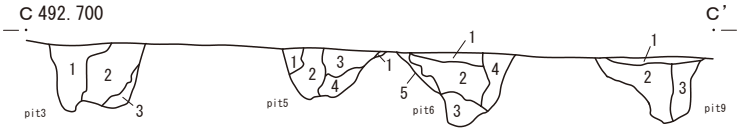
４号掘立柱建物跡





４号掘立柱建物跡 pit１・４・７
１黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア、焼土微量。
３黒褐色土 粘性やや強。３mm 以下黒色スコリア微量。２mm 以下橙色スコリア少量。
４黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア微量。
５黒褐色土 粘性弱。５mm 以下黒色スコリア 30%。２mm 以下橙色スコリア 10%。
６黒褐色土 粘性やや弱。３mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア 10%。

４号掘立柱建物跡 pit２・８
１黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性弱。５mm 以下黒色スコリア 30%。２mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや強。５mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア 10%。
４黒褐色土 粘性やや弱。締まり弱。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
５黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア微量。
６黒褐色土 粘性やや弱。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。



４号掘立柱建物跡 pit３
１黒褐色土 粘性やや強。締まりやや弱。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。締まり強。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア、褐色土少量。
３黒褐色土 粘性弱。５mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア 10%。

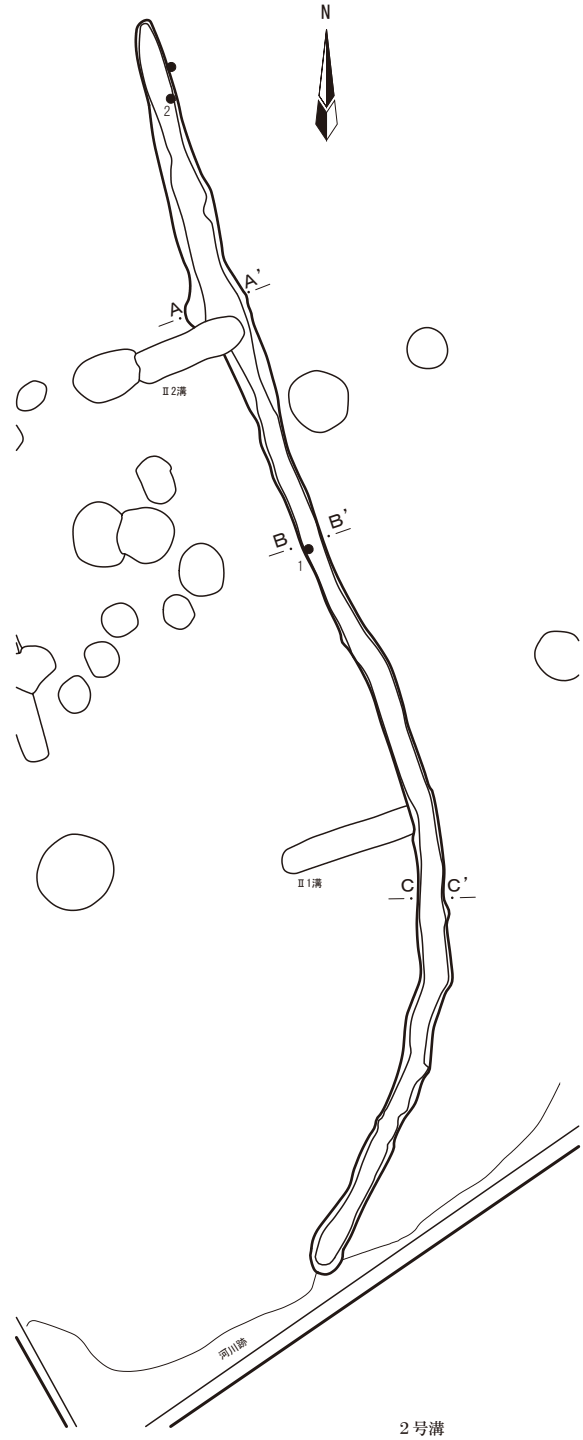
４号掘立柱建物跡 pit５
１黒褐色土 粘性やや弱。締まり強。３mm 以下黒色スコリア微量。２mm 以下橙色スコリア 10%。
２黒褐色土 粘性やや弱。締まり弱。３mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア微量。
３黒褐色土 粘性やや弱。締まり強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
４黒褐色土 粘性やや弱。締まり強。３mm 以下黒色スコリア 10%。２mm 以下橙色スコリア少量。褐色土微量。

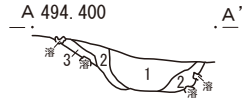
４号掘立柱建物跡 pit６
１黒褐色土 粘性やや弱。締まり強。３mm 以下黒色スコリア少量。２mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。締まり強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや弱。締まりやや強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア 10%。
４黒褐色土 粘性やや弱。締まり弱。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。

４号掘立柱建物跡 pit７
１黒褐色土 粘性やや強。締まりやや強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。締まりやや強。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや弱。締まりやや弱。３mm 以下黒色スコリア・２mm 以下橙色スコリア少量。

第23図　４号掘立柱建物跡

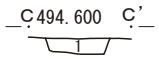
1号溝状遺構



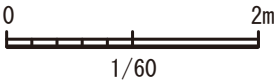


1号溝状遺構（A-A'）
1黒褐色土 粘土。5mm以下黒色・赤色スコリア微量。
2黒褐色土 やや粘土質。 5mm以下黒色・赤色スコリア10%。
3暗褐色土 ややシルト。5mm以下黒色・赤色スコリア30%。

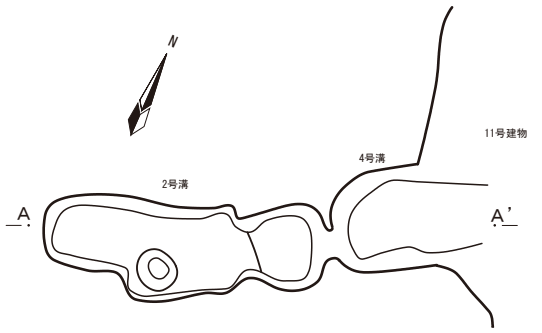
1号溝状遺構（B-B'）
1黒褐色土 粘性やや強。 5mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。

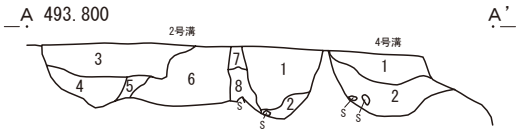


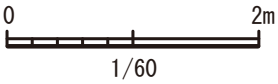
1号溝状遺構（C-C'）
1黒褐色土 粘性やや強。 5mm以下黒色スコリア・3mm以下橙色スコリア少量。



2・4号溝状遺構



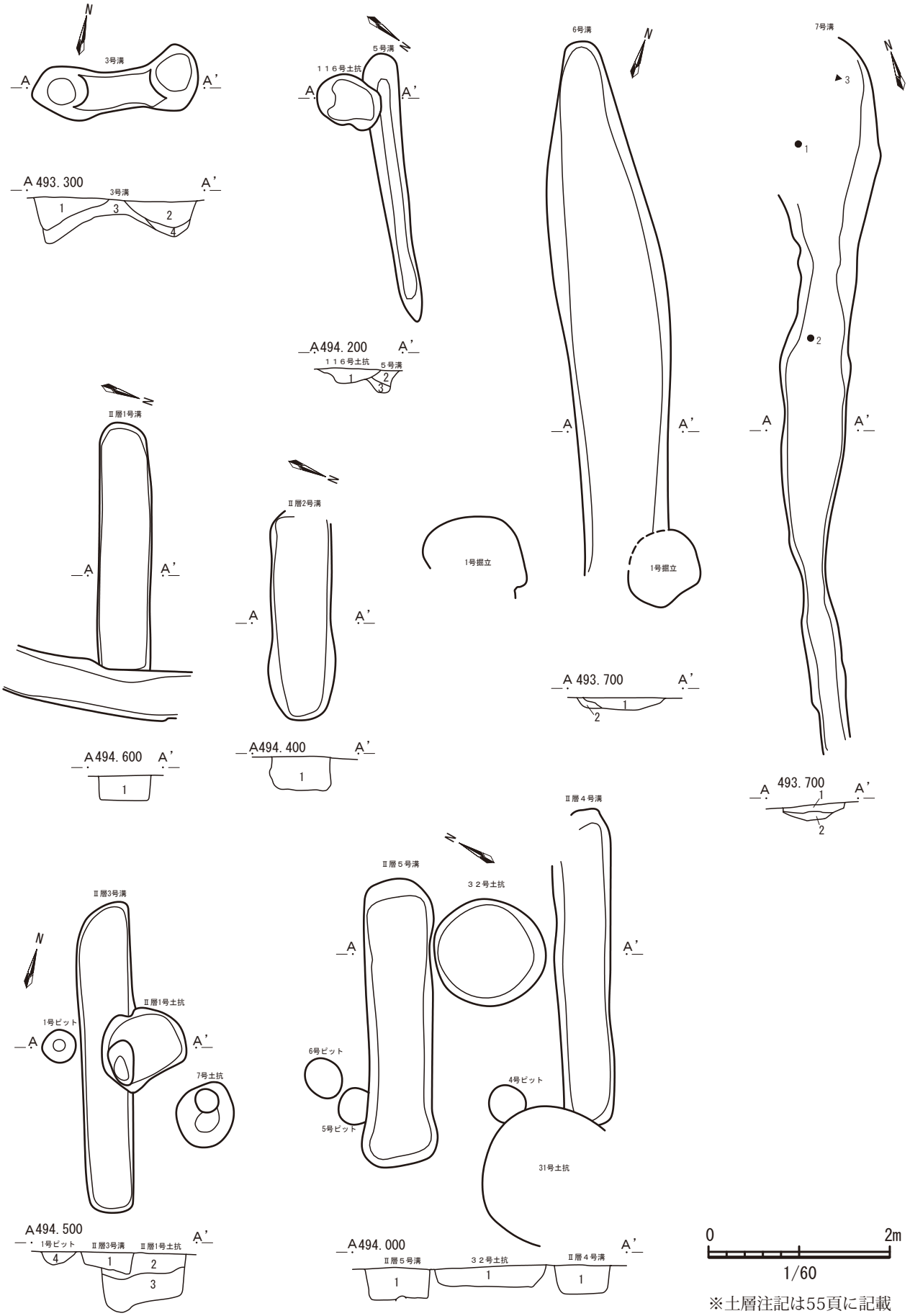




2号溝
1黒褐色土 粘性やや強。 10mm以下黒色スコリア10%・3mm以下橙色スコリア微量。
2黒褐色土 粘性やや弱。 5mm以下黒色スコリア微量・2mm以下橙色スコリア微量。
3黒褐色土 粘性やや弱。 5mm以下黒色スコリア少量・3mm以下橙色スコリア少量・褐色土粒子10%。
4黒褐色土 粘性やや強。 10mm以下黒色スコリア少量・2mm以下橙色スコリア微量。
5黒褐色土 粘性やや強。 5mm以下黒色スコリア少量・2mm以下橙色スコリア10%。
6黒褐色土 粘性やや弱。 10mm以下黒色スコリア少量・2mm以下橙色スコリア少量。
7黒褐色土 粘性やや弱。 3mm以下黒色スコリア微量・2mm以下橙色スコリア少量。
8黒褐色土 粘性やや弱。 5mm以下黒色スコリア10%・2mm以下橙色スコリア20%（地山）。

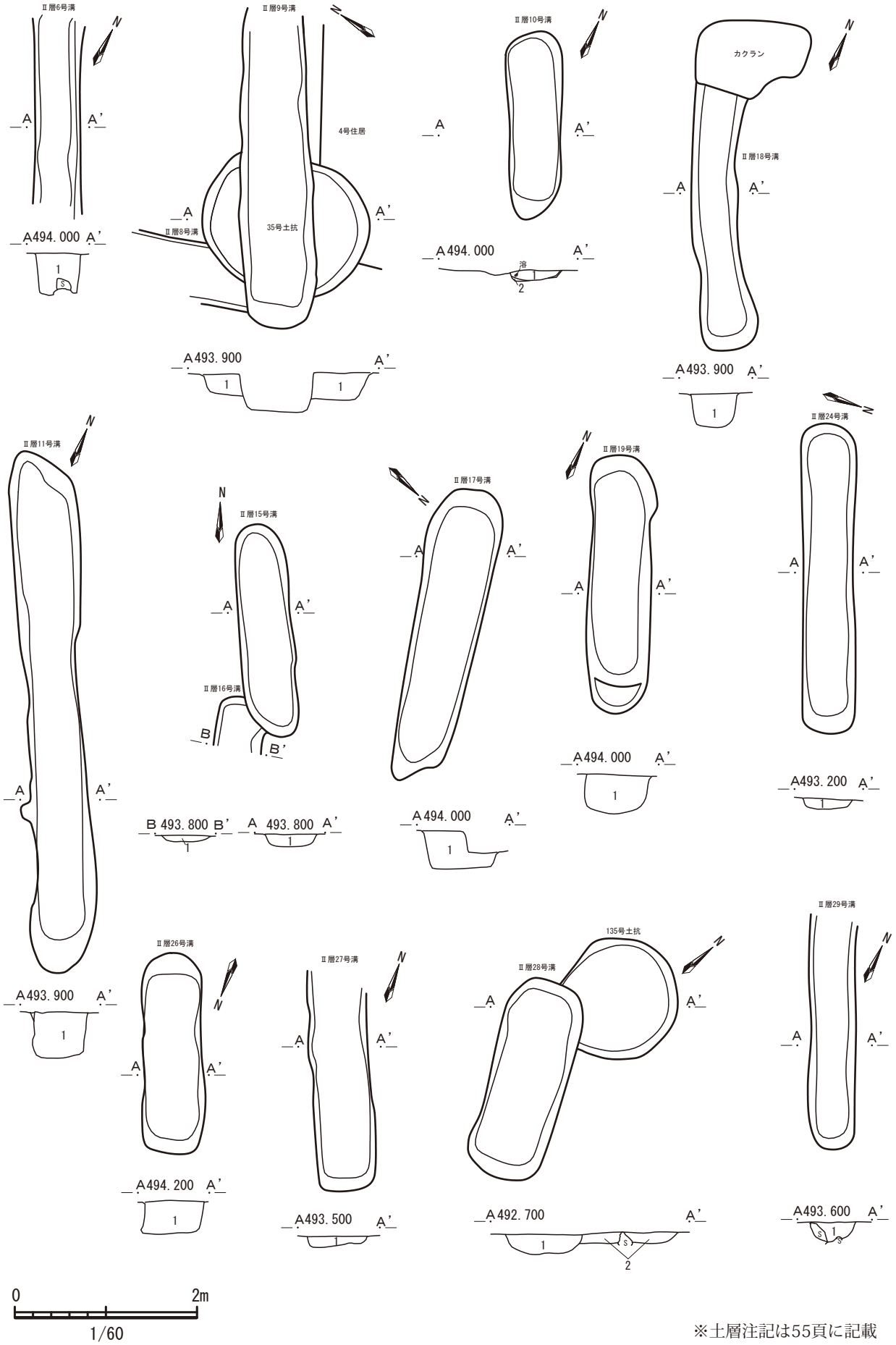
4号溝
1黒褐色土 粘性やや弱。 5mm以下黒色スコリア少量・2mm以下橙色スコリア少量。
2黒褐色土 粘性やや弱。 5mm以下黒色スコリア少量・2mm以下橙色スコリア微量。

第24図　1号溝状遺構・2号溝状遺構・4号溝状遺構



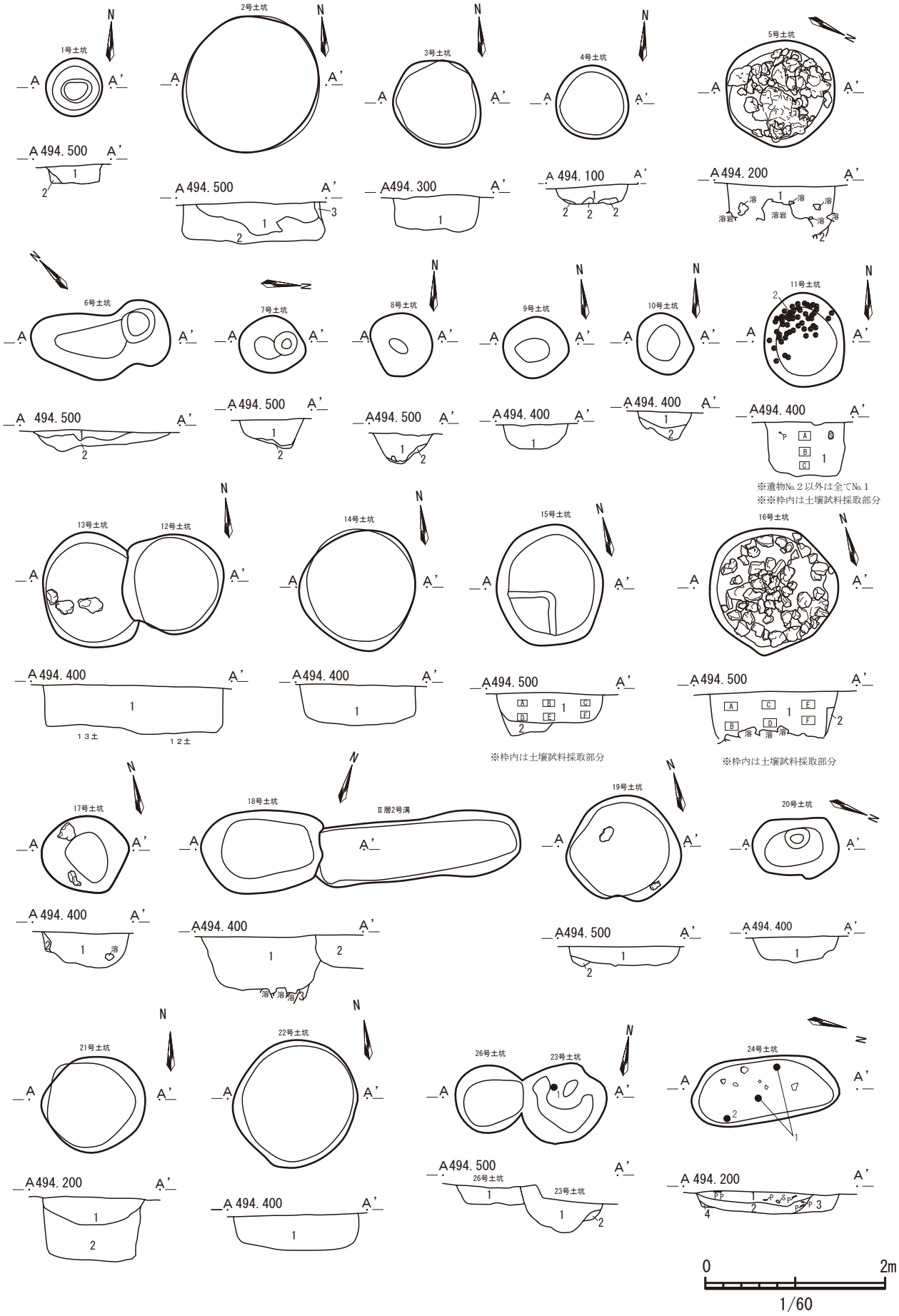
※土層注記は55頁に記載

第25図　3・5～7・Ⅱ層1～5号溝状遺構・32・116・Ⅱ層1号土坑・1号ピット

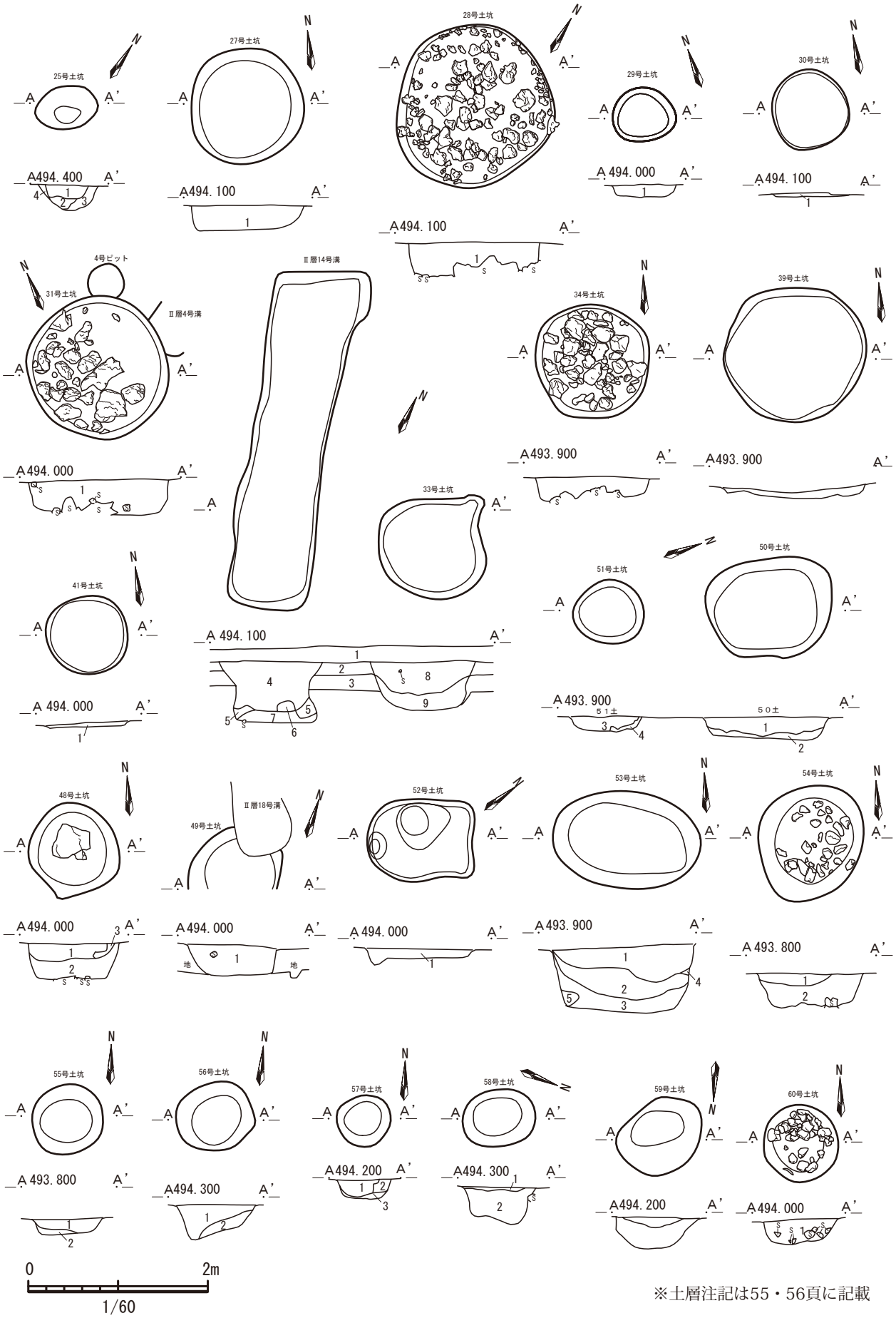


※土層注記は55頁に記載

第26図　Ⅱ層６・８～11・15・17～19・24・26～29号溝状遺構、35・135号土坑

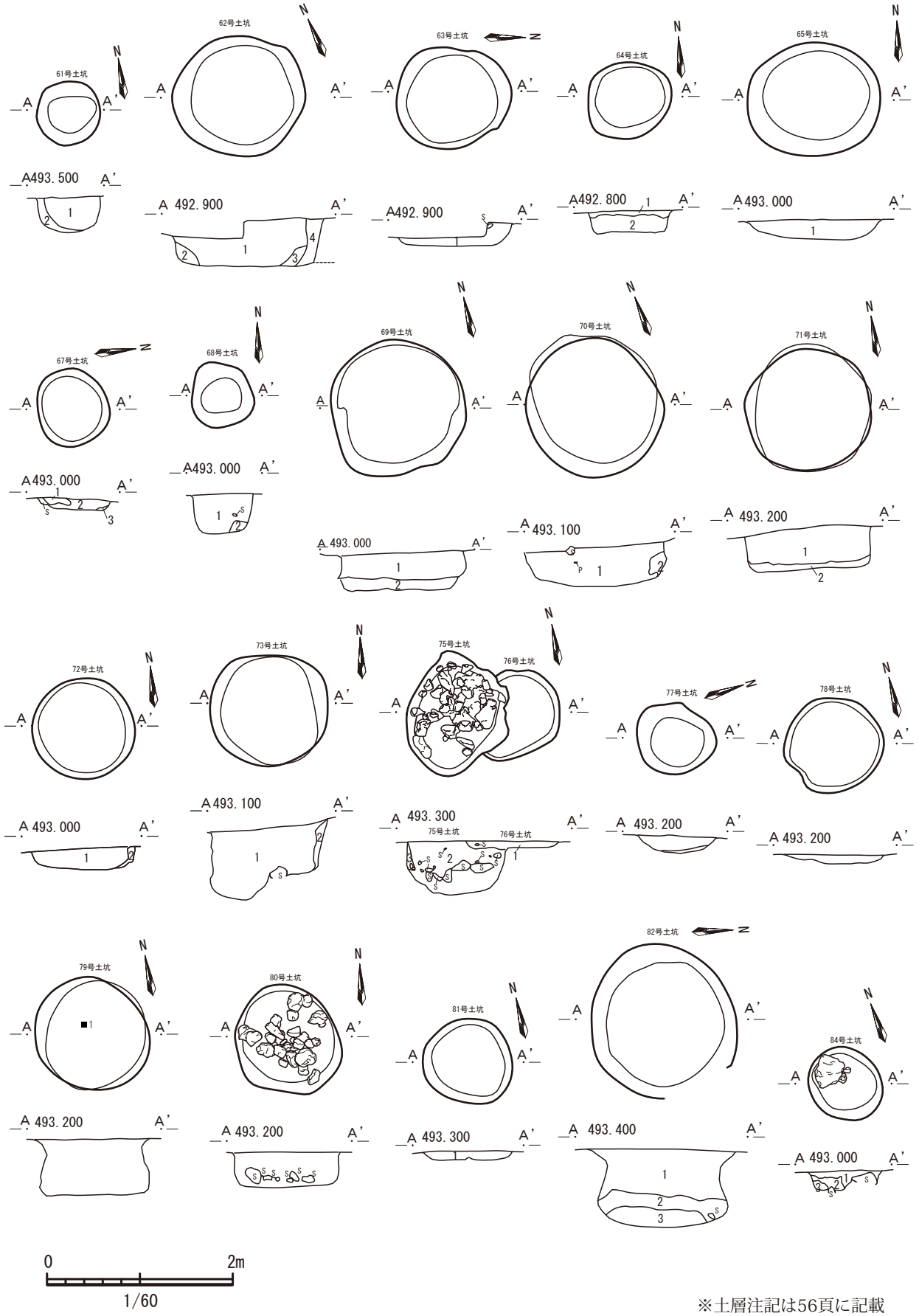


第27図　１～24・26号土坑、Ⅱ層２号溝状遺構　　※土層注記は55頁に記載



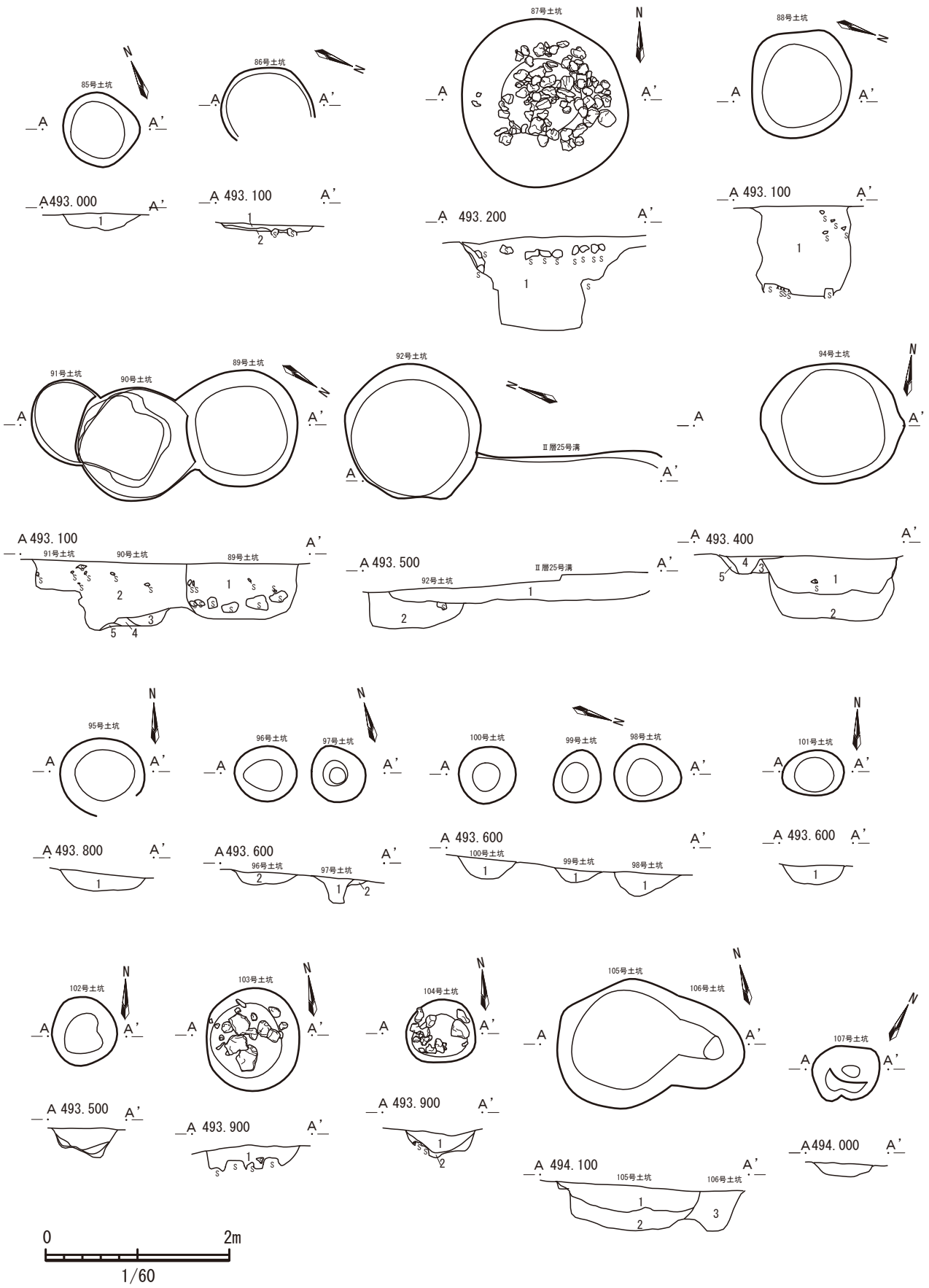
※土層注記は55・56頁に記載

第28図　25・27～31・33・34・39・41・48～60号土坑、Ⅱ層14号溝状遺構



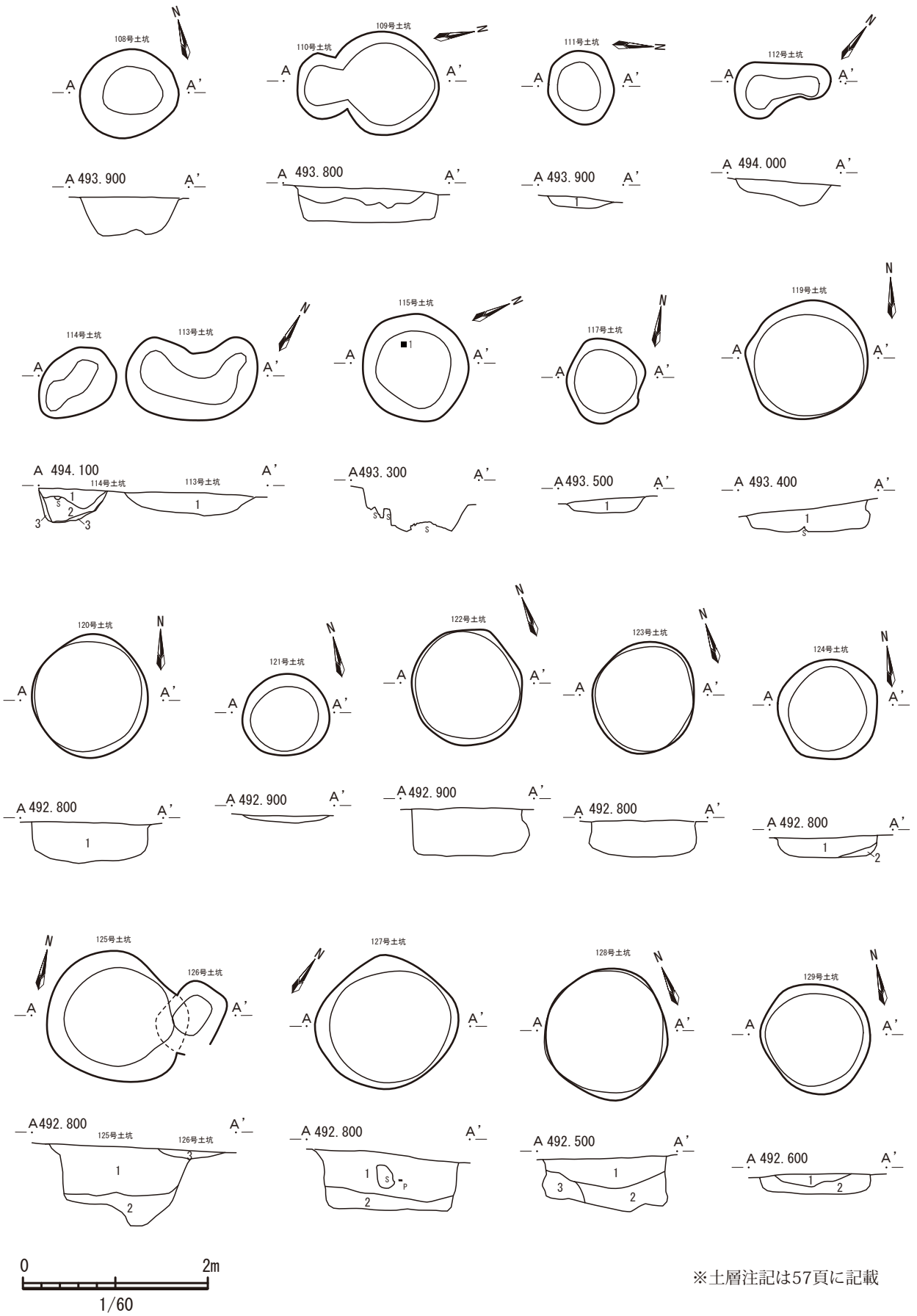
※土層注記は56頁に記載

第29図　61 ～ 65・67 ～ 73・75 ～ 82・84号土坑



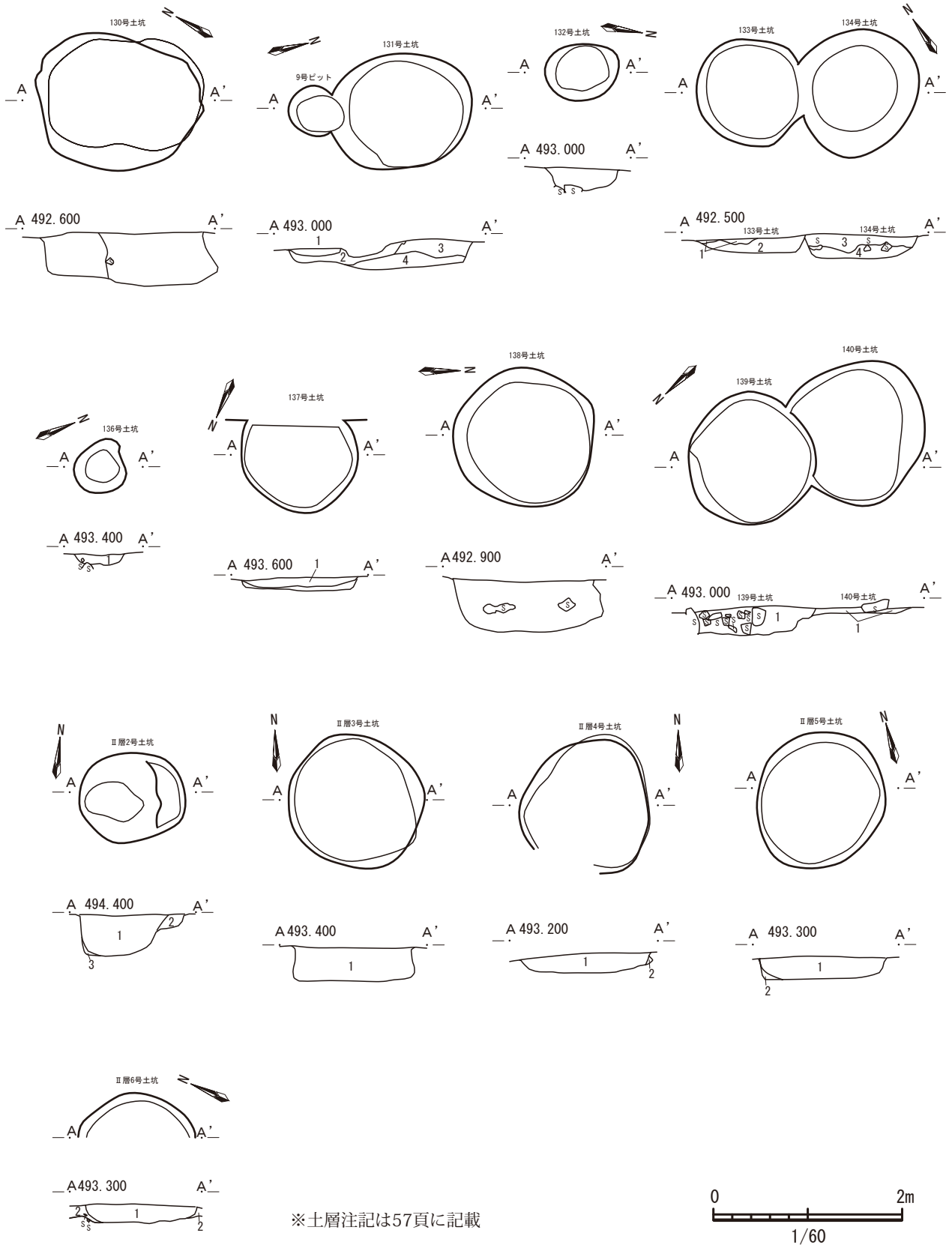
※土層注記は56・57頁に記載

第30図　85 ～ 92・94 ～ 107号土坑



※土層注記は57頁に記載

第31図　108 ～ 115・117･119 ～ 129号土坑



※土層注記は57頁に記載

第32図　130 ～ 134・136 ～ 140、Ⅱ層２～６号土坑

第 25 図　溝状遺構・土坑・ピット

３号溝
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量・焼土粒子微量。
２黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。焼土粒子微量。
３黒褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量。
４黒褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量・灰白色粒子少量。

116 号土坑・5 号溝
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・2ミリ以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア・2ミリ以下橙色スコリア少量。
３暗褐灰色土 粘性弱。　10mm 以下砂礫 30%。

６号溝
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア 30%（地山）。

７号溝
１黒褐色土 粘性やや強。　2mm 以下橙色スコリア少量・炭化材微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。　2mm 以下橙色スコリア少量・2mm 以下砂礫 10%・炭化材微量。

Ⅱ層２号溝
１暗褐色土 やや粘土質。　8mm 以下黒色・赤色スコリア微量。

Ⅱ層 3 号溝・Ⅱ層 1 号土坑・1 号ピット
１暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。
２暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア微量。
３暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア微量・黒褐色土ブロック少量
４黒褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 4 号溝・Ⅱ層 5 号溝・32 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

第 26 図　Ⅱ層溝状遺構、35・135 号土坑

Ⅱ層９号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　1cm 以下礫少量。

35 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア微量。

Ⅱ層 10 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　1cm 以下黒色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。（4住）

Ⅱ層 11 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 15 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　3mm 以下黒色・橙色スコリア少量。

Ⅱ層 16 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 18 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 19 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 27 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。　3mm 以下橙色スコリア少量。

Ⅱ層 29 号溝
１暗褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア微量・3mm 以下橙色スコリア少量。

第 27 図　1 から 24・26 号土坑、Ⅱ層 2 号溝状遺構

１号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色・赤色スコリア 30%。

２号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 10%。
２黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア微量。
３暗褐色土 ややシルト。　3mm 以下黒色・橙色スコリア 30%。

３号土坑
１黒褐色土　やや粘土質。　5mm 以下黒色・赤色スコリア微量・黄褐色土ブロック少量。

４号土坑
１黒褐色土 やや粘土質。　5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。
２黒褐色土 やや粘土質。　黄褐色土ブロック 30%。

５号土坑
１黒褐色土 やや粘土質。　5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。
２黄褐色土 やや粘土質。　地山。

６号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア微量。
２暗褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 10%。

７号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 30%。

８号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 30%。

９号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。

10 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア微量。

11 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

12 号土坑・13 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

14 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

15 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア 10%。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 40%。

16 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 30%。（地山）

17 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　8mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア微量。
２暗褐色土 粘性やや弱。　3mm 以下黒色スコリア・橙色スコリア 10%。

18 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。
２暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア微量。
３暗褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア 30%（地山）。

19 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・1mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。　3mm 以下黒色・橙色スコリア 20%（地山）。

20 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

21 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア 10%・3mm 以下橙色スコリア少量。

22 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

23 号土坑・26 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量・1～2㎝白色粒子微量。

24 号土坑
１暗褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア・炭化材微量。
２黒褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア・炭化材微量。
３黒褐色土 粘性やや弱。　5mm 以下黒色・橙色スコリア 10%。
４暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色・橙色スコリア微量。

第 28 図　25・27～31・33・34・39・41・48～60 号土坑、Ⅱ層 14 号溝状遺構

25 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量・暗褐色土 20%。
３暗褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。
４暗褐色土 粘性やや弱。　3mm 以下橙色スコリア 10%（地山）。

27 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア少量。

28 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

29 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

30 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。　5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

31 号土坑セクション
１黒褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

33 号土坑・Ⅱ層 14 号溝
１暗褐色土 粘性強。まさ土。
２褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア 30%。
３黒褐色土 粘性弱。　5mm 以下黒色スコリア 30%・3mm 以下橙色スコリア 30%。
４暗褐色土 粘性やや強。　10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量
５暗褐色 粘性やや弱。　10mm 以下黒色スコリア 10%・3mm 以下橙色スコリア少量・黒褐色土ブロック 30%

６暗黄褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%。
７暗褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア 10%。
８黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア・暗黄褐色土ブロック少量
９黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量

41 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 10%。

48 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア 30%。
３暗褐色土 粘性やや弱・しまり強。 3mm 以下橙色スコリア 30%。

49 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

50・51 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア 10%。
２黒褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色・橙色スコリア 20%。
３黒褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア 10%。
４黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色 ・橙色スコリア 10%。

52 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア少量・5mm 以下橙色スコリア 10%。

53 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 暗褐色土ブロック 10%・5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強・しまり強。 10mm 以下黒色スコリア少量・5mm 以下橙色スコリア 10%。
３黒褐色土 粘性やや弱。 1cm 以下黒色スコリア 10%・5mm 以下橙色スコリア 10%。
４暗褐色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量。
５褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア少量・10mm 以下橙色スコリア 20%。

54 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 暗灰褐色粘土ブロック少量・5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。

55 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 暗灰褐色粘土ブロック 10%・2mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 暗灰褐色粘土ブロック 20%・2mm 以下橙色スコリア微量。

56 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量・褐色土粒子微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア微量。

57 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量。
３暗褐色土 粘性弱。 3mm 以下黒色・橙色スコリア 30%（地山）。

58 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・1mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量。

59 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

60 号土坑
1 黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

第 29 図 61 ～ 65・67 ～ 73・75 ～ 82・84 号土坑

61 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア 10%。

62 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア微量。
４黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量。

63 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
64 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。
２暗褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%。

65 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

67 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア 10%・褐色土粒子少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・3mm 以下橙色スコリア少量。

68 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。

69 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%（地山）。

70 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。暗黄褐色土ブロック 30%。

71 号土坑
１暗褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア微量・3mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量・暗黄褐色粘土ブロック 30%。

72 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量・暗黄褐色土ブロック少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・3mm 以下橙色スコリア少量。

73 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 3mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量・暗褐色土ブロック 20%。
２暗黄褐色土 粘性やや弱。 2mm 以下橙色スコリア微量・5～ 30cm 溶岩ブロック少量（地山）。

75・76 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア微量。
２暗褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア微量・2～ 20cm 礫（溶岩）10%・黒褐色土・暗黄褐色土ブロック 10%。

77 号土坑
１黒褐色土・暗褐色土少量
２黒褐色土・暗黄褐色スコリア 20%

78 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 30%

79 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 10%・3～4cm 礫微量

80 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 10%

81 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック少量。

82 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 30%。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量
３黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 10%

84 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 1mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 1mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 30%。
３暗黄褐色土 粘性やや弱。 2mm 以下橙色スコリア微量（地山）。

第 30 図 85 ～ 92・94 ～ 107 号土坑

85 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 1mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 10%。

86 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 1mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック少量。
２暗黄褐色土 粘性やや弱。 2mm 以下橙色スコリア微量・5～ 15cm 溶岩ブロック少量。

87 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 2mm 以下橙色スコリア微量・暗黄褐色土ブロック 10%。

89 号土坑・90 号土坑・91 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・暗黄褐色土ブロック 30%・2～5cm 礫少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量・1～ 5cm 礫少量。
３黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量・中砂 10%。
４暗褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%・細～中砂 30%。
５黒褐色土 粘性やや弱。 3mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア 10%。

92 号土坑・Ⅱ層 25 号溝
１暗褐色土 粘性やや強。 10mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。・暗黄褐色土ブロック 30%。

94 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・ 2mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・ 2mm 以下橙色スコリア少量。
３暗黄褐色土 粘性やや弱。 2mm 以下橙色スコリア微量。
４砂礫 5cm以下の礫・粗砂。
５暗褐色土 粘性弱。 3cm 以下の礫・粗砂 30%。

95 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色・橙色スコリア少量。

96・97 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。

98・99・100 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

101 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

102 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量
２黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下橙色スコリア少量

103 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

104 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。

２黒褐色土 粘性やや弱。 3mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%。

105・106 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。・暗褐色土粒子少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。
３黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量。
４黒褐色土 粘性やや弱。 3mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア 10%(地山)。

第 31 図 108 ～ 115・117・119 ～ 129 号土坑

108 号土坑
1 黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量

109・110 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量

111 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

112 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2ミリ以下橙色スコリア少量。

113 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量・炭化材微量。

114 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・2mm 以下橙色スコリア少量・暗黄褐色土ブロック少量。
２黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア 30%・5mm 以下橙色スコリア少量。(地山)

117 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量。

119 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。

120 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

121 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。

122 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色ブロック 10%・ 3mm 以下橙色スコリア微量・2cm 礫微量。

123 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色ブロック 10%・ 3mm 以下橙色スコリア微量・2cm 礫微量。

124 号土坑
１黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック少量・3mm 以下橙色スコリア微量。
２暗黄褐色土 粘性やや強。 黒褐色土ブロック 30%。

125 号土坑・126 号土坑
１黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック 30%・3mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや弱。 暗黄褐色土ブロック少量・3mm 以下橙色スコリア少量。
３黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色・橙色スコリア少量。

127 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土ブロック 30%・3mm 以下橙色スコリア少量。
２黒褐色土 粘性強。 明黄褐色土ブロック・ 3mm 以下橙色スコリア少量。

128 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土ブロック 30%・3mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土ブロック 10%・3mm 以下橙色スコリア微量。
３黒褐色土 粘性強。 明黄褐色土ブロック少量・3mm 以下橙色スコリア微量。

129 号土坑
１黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック 30%・3mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック・3mm 以下橙色スコリア微量。

第 32 図 130 ～ 134・136 ～ 140、Ⅱ層 2 ～ 6 号土坑

131 号土坑・9 号ピット
１黒褐色土 粘性やや強。 3mm 以下黒色スコリア・1mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性強。 3mm 以下黒色スコリア・1mm 以下橙色スコリア微量。
３黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。
４黒褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土ブロック少量・5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア微量。

132 号土坑
１黒褐色土 粘性やや弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

133・134 号土坑
１黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック 30%。
２黒褐色土 粘性強。 3mm 以下橙色スコリア微量。
３黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック 10%・黒褐色土ブロック 10%。
４黒褐色土 粘性強。 暗黄褐色土ブロック少量・3mm 以下橙色スコリア微量。

136 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・ 2mm 以下橙色スコリア少量。

137 号土坑
１黒褐色土 粘性強。 3mm 以下黒色スコリア・1mm 以下橙色スコリア微量。
２黒褐色土 粘性弱。 3mm 以下黒色スコリア 30%・2mm 以下橙色スコリア少量。

138 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下橙色スコリア微量・明黄褐色土ブロック少量。

139 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下橙色スコリア少量。

140 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・5mm 以下橙色スコリア少量。

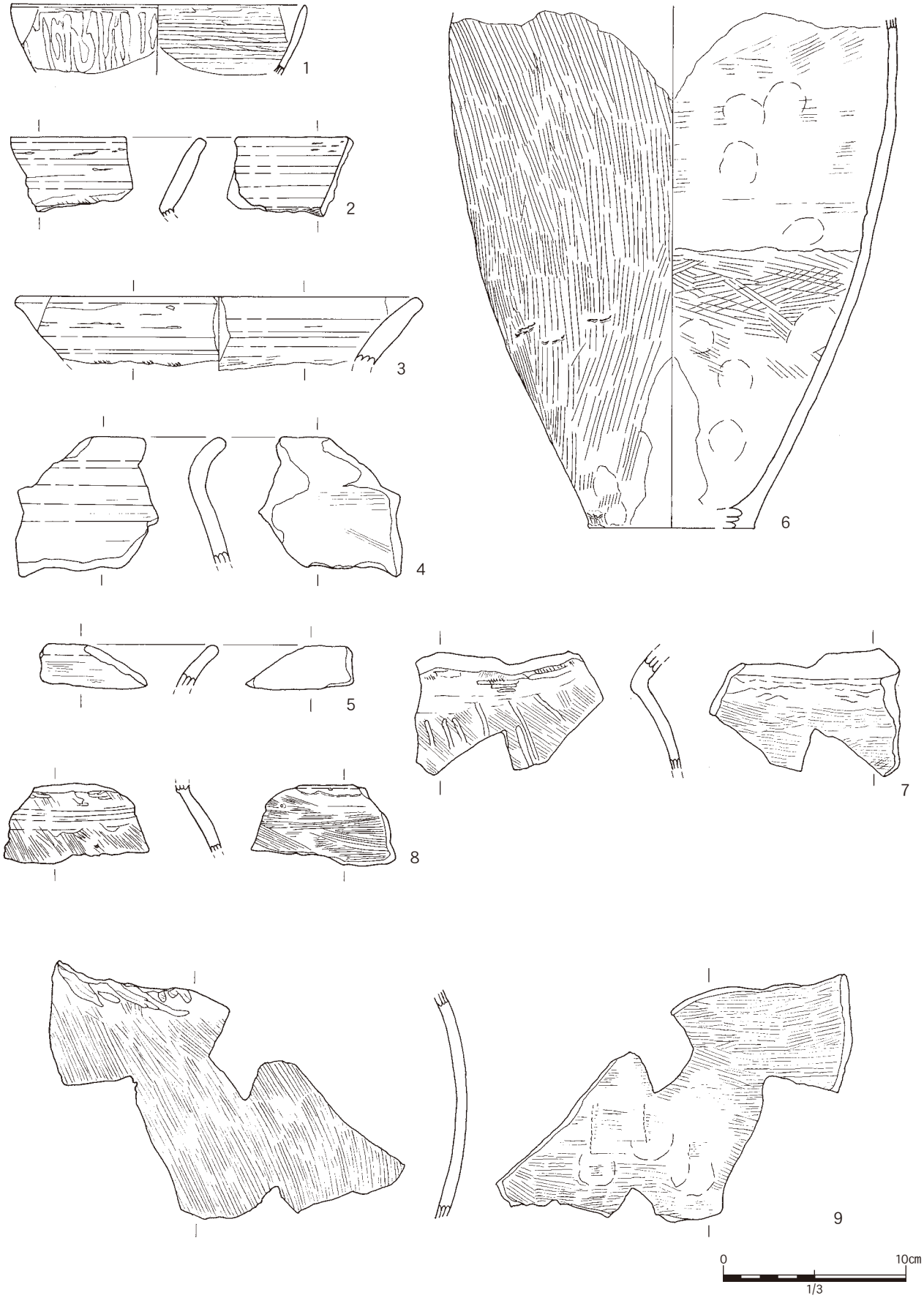
Ⅱ層 2 号土坑
１暗褐色土 粘性やや弱。 10mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア微量。
２暗褐色土 粘性弱。 10mm 以下黒色スコリア・ 2mm 以下橙色スコリア少量・褐色土ブロック少量。
３黒褐色土 粘性弱。 10mm 以下黒色スコリア・ 3mm 以下橙色スコリア 30%(地山)。

Ⅱ層 3 号土坑
１暗黄褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下橙色スコリア少量。

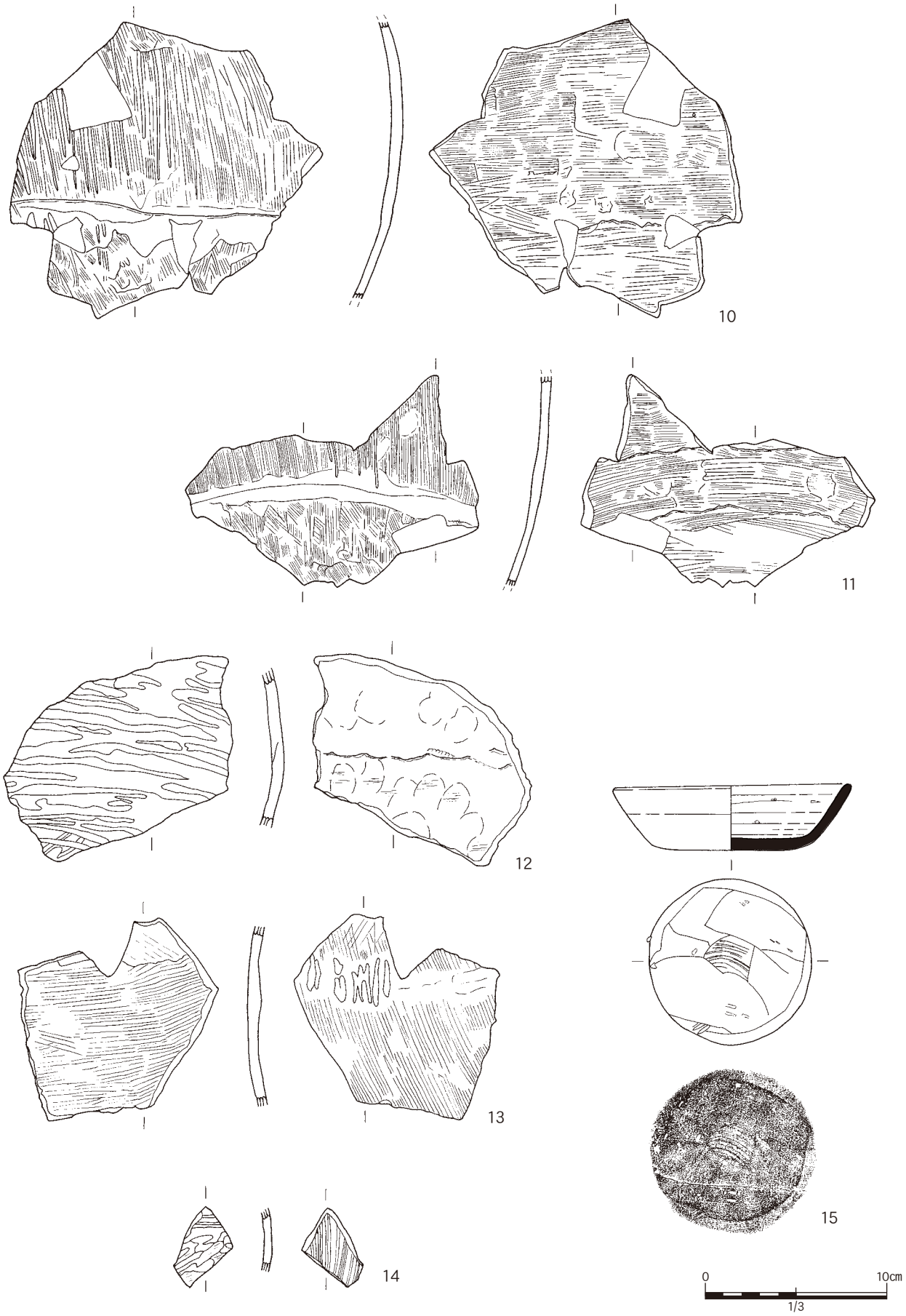
Ⅱ層 4 号土坑
１暗褐色土 5mm 以下の黒色スコリア微量・5mm 以下の橙色スコリア少量・黒褐色粘土粒子微量。
２暗褐色土 5mm 以下の黒色スコリア微量・5mm 以下の橙色スコリア少量・黒褐色粘土粒子 10%。

Ⅱ層 5 号土坑
１暗褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・5mm 以下橙色スコリア少量・炭化粒子微量。
２暗黄褐色土 粘性やや弱。 黒褐色土ブロック少量。

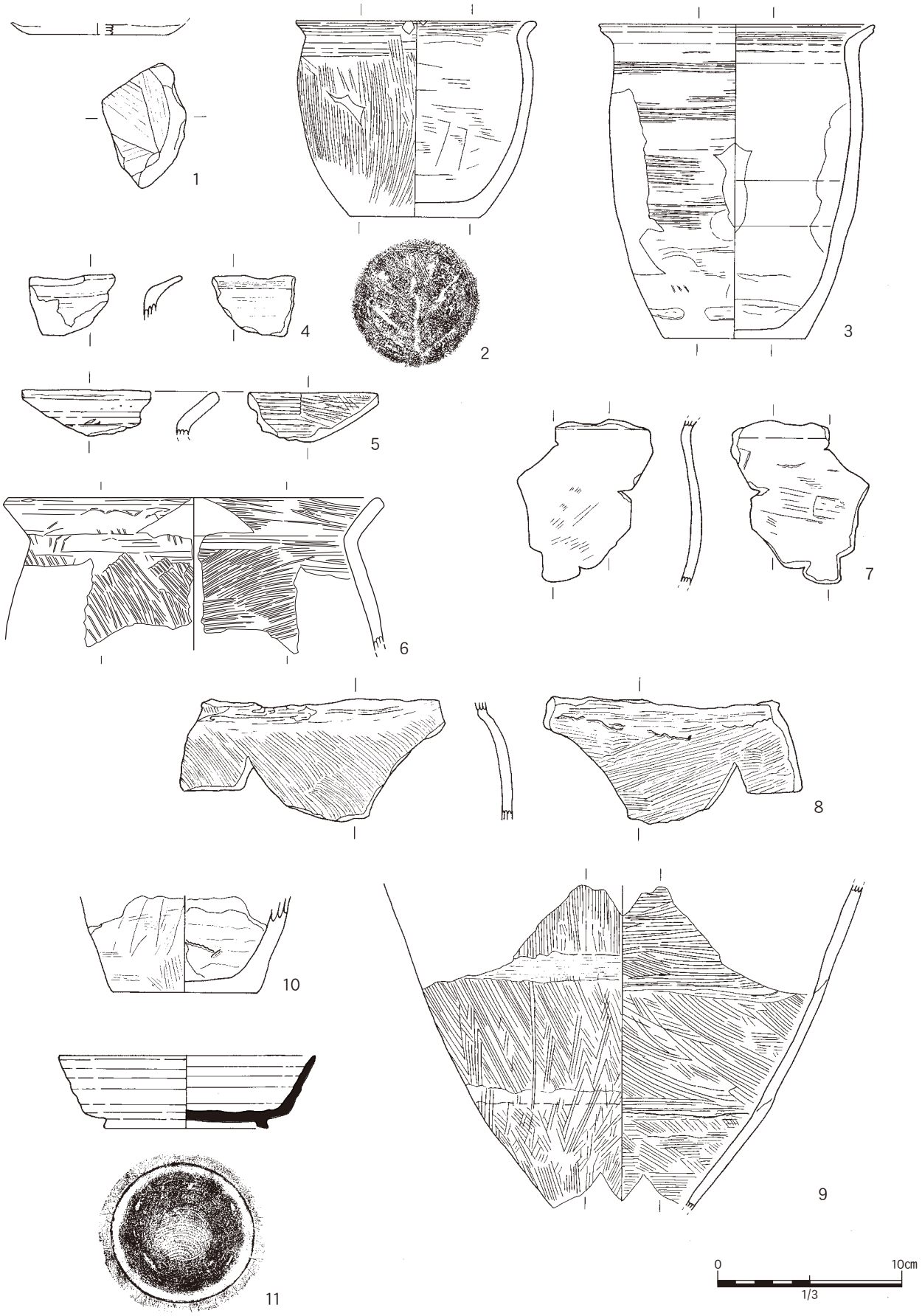
Ⅱ層 6 号土坑
１黒褐色土 粘性やや強。 5mm 以下黒色スコリア微量・3mm 以下橙色スコリア少量。
２暗黄褐色土 粘性やや弱。 2～5cm 礫少量。



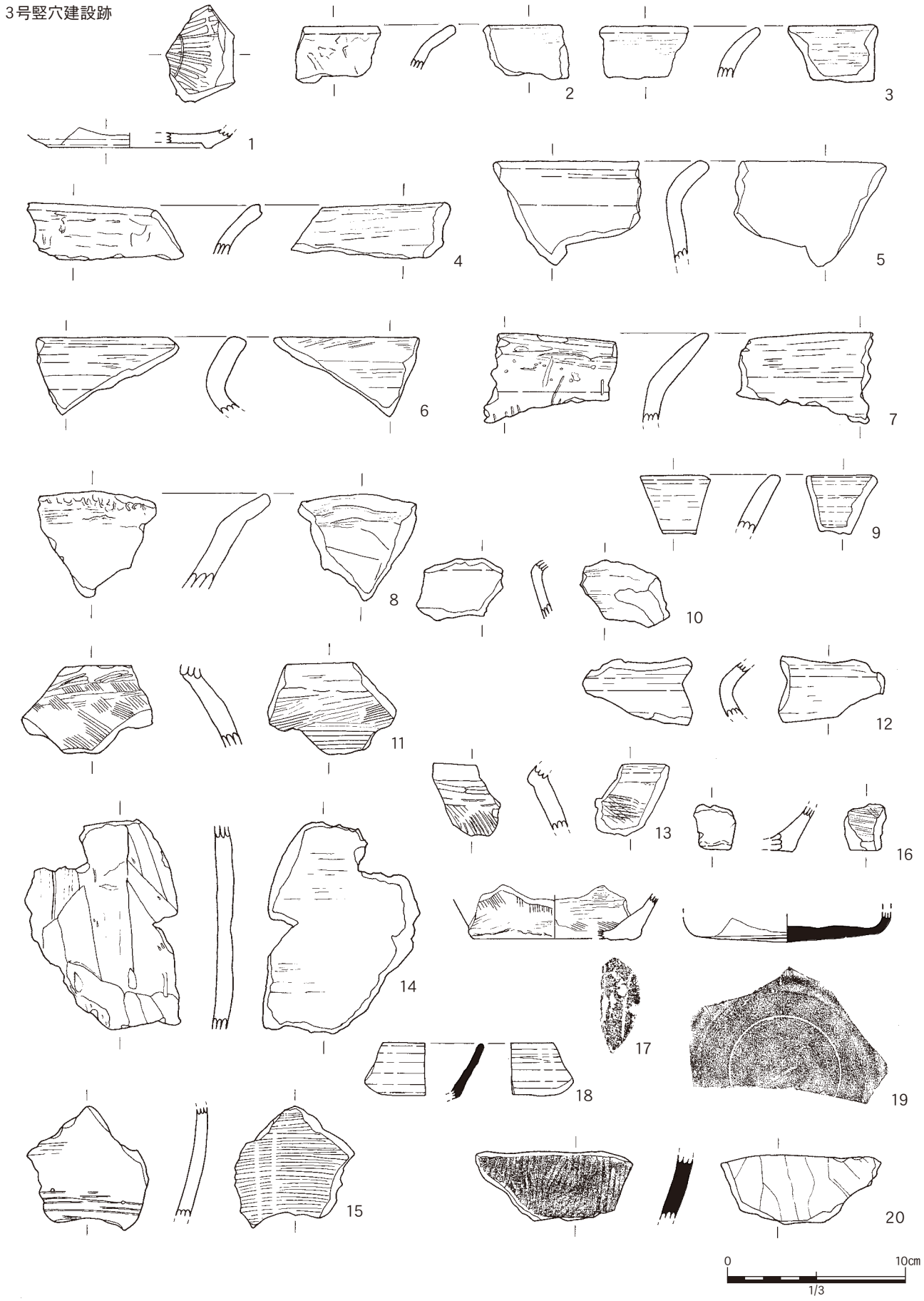
第33図　1号竪穴建物跡出土遺物（1）



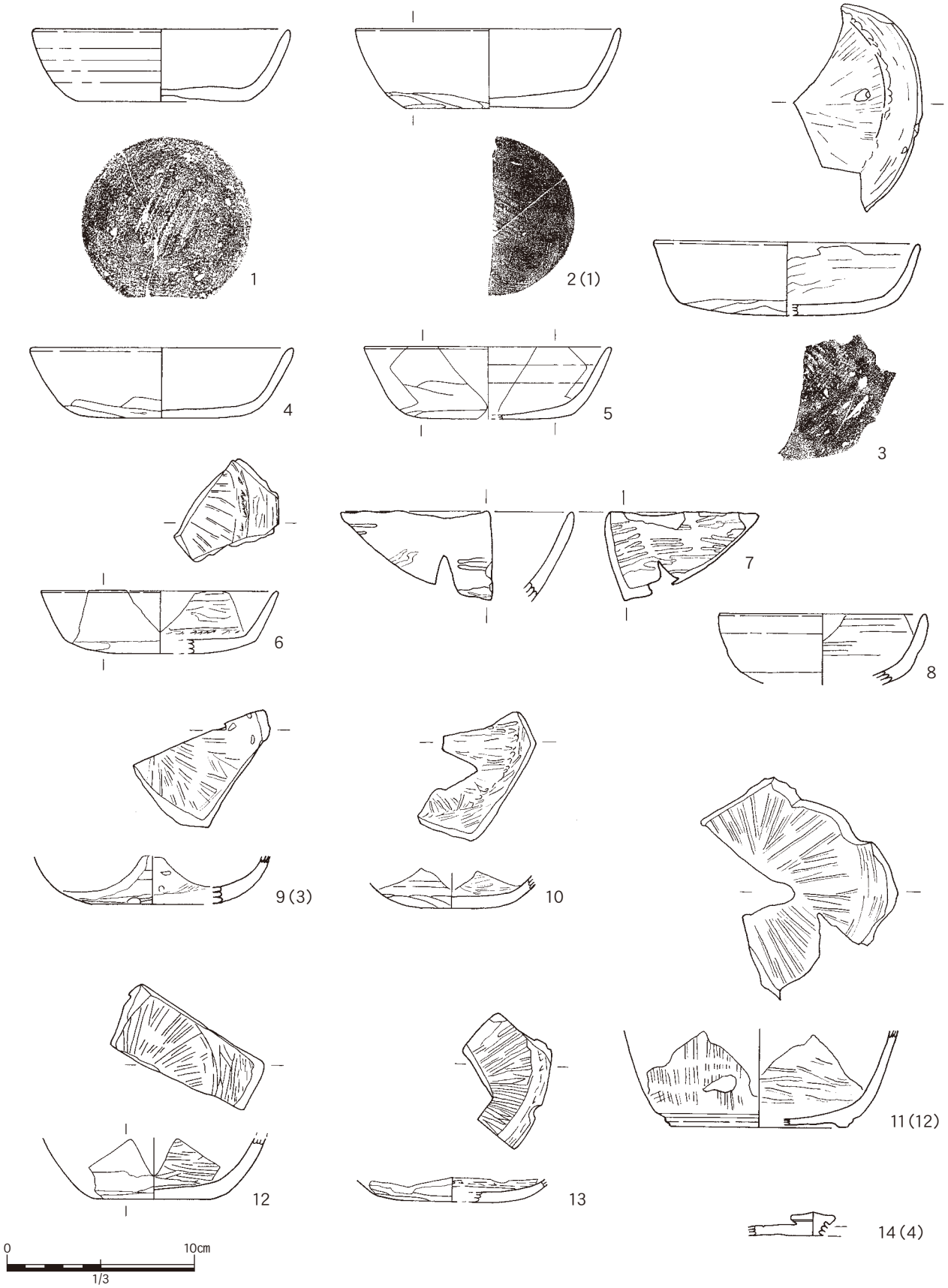
第34図　１号竪穴建物跡出土遺物（２）



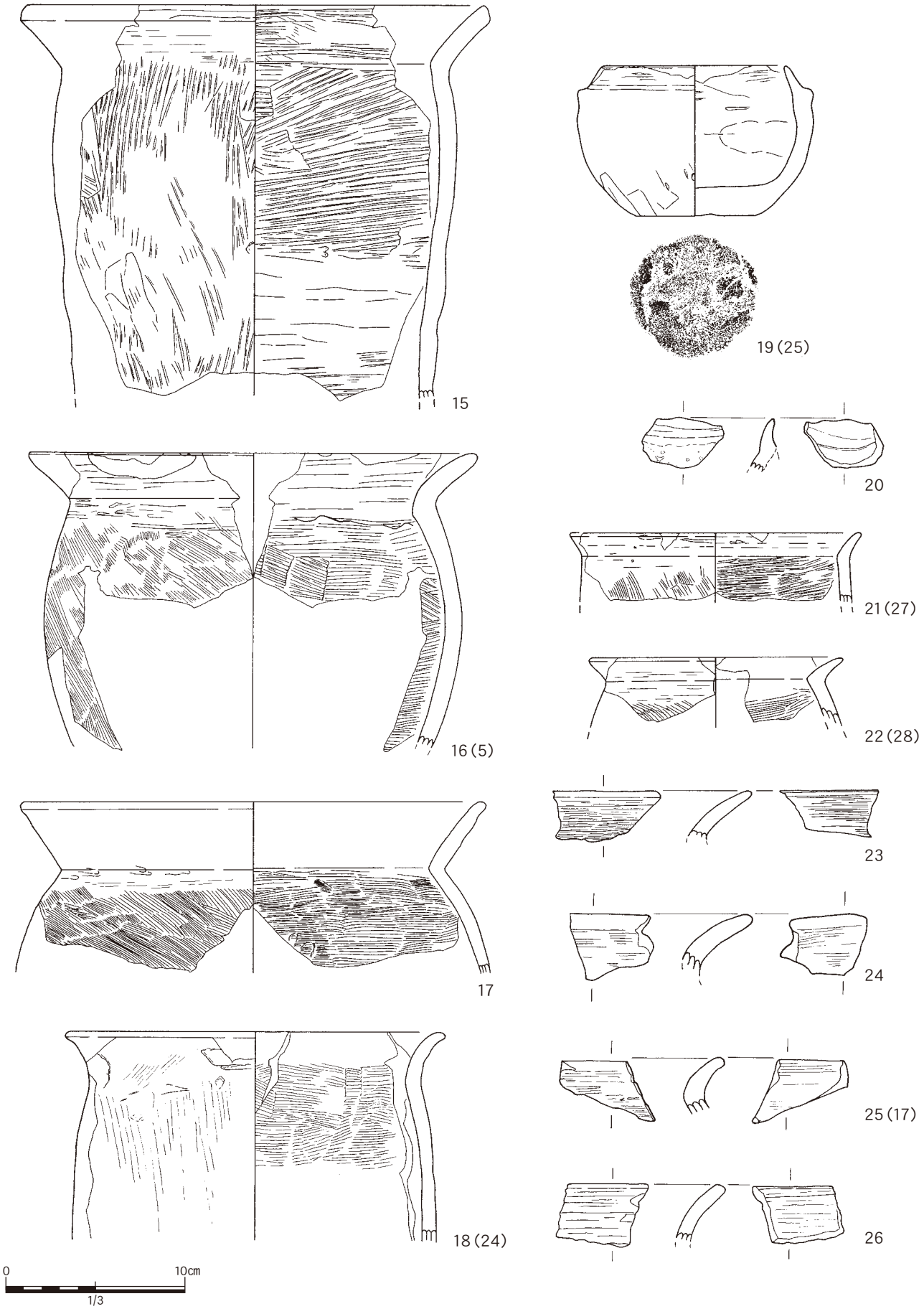
第35図　2号竪穴建物跡出土遺物



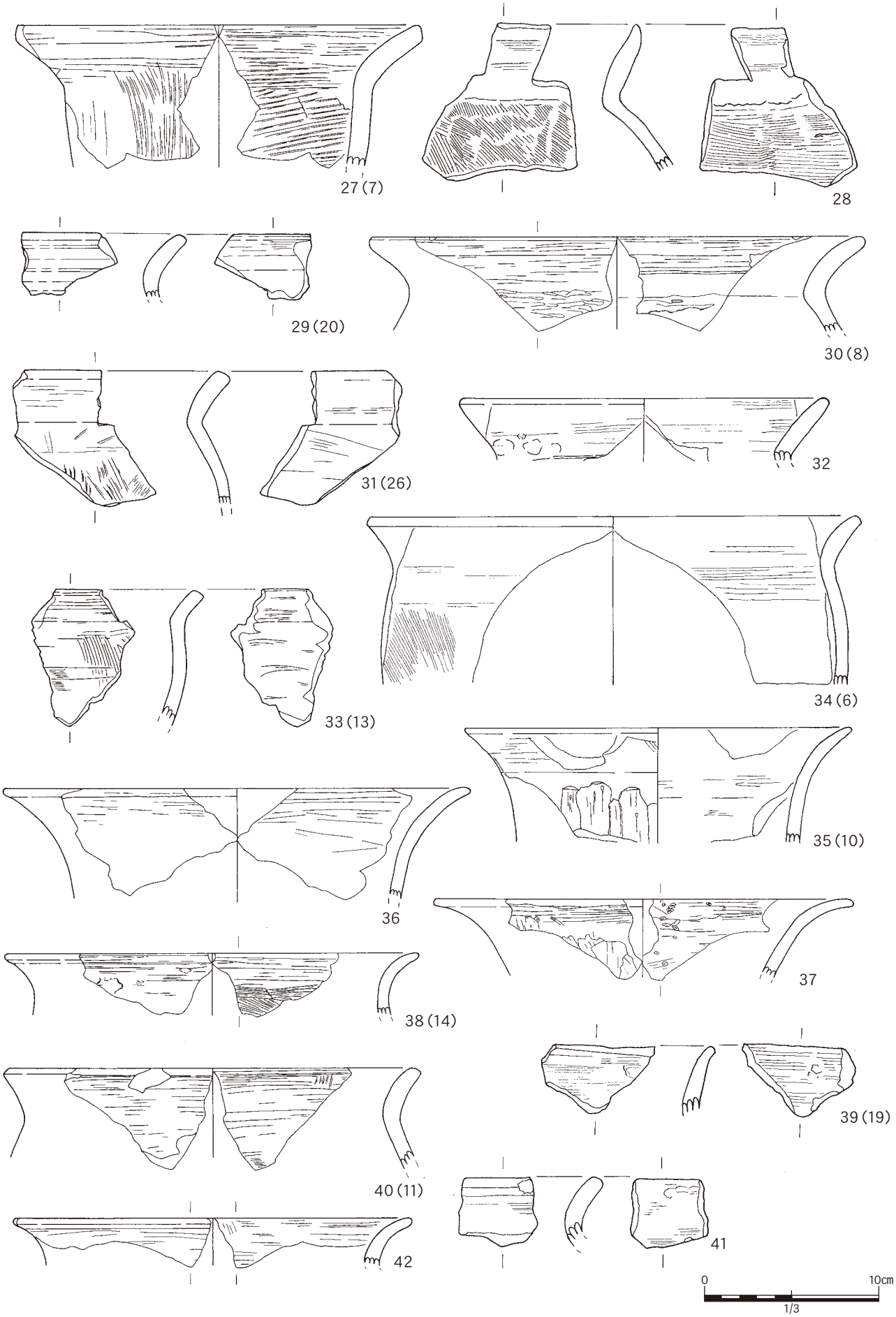
第36図　3号竪穴建物跡出土遺物



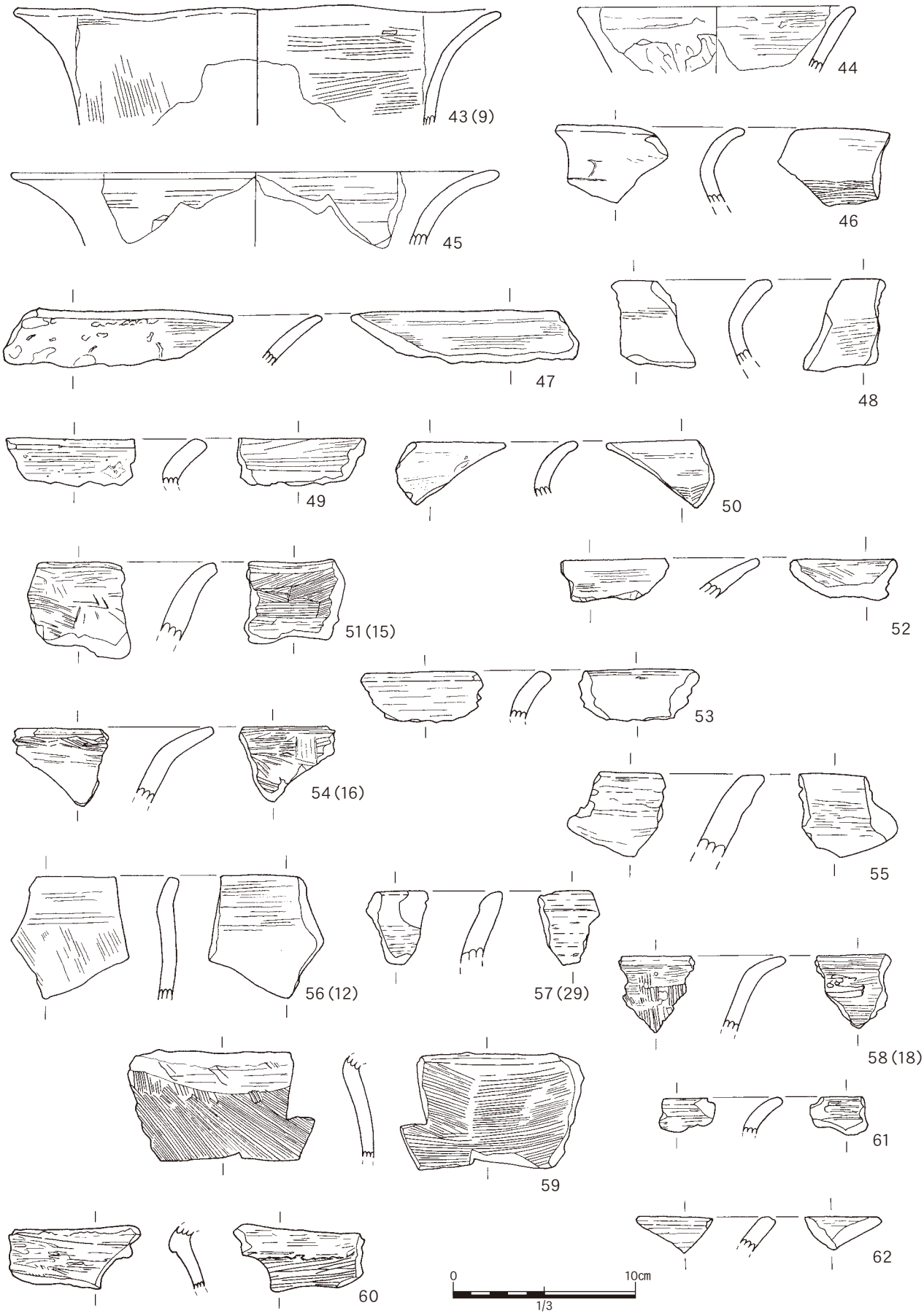
第37図　４号竪穴建物跡出土遺物（１）※（　）内は胎土分析試料No.



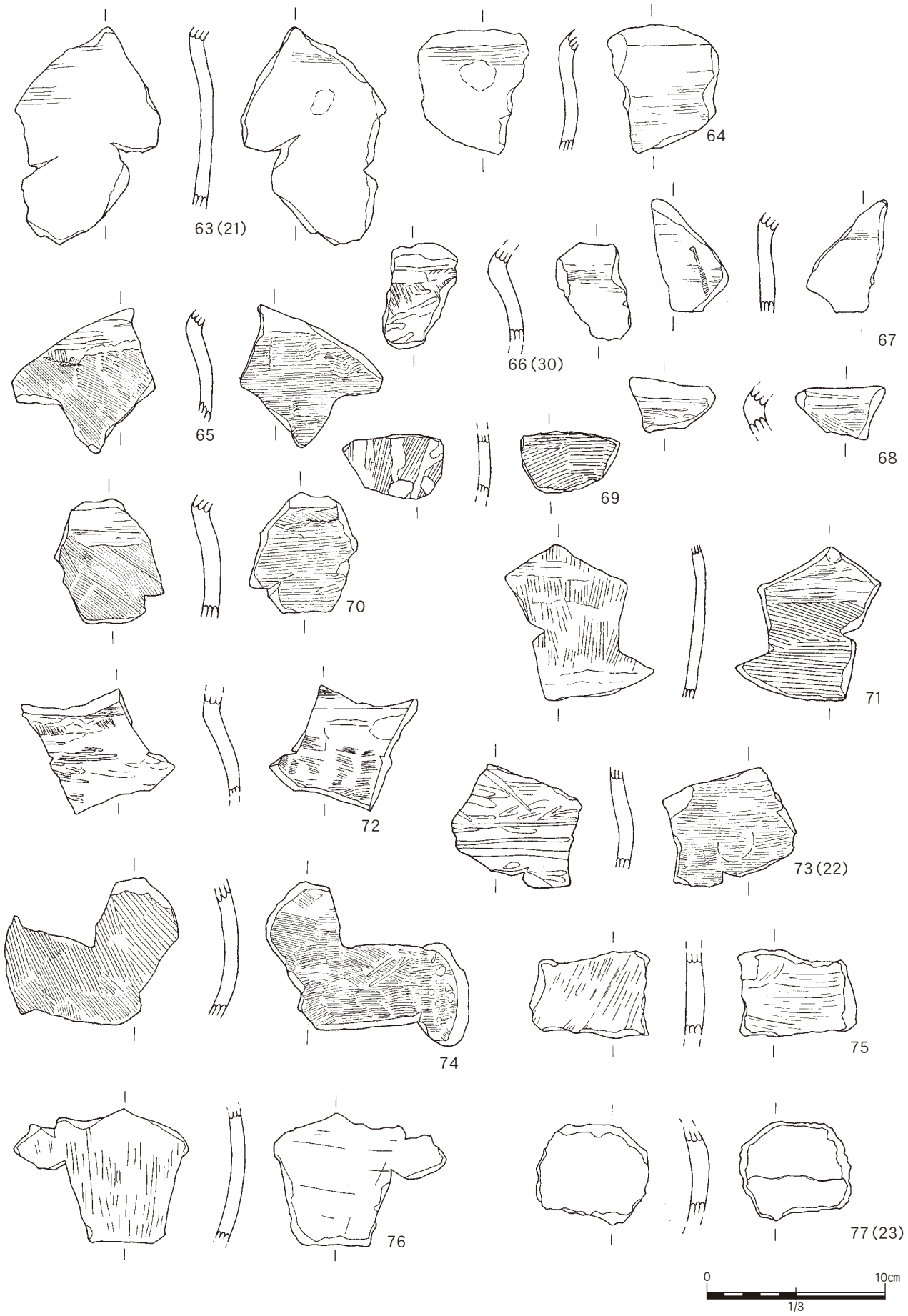
第38図　４号竪穴建物跡出土遺物（２）※（　）内は胎土分析試料No.



第39図　４号竪穴建物跡（３）※（　）内は胎土分析試料No.

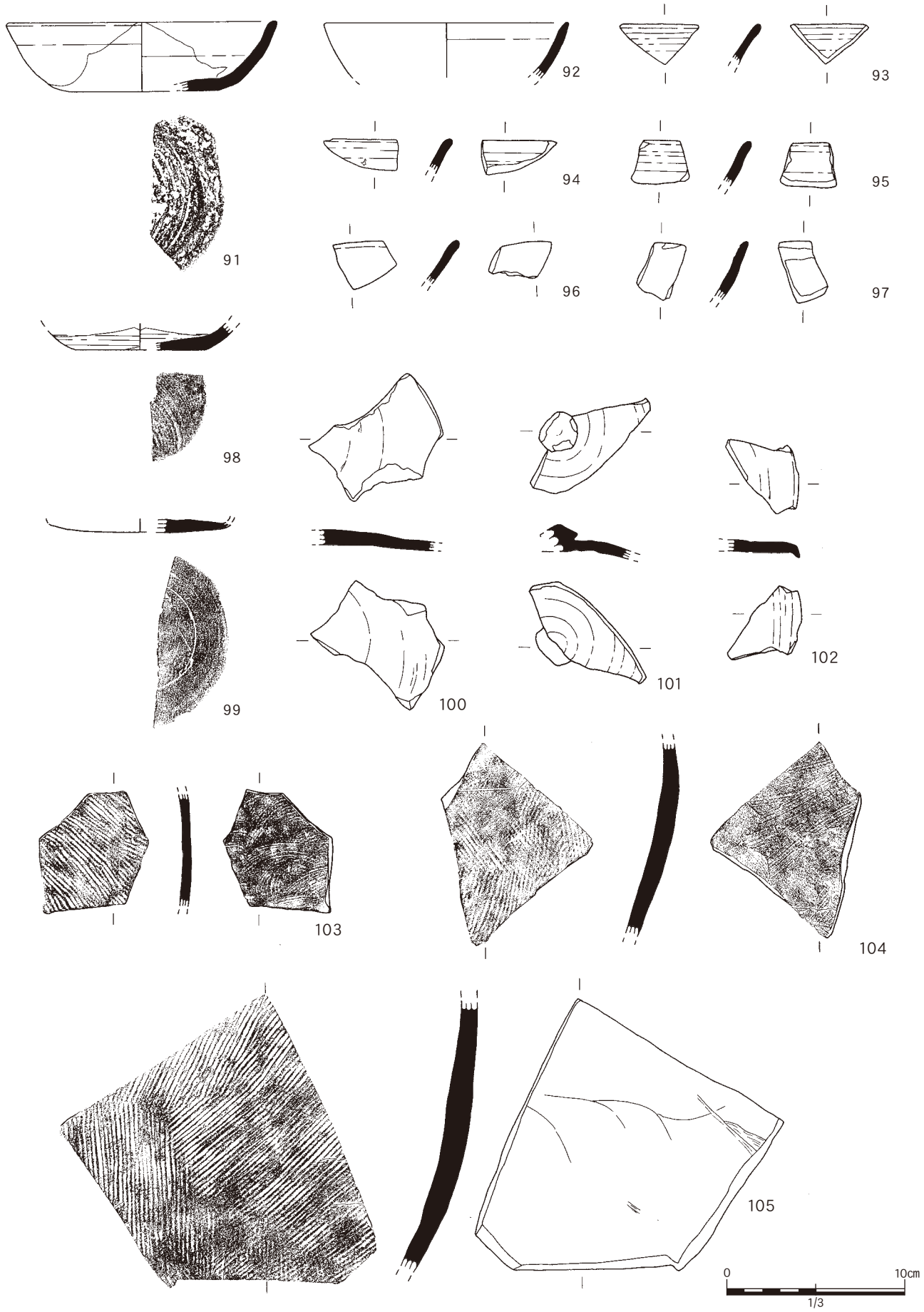


第40図　４号竪穴建物跡出土遺物（４）※（　）内は胎土分析試料No.

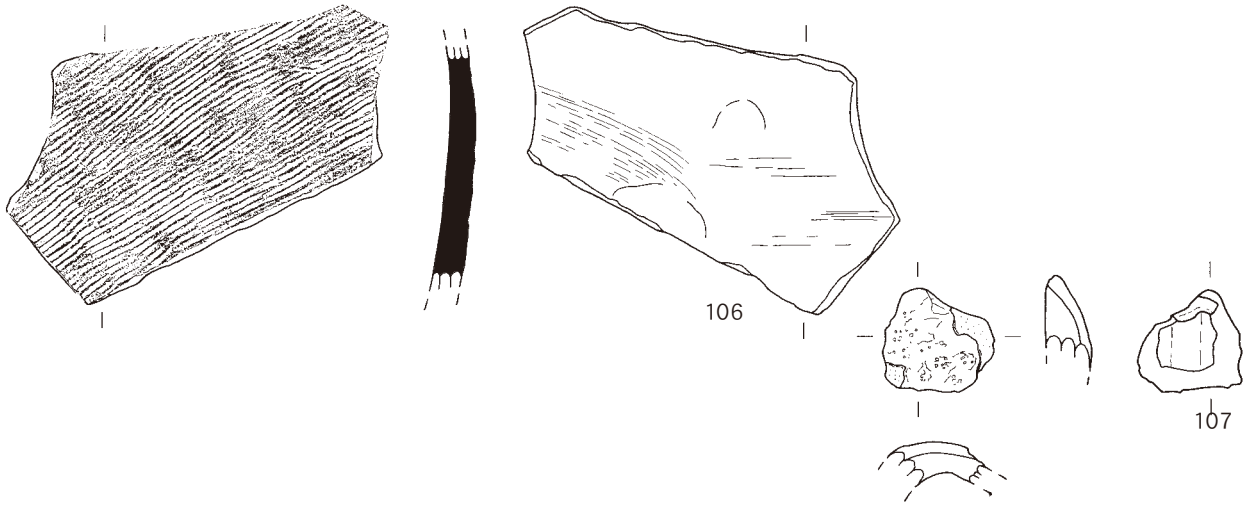


第41図　４号竪穴建物跡出土遺物（５）※（　）内は胎土分析試料No.

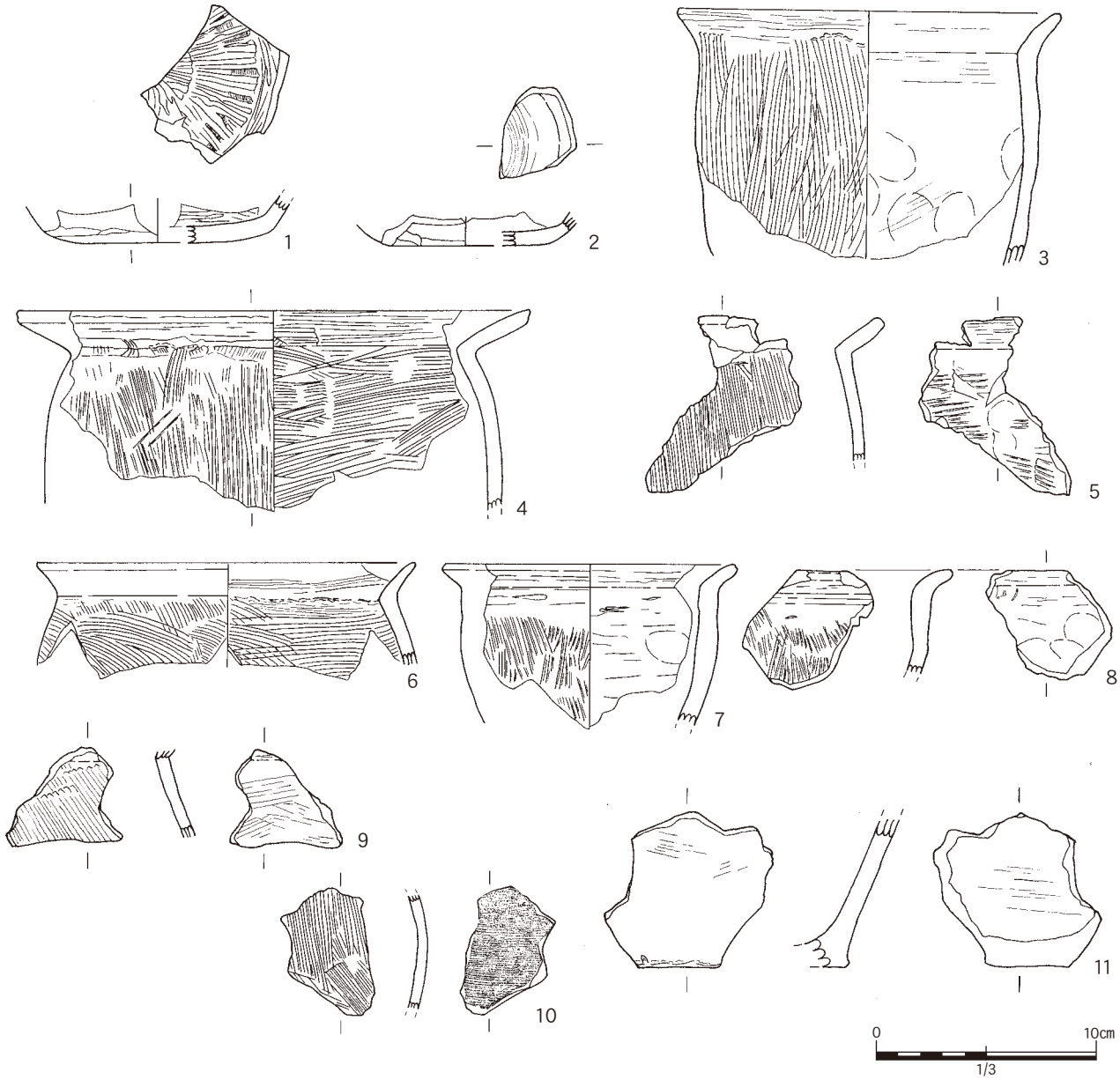
第42図　４号竪穴建物跡出土遺物（６）



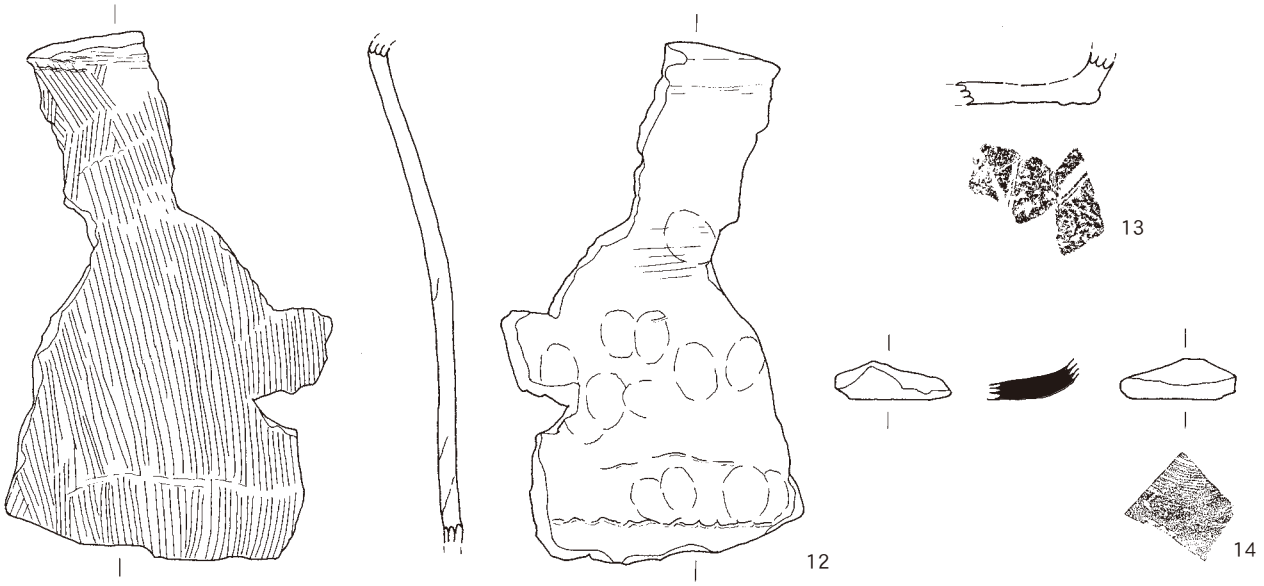
第43図　４号竪穴建物跡出土遺物（７）



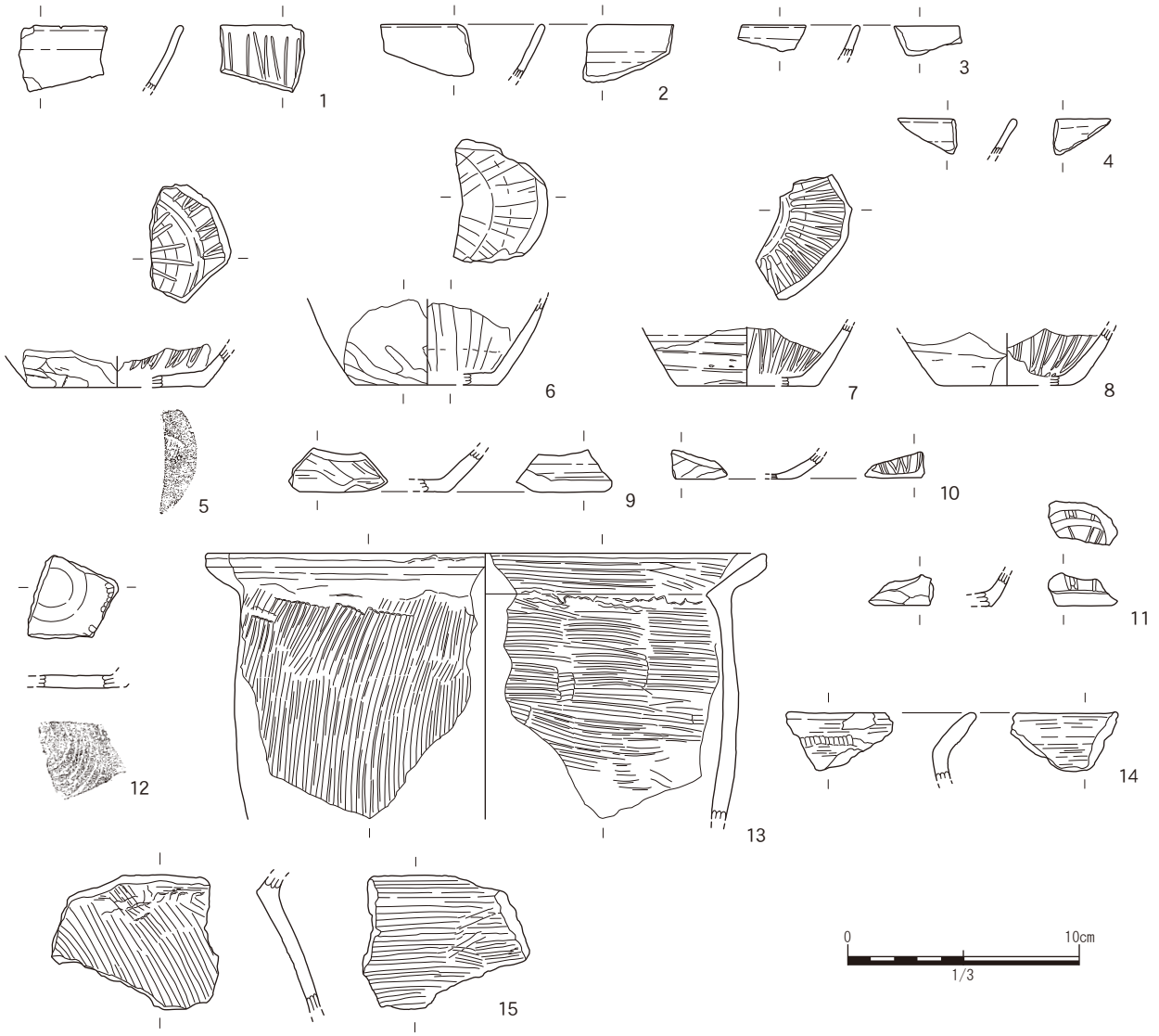
5号竪穴建設跡



第44図　4号竪穴建物跡（8）・5号竪穴建物跡（1）出土遺物

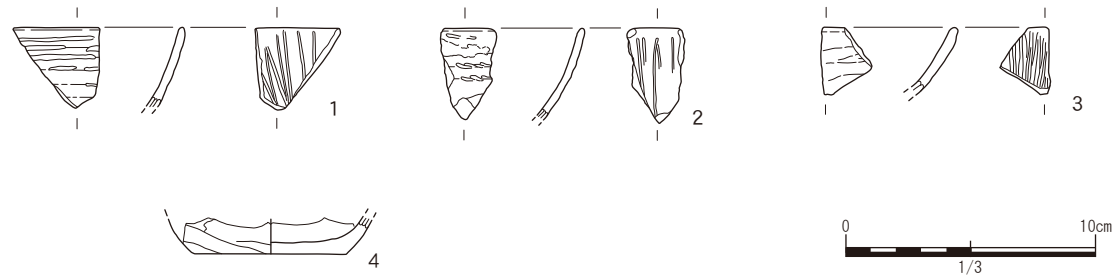


6号竪穴建物跡

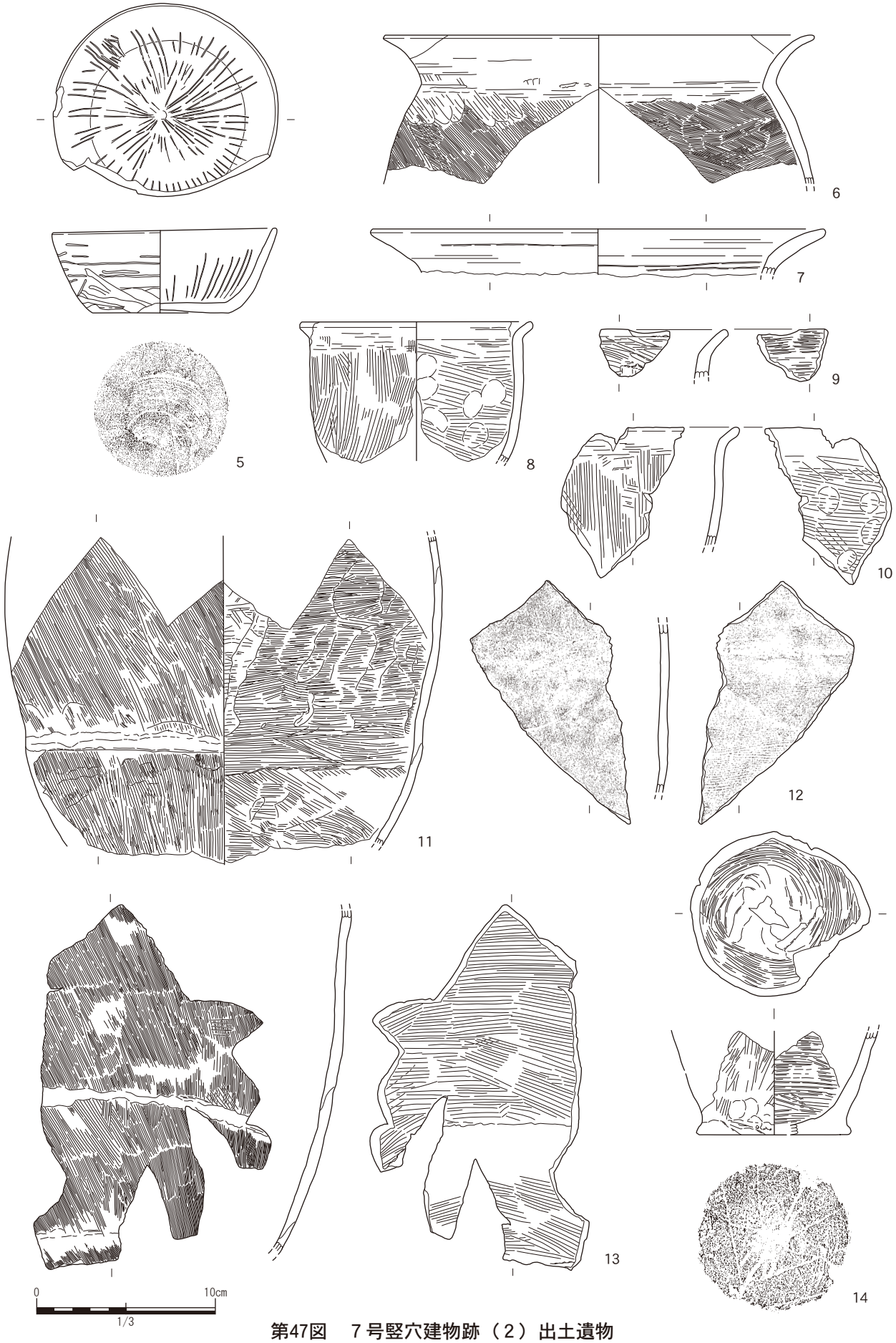


第45図　5号竪穴建物跡（2）・6号竪穴建物跡（1）出土遺物

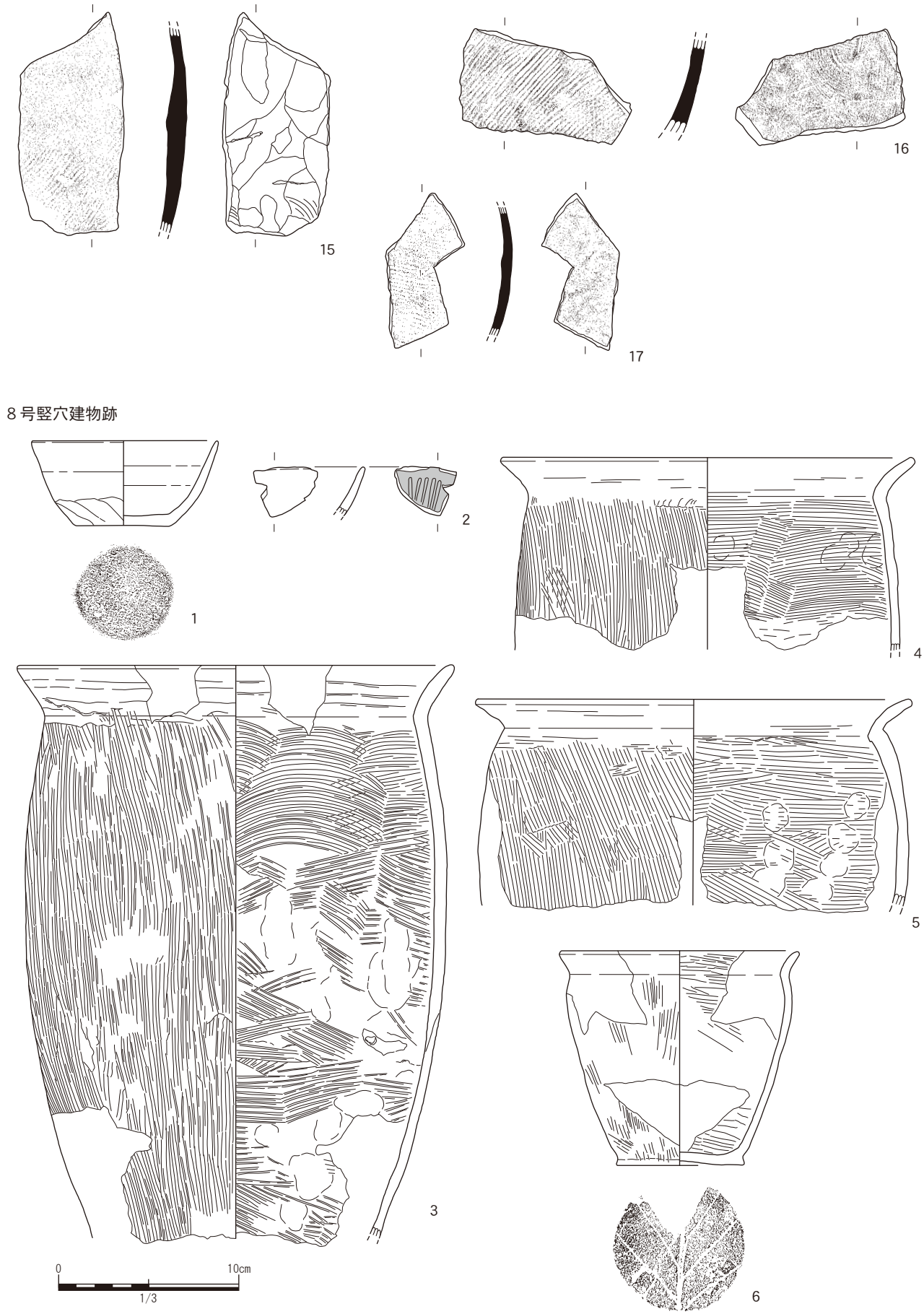
7号竪穴建物跡



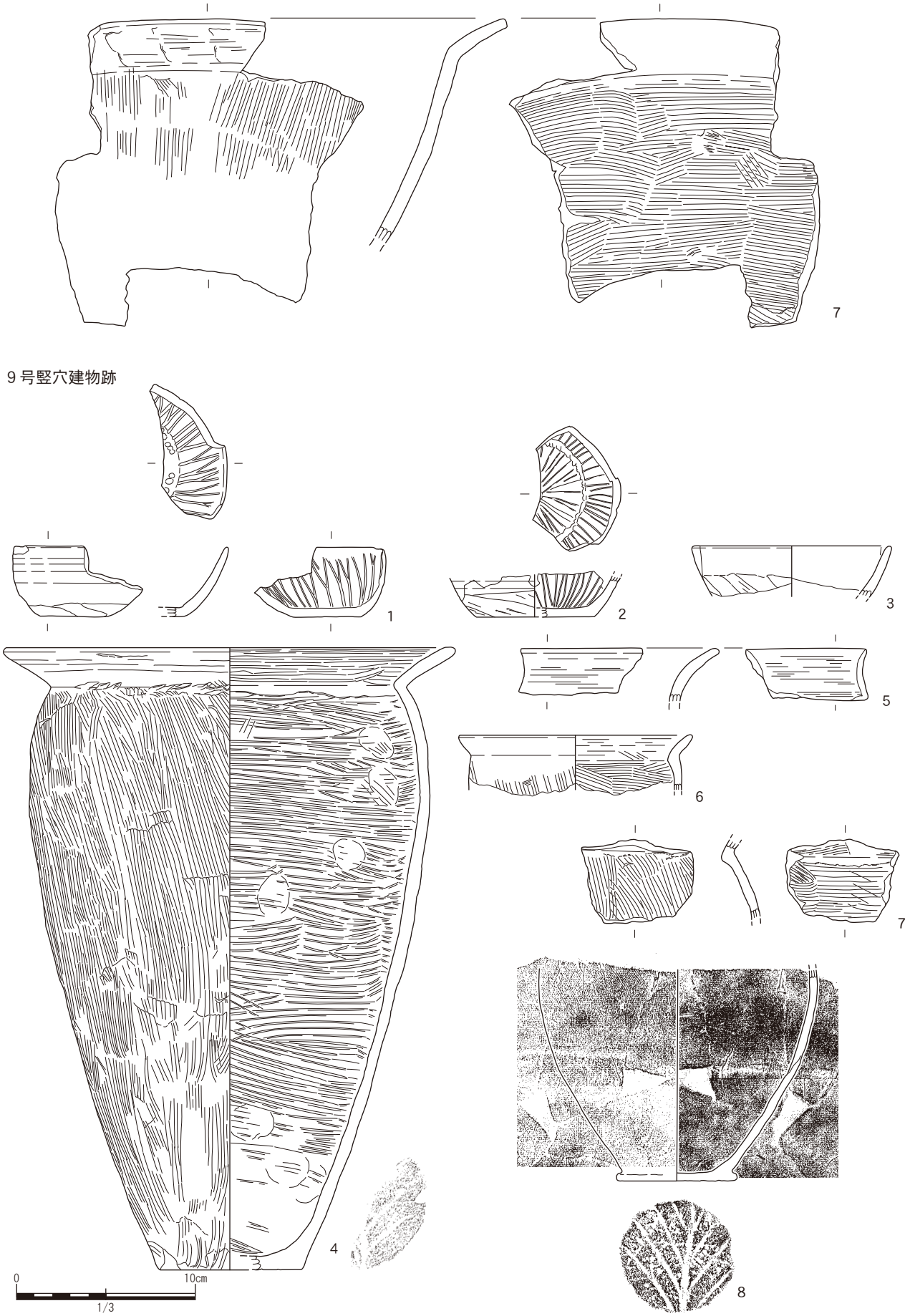
第46図　6号竪穴建物跡（2）・7号竪穴建物跡（1）出土遺物



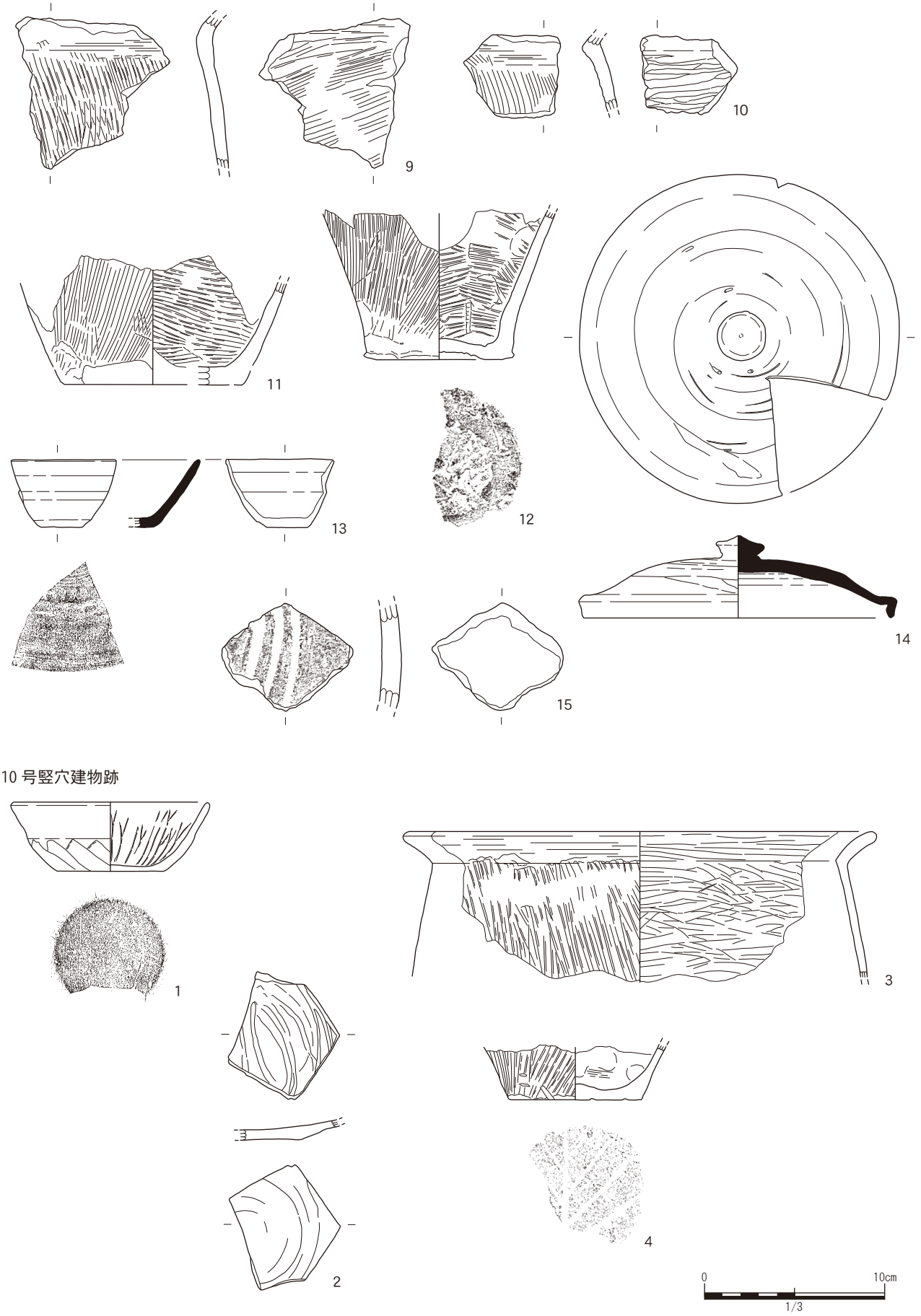
第47図　７号竪穴建物跡（２）出土遺物



第48図　7号竪穴建物跡（3）・8号竪穴建物跡（1）出土遺物

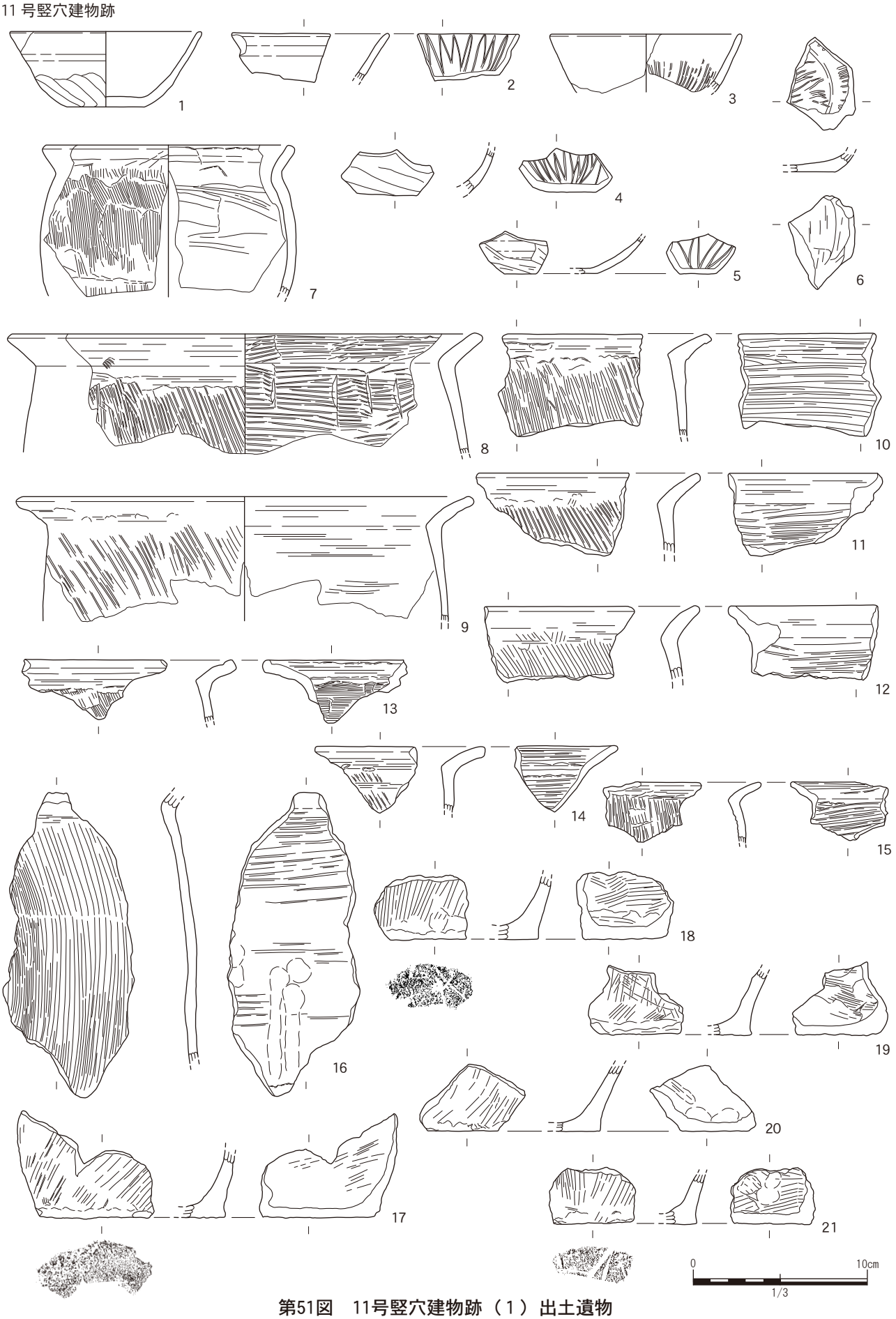


第49図　８号竪穴建物跡（２）・９号竪穴建物跡（１）出土遺物

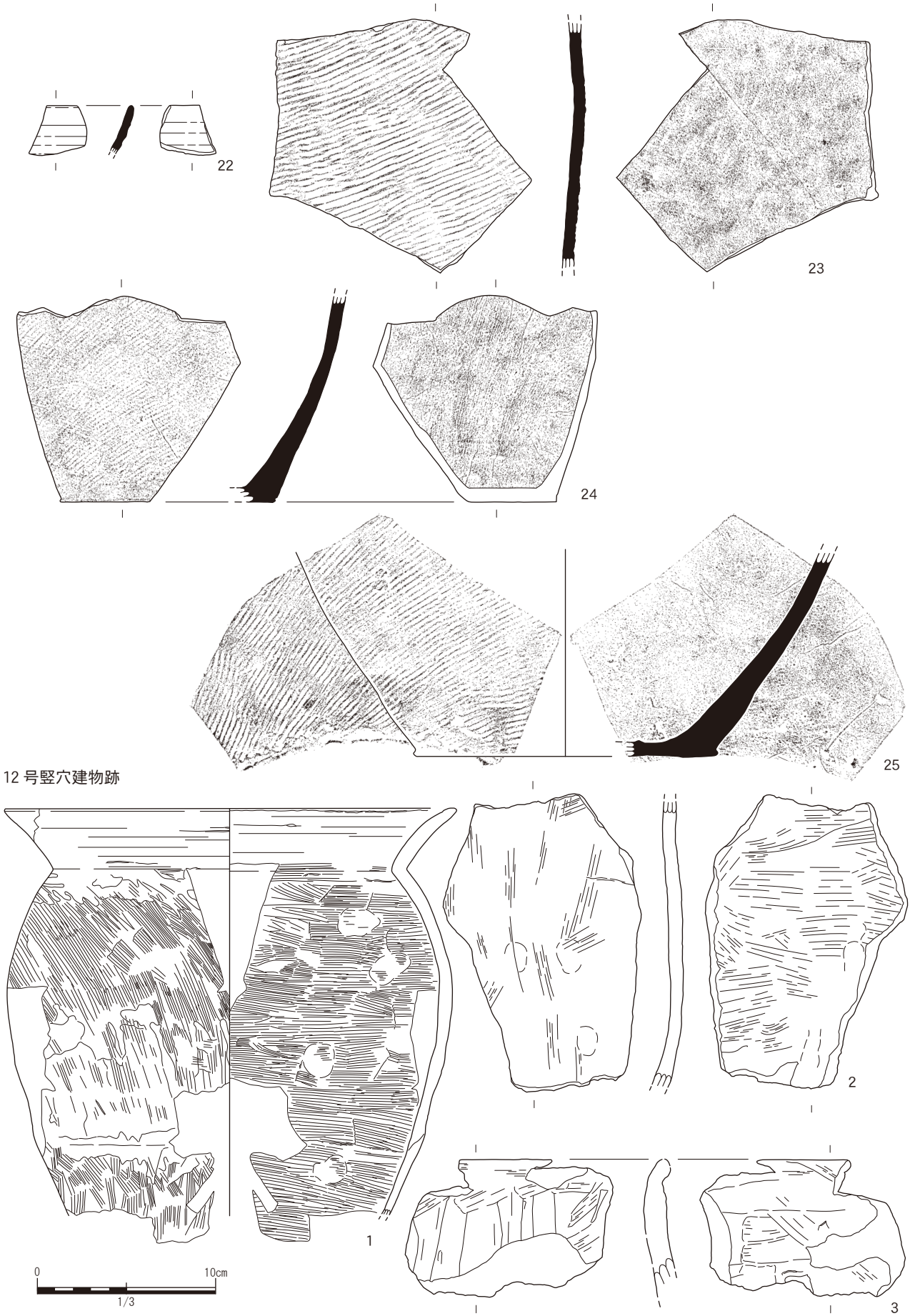


第50図　9 号竪穴建物跡（2）・10号竪穴建物跡出土遺物

11 号竪穴建物跡

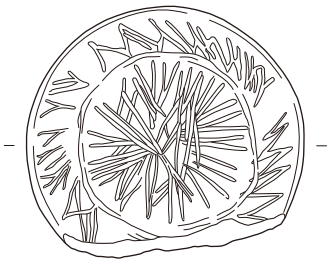


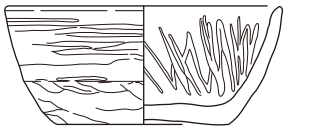
第51図　11号竪穴建物跡（1）出土遺物

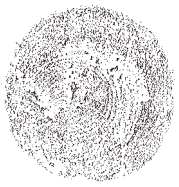


第52図　11号竪穴建物跡（２）・12号竪穴建物跡出土遺物

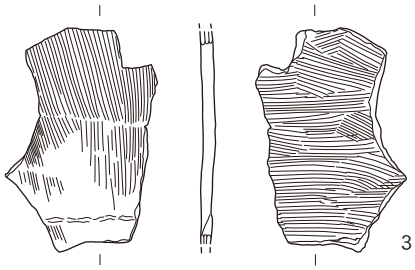
13 号竪穴建物跡



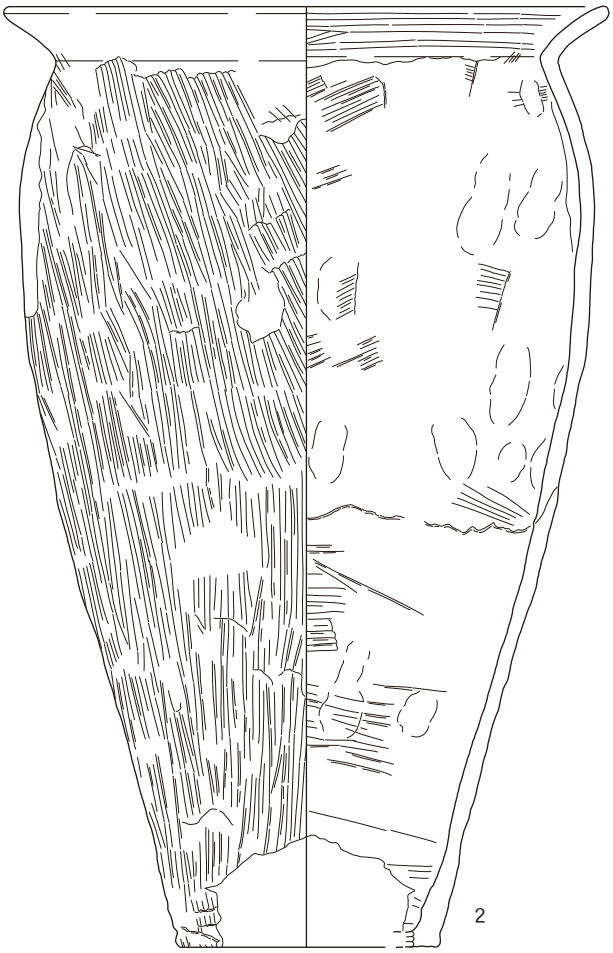




1

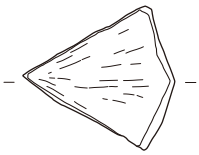


3

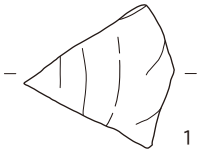


2

1 号掘立柱建物跡



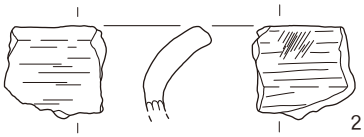
2



1

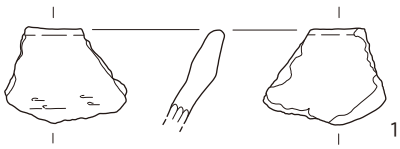
2 号掘立柱建物跡

1



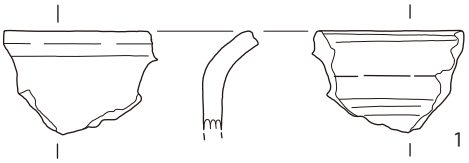
2

3 号掘立柱建物跡

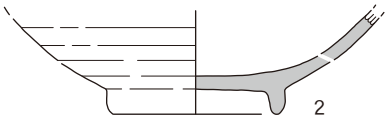


1

1 号溝状遺構



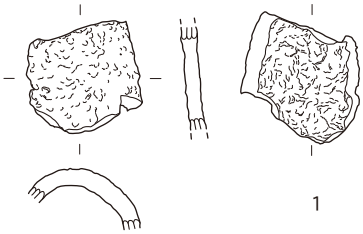
1



2

3

4 号掘立柱建物跡（石製品）

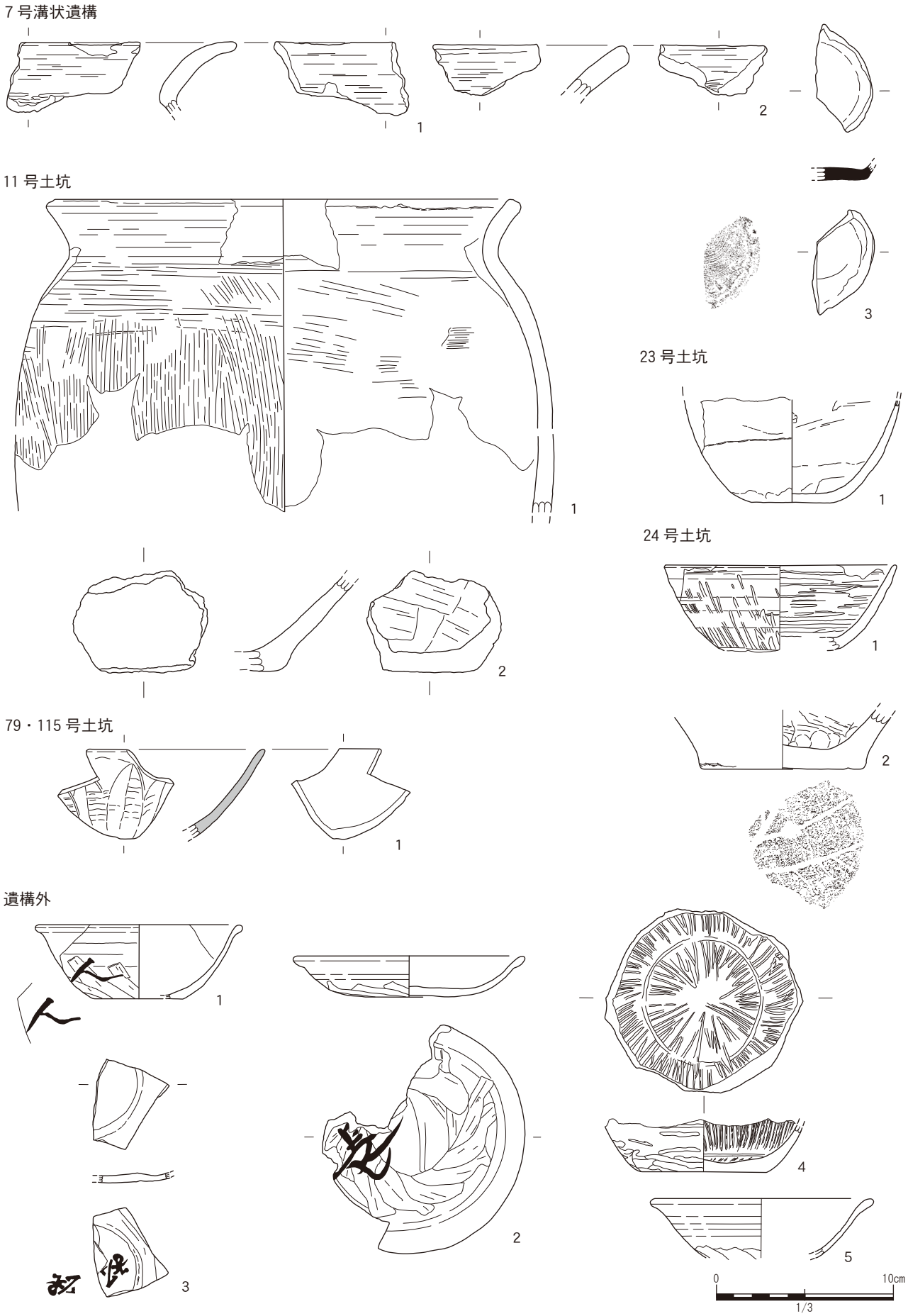


1

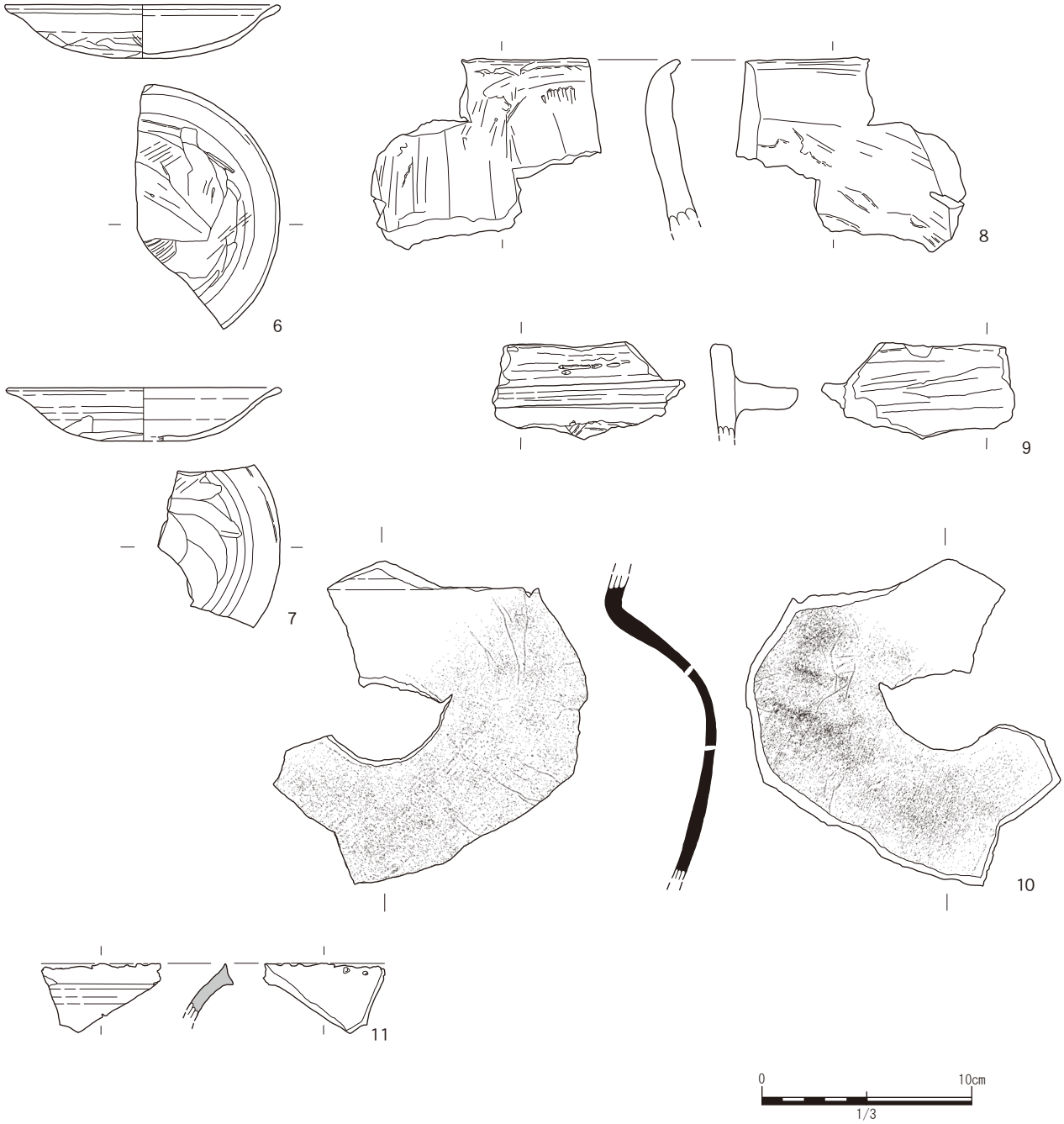
0　10cm

1/3

第53図　13号竪穴建物跡、１～４号掘立柱建物跡、１号溝状遺構出土遺物

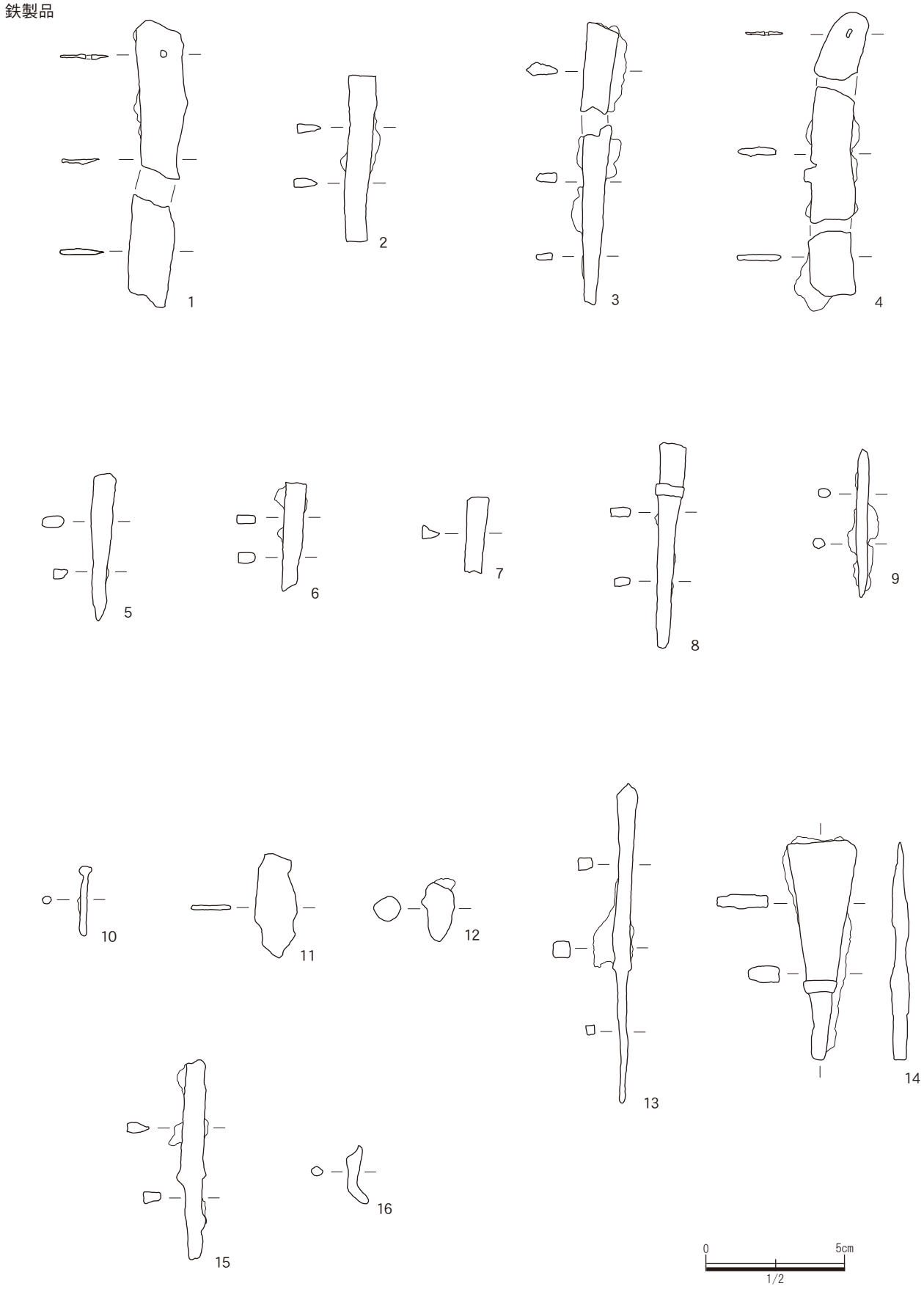


第54図　7 号溝状遺構、11・23・24・79・115号土坑、遺構外（1）出土遺物



第55図　遺構外（２）出土遺物

鉄製品



第56図　鉄製品

第３表　出土遺物観察表

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
33	1	１号竪穴建物	ハ63	土師器	坏	口縁部	16.0			ミガキ	ミガキ	明黄褐色		良	８世紀後半	
33	2	１号竪穴建物	ハ8	土師器	甕	口縁部				頸部：ハケ	頸部：ハケ	褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
33	3	１号竪穴建物	ハ40	土師器	甕	口縁部				頸部：ハケ	頸部：ハケ	明赤褐色	緻密、石英	良	８世紀後半	駿東型
33	4	１号竪穴建物	ハ21	土師器	甕	口縁部				ナデ	ヘラナデ	明赤褐色	長石、粗砂が目立つ	良	８世紀後半	
33	5	１号竪穴建物	ハ15	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
33	6	１号竪穴建物	ハ16、２住ハ10、11、14、52	土師器	甕	40%		9.1		タテハケ	ヨコハケ、指頭痕、輪積痕	暗赤褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
33	7	１号竪穴建物	ハ18、19	土師器	甕	頸部				ハケ、ミガキ	ヨコハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
33	8	１号竪穴建物	ハ54	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	明褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
33	9	１号竪穴建物	ハ32,33,35,45,52	土師器	甕	体部				ハケ、ミガキ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
34	10	１号竪穴建物	ハ25,27,28,31,36,51,54	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ、ミガキ	ハケ、指頭痕	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
34	11	１号竪穴建物	ハ20,34,60,61	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ、ミガキ	ハケ、指頭痕	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	10と同一個体か
34	12	１号竪穴建物	ハ38	土師器	甕	体部				ミガキ	ヘラナデ、指頭痕、輪積痕	褐色	石英	良	８世紀後半	
34	13	１号竪穴建物	ハ39,41,53,62	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ、ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
34	14	１号竪穴建物	ハ4	土師器	坏	体部				ヘラケズリ、ミガキ	暗文	にぶい赤褐色		良	８世紀後半	
34	15	１号竪穴建物	ス1	須恵器	坏	ほぼ完形	13.0	8.8	3.6	底部：回転糸切り後周囲をヘラケズリ		灰色	白色砂礫	良	８世紀前半～後半	
35	1	２号竪穴建物	ハ3	土師器	坏	底部		7.6		ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ		にぶい赤褐色	赤色粒子	良	８世紀後半	
35	2	２号竪穴建物	ハ15,20,24,33,35	土師器	小甕	50%	13.0	6.8	10.5	ハケ、底部：木葉痕	ヘラナデ	にぶい赤褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
35	3	２号竪穴建物	ハ4、26,31,38,42	土師器	ロクロ甕	30%	14.7	7.6	16.8	カキメ、底部：ヘラケズリ		にぶい褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
35	4	２号竪穴建物	ハ18	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
35	5	２号竪穴建物	ハ41	土師器	甕	口縁部				ナデ	ハケ	明赤褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
35	6	２号竪穴建物	ハ12、28、32	土師器	甕	口縁部	20.0			ハケ	ハケ	明褐色	石英、長石、輝石	良	８世紀後半	
35	7	２号竪穴建物	ハ36、37	土師器	甕	頸部				ヘラナデ	ヘラナデ	褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	摩耗して不明瞭
35	8	２号竪穴建物	ハ1、16	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	灰褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
35	9	２号竪穴建物	ハ5,17,22,27,29,30,3443,49,51,	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ	ハケ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
35	10	２号竪穴建物	ハ25	土師器	甕	底部		7.8		ヘラナデ	ハケ	にぶい褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
35	11	２号竪穴建物	ス1	須恵器	高台坏	90%	13.8	8.8	3.9	底部：回転糸切り		にぶい黄褐色	白色砂礫	良	８世紀後半	
36	1	３号竪穴建物	ハ41	土師器	高台坏	底部		9.0		底部：削り出し高台	みこみ部：暗文	にぶい黄褐色		良	８世紀後半	
36	2	３号竪穴建物	ハ50	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	3	３号竪穴建物	ハ4	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
36	4	３号竪穴建物	ハ52	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙色	６mm以下の暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	5	３号竪穴建物	ハ6	土師器	甕	口縁部						にぶい橙色	５mm以下の赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	6	３号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ナデ	ヘラナデ	にぶい橙色	４mm以下の赤・赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	7	３号竪穴建物	ハ7	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリか	ナデ	にぶい赤褐色	５mm以下の灰色・赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	8	３号竪穴建物	ハ8	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ、口唇部：工具痕	ヘラナデ	灰褐色	白色砂	良	８世紀後半	
36	9	３号竪穴建物	ハ22	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
36	10	３号竪穴建物	ハ36	土師器	甕	頸部					ヘラナデ	褐色	４mm以下の暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	11	３号竪穴建物	ハ1	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
36	12	３号竪穴建物	ハ24	土師器	甕	頸部				ナデ	ナデ	にぶい橙色	３mm以下の暗褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	13	３号竪穴建物	ハ15	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
36	14	３号竪穴建物	ハ16,27,39,43	土師器	甕	底部				ヘラケズリ	ナデ	赤褐色	４mm以下の灰色・赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
36	15	３号竪穴建物	ハ19	土師器	ロクロ甕	体部				カキメ		にぶい赤褐色	石英、長石、輝石	良	８世紀後半	
36	16	３号竪穴建物	ハ49	土師器	甕	底部					ハケ	灰褐色	石英、長石	良	８世紀後半	
36	17	３号竪穴建物	ハ18	土師器	甕	底部		9.0		ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい赤褐色	石英	良	８世紀後半	
36	18	３号竪穴建物	ス1	須恵器	坏	口縁部						灰色		良	８世紀後半	
36	19	３号竪穴建物	ス2	須恵器	坏	底部		9.6		底部：回転ヘラケズリ		灰白色		良	８世紀後半	助宗窯か

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
36	20	３号竪穴建物	ス３	須恵器	甕	体部				タタキ目	ヘラケズリ	灰白色		良	８世紀後半	
37	1	４号竪穴建物	ハ221～227	土師器	坏	70%	13.4	8.8	3.9	底部：静止糸切り後周辺をヘラケズリ		明赤褐色		良	８世紀後半	
37	2	４号竪穴建物	ハ53、287	土師器	坏	40%	14.0	8.8	4.2	ヘラケズリ、底部：静止糸切り後周囲をヘラケズリ		橙色		良	８世紀後半	試№１
37	3	４号竪穴建物	ハ65、133	土師器	坏	40%	14.0	10.0	3.9	ヘラケズリ	ミガキ	橙色		良	８世紀後半	
37	4	４号竪穴建物	ハ315、335、339、340、345、348、349	土師器	坏	60%	13.6	8.2	3.7	ヘラケズリ、底部：全面ヘラケズリ		橙色	赤色・黒色粒子、雲母	良	８世紀後半	
37	5	４号竪穴建物	ハ327、一括	土師器	坏	口縁～底部	13.0	10.4	3.8	ヘラケズリ		橙色		良	８世紀後半	摩耗して不明瞭
37	6	４号竪穴建物	ハ328	土師器	坏	口縁～底部	12.4	10.0	3.3	ヘラケズリ、	ミガキ	橙色		良	８世紀後半	
37	7	４号竪穴建物	ハ19、20	土師器	甕	坏				ミガキ、ヘラケズリ	ミガキ	赤褐色		良	８世紀後半	
37	8	４号竪穴建物	ハ272	土師器	坏	口縁～体部	10.8				ミガキ	橙色		良	８世紀後半	外面の摩耗が激しい
37	9	４号竪穴建物	ハ28、一括	土師器	坏	体部		6.4		ヘラケズリ	ミガキ	褐色		良	８世紀後半	試№３
37	10	４号竪穴建物	ハ52、257	土師器	坏	底部				ヘラケズリ	ミガキ	橙色		良	８世紀後半	
37	11	４号竪穴建物	ハ90、96、124	土師器	高台坏	体～底部		9.4		ミガキ、底部：削り出し高台	ミガキ	橙色		良	８世紀後半	試№２
37	12	４号竪穴建物	ハ337、一括	土師器	坏	体～底部		7.6		ヘラケズリ	ミガキ	にぶい橙色		良	８世紀後半	
37	13	４号竪穴建物	ハ４、311	土師器	坏	底部		8.2		ヘラケズリ、底部：静止糸切り後周囲をヘラケズリ	ミガキ	明赤褐色		良	８世紀後半	
37	14	４号竪穴建物	ハ331	土師器	蓋	つまみ部						明赤褐色		良	８世紀後半	試№４
38	15	４号竪穴建物	ハ153、352、354、一括	土師器	甕	口縁～体部	25.0			ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
38	16	４号竪穴建物	ハ43、91、95、364、一括	土師器	甕	口縁～体部	24.8			ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型。試№５
38	17	４号竪穴建物	ハ102、184、185、186、190	土師器	甕	口縁部	25.3			ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
38	18	４号竪穴建物	ハ351、362、377、395	土師器	甕	口縁～体部	20.8			ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	石英、雲母、黒色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№24
38	19	４号竪穴建物	ハ350	土師器	小甕	40%	10.1	6.5	8.2	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	明赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	試№25
38	20	４号竪穴建物	ハ393	土師器	小甕	口縁部				ナデ	ナデ	褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	19と同一個体
38	21	４号竪穴建物	ハ217、218	土師器	甕	口縁部	16.0			ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英	良	８世紀後半	試№27
38	22	４号竪穴建物	ハ157	土師器	甕	口縁部	14.0			ハケ	ハケ	褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型。試№28
38	23	４号竪穴建物	ハ264	土師器	甕	口縁部	23.0			ナデ	ナデ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
38	24	４号竪穴建物	ハ216	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
38	25	４号竪穴建物	ハ199	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	褐色	緻密、白色粒子	良	８世紀後半	駿東型。試№17
38	26	４号竪穴建物	ハ71	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
39	27	４号竪穴建物	ハ55、179、307、334、一括	土師器	甕	口縁～体部				ハケ	ハケ	赤褐色	石英	良	８世紀後半	15と同一個体か試№7
39	28	４号竪穴建物	ハ138、158	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
39	29	４号竪穴建物	ハ160	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	白色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№20
39																
39	30	４号竪穴建物	ハ128、一括	土師器	甕	口縁部	28.0			頸部：ミガキ		橙色	緻密	良	８世紀後半	駿東型。試№８
39	31	４号竪穴建物	ハ152	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	外：にぶい橙色 内：暗灰黄色	赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№26
39	32	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部	21.0			頸部：ミガキ	ナデ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
39	33	４号竪穴建物	ハ383、384	土師器	甕	口縁部				ハケ、ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐色	にぶい赤褐色砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№13
39	34	４号竪穴建物	ハ64	土師器	甕	口縁部	27.6			ヘラナデ	ヘラナデ	褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№６
39	35	４号竪穴建物	ハ46、269、289	土師器	甕	口縁部	22.0			ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙色	明赤・黒褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№10
39	36	４号竪穴建物	ハ109	土師器	甕	口縁部	26.4				ヘラナデ	にぶい赤褐色	明赤・黒褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
39	37	４号竪穴建物	ハ58、112	土師器	甕	口縁部	23.6			ヘラケズリ	ヘラナデ	暗褐色	４mm以下のにぶい赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
39	38	４号竪穴建物	ハ274	土師器	甕	口縁部	23.2			ナデ	ヘラナデ	褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№14
39	39	４号竪穴建物	ハ325	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	暗赤灰色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試№19

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
39	40	４号竪穴建物	ハ 320	土師器	甕	口縁部	23.6			ヘラナデ	ヘラナデ	灰褐色	１mm ほどの暗・褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 11
39	41	４号竪穴建物	ハ 241	土師器	甕	口縁部				ナデ	ヘラナデ	にぶい橙色	暗赤褐色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
39	42	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	灰褐色	白色・赤色・黒色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	43	４号竪穴建物	ハ 162、383	土師器	甕	口縁部	26.4			ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 9
40	44	４号竪穴建物	ハ 209	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリ	ナデ	褐灰色	５mm 以下のにぶい黄橙色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	45	４号竪穴建物	ハ 114、156	土師器	甕	口縁部	26.4			ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙色	５mm 以下の灰伯・赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	46	４号竪穴建物	ハ 213	土師器	甕	口縁部				ナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	47	４号竪穴建物	ハ 282	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリ	ナデ	赤褐色	暗赤褐色・暗褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	48	４号竪穴建物	ハ 61	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	暗褐色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	49	４号竪穴建物	ハ 10	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	明赤褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	50	４号竪穴建物	ハ 358	土師器	甕	口縁部				ナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	51	４号竪穴建物	ハ 13	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	灰褐色	白色・暗褐色の粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 15
40	52	４号竪穴建物	ハ 26	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリ	ナデ	にぶい赤褐色	３mm 以下の橙色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	53	４号竪穴建物	ハ 201	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい橙色	３mm 以下の灰白色・赤色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	54	４号竪穴建物	ハ 262	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	６mm 以下の暗赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 16
40	55	４号竪穴建物	ハ 86	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	56	４号竪穴建物	ハ 208	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	灰褐色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 12
40	57	４号竪穴建物	ハ 240	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	石英、長石	良	８世紀後半	試No. 29
40	58	４号竪穴建物	ハ 117	土師器	甕	口縁部				縦方向のハケか	ヘラナデ	にぶい褐色	３mm 以下の赤色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 18
40	59	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
40	60	４号竪穴建物	ハ 56	土師器	甕	頸部				ミガキ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
40	61	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	暗赤褐色	灰白色・暗赤褐色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
40	62	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	暗赤褐色粗砂、白色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
41	63	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	頸部				ナデ	指頭痕	灰褐色	４mm 以下の赤～暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 21
41	64	４号竪穴建物	ハ 97	土師器	甕	頸部				ナデ	ナデ	褐色	雲母、暗赤褐色・暗褐色砂礫	良	８世紀後半	
41	65	４号竪穴建物	ハ 245	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	66	４号竪穴建物	ハ 255	土師器	甕	頸部				ハケ、ミガキ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色粗砂	良	８世紀後半	試No. 30
41	67	４号竪穴建物	ハ 121	土師器	甕	頸部				ヘラナデ、工具痕	ナデ	にぶい褐色	赤褐色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
41	68	４号竪穴建物	ハ 308	土師器	甕	頸部				ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密、微量の石英	良	８世紀後半	駿東型
41	69	４号竪穴建物	一括	土師器	甕	体部				ハケ、ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	70	４号竪穴建物	ハ 210、一括	土師器	甕	頸部				ハケ、頸部：ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	71	４号竪穴建物	ハ 182、191	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ	ハケ	黒褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	72	４号竪穴建物	ハ 33、381	土師器	甕	口縁部				ミガキ、ハケ	ハケ	黒褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	73	４号竪穴建物	ハ 17、23、83、一括	土師器	甕	体部				ミガキ	ハケ	にぶい赤褐色	石英ごく少量	良	８世紀後半	駿東型。試No. 22
41	74	４号竪穴建物	ハ 205、226、324	土師器	甕	体部				ハケ	ハケ	褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
41	75	４号竪穴建物	ハ 91	土師器	甕	体部				ハケメ	ヘラナデ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
41	76	４号竪穴建物	ハ 173	土師器	甕	体部				ヘラナデ（縦方向）	ヘラナデ	にぶい橙色	３mm 以下の暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
41	77	４号竪穴建物	ハ 175	土師器	甕	体部				ナデ	ナデ	灰褐色	３mm 以下の赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系試 No. 23
42	78	４号竪穴建物	ハ 108、120、125、394	土師器	甕	体部				ハケ、ミガキ	ヘラナデ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、褐色粗砂	良	８世紀後半	
42	79	４号竪穴建物	ハ 299、301、367	土師器	甕	体部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	15 と同一個体か
42	80	４号竪穴建物	ハ 373	土師器	甕	体部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
42	81	４号竪穴建物	ハ 57、77、78	土師器	甕	体部				ヘラケズリ	ヘラナデ	灰褐色	４mm 以下の赤色・暗赤色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
42	82	４号竪穴建物	ハ 98	土師器	甕	体部				ヘラケズリ	ヘラナデ	灰褐色	３mm 以下の暗赤色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	83	４号竪穴建物	ハ 168	土師器	甕	体部				ヘラケズリ、	ヘラナデ	にぶい褐色	４mm 以下の明赤褐色・暗赤褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	84	４号竪穴建物	ハ 193	土師器	甕	体部				ナデ	ナデ、輪積痕	にぶい橙色	白色・赤色粒子	良	８世紀後半	堀之内原・相模系断面（輪積部分）に刻み
42	85	４号竪穴建物	ハ 238	土師器	甕	底部				ナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	赤色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	86	４号竪穴建物	ハ 292	土師器	甕	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	灰黄褐色	長石、雲母、５mm 以下のにぶい赤橙色・暗赤色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	87	４号竪穴建物	ハ 166	土師器	甕	底部				ヘラケズリ、底部：木葉痕	ヘラナデ	黒褐色	３mm 以下の赤褐色礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	88	４号竪穴建物	ハ 145、316	土師器	甕	底部		9.3		ヘラケズリ、底部：木葉痕	ナデ	灰黄褐色	７mm 以下の赤褐色・黒褐色砂礫	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
42	89	４号竪穴建物	ハ 167、171、285、313、332、一括	土師器	甕	底部		6.4		ハケ、底部：木葉痕	ハケ、指頭痕	灰黄褐色	石英ごく少量	良	８世紀後半	駿東型か
42	90	４号竪穴建物	ハ 317、330	土師器	甕	底部		7.6		ヘラナデ	ハケ	黒褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
43	91	４号竪穴建物	ス 13	須恵器	坏	20%	15.0	8.4	3.8	底部：回転ヘラケズリ		灰色	白色粒子	良	８世紀後半	
43	92	４号竪穴建物	ス４、一括	須恵器	坏	口縁部	13.6					灰色		良	８世紀後半	
43	93	４号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						黄灰色		良	８世紀後半	
43	94	４号竪穴建物	ス 15	須恵器	坏	口縁部						黄灰色		良	８世紀後半	
43	95	４号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						黄灰色		良	８世紀後半	
43	96	４号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						灰黄色		良	８世紀後半	
43	97	４号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						褐灰色		良	８世紀後半	
43	98	４号竪穴建物	ス５	須恵器	壺か	底部		7.0		底部：回転糸切り		黄灰色		良	８世紀後半	
43	99	４号竪穴建物	ス 12	須恵器	坏	底部		5.0		底部：回転ヘラケズリ		灰白色		良	８世紀後半	助宗窯か
43	100	４号竪穴建物	ス７	須恵器	蓋	破片						灰オリーブ色		良	８世紀後半	
43	101	４号竪穴建物	ス２	須恵器	蓋	つまみ部				上面回転ヘラケズリ		黄灰色		良	８世紀後半	
43	102	４号竪穴建物	ス３	須恵器	蓋	縁部						暗灰黄色		良	８世紀後半	
43	103	４号竪穴建物	ス６	須恵器	壺・甕	体部				タタキ目	当具痕	灰色		良	８世紀後半	
43	104	４号竪穴建物	ス１	須恵器	甕	体部				タタキ目	当具痕、ヘラケズリ	灰黄色		良	８世紀後半	
43	105	４号竪穴建物	ス８	須恵器	甕	体部				タタキ目	当具痕	黄灰色		良	８世紀後半	内・外面自然釉
44	106	４号竪穴建物	ス 11	須恵器	甕	体部				タタキ目	当具痕、ヘラナデ	暗赤褐色		良	８世紀後半	内・外面自然釉
44	107	４号竪穴建物	ハ 35	土師器	羽口	先端破片						黒褐色	石英、長石	良	８世紀後半	鉄付着
44	1	５号竪穴建物	一括	土師器	坏	底部		10.2		ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ミガキ	橙色		良	８世紀後半	
44	2	５号竪穴建物	ハ 12	土師器	坏	底部		7.2		ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ロクロ（木口痕）	明赤褐色		良	８世紀後半	
44	3	５号竪穴建物	一括、サンタンシクツ５トレ	土師器	甕	口縁～体部	17.0			ハケ	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
44	4	５号竪穴建物	サンタンシクツ５トレ	土師器	甕	口縁～体部	23.0			ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
44	5	５号竪穴建物	サンタンシクツ５トレ	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	褐色	石英、長石、輝石	良	８世紀後半	
44	6	５号竪穴建物	ハ 16	土師器	甕	口縁部	17.0			ハケ	ナデ、指頭痕	明赤褐色	緻密、微量の石英	良	８世紀後半	駿東型
44	7	５号竪穴建物	サンタンシクツ５トレ	土師器	甕	口縁～体部				ハケ	ナデ、指頭痕	褐色	石英、雲母	良	８世紀後半	
44	8	５号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ハケ	ナデ、指頭痕	赤褐色	石英、雲母	良	８世紀後半	
44	9	５号竪穴建物	ハ 29	土師器	甕	頸部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
44	10	５号竪穴建物	ハ 13	土師器	甕	体部				ハケ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
44	11	５号竪穴建物	サンタンシクツ５トレ	土師器	甕	底部				ナデ	ナデ	外：オリーブ黒色 内：にぶい橙色	暗赤褐色・灰白色粗砂	良	８世紀後半	堀之内原・相模系
45	12	５号竪穴建物	ハ 22、23、26、27	土師器	甕	頸～体部				ハケ	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、雲母、輝石	良	８世紀後半	
45	13	５号竪穴建物	一括	土師器	甕	底部				底部：木葉痕	ナデ	赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
45	14	５号竪穴建物	ス１	須恵器	坏	底部						黄灰色		良	８世紀後半	
45	1	６号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部				ヘラケズリ	暗文	橙色		良	８世紀後半	
45	2	６号竪穴建物	ハ 30	土師器	坏	口縁部						明赤褐色		良	８世紀後半	やや摩耗
45	3	６号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部						明赤褐色		良	８世紀後半	
45	4	６号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部						明赤褐色		良	８世紀後半	

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
45	5	6号竪穴建物	ハ15	土師器	坏	底部		7.4		ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり）	明赤褐色		良	8世紀後半	
45	6	6号竪穴建物	ハ27	土師器	坏	体～底部		6.0		ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり）	明赤褐色		良	8世紀後半	
45	7	6号竪穴建物	ハ33	土師器	坏	底部		6.0		回転ヘラケズリ	暗文（みこみ部なし）	明赤褐色		良	8世紀後半	
45	8	6号竪穴建物	ハ12	土師器	坏	底部		6.0		回転ヘラケズリ、底部：回転ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり）	にぶい褐色		良	8世紀後半	
45	9	6号竪穴建物	ハ22	土師器	坏	底部				ヘラケズリ		明赤褐色		良	8世紀後半	
45	10	6号竪穴建物	一括	土師器	坏	底部				ヘラケズリ	暗文	にぶい赤褐色		良	8世紀後半	
45	11	6号竪穴建物	一括	土師器	坏	底部				ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり）	明赤褐色		良	8世紀後半	
45	12	6号竪穴建物	ハ31	土師器	坏	底部					暗文（みこみ部なし）	明赤褐色		良	8世紀後半	
45	13	6号竪穴建物	ハ45、46	土師器	甕	口縁～体部	24.0			ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	8世紀後半	
45	14	6号竪穴建物	ハ9	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ、ハケ	ナデ	黒褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
45	15	6号竪穴建物	ハ49	土師器	甕	頸部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	16	6号竪穴建物	ハ5、43	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	明褐灰色	灰赤色の砂礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
46	17	6号竪穴建物	ハ2	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	灰褐色		良	8世紀後半	
46	18	6号竪穴建物	ハ26	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	石英、雲母	良	8世紀後半	
46	19	6号竪穴建物	ハ24	土師器	甕	頸部				ハケ、ナデ	ハケ	褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	20	6号竪穴建物	ハ41	土師器	甕	頸部				ナデ	ナデ	黒褐色	石英、暗青灰色粗砂	良	8世紀後半	
46	21	6号竪穴建物	ハ23	土師器	甕	体部				ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄褐色	3mm以下の赤褐色砂礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
46	22	6号竪穴建物	ハ51	土師器	甕	底部		8.0		ハケ、底部：木葉痕	ハケ	褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	8世紀後半	
46	23	6号竪穴建物	ハ20、42	土師器	甕	体部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	3mm以下の灰白色・極暗赤褐色砂礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
46	24	6号竪穴建物	ハ44	土師器	甕	体部				ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	5mm以下の赤褐色・灰白色砂礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
46	25	6号竪穴建物	ハ39	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	26	6号竪穴建物	ハ17	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい黄褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	27	6号竪穴建物	ハ36	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	28	6号竪穴建物	ハ14	土師器	甕	底部				ハケ、ナデ、指頭痕、底部：木葉痕	ナデ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、輝石	良	8世紀後半	
46	29	6号竪穴建物	ハ1	土師器	甕	底部					ハケ	にぶい黄褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
46	30	6号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						灰色		良	8世紀後半	
46	31	6号竪穴建物	ス2	須恵器	坏	口縁部						褐灰色		良	8世紀後半	
46	32	6号竪穴建物	ス1	須恵器	坏	口縁部						黄灰色		良	8世紀後半	
46	33	6号竪穴建物	ス1	須恵器	壺	体部				タタキ目	当具痕、ヘラナデ	灰色		良	8世紀後半	
46	34	6号竪穴建物	一括	縄文土器	深鉢	口縁部				刺突		にぶい赤褐色	赤色・灰白色の砂礫	良	縄文時代『前期末	
46	1	7号竪穴建物	ハ30	土師器	坏	口縁部				ミガキ	暗文	明赤褐色		良	8世紀後半	
46	2	7号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部				ミガキ、ヘラケズリ	暗文	明赤褐色		良	8世紀後半	
46	3	7号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部				ヘラケズリ・ミガキか	暗文	明赤褐色		良	8世紀後半	
46	4	7号竪穴建物	一括（シクツ4トレ）	土師器	坏	底部		8.9		ヘラケズリ		明赤褐色		良	8世紀後半	内面剥離
47	5	7号竪穴建物	ハ55	土師器	坏	70%	12.4	7.5	4.7	ヘラケズリ、ミガキ、底部：回転糸切り後周囲をヘラケズリ	ミガキ・暗文	明赤褐色		良	8世紀後半	
47	6	7号竪穴建物	ハ24、25、34、36、39、45、48	土師器	甕	口縁部	24.0			ハケ、頸部：斜め方向のナデ	ハケ	明赤褐色	緻密	良	8世紀後半	駿東型
47	7	7号竪穴建物	ハ6、10、53	土師器	甕	口縁部	25.0			ヘラナデ	ヘラナデ	明褐色	緻密、石英	良	8世紀後半	駿東型
47	8	7号竪穴建物	ハ14、27	土師器	甕	口縁～体部	19.0			ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、雲母	良	8世紀後半	
47	9	7号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	灰褐色	4mm以下の赤色・明赤灰色砂礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
47	10	7号竪穴建物	ハ16、17	土師器	甕	口縁～体部				ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	
47	11	7号竪穴建物	ハ37、46	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ	ハケ	橙色	緻密	良	8世紀後半	駿東型
47	12	7号竪穴建物	ハ11、12	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ	ハケ、接合部：ナデ	褐色	緻密	良	8世紀後半	駿東型
47	13	7号竪穴建物	ハ　4、20、29、31、33、38、41	土師器	甕	体部				ハケ、接合部：ナデ	ハケ	にぶい赤褐色	緻密	良	8世紀後半	駿東型
47	14	7号竪穴建物	ハ15、26、28	土師器	甕	底部		8.4		ハケ、指頭痕、底部：木葉痕	ハケ	褐色	石英、長石、雲母	良	8世紀後半	

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
48	15	７号竪穴建物	ス２	須恵器	甕	体部				タタキ目	当具痕、ヘラケズリ	灰色		良	８世紀後半	
48	16	７号竪穴建物	ス１	須恵器	甕	体部				タタキ目		灰色		良	８世紀後半	
48	17	７号竪穴建物	ス３	須恵器	壺	体部				タタキ目	当具痕、ヘラケズリ	灰色		良	８世紀後半	
48	1	８号竪穴建物	ハ25	土師器	坏	80%	10.4	5.2	4.7	ヘラケズリ		赤褐色	赤色粒子、雲母	良	９世紀前半	底部に刻書
48	2	８号竪穴建物	一括	土師器	坏	口縁部					暗文	外：明赤褐色 内：黒色		良	９世紀前半	黒色（内黒）土器
48	3	８号竪穴建物	ハ 12、15、21、34、53、55、56、59、60、65、69、70、75	土師器	甕	口縁～体部	24.0			ハケ	ハケ、指頭痕	褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	９世紀前半	
48	4	８号竪穴建物	ハ29、32、35、58、62、63	土師器	甕	口縁～体部	33.7			ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	９世紀前半	
48	5	８号竪穴建物	ハ21、23	土師器	甕	口縁～体部	24.0			ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	９世紀前半	
48	6	８号竪穴建物	ハ 22、33、36、39、40、41、60	土師器	小甕	30%	13.2	7.0	11.8	ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	９世紀前半	
49	7	８号竪穴建物	ハ14、61、73、74、80	土師器	甕	口縁～体部				ハケ、口縁部：ナデ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、雲母	良	９世紀前半	
49	1	９号竪穴建物	ハ22	土師器	坏	口縁～体部			5.8	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	暗文（みこみ部な）	赤褐色		良	８世紀後半	
49	2	９号竪穴建物	ハ43	土師器	坏	口縁部	11.0			ヘラケズリ		明褐色	赤色・暗赤色粒子	良	８世紀後半	
49	3	９号竪穴建物	ハ41	土師器	坏	体～底部		6.6		ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり）	にぶい赤褐色		良	８世紀後半	
49	4	９号竪穴建物	ハ 32、50 ～ 52、57、58、60 ～ 65、76、80 ～ 89、92 ～ 95、98、99、102	土師器	坏	60%	25.0	8.0	34.4	ハケ、底部：木葉痕	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
49	5	９号竪穴建物	ハ131	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
49	6	９号竪穴建物	一括	土師器	甕	口縁部	13.0			ハケ	ハケ	暗赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
49	7	９号竪穴建物	ハ142	土師器	甕	頸部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
49	8	９号竪穴建物	ハ 53 ～ 56、69 ～ 75、77 ～ 79、90、91	土師器	甕	体～底部		6.0		ハケメ、接合部：ナデ、底部：木葉痕	ハケ	褐色	緻密	良	８世紀後半	駿東型
50	9	９号竪穴建物	ハ138、140	土師器	甕	頸部				ハケ	ハケ	褐色	石英、長石、雲母	良	８世紀後半	
50	10	９号竪穴建物	ハ125	土師器	甕	頸部				ハケ	粗いハケメ（ヘラナデか）	褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
50	11	９号竪穴建物	ハ６、18	土師器	甕	底部		10.0		ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
50	12	９号竪穴建物	ハ15、16、37	土師器	甕	底部		8.2		ハケ、指頭痕、底部：木葉痕、工具痕	ハケ、指頭痕	灰黄褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	８世紀後半	
50	13	９号竪穴建物	ス１	須恵器	坏	口縁～底部			3.7	底部：回転糸切り		灰色		良	８世紀後半	
50	14	９号竪穴建物	ス２～６	須恵器	蓋	80%	17.0		4.5	上部回転ヘラケズリ		灰色		良	８世紀後半	
50	15	９号竪穴建物	ハ67	縄文土器	深鉢	体部				３条の弧状沈線		褐色	石英、雲母	良	縄文時代後期中葉	
50	1	10号竪穴建物	ハ49	土師器	坏	60%	11.0	6.0	3.8	ヘラケズリ、底部：回転糸切り後ヘラケズリ	暗文（みこみ部なし）	明赤褐色		良	９世紀前半	
50	2	10号竪穴建物		土師器	皿	底部		5.5		回転ヘラケズリ、底部：回転ヘラケズリ	渦巻状暗文	明赤褐色		良	９世紀前半	
50	3	10号竪穴建物		土師器	甕	口縁部	26.0			ハケ	ハケ、指頭痕	褐色	石英、雲母	良	９世紀前半	
50	4	10号竪穴建物		土師器	甕	底部		7.2		ハケ、底部：木葉痕	指頭痕	褐色	石英、雲母	良	９世紀前半	
51	1	11号竪穴建物	ハ14、110	土師器	坏	60%	11.0	4.4	4.3	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ		明赤褐色	３mm 以下の暗赤色砂礫	良	９世紀前半	内面摩耗
51	2	11号竪穴建物	ハ35	土師器	坏	口縁部					暗文	橙色		良	９世紀前半	
51	3	11号竪穴建物	ハ19	土師器	坏	口縁部	11.0				暗文	明赤褐色		良	９世紀前半	摩耗
51	4	11号竪穴建物	ハ５	土師器	坏	体部				ヘラケズリ	暗文	明赤褐色		良	９世紀前半	
51	5	11号竪穴建物	ハ26	土師器	坏	底部				ヘラケズリ	暗文（みこみ部なし９	明赤褐色		良	９世紀前半	
51	6	11号竪穴建物	ハ21	土師器	坏	底部				ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	暗文（みこみ部あり９	明赤褐色		良	９世紀前半	
51	7	11号竪穴建物	ハ99	土師器	甕	口縁～体部	14.0			ハケ	ヘラナデ	にぶい褐色	緻密	良	９世紀前半	駿東型
51	8	11号竪穴建物	ハ71、80、96	土師器	甕	口縁部	26.4			ハケ	ハケ	にぶい褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	９世紀前半	
51	9	11号竪穴建物	ハ９、24	土師器	甕	口縁部	26.0			ハケ	ヘラナデ	褐色	石英、雲母、輝石	良	９世紀前半	
51	10	11号竪穴建物	ハ97	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	明赤褐色	石英、雲母、輝石	良	９世紀前半	
51	11	11号竪穴建物	ハ59	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	９世紀前半	
51	12	11号竪穴建物	ハ61	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	褐色	石英、雲母、輝石	良	９世紀前半	

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
51	13	11 号竪穴建物	ハ 88	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	14	11 号竪穴建物	ハ 53	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	15	11 号竪穴建物	ハ 33	土師器	甕	口縁部				ハケ	ハケ	にぶい赤褐色	石英、雲母	良	9 世紀前半	
51	16	11 号竪穴建物	ハ 89、94、98	土師器	甕	頸～体部				ハケ	ハケ、指頭痕	暗赤褐色	石英、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	17	11 号竪穴建物	ハ 40、52	土師器	甕	底部				ハケ	ハケ	にぶい褐色	石英、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	18	11 号竪穴建物	ハ 11	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	19	11 号竪穴建物	ハ 46	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい黄褐色	石英、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
51	20	11 号竪穴建物	ハ 50	土師器	甕	底部				ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	9 世紀前半	やや摩耗
51	21	11 号竪穴建物	ハ 75	土師器	甕	底部				ハケ、底部：木葉痕	ハケ	にぶい褐色	石英、雲母、輝石	良	9 世紀前半	
52	22	11 号竪穴建物	一括	須恵器	坏	口縁部						暗灰黄色		良	9 世紀前半	
52	23	11 号竪穴建物	ス 1、3	須恵器	甕	体部				タタキ目	ヘラナデ	黒褐色		良	9 世紀前半	内・外面自然釉薬
52	24	11 号竪穴建物	ス 5	須恵器	甕	底部				建て期目	当具痕、ヘラナデ	灰色		良	9 世紀前半	
52	25	11 号竪穴建物	ス 4	須恵器	甕	底部		16.6		タタキ目、底部：周辺ヘラナデ	当具痕	黒褐色		良	9 世紀前半	内・外面自然釉薬
52	1	12 号竪穴建物	ハ 11、17、19、21、30 ～ 32、38、40、41、43、44、48 ～ 52、57 ～ 59	土師器	甕	口縁～体部	25.0			ハケ、頸部：ミガキ、接合部；ナデ	ハケ、指頭痕	明赤褐色	緻密、長石	良	8 世紀後半	駿東型
52	2	12 号竪穴建物	ハ 37	土師器	甕	体部				ヘラナデ	ヘラナデ、指頭痕	褐色	5 mm 以下の灰白色・赤褐色礫	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
52	3	12 号竪穴建物	ハ 1、2	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい褐色	5 mm 以下の暗赤褐色・黒褐色礫	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
53	1	13 号竪穴建物	ハ 13	土師器	坏	80%	9.0	6.8	4.7	ミガキ、ヘラケズリ	ミガキ・暗文	明赤褐色		良	8 世紀後半	
53	2	13 号竪穴建物	ハ　9、11、18、30、32、33、35、37、38、40、44 ～ 46、48 ～ 53、55、56	土師器	甕	40%	24.0	10.2	37.3	ハケ	ハケ、指頭痕	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	8 世紀後半	
53	3	13 号竪穴建物	ハ 16、47	土師器	甕	体部				ハケ	ハケ	明褐色	緻密	良	8 世紀後半	駿東型
53	1	1 号掘立柱建物	1 ピット ハ 1	土師器	坏	底部				ヘラケズリ	ミガキ	明赤褐色		良	8 世紀後半	やや摩耗
53	2	1 号掘立柱建物	14 ピット ハ 1	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	赤褐色・暗赤褐色粗砂	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
53	1	2 号掘立柱建物	2 ピット ハ 2	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐色	緻密	良	8 世紀後半	駿東型
53	2	2 号掘立柱建物	3 ピット 一括	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	暗赤褐色粗砂	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
53	1	3 号掘立柱建物	5 ピット ハ 2	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ		にぶい赤褐色	石英、長石	良	8 世紀後半	
53	1	4 号掘立柱建物	1 ピット ハ 1	石製品		破片						灰黄褐色			8 世紀後半か	溶岩礫を加工した筒状の破片
53	1	1 号溝状遺構	ハ 4	土師器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	4 mm 以下の暗赤褐色砂礫	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
53	2	1 号溝状遺構	カ	灰釉陶器	碗	体～底部		7.0		回転ヘラケズリ	施釉刷毛塗い	灰黄色		良	9 世紀中頃	
53	3	1 号溝状遺構	水西カベ	土師器	高台付	体～底部		8.0		底部：削り出し高台		橙色		良	8 世紀後半か	摩耗。旧河川部出土
54	1	7 号溝状遺構	ハ 4	土師器	甕	口縁部				ヘラナデ、頸部：ミガキ	ヘラナデ	明赤褐色	緻密	良	8 世紀後半	駿東型
54	2	7 号溝状遺構	ハ 8	土師器	甕	口縁部				ナデ	ハケ、ナデ	にぶい赤褐色	石英、長石、雲母、輝石	良	8 世紀後半か	
54	3	7 号溝状遺構	ス 1	須恵器	壺	底部				底部：回転糸切り		灰色		良	8 世紀後半	
54	1	11 号土坑	ハ 1 ～ 6、8、10 ～ 30、33 ～ 39、41、43 ～ 53、55	土師器	甕	口縁～体部	25.6			ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙色	4 mm 以下の灰白色・暗赤褐色砂礫	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
54	2	11 号土坑	ハ 54	土師器	甕	底部					ヘラナデ	外：褐灰色 内：にぶい褐色	3 mm 以下の灰白色・暗赤褐色砂礫	良	8 世紀後半	1 と同一個体
54	1	23 号土坑	ハ 2	土師器	甕	底部		4.8		ナデ	ヘラナデ	橙色	緻密、石英、雲母	良	8 世紀後半	駿東系
54	1	24 号土坑	ハ 6、7	土師器	坏	口縁～体部	13.0			ミガキ (縦方向)、回転ヘラケズリ	ミガキ	橙色		良	8 世紀後半	
54	2	24 号土坑	ハ 2	土師器	甕	底部		9.0		底部：木葉痕	ヘラナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	2 mm 以下の灰白色・暗赤褐色粗砂	良	8 世紀後半	堀之内原・相模系
54	1	79・115 号土坑	セ 1、セ 1	青磁	碗	口縁部				鎬連弁文		オリーブ黄色		良	13 ～ 14 世紀	
54	1	遺構外出土遺物	表採一括	土師器	坏	口縁～底部	11.4	5.0	4.1	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ		明赤褐色		良	10 世紀前半	外面体部に墨書「人」
54	2	遺構外出土遺物	表ハ 121	土師器	皿	60%	13.0	5.0	2.3	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ		明赤褐色		良	10 世紀前半	外面底部から体部にかけて墨書「長」

図	番号	出土地点	注記番号	種別	器種	部位・残存率	法量（cm）			整形・調整技法（外面）	整形・調整技法（内面）	色　調	胎　土	焼成	時　期	備　考
							口径	底径	器高							
54	3	遺構外出土遺物	表169	土師器	皿	底部				底部：ヘラケズリ		明赤褐色		良	10世紀前半か	底部に墨書
54	4	遺構外出土遺物	表6	土師器	坏	体～底部		7.2		ミガキ、ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ミガキ・暗文（みこみ部あり）	明赤褐色		良	8世紀後半	
54	5	遺構外出土遺物	表ハ296	土師器	坏	口縁～体部	12.6			ヘラケズリ		橙色		良	10世紀前半	
55	6	遺構外出土遺物	表ハ459	土師器	皿	40%	13.0	3.0	2.5	ヘラケズリ、底部：回転糸切り後周辺をヘラケズリ		明赤褐色		良	10世紀後半	
55	7	遺構外出土遺物	表ハ279	土師器	皿	30%	13.0	4.0	2.5	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ		明赤褐色		良	10世紀後半	
55	8	遺構外出土遺物	表ハ117～119	土師器	甕	口縁部				ヘラケズリ	ナデ	にぶい赤褐色	4mm以下の灰白色・暗赤色礫	良	8世紀後半	堀之内原・相模系
55	9	遺構外出土遺物	表ハ62	土師器	羽釜	口縁部				ナデ、ハケ	ヘラナデ	にぶい褐色	石英、雲母	良	10世紀前半	
55	10	遺構外出土遺物	表38、43、46～48、59	須恵器	甕	頸～体部				タタキ目	当具痕、ヘラナデ	暗灰黄色		良	8世紀後半か	
55	11	遺構外出土遺物	表カ2、3	灰釉陶器	壺	口縁部						褐灰色		良	9～10世紀	

第４表　金属製品観察表

図	番号	出土地点	注記番号	種類	材質	部位	寸法（㎝）			重量（ｇ）	備考
							長さ	幅	厚さ		
56	1	１号竪穴建物	キ１	手鎌	鉄		9.58	1.8	0.57	8.6	片側端部に孔。覆土上層から出土。
56	2	２号竪穴建物	キ１	刀子	鉄	刃部～茎部	3.26/6.51	1.22/1.1	0.34/0.53	3.4/5.3	覆土上層から出土。
56	3	４号竪穴建物	キ１	刀子	鉄	茎部	5.93	1.0	0.55	5.0	覆土上層から出土。
56	4	４号竪穴建物	キ２	手鎌	鉄		9.06	1.72	0.3	8.6	片側端部に孔。覆土上層から出土。
56	5	４号竪穴建物	キ３	刀子	鉄	茎部	7.34	1.1	0.51	6.1	刃部と茎部の境目に柄の留め具？が残る。覆土中から出土。
56	6	４号竪穴建物	キ４	刀子	鉄	茎部	2.81	0.75	0.37	1.2	覆土上層から出土。
56	7	４号竪穴建物	キ５	刀子	鉄	茎部	3.93	0.80	0.33	3.1	覆土中から出土。
56	8	６号竪穴建物	キ１	刀子	鉄	茎部	5.32	0.78	0.38	3.7	覆土中から出土。
56	9	10 号竪穴建物	キ１	棒状製品	鉄		5.43	0.51	0.50	2.4	覆土中から出土。
56	10	遺構外	表キ１	刀子	鉄	刃部	3.65	1.43	0.28	3.8	
56	11	遺構外	表キ２	棒状製品	鉄		2.51	0.48	0.35	0.5	
56	12	遺構外	表キ３	棒状製品	鉄		2.08	1.02	0.99	2.7	
56	13	遺構外	表キ４	釘	鉄		11.4	0.76	0.81	8.9	
56	14	遺構外	表キ５	鏨	鉄	刃部～茎部	7.8	2.52	0.75	14.3	刃部と茎部の境目に柄の留め具？が残る。
56	15	遺構外	表採 54	刀子	鉄	刃部～茎部	7.05	1.0	0.43	4.7	
56	16	遺構外	表採 172	棒状・鉤状製品	鉄		2.03	0.81	0.50	0.3	

第４章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第１節　胎土分析

はじめに

三ノ側遺跡は、御坂山地東部を流れる桂川右岸に形成された段丘上に位置する。本遺跡では、発掘調査の結果、奈良～平安時代とされる竪穴建物跡等の遺構やそれらに伴う遺物が多数確認されている。その中でも、４号竪穴建物跡からは、甕、坏及び蓋等の土師器の一括資料が出土し、器型や胎土の特徴（色調、整形、質感）等から、甲府盆地および都留郡西部（堀之内原タイプ）と静岡地域（駿東）さらには神奈川地域（相模）等の産地と推定される土師器が含まれる可能性のあることが考えられている。

本報告では、上記した４号竪穴建物跡より出土した土師器の流通や製作事情に関わる資料の作成を目的として、土師器の材質（胎土）の特性を岩石学的な手法により把握し、既存の地質情報等との比較により、検討を行った。

１．試料

試料は、三ノ側遺跡４号竪穴建物跡から出土した土師器 30 点（№.１～30）と、同住居跡で確認されたカマドの構築材２点（№.31、32）の計 32 点である。このうち、土師器試料については、担当者による観察により、分析に供された試料の特徴や推定産地が記されている（表 5）。カマド構築材については、分析前の観察により、以下の特徴が把握された。№.31 は、にぶい黄橙色を呈する粘土質シルトの基質中に、径 1.5 ～ 8.0mm 程の粒径の淘汰の不良な灰白色を呈する角礫～亜角礫状のシルト塊（風化岩片か）が多量に含まれる。№.32 は、灰黄色を呈するシルト質粘土の塊であり、径 8.0mm 程の灰白色を呈する斑状部分が認められるが、№.31 の灰白色シルト塊ほど明瞭ではない。

第５表　試料一覧および胎土分類結果

試料 No.	掲載 No	土器区分	器種	残存率	特徴・備考	産地予想	胎土分類		
							鉱物・岩石	粒径組成	砕屑物量
1	2	土師器	坏	40%	盤状坏	甲府盆地	F	V	1
2	11	土師器	坏	30%	高台坏	甲府盆地	F	V	1
3	9	土師器	坏	体・底部破片	内面放射状暗文	甲府盆地	F	V	1
4	14	土師器	蓋	つまみ部破片		甲府盆地	G	Ⅲ	2
5	16	土師器	甕	口縁・体部破片	球胴甕。胎土が緻密。	静岡 (駿東型)	D	Ⅲ	2
6	34	土師器	甕	口縁・体部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	2
7	27	土師器	甕	口縁・体部破片	花崗岩系の胎土。	甲府盆地	E	Ⅱ	3
8	30	土師器	甕	口縁部破片	球胴甕。胎土が緻密。	静岡 (駿東型)	D	Ⅲ	2
9	43	土師器	甕	口縁・体部破片	胎土に赤褐色の礫を多く含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	1
10	35	土師器	甕	口縁・体部破片	体部外面ヘラ削り。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
11	40	土師器	甕	口縁・体部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	2
12	56	土師器	甕	口縁・体部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	1
13	33	土師器	甕	口縁・体部破片	胎土に暗赤褐色の礫を含む。	?	C	Ⅱ	2
14	38	土師器	甕	口縁部破片		?	C	Ⅱ	3
15	51	土師器	甕	口縁部破片	口唇部いびつ	?	C	Ⅱ	2
16	54	土師器	甕	口縁・体部破片	胎土に暗赤褐色の礫を含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
17	25	土師器	甕	口縁部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	2
18	58	土師器	甕	口縁部破片	彫りの深いハケメ。胎土に明褐色・黒色の礫を含む。	神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	2
19	39	土師器	甕	口縁・体部破片	胎土に赤褐色の礫を含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
20	29	土師器	甕	口縁部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	2
21	63	土師器	甕	頸・体部破片	胎土に赤褐色の粗砂を多く含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
22	73	土師器	甕	体部破片	体部外面みがき。	静岡 (駿東型)	B	Ⅱ	2
23	77	土師器	甕	体部破片	胎土に赤褐色の砂礫を多く含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
24	18	土師器	甕	口縁・体部破片		神奈川 (相模型)?	C	Ⅱ	3
25	19	土師器	甕	50%	花崗岩系の胎土。	甲府盆地	E	Ⅱ	3
26	31	土師器	甕	口縁・体部破片	胎土に暗赤褐色の砂礫を含む。	都留郡西部 (堀之内原タイプ)	C	Ⅱ	2
27	21	土師器	甕	口縁部破片	胎土に石英？	静岡 (駿東型)	D	Ⅲ	3
28	22	土師器	甕	口縁部破片	胎土が緻密	静岡 (駿東型)	D	Ⅳ	3
29	57	土師器	甕	口縁部破片	胎土に白色粗砂 (長石 ?)	?	A	Ⅱ	2
30	66	土師器	甕	頸部破片	胎土に赤褐色の砂礫を含む。外面みがき。	静岡 (駿東型)?	A	Ⅱ	2
31		カマド構築材			白色粘土・鉱物	三ノ側遺跡周辺	A	Ⅱ	2
32		カマド構築材			白色粘土	三ノ側遺跡周辺	H	Ⅰ	3

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉砕による重鉱物分析や切片による薄片作製等が主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいこと等の利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類等も捉えることが可能であり、得られる情報が多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結果

薄片観察結果を図 57 ～ 65 に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒径組成、砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合の順に述べる。なお、以下に述べる胎土分類結果は、試料一覧を示した表 5 にも併記した。

（1）鉱物片および岩石片の種類構成

ほとんどの試料において鉱物片では、石英および斜長石が多く、この他にカリ長石、カンラン石、斜方輝石、単斜輝石、角閃石、緑廉石、黒雲母、不透明鉱物の各鉱物片が試料によっては認められる。ただし、石英と斜長石以外の鉱物片は、いずれも微量であり、その出現によって胎土の特徴とすることのできるほどの産状ではない。

一方、岩石片では、試料によって多く含まれる種類が異なり、また共伴する岩石片の種類も異なっている。したがって、今回の試料は、岩石片の産状により、胎土の分類をすることが可能である。ここでは以下に示す A 類から H 類までの 8 分類を設定した。

１）A 類

玄武岩と変質岩を多く含み、他に微量または少量のスコリア、凝灰岩、安山岩等を伴う。変質岩の多くはスコリアや凝灰岩および火山岩類を原岩としている。この組成は、観察所見でも指摘されているようにおそらく三ノ側遺跡周辺の土に由来すると考えられるカマド構築材（№ 31）に認められたことから、在地性の最も高い組成として A 類としたものである。なお、№ 31 の観察記載で述べた灰白色のシルト塊は、顕微鏡観察において変質岩と同定したものに相当する。今回の試料では、№ 31 以外にも土師器甕 2 点（№ 29、30）が A 類に分類される。

２）B 類

安山岩と変質岩を多く含み、少量の玄武岩を伴う。他に微量の流紋岩・デイサイトや花崗岩類等の岩石片も含まれる。変質岩は火山岩類を原岩としている。A 類に類似する組成であることから B 類とした。これに分類される試料は、土師器甕 1 点（№ 22）のみである。

3）C 類

凝灰岩と変質岩を多く含み、少量の珪化岩を伴う。試料によっては、スコリア、流紋岩･デイサイト、安山岩、玄武岩の火山岩類や花崗岩類等も微量または少量含まれる。凝灰岩は弱く珪化しているものが多く、また変質岩および珪化岩は、凝灰岩を原岩とするとみられる。今回の試料では、全試料の半数を超える 17 点もの試料が、この組成に分類されたことから、B 類に次いで在地性の高いことが示唆される組成として C 類とした。C 類に分類された試料は、土師器甕のみ 17 点（№6、9 ～ 21、23、24、26）からなる。

4）D 類

流紋岩・デイサイトを多く含み、少量の多結晶石英と花崗閃緑斑岩または珪長岩を伴う。流紋岩・デイサイトの岩相は花崗閃緑斑岩および珪長岩に近い。C 類以外の分類の中では、最も試料数が多いことから D 類とした。これに分類される試料は、土師器甕 4 点（№5、8、27、28）である。なお、№28 は、流紋岩・デイサイトは多結晶石英よりも少量であるが、花崗閃緑斑岩に近い岩相を示す珪長岩を伴うことと、他に上述および後述の分類の特徴となる岩石片が流紋岩・デイサイトよりも多くはないことから、D 類に分類している。

5）E 類

花崗岩類が多く、少量の多結晶石英を伴う。これら以外の岩石片は含まれない。また、鉱物片では石英と斜長石が多く、カリ長石は少量であり、さらに少量の角閃石と微量の黒雲母が含まれる。後述するように今回の試料では、岩石片が特徴となる分類は本分類までであることから、D 類の次の E 類とした。今回の試料では、土師器甕 2 点（№7、25）が E 類に相当する。

6）F 類

胎土中における砂粒の全体量自体が少量であり、岩石片は含まれていない。砂粒の主体は、石英または斜長石の鉱物片であり、少量のカリ長石と微量の角閃石を伴う。これに分類される試料は、土師器坏 3 点（№1 ～ 3）である。

7）G 類

F 類と同様に砂粒の少ない胎土であり、砂粒の主体は石英と斜長石の鉱物片である。極めて微量のチャートおよび花崗岩類の岩石片が認められたことから、F 類とは区別して G 類とした。これに分類される試料は、土師器蓋 1 点（№4）のみである。

8）H 類

№32 のカマド構築材の組成をここでは、H 類とした。№32 は、顕微鏡下の観察により、粘土化の進んだ火山礫凝灰岩とみられ、岩石を構成している岩片の粒界は非常に不明瞭となっている。変質岩は、デイサイト、安山岩、玄武岩等の火山岩類が原岩であると見られる。

（2）砂分全体の粒径組成

各試料のモードを示す粒径をみると、試料によって様々な粒径がモードとなっており、細粒側に偏った組成や粗粒側に偏った組成等も認められる。このような傾向をより明確に捉える目的で、細粒砂より粗粒側の粒径（細礫、極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂）と細粒側の粒径（極細粒砂、粗粒シルト、中粒シルト）に分けて、それぞれの割合を軸として散布図（図 64）に示した。

散布図では、右下の領域ほど細粒傾向が強く、左上の領域ほど粗粒傾向が強いことを示している。最も粗粒傾向が強い試料は、粗粒砂径以上の砂と細礫からなるカマド構築材（№32）であり、下記の 4 点の試料以外の土師器甕試料とカマド構築材（№31）も粗粒傾向の強い左上の領域に分布している。この土師器甕試料の多くが分布する領域からやや右下に離れた位置、すなわちやや細粒傾向の強い領域には土師器甕 3 点（№5、8、27）が分布し、これらに近い位置には土師器蓋（№4）も位置している。さらに右下には土師器甕（№28）が分布しており、土師器坏 3 点（№1 ～ 3）は、いずれも細粒傾向の最も強い右下隅の領域に分布している。

このような散布図における分布状況から、粒径組成では、最も粗粒傾向の強い№32 を I 類とし、多くの土師

器甕試料が分布する領域内の試料をⅡ類、その右下に分布する３点の土師器甕と１点の土師器蓋の試料をⅢ類、それよりも細粒傾向の強い№28の土師器甕をⅣ類、最も細粒傾向の強い土師器坏の試料３点をⅤ類とする。

３）砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合

多くの試料は、砕屑物の割合が10～15%の範囲にあるが、10%未満の試料や15%を超える試料も少数認められた（図65）。ここでは、砕屑物の割合が10%未満のものを１類、10%以上15%未満のものを２類、15%以上のものを３類とした。砕屑物の少ない１類には、土師器坏の試料３点（№1～3）が分類されるが、土師器甕の№9と№12も１類に分類される。一方砕屑物の多い３類には、土師器甕６点（№7、14、24、25、27、28）とカマド構築材（№32）が分類される。土師器蓋（№4）と上記した１類と３類の土師器甕試料を除く土師器甕試料およびカマド構築材（№31）は、いずれも２類に分類される。

４．考察

（1）土器胎土の地域性

今回の分析では、それぞれ特徴となる岩石片の組成が得られたことから、岩石片の産状からA類からE類までの８種類の胎土に分類した。土器胎土中の岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背景を反映していると考えられる。このことから、胎土中の岩石片の組成により、材料採取地すなわち土器の製作地域を検討してみたい。

１）A類

A類はカマド構築材に認められた組成であることから、観察所見でも推定されているように三ノ側遺跡周辺の土の岩石片組成を示している可能性がある。三ノ側遺跡の位置する都留市周辺の地質を尾崎ほか（2002）等により概観すると、遺跡の位置する段丘の基盤は、後期更新世～完新世にかけて富士山から噴出した玄武岩溶岩であり、桂川流域の山地は、新第三紀中期中新世の火砕岩類からなる西八代層群（丹沢層群）により構成されている。カマド構築材(№31)の岩石片組成において､スコリアと玄武岩およびその風化変質岩を主体とすることは、段丘構成層に由来する砕屑物が多く含まれていることを示唆しており、少量の凝灰岩や安山岩および微量の流紋岩・デイサイトを伴っていることは、西八代層群に由来する砕屑物が混在していることを示していると考えられる。なお、H類としたカマド構築材（№32）を構成する火山礫凝灰岩も西八代層群に由来すると考えられる。

A類に分類した土師器甕（№29、30）は、ともに都留市周辺で作製された可能性がある。ただし、№30については、静岡（駿東型）の可能性があるという所見が示されている。ここで、駿東地域として例えば沼津市や三島市周辺の地質を杉山ほか（2010）等でみると、その地質学的背景の主体は、富士火山、愛鷹火山および箱根火山のそれぞれの噴出物となる。富士火山の噴出物は上述したように玄武岩質であり、愛鷹火山は玄武岩～安山岩質、箱根火山は安山岩～デイサイト質である。また、箱根火山の噴出物には火砕岩からなる噴出物も比較的広く分布している。№30の岩石片組成では、玄武岩と変質岩の他に安山岩と凝灰岩とスコリアおよび軽石が検出されている。これらのうち、安山岩や凝灰岩および軽石は箱根火山の噴出物に由来すると考えることも可能であり、中でも軽石は№31のカマド構築材では認められていない。したがって、現時点では、№30の土師器甕について、胎土分類はA類ではあるが、その産地としては、都留市周辺と沼津・三島市周辺の両者の可能性があるとする。今後、当該地域出土土器の分析事例を得て比較する等の検討が必要であると考えられる。なお産地不明との所見のある№29については、安山岩も軽石も検出されなかったこと、および極めて微量検出された泥岩は沼津・三島市周辺には分布しないこと等から、現時点では沼津・三島市周辺の産地の可能性は低いと考えられる。

２）B類

B類は、安山岩の多いことを特徴とする。安山岩の顕微鏡下の特徴では、新鮮なものと風化したものとが混在することから、その由来を第四紀の火山噴出物とするか新第三紀の堆積層とするか、あるいは両者混在するかは

特定できない。カマド構築材（№31）の安山岩と同様に新第三紀の堆積層に由来すると考えれば、B類の胎土が示す地域性も都留市周辺とすることができる。安山岩が玄武岩より多いという組成については、例えば山地斜面に近接した場所の砕屑物等を想定すれば、山地の地質すなわち新第三紀の堆積物に由来する砕屑物がより多く含まれているという組成を考えることができる。一方、安山岩の由来を第四紀の火山噴出物とした場合、富士山の噴出物はほとんど玄武岩質であることから、都留市周辺の地質では安山岩の由来を求めることはできない。ここでB類に分類した土師器甕（№22）には、№30と同様に静岡（駿東型）という所見が示されている。上述した沼津・三島市周辺の地質学的背景を考慮すれば、安山岩の多い岩石片組成は、その所見には整合すると言うことができる。特に№22の岩石片組成には軽石も検出されている。しかし、その一方で№22には沼津・三島市周辺には分布しない花崗岩類の岩石片も微量ではあるが検出されている。花崗岩類の岩石片の由来については、下記のC類で述べるが、その場合には、さらにC類から推定される産地の可能性もあることになる。いずれにしても、現時点でのB類の地域性については、都留市周辺、沼津・三島市周辺およびC類の地域の３通りの可能性が並立するとしておきたい。

３）C類

C類は、凝灰岩と変質岩および珪化岩を特徴とする胎土である。凝灰岩は弱く珪化したものが多く認められることから新第三紀の堆積層を構成する凝灰岩である可能性が高い。さらに、C類とした組成の中で共伴する岩石の種類をみると、スコリアや玄武岩が含まれていることが多い。スコリアや玄武岩は富士山の噴出物に由来すると考えられ、新第三紀の凝灰岩は上述したように桂川流域の山地に西八代層群として広く分布している。したがって、C類の地域性としては、まず桂川流域であると考えることができる。次にスコリアや玄武岩以外にもC類には共伴する岩石片が認められるが、その中で注目されるのは花崗岩類およびホルンフェルスである（例えば№18等）。花崗岩類の分布は、至近では、いずれも新第三紀中新世に貫入した甲府盆地南東部の芦川深成岩体や東部の徳和深成岩体があげられる。そしてこれらの深成岩体の周囲にはホルンフェルスが産出している。桂川水系をみると、これらの深成岩体の砕屑物が河川堆積物中に混在する可能性があるのは笹子川や真木川である。したがって、C類の地域性をさらに絞るならば、桂川流域でも笹子川や真木川の合流する大月市付近より下流側の地域であることが推定される。また、その付近になると都留市付近に比べて富士山に由来する砕屑物の量比は当然下がっていると考えられるから、A類に比べるとスコリアや玄武岩の割合が低いC類の組成とも整合する。

なお、C類に分類した試料には、産地の所見として神奈川（相模型）の可能性があるとされたものと、都留郡西部（堀之内原タイプ）とされたものの両者が含まれている。上述したC類の地域性を考慮すれば、今回の分析結果は、神奈川（相模型）とした所見を支持しているといえる。その場合、C類の地域は、桂川が相模川となる流域まで含まれる可能性がある。凝灰岩の由来する地質は西八代層群という名前よりも丹沢層群とした方がよい。一方の都留郡西部とされた所見については、現時点ではまだ否定するものではないが、胎土分析の結果との整合性はよくない。都留郡西部というならば、おそらく今回の分析におけるA類のような胎土になることが考えられる。

４）D類

D類は、流紋岩・デイサイトとそれに伴う花崗閃緑斑岩または珪長岩を特徴とする。流紋岩・デイサイトは、桂川流域の山地に分布する西八代層群中にも含まれているが、A類からC類までの説明にあるように、桂川流域の堆積物であれば、玄武岩や凝灰岩が混在する可能性が高いが、D類に分類した組成にはそれらは検出されていない。また、花崗閃緑斑岩や珪長岩は岩脈として産出することが多いが、それらの岩脈の顕著な分布も桂川流域の山地には認められていない。したがって、D類の地域性としては、少なくとも桂川流域外である可能性が高いと考えられる。この時点で、D類に分類した４点（№5、8、27、28）がいずれも桂川流域外の地域である静岡（駿東型）という所見が付されていることとは整合する。

なお、D類の地域性を考える場合、まず流紋岩・デイサイト質の溶岩や火砕岩が広く分布しているような地域

を想定し、さらに堆積岩類や花崗岩類が混在しないような水系の地域も考えなければならない。そして岩脈の分布である。上述した尾崎ほか（2002）や杉山ほか（2010）では、そのような地域を御坂山地から甲府盆地および相模川流域や沼津・三島市周辺まで広げた範囲の中には見出すことはできない。すなわち、D 類の胎土は「駿東」という地域性までは示してはいない。そこで、さらに範囲を広げると、静岡平野の北側に分布する賤機山や安倍川下流の右岸側の沖積低地の縁辺に分布する山地を構成する地質に、竜爪層群と呼ばれるデイサイト溶岩および火砕岩からなる地質が認められる。現時点で、D 類の地域性をここまで広げることはできないが、今後の検討対象地域としては考慮する必要がある。

５）E 類

E 類は花崗岩類を特徴とする胎土である。花崗岩類の岩種としては、共伴する鉱物片の組成においてカリ長石が少ないことや角閃石が多い傾向が窺えることから、角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩が推定される。このような岩石の分布は、甲府盆地南東縁の御坂山地に貫入する芦川深成岩体に見ることができる。E 類に分類した 2 点（№ 7、25）には、ともに甲府盆地が推定産地であるという所見が付されていることから、分析結果は、この所見を支持している。

なお、河西（1989）は、甲府盆地各地の河川堆積物の岩石鉱物組成を調べ、その組成の違いから、新第三系分布地域、釜無川地域、荒川地域、笛吹川地域に大別している。これらのうち、笛吹川地域は花崗岩類の卓越を特徴とすると述べられている。笛吹川地域の背後には上述した芦川深成岩体が分布しており、本分析の E 類は、甲府盆地の中でも笛吹川地域の堆積物に由来する可能性がある。

６）F 類および G 類

F 類および G 類については、地質の指標となる岩石片が殆ど含まれていないため、具体的な地域性の検討には至らない。産地の所見では、F 類に分類した 3 点（№ 1 ～ 3）と G 類に分類した 1 点（№ 4）について、いずれも甲府盆地とされている。胎土分析結果からも甲府盆地の地域性が推定された E 類の鉱物片組成と比べると共通して角閃石が含まれているという特徴が指摘できる。上述したように角閃石は甲府盆地南東部に分布する芦川深成岩体の岩石に由来すると考えられるから、F 類および G 類の地域性を甲府盆地と想定したい。

（2）土器胎土と器種

今回の分析に供された土師器の器種と胎土との関係では、岩石組成でみると、坏は F 類、蓋は G 類であり甕はそれら以外という対応関係が認められた。この特徴は、胎土中の砂の粒径組成に、より明瞭な形で表されており、坏は細粒傾向の非常に強いⅤ類、蓋はやや細粒傾向の強いⅢ類、甕の多くは粗粒傾向の強いⅡ類となっている（図 65）。おそらく、器種の用途や形状、大きさ等に合わせて、素地土の調整等の製作事情が異なっていたことが窺える。

また、土師器甕では、少数の細粒傾向を示す試料が 4 点（№ 5、8、27、28）認められた。粒径組成分類ではⅢ類およびⅣ類とした試料である。これらの試料の岩石片組成はいずれも D 類であり、また、産地の所見はいずれも静岡（駿東）とされている。前述したように D 類の地域性は桂川流域外である可能性が高いとしたが、この粒径組成の違いはその所見を支持する傾向といえる。

５．まとめ

三ノ側遺跡の 4 号竪穴建物跡から出土した土師器試料及びカマド構築材の胎土分析（薄片作製観察）結果から得られた成果と課題は、以下の通りである。

（1）岩石片組成から、A 類から H 類までの 8 種類の胎土が分類された。既知の地質情報との比較により、A 類は在地または駿東地域、B 類は在地または駿東地域または大月市付近より下流の桂川流域のいずれか、C 類は大月市付近より下流の桂川流域、D 類は桂川流域外であるが、具体的な地域は特定できず、E 類・F 類・G 類は甲府盆地、特に E 類は笛吹川流域、H 類は在地という地域性が推定された。

（2）器種間では、岩石組成および粒径組成において比較的明瞭な違いが認められた。さらに上述した岩石組成による胎土の違いからは、坏と蓋は甲府盆地、甕は複数の地域に由来する資料が混在している可能性が高い。

（3）さらに胎土分析による具体的な地域性を検討するため、遺跡出土土師器の調査分析とともに、桂川流域や甲府盆地、相模川流域、さらには沼津・三島地域等の各地の自然堆積物の分析データの蓄積および比較検討も必要と考える。

引用文献

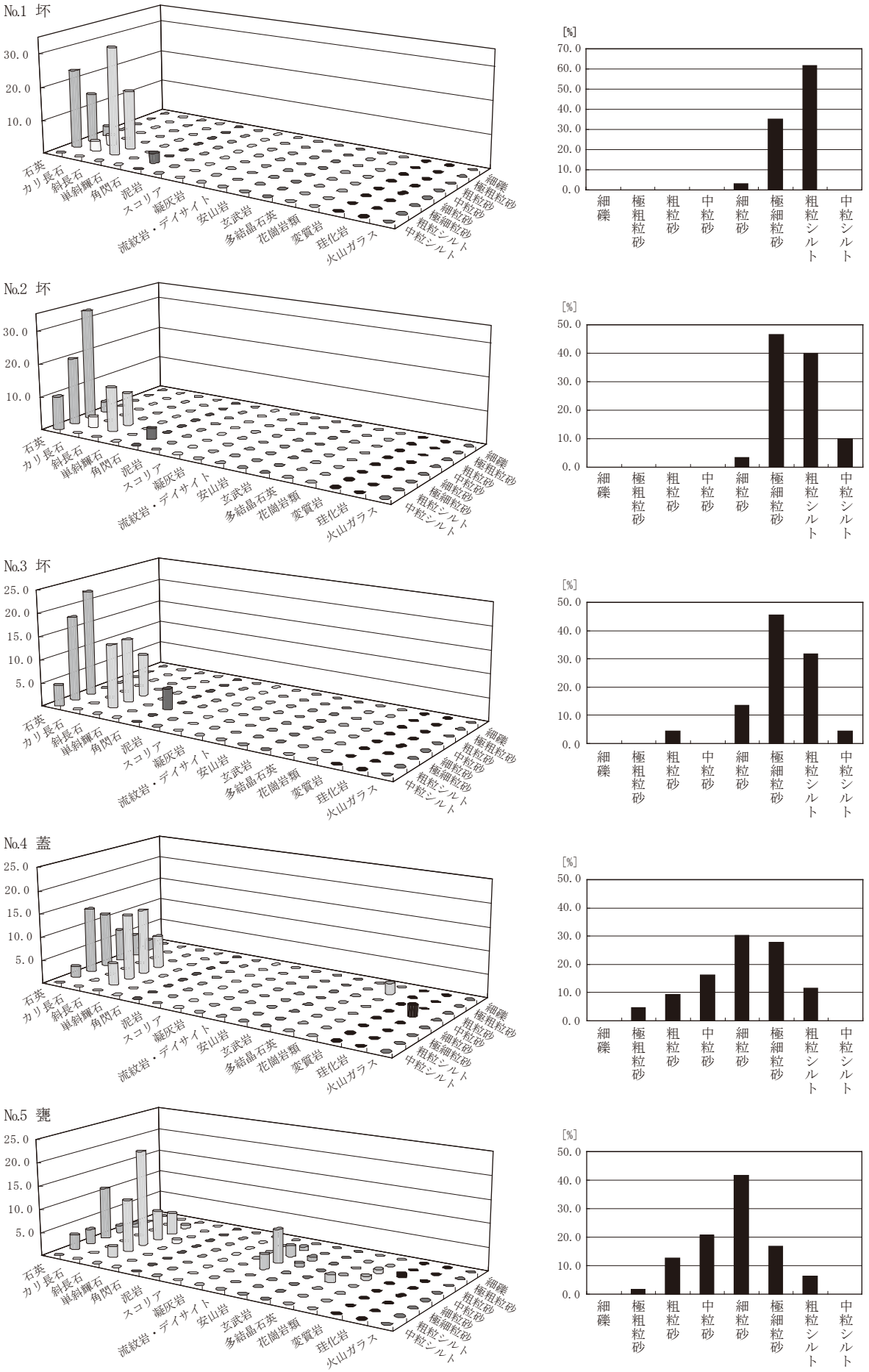
河西　学 ,1989, 甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成－土器胎土分析のための基礎データ－ . 山梨考古学論集Ⅱ ,505-523.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 ,1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－ . 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集 ,120-121.

尾崎正紀・牧本　博・杉山雄一・三村弘二・酒井　彰・久保和也・加藤碩一・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久 , 2002, 20 万分の 1 地質図幅「甲府」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター .

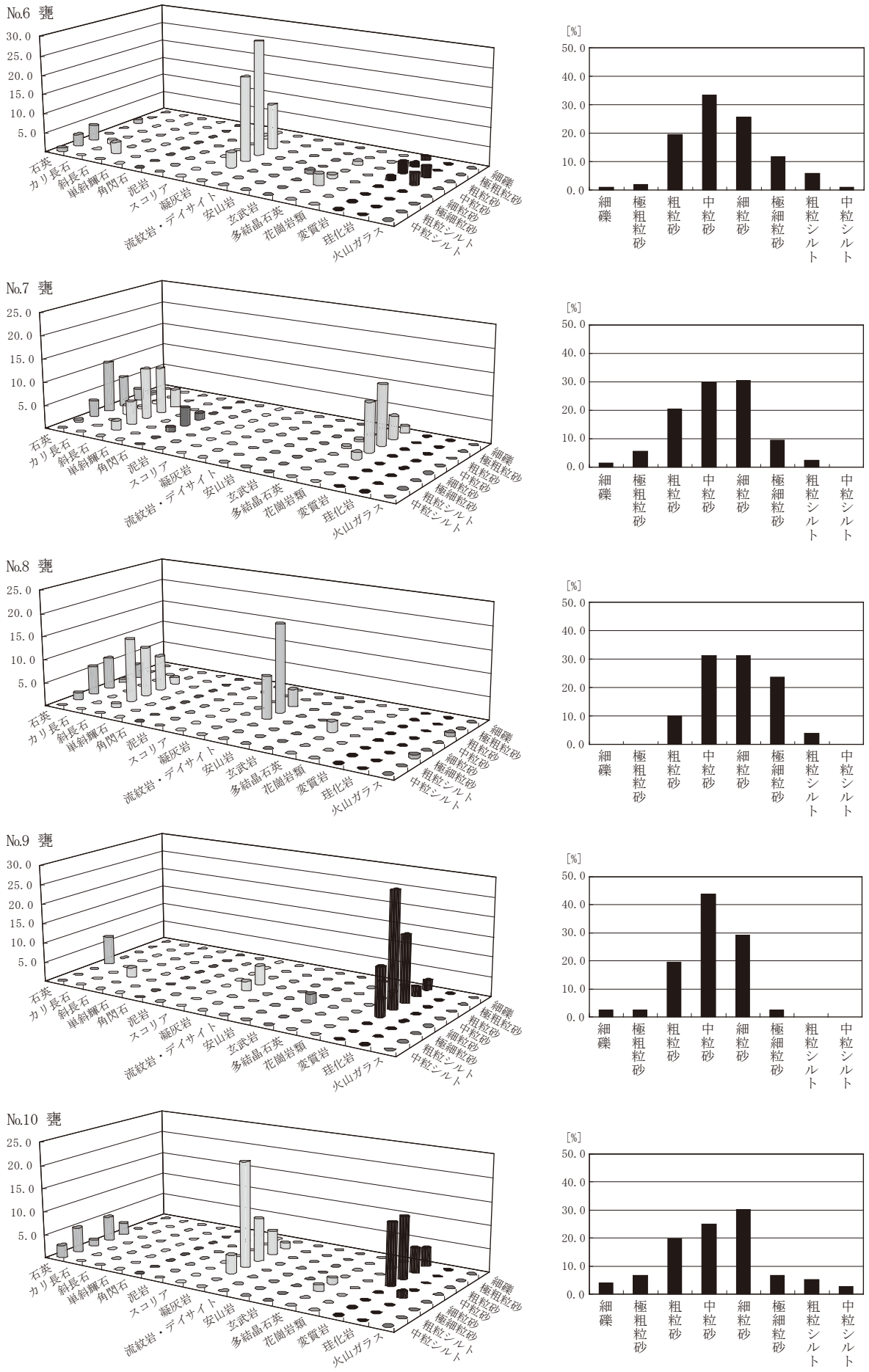
杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松　武・松田時彦・石塚　治・及川輝樹・高田　亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫 ,2010,20 万分の 1 地質図幅　静岡及び御前崎（第 2 版）, 産業術総合研究所地質調査総合センター .

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成



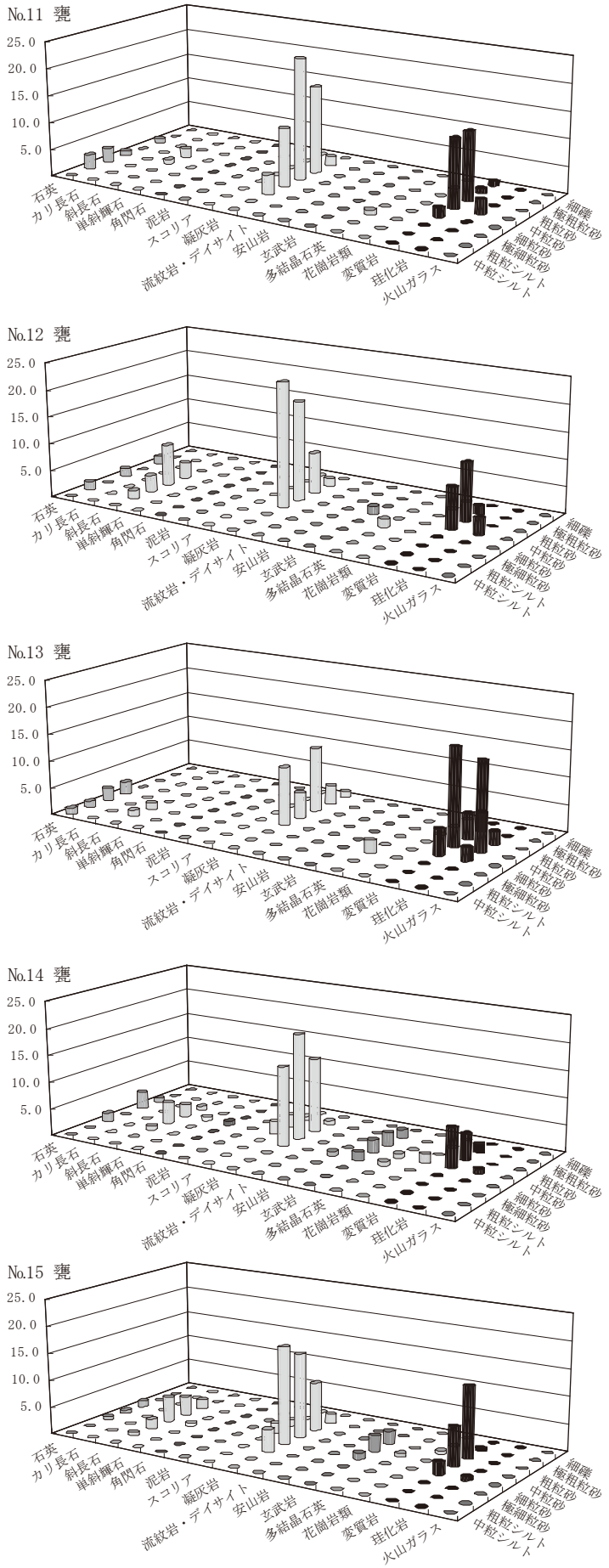
第57図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その１）

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成



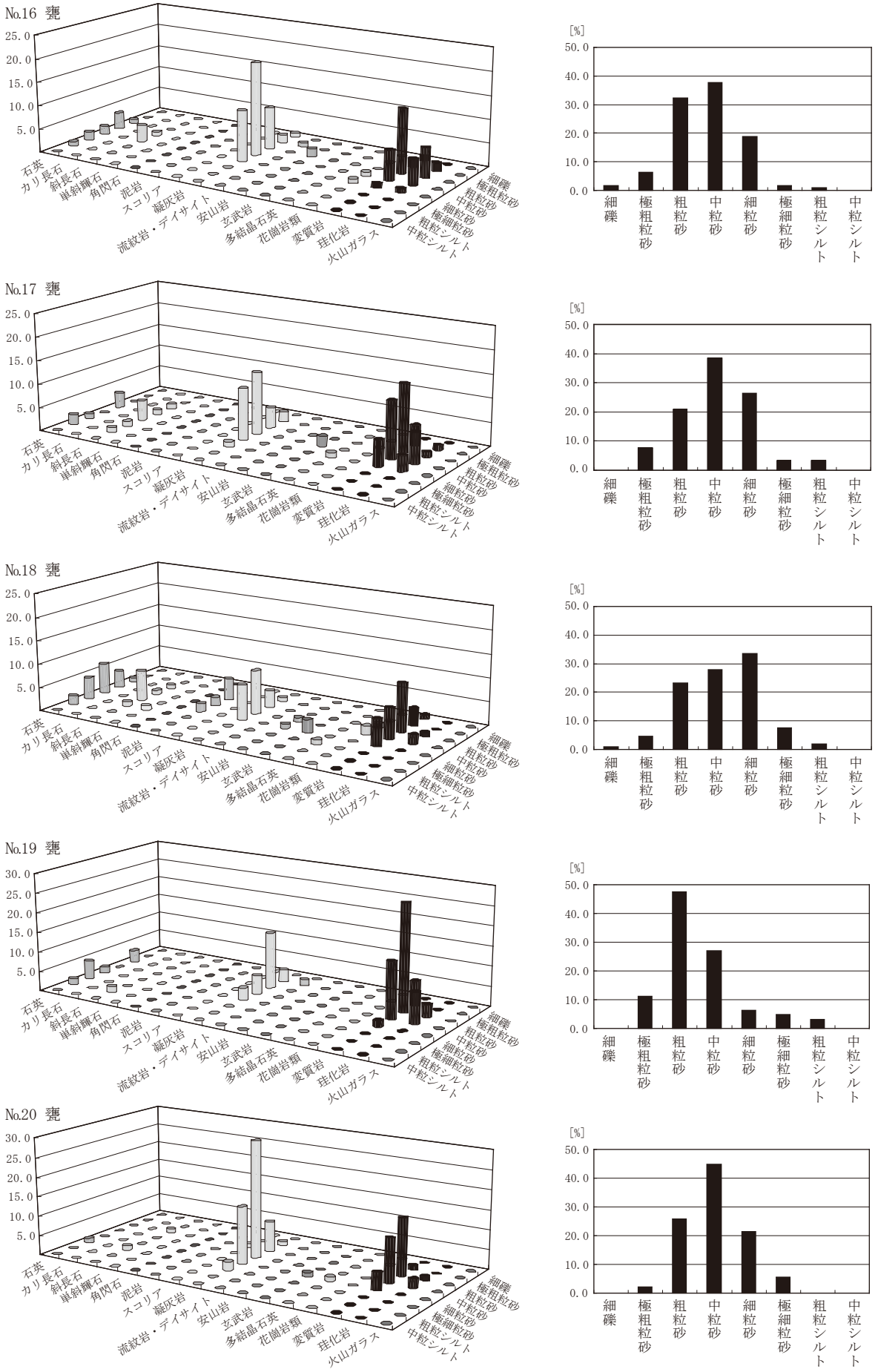
第58図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その２）

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成



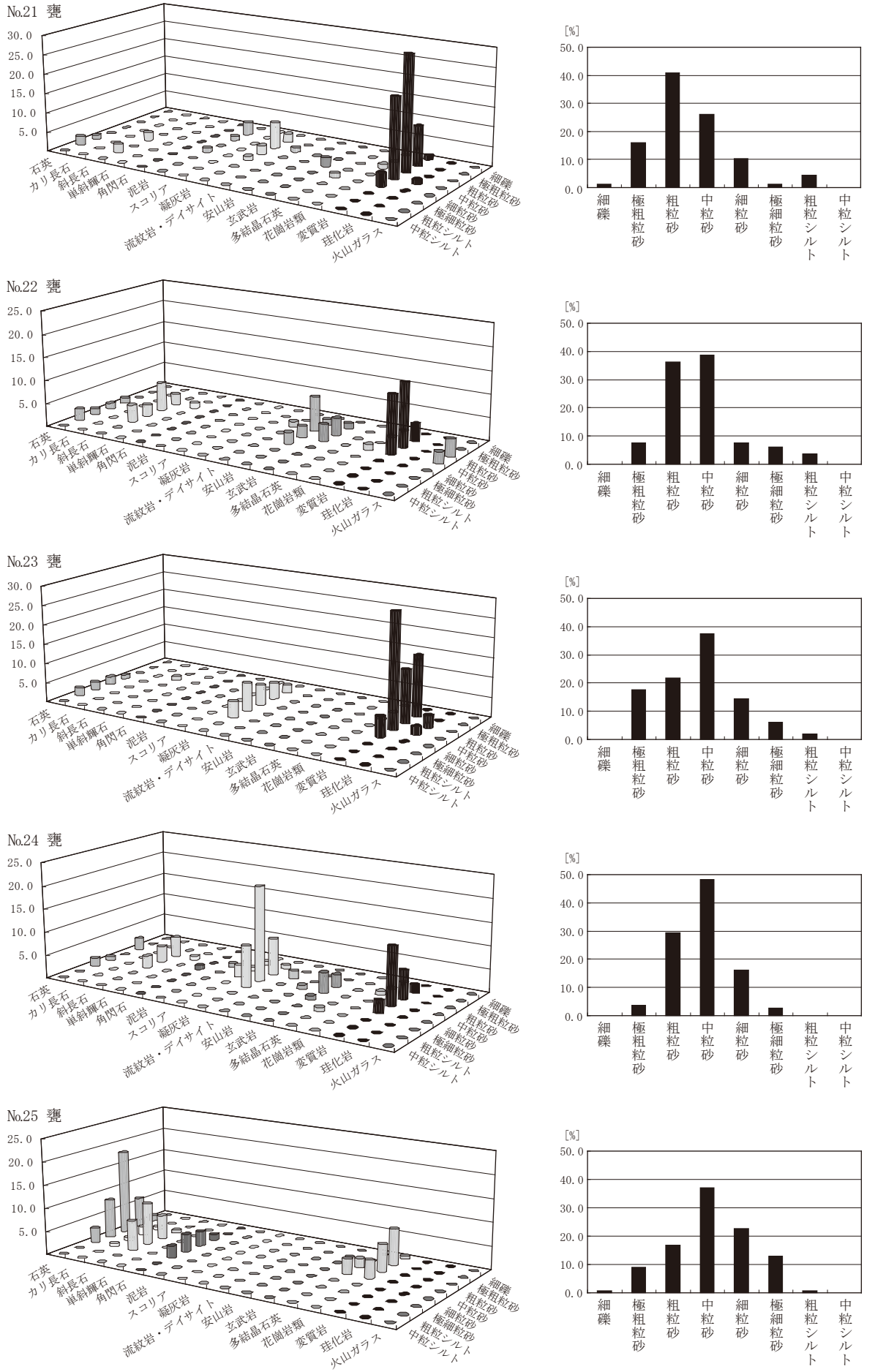
第59図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その３）

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成



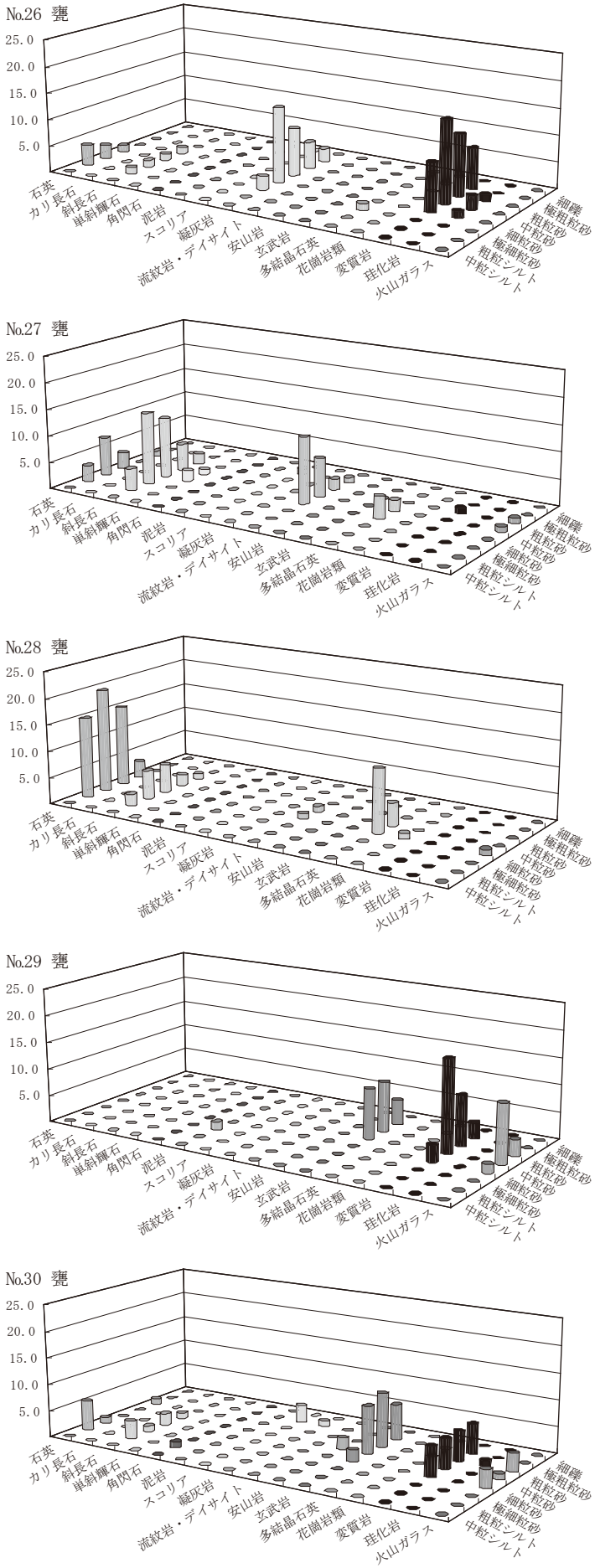
第60図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その４）

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成

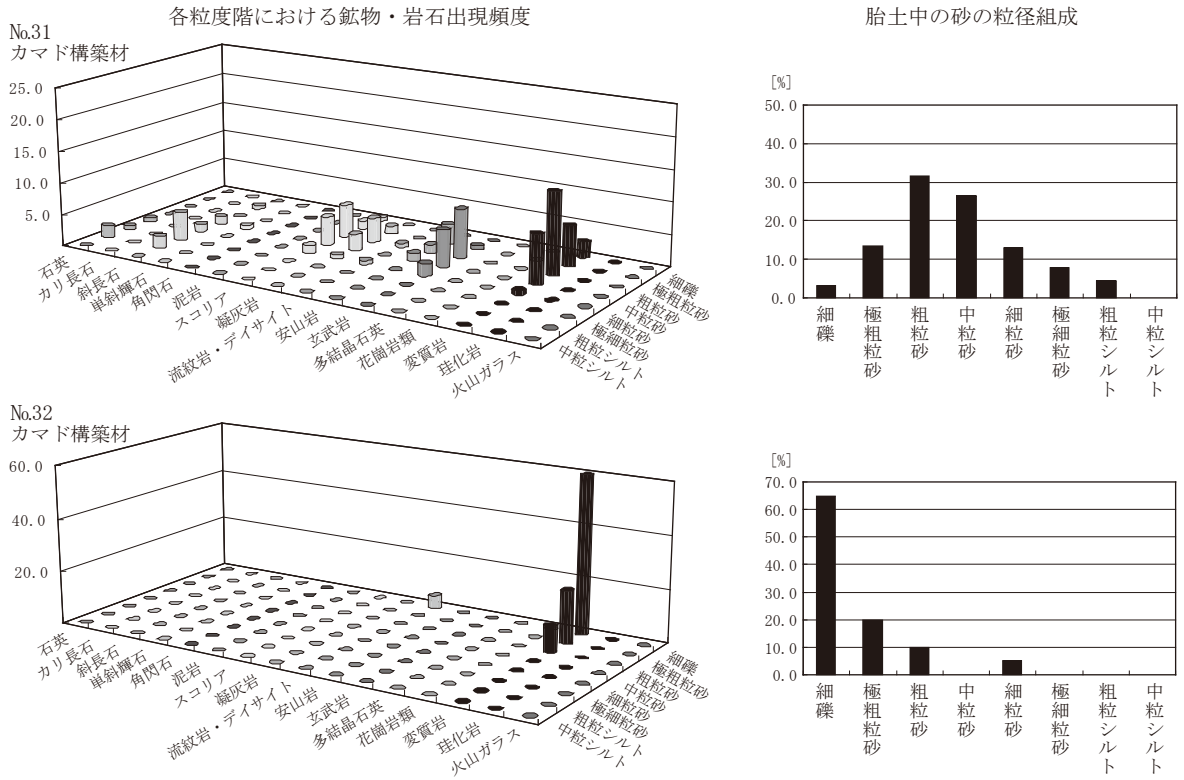


第61図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その５）

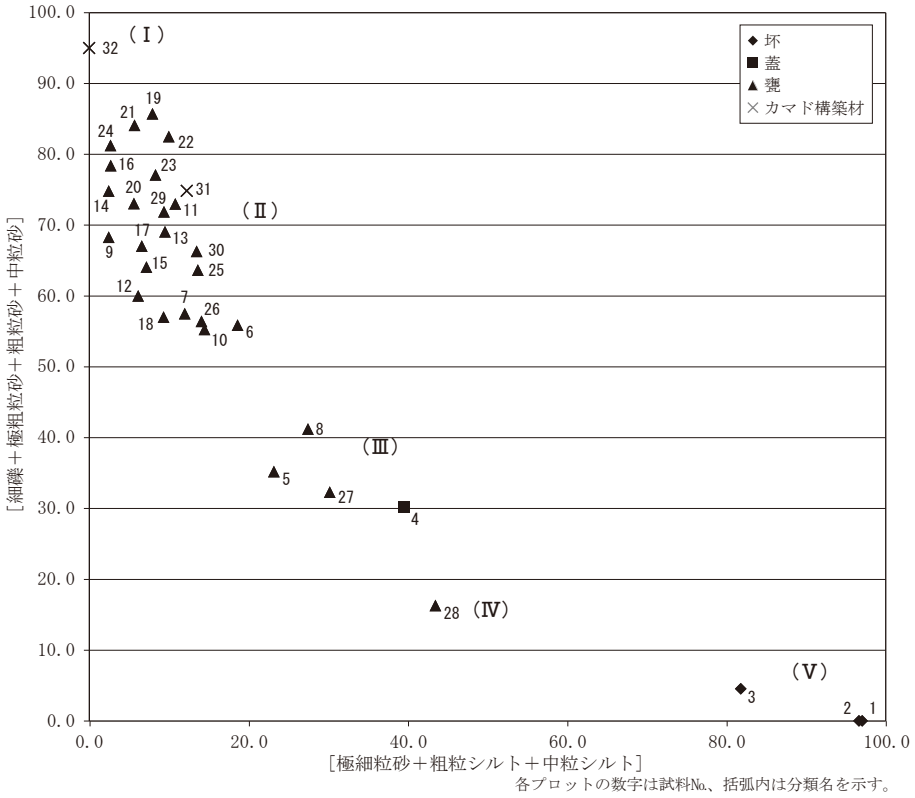
各粒度階における鉱物・岩石出現頻度　　胎土中の砂の粒径組成



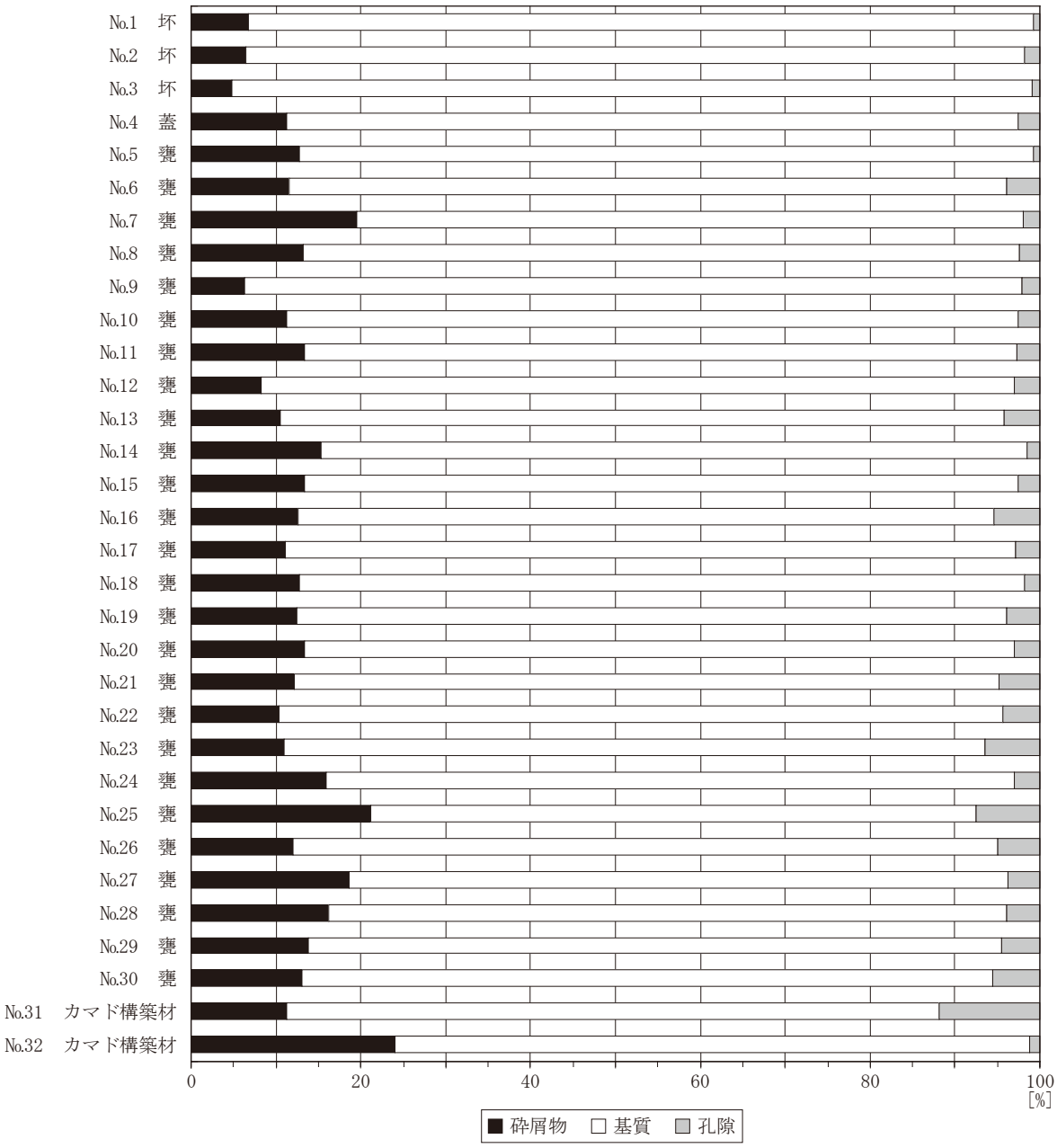
第62図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その６）



第63図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その７）

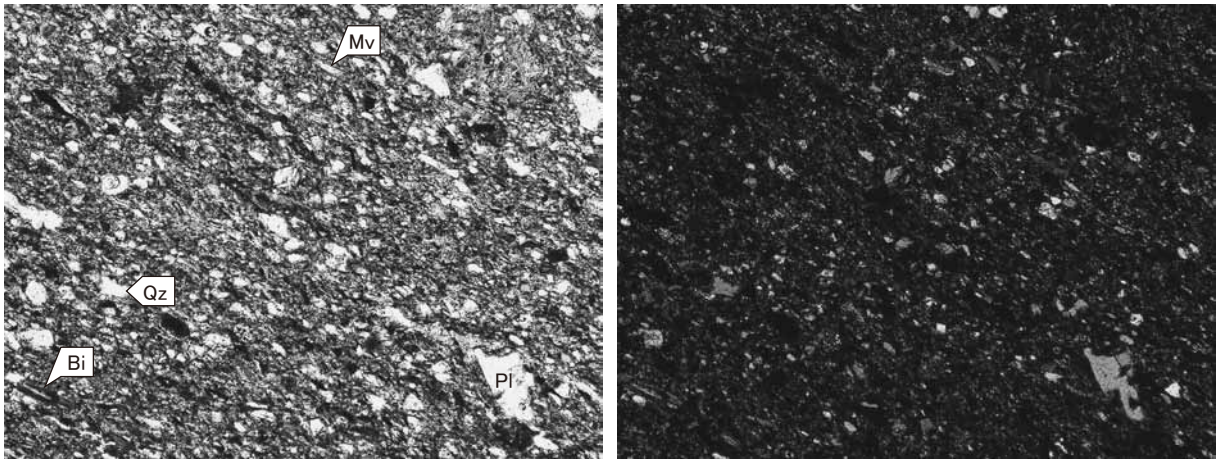


第64図　胎土中の砂の粒径組成散布図

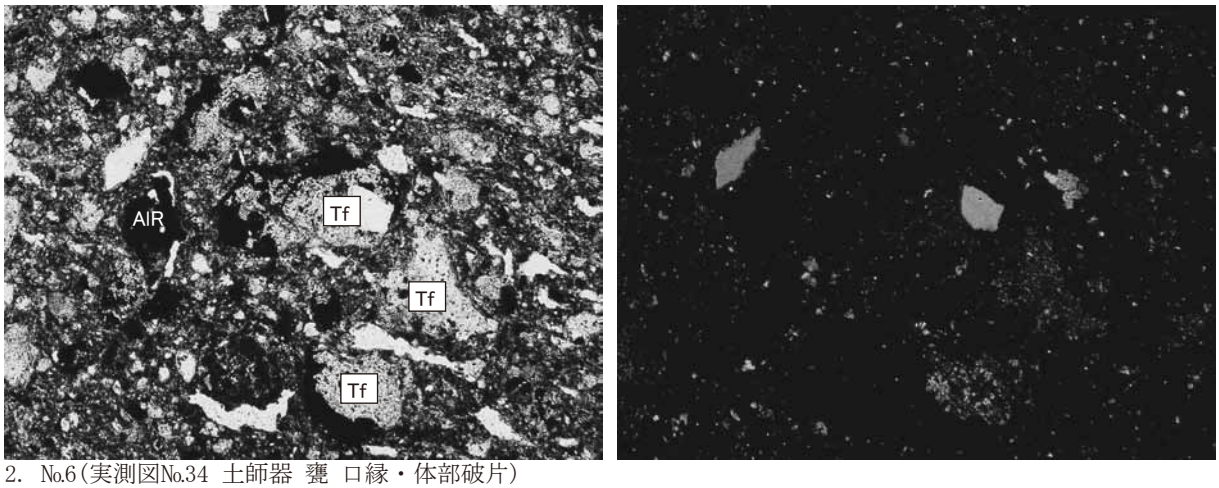


第65図　砕屑物・基質・孔隙の割合

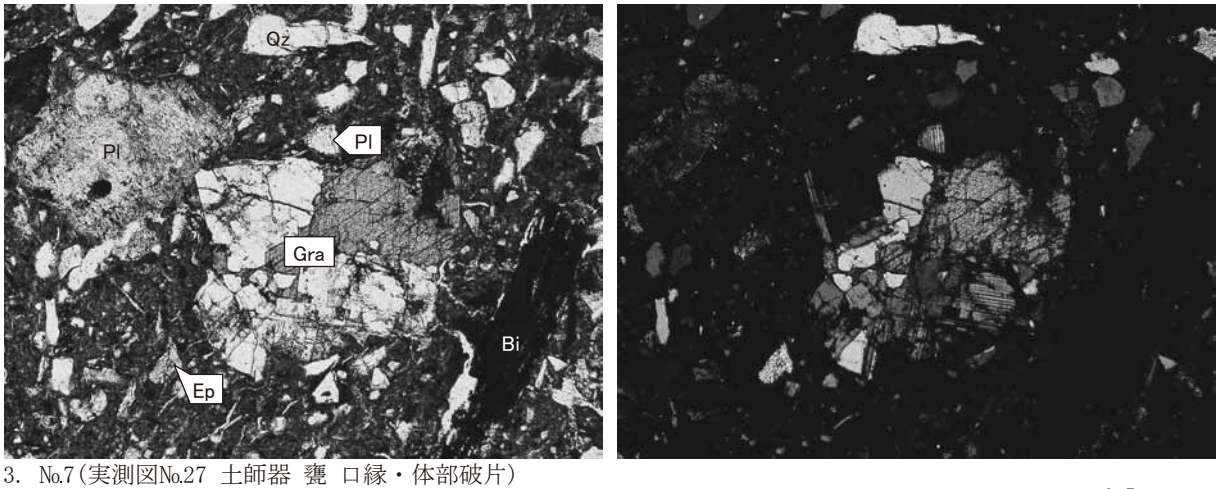
図版1　胎土薄片(1)



1. №2(実測図№11 土師器 坏 高台坏)



2. №6(実測図№34 土師器 甕 口縁・体部破片)

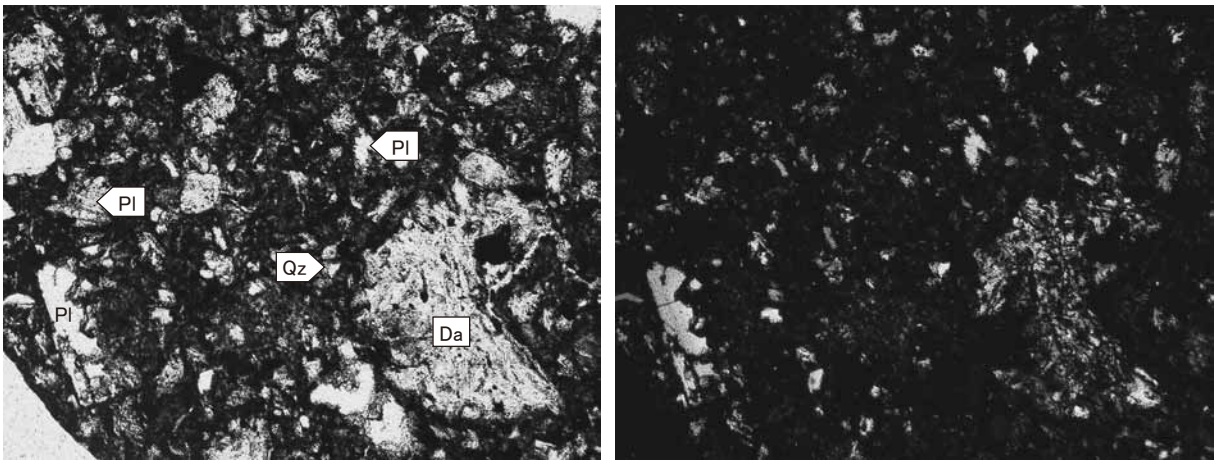


3. №7(実測図№27 土師器 甕 口縁・体部破片)

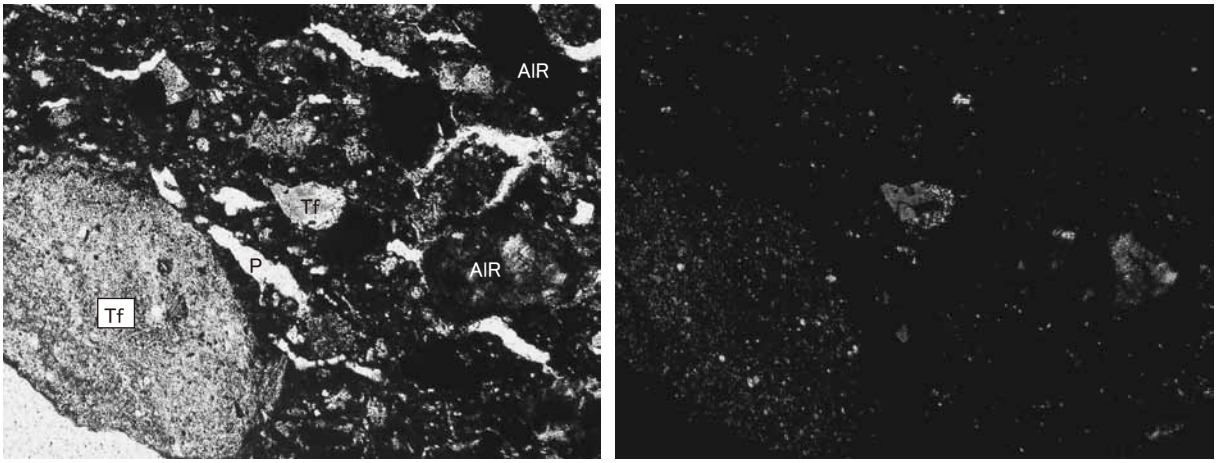
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Ep:緑レン石. Mv:白雲母. Bi:黒雲母. Tf:凝灰岩. Gra:花崗岩.
AlR:変質岩.
写真左列は下方ポーラー,右列は直交ポーラー下.

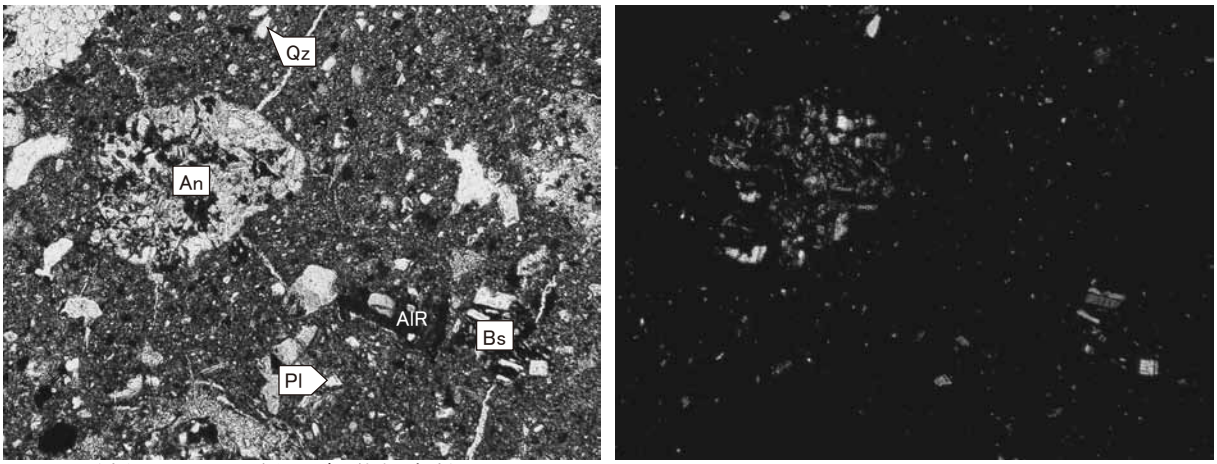
図版2 胎土薄片(2)



4. №8(実測図№30 土師器 甕 口縁部破片)



5. №15(実測図№51 土師器 甕 口縁部破片)

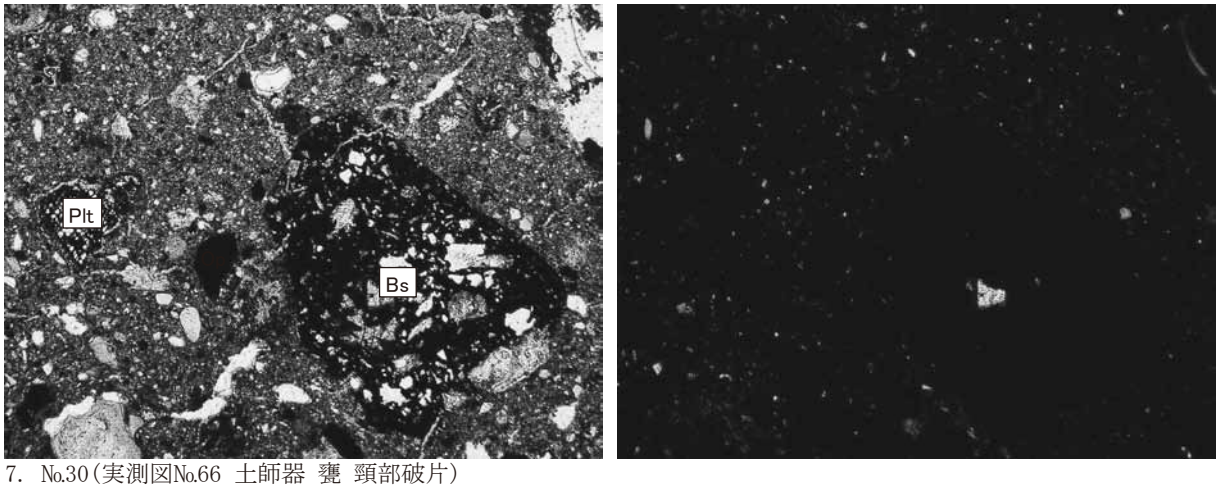


6. №22(実測図№73 土師器 甕 体部破片)

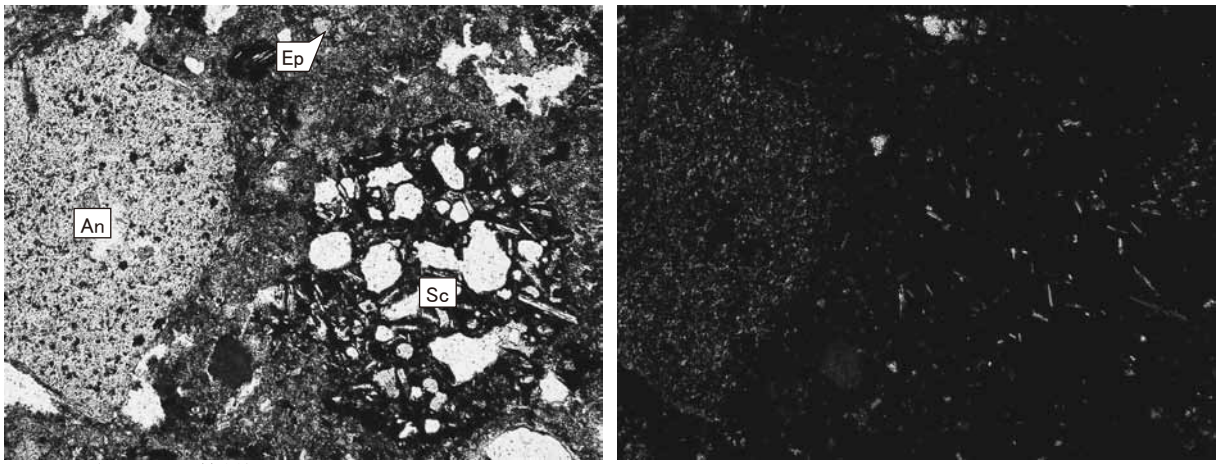
0.5mm

Qz:石英. Pl:斜長石. Tf:凝灰岩. Da:デイサイト. An:安山岩. Bs:玄武岩. AlR:変質岩.
P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー,右列は直交ポーラー下.

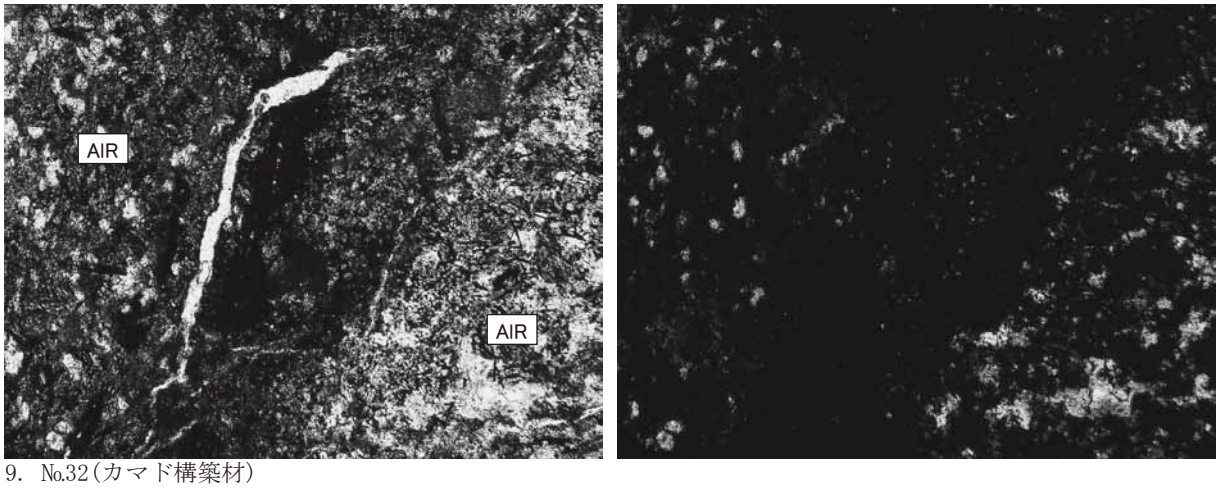
図版3 胎土薄片(3)



7. №30(実測図№66 土師器 甕 頸部破片)



8. №31(カマド構築材)



9. №32(カマド構築材)

0.5mm

Ep:緑レン石. Op:不透明鉱物. Sc:スコリア. An:安山岩. Bs:玄武岩. AlR:変質岩.
Plt:植物片. Mtx:基質.
写真左列は下方ポーラー,右列は直交ポーラー下.

第２節　放射性炭素年代測定・樹種同定・土壌理化学分析

はじめに

三ノ側遺跡（都留市上谷５丁目地内）は、桂川右岸の河岸段丘上に位置する。本遺跡の発掘調査では、奈良～平安時代（8 世紀前半～ 9 世紀前半）の竪穴建物跡をはじめとして、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構などが確認されている。

本報告では、遺構の年代、竪穴建物跡のカマドの燃料材と考えられる炭化材の樹種および木材利用、さらに土坑墓の可能性がある土坑の性格の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

Ⅰ. 放射性炭素年代測定

１．試料

試料は、5 号土坑の上部壁面付近から出土した炭化材 2 点（5 号土坑 炭 1, 炭 2）である。5 号土坑は、平面が円形を呈し、直径が約 1.2m、深さが約 0.55m を測る。当遺構からは、遺物は出土していないが、埋積物（覆土）の特徴から、奈良～平安時代の遺構と推定されている。

測定に供された炭化材 2 点は、いずれも板状を呈する長さ約 2cm、幅約 1 ～ 1.5cm 程度、厚さ 0.5cm 前後の破片である。なお、本分析では、試料の履歴（樹種）に関わる情報を得るため、それぞれ測定試料の一部を採取し、樹種同定を行った。樹種同定結果は、後述するⅡ. に示す。

２．分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸･アルカリ･酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2 σ（σは統計的に真の値が 68%、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対

的に示したものである。

第６表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試 料 名	補正年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代（cal）			相対比	測定機関 Code No.
5 号土坑 炭 1 炭化材 (ヤマグワ近似種)	1250 ± 20	− 19.24 ± 0.41	1247 ± 23	σ	cal AD 691 − cal AD 750		0.788	IAAA-112761
					cal AD 763 − cal AD 779		0.212	
				2 σ	cal AD 682 − cal AD 784		0.812	
					cal AD 786 − cal AD 827		0.130	
					cal AD 839 − cal AD 864		0.058	
5 号土坑 炭 2 炭化材 (ヤマグワ近似種)	1230 ± 20	− 21.84 ± 0.38	1232 ± 23	σ	cal AD 713 − cal AD 745		0.352	IAAA-112762
					cal AD 767 − cal AD 783		0.201	
					cal AD 788 − cal AD 819		0.314	
					cal AD 842 − cal AD 859		0.133	
				2 σ	cal AD 691 − cal AD 750		0.349	
					cal AD 763 − cal AD 877		0.651	

３．結果および考察

５号土坑から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、炭 1 が 1,250 ± 20yrBP、炭 2 が 1,230 ± 20yrBP を示す。較正暦年代（測定誤差 σ）は、炭 1 が calAD 691-calAD 779、炭 2 が calAD 713-calAD 859 である（表 6）。

上記した 5 号土坑出土炭化材の較正暦年代を参考とすると、炭 1 が 7 世紀末～ 8 世紀後半、炭 2 が 8 世紀前半～ 9 世紀中頃に相当する。調査所見によれば、土坑の年代は奈良～平安時代と推定されており、今回の結果は概ね整合する値と言える。また、炭化材は、後述するように 2 点ともにヤマグワ近似種であった。2 試料は、測定結果、出土状況および確認された樹種などから同一の個体に由来する可能性もあるが、接合関係および形状観察からは特定には至らなかった。

Ⅱ．樹種同定

１．試料

試料は、奈良時代（8 世紀前半）と考えられる 4 号建物跡から出土した炭化材 1 点（炭 1）、平安時代（9 世紀前半）と考えられる 8 号建物跡から出土した炭化材 1 点（炭 1）および 9 世紀前半～後半と考えられる 10 号建物跡から出土した炭化材 2 点（炭 1, 炭 2）の、計 4 点である。10 号建物跡の炭 2 を除く炭化材は、カマド構築材に由来する白色粘土中から出土しており、カマドで使用された燃料材と推定されている。

また、本分析では、上述した放射性炭素年代測定に供した炭化材 2 点も対象としたことから、結果を表 2 に併記した。

２．分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3．結果

樹種同定結果を表 7 に示す。建物跡および土坑から出土した炭化材は、広葉樹 4 分類群（ブナ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、ヤマグワ近似種、ムラサキシキブ属）に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴などを記す。

・ブナ属（Fagus）　ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列～2 列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Quercus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1 列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤマグワ近似種（cf. Morus australis Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は 3-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部の道管は単独または 2-4 個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は潰れており、形態や大きさは不明。

木口の道管配列の特徴から、ヤマグワと考えられるが、放射組織がほとんど観察できないことから近似種とした。

・ムラサキシキブ属（Callicarpa）　クマツヅラ科

散孔材で、横断面では多角形、道管は単独または 2-3 個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-25 細胞高。

第７表　樹種同定結果

遺　構	出土位置	取上№	状　態	樹　　種	備　　考
4 号建物跡	カマド	炭 1	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
8 号建物跡	カマド	炭 1	破片	ブナ属	
10 号建物跡	西壁北西隅	炭 1	破片	ムラサキシキブ属	
	カマド	炭 2	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
5 号土抗	土抗覆土	炭 1	破片	ヤマグワ近似種	放射性炭素年代測定試料
		炭 2	破片	ヤマグワ近似種	放射性炭素年代測定試料

4．考察

奈良時代および平安時代の竪穴建物跡から出土した炭化材には、広葉樹のブナ属、クヌギ節、ムラサキシキブ属が確認された。ブナ属は山地の落葉広葉樹林に生育する落葉高木であり、クヌギ節は二次林や水辺に生育する落葉高木である。また、ムラサキシキブ属は、落葉広葉樹林の明るい林内や林縁などに生育する落葉低木である。

分析に供された炭化材は、一部の試料を除きカマドの燃料材と推定されているが、確認された樹種は 4 号建物跡がクヌギ節、8 号建物跡がブナ属、10 号建物跡がクヌギ節からなる。数量が少なく量比の比較はできないが、山地に生育する分類群や二次林を構成する分類群が多いことから、おそらく近傍の森林より調達できる木材が燃料材として利用されたと考えられる。

Ⅲ . 土壌理化学分析

1．試料

試料は、調査区南西側に集中する奈良～平安時代と考えられる土坑群のうち、3 基（11 号土坑、15 号土坑、16 号土坑）の土坑埋積物（覆土）より採取された土壌である。以下、遺構毎に試料の概要を記す。

（1）11 号土坑

11 号土坑は、直径が約 0.85m、深さ約 0.6m を測る、平面が円形を呈する土坑である。本土坑は、覆土上層から古代の都留郡特有の土師器（堀之内原タイプ）の甕が出土したことから、葬送儀礼が行われた土坑墓の可能性が指摘されている。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（A）、中層（B）および下層（C）と、土坑周辺の地山（D）の土壌 4 点である。

（2）15 号土坑

15 号土坑は、直径が約 1.2m、深さが約 0.35m を測る、平面が円形を呈する土坑である。本土坑の規模は、今回の三ノ側遺跡の発掘調査で検出される土坑の典型とされ、土坑墓の可能性が示唆されている。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（西側 ;A、中央 ;C、東側 ;E）、下層～底面直上（西側 ;B、中央 ;D、東側 ;F）と、土坑周辺の地山から採取された土壌 1 点（G）の、計 7 点である。

（3）16 号土坑

16 号土坑は、直径が約 1.45m、深さが約 0.5m を測る、平面が円形を呈する土坑であり、15 号土坑の東側に隣接する。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（西側 ;A、中央 ;C、東 ;E）、下層～底面直上（西側 ;B、中央 ;D、東側 ;F）と、土坑周辺の地山から採取された土壌 1 点（G）の、計 7 点である。

今回の分析では、上記した各土坑の機能や用途に関わる資料を得るため、土壌の化学性について検討した。

2．分析方法

本分析では、土壌理化学分析として、腐植含量、リン酸、カルシウム含量の調査を実施する。リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法、腐植含量はチューリン法（土壌標準分析・測定法委員会 ,1986）でそれぞれ行った。以下に、各項目の操作工程を示す。

（1）試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作製する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）腐植含量

粉砕土試料 0.100 ～ 0.200g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土 %）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

（3）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3. 結果

土壌理化学分析結果を表８に示し、以下に遺構別の結果について記す。

（1）11 号土坑

野外土性（ペドロジスト懇談会編 ,1984）は、いずれの試料も SiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、3.72 ～ 4.24% であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.41 ～ 3.76P2O5mg/g と腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、30.5 ～ 34.9CaOmg/g の範囲で概ね一定しており、大差はない。

（2）15 号土坑

野外土性は、いずれの試料も SiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/2 黒褐、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、4.43 ～ 5.55% であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.48 ～ 4.55P2O5mg/g と腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、22.8 ～ 34.4CaOmg/g の範囲であり、試料 G（土坑周辺 地山）が最も高い値を示す。

（3）16 号土坑

野外土性は、いずれの試料も SiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/2 黒褐、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、4.97 ～ 6.07% であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.49 ～ 5.09P2O5mg/g と腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、19.5 ～ 30.9CaOmg/g の範囲であり、試料 G（土坑周辺 地山）が最も高い値を示す。

第８表　土壌理化学分析結果

遺　構	試　料	土性 *1	土色 *2	有機炭素 (%)	腐植 *3 (%)	全リン酸 P2O5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備　考
11 号土坑	A	SiC	10YR2/3　黒褐	2.16	3.72	3.69	30.5	
	B	SiC	10YR2/3　黒褐	2.24	3.86	3.41	33.6	
	C	SiC	10YR2/2　黒褐	2.35	4.05	3.47	34.9	
	D	SiC	10YR3/2　黒褐	2.46	4.24	3.76	34.6	土坑周辺
15 号土坑	A	SiC	10YR3/2　黒褐	3.22	5.55	4.55	30.8	
	B	SiC	10YR2/3　黒褐	3.06	5.28	4.43	32.1	
	C	SiC	10YR2/3　黒褐	3.04	5.24	4.09	26.5	
	D	SiC	10YR2/3　黒褐	3.00	5.17	4.41	27.0	
	E	SiC	10YR2/2　黒褐	3.19	5.50	4.19	22.8	
	F	SiC	10YR2/3　黒褐	3.13	5.40	4.38	22.8	
	G	SiC	10YR3/2　黒褐	2.57	4.43	3.48	34.4	土坑周辺
16 号土坑	A	SiC	10YR2/2　黒褐	3.39	5.84	4.67	20.6	
	B	SiC	10YR2/2　黒褐	3.52	6.07	5.09	26.4	
	C	SiC	10YR2/2　黒褐	3.21	5.53	4.53	30.7	
	D	SiC	10YR2/3　黒褐	2.96	5.10	4.61	21.0	
	E	SiC	10YR2/3　黒褐	3.43	5.91	5.06	19.5	
	F	SiC	10YR2/3　黒褐	2.88	4.97	4.40	26.2	
	G	SiC	10YR2/3　黒褐	2.88	4.97	3.49	30.9	土坑周辺

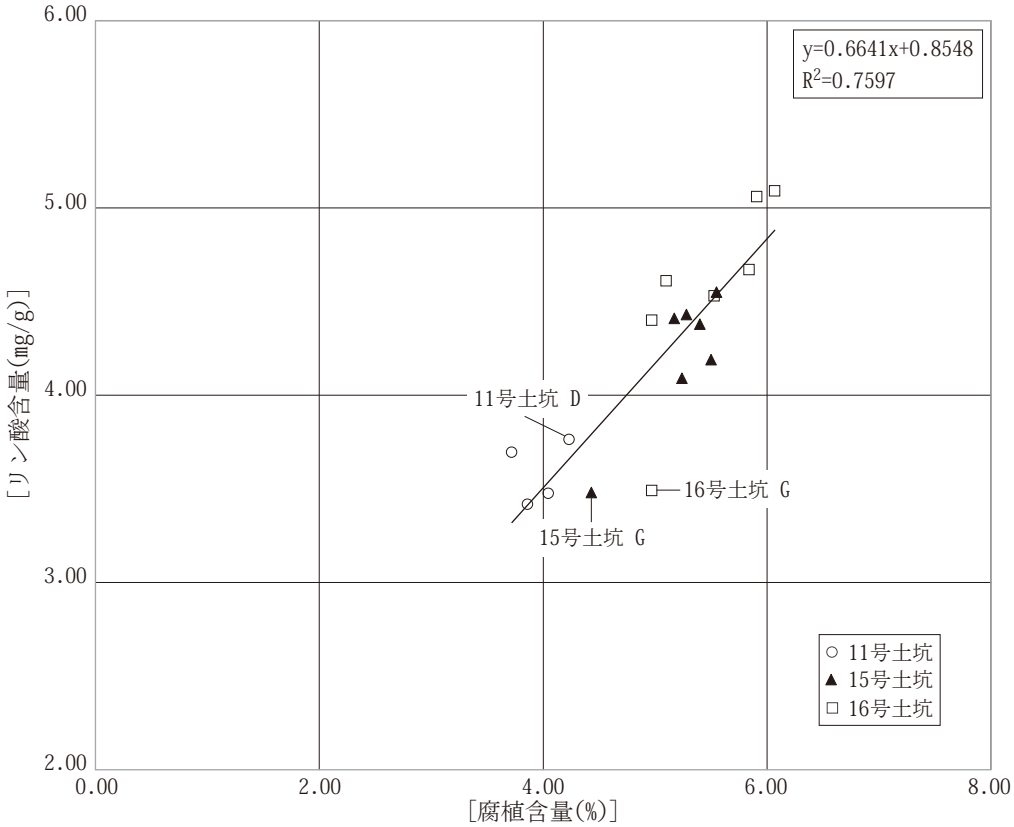
＊１　土性 : 土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編 ,1984) の野外土性による .
　SiC : シルト質埴土 (粘土 25 ～ 45%、シルト 45 ～ 75%、砂 0 ～ 30%)
＊２　土色 : マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修 ,1967) による .
＊３　腐植 : 有機炭素量× 1.724

4．考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄や

アルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壌ではリン酸の固定力が高いことから、火山灰土壌の上に立地する遺跡では生物起源残留物の痕跡確認などに有効である。

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり（Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980; 川崎ほか ,1991; 天野ほか ,1991）。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度であるが、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか ,1991）という報告例がある。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50mg/g（藤貫 ,1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。



第 66 図 腐植含量とリン酸含量の相関図

分析に供された試料のうち、土坑覆土試料はいずれもリン酸含量が天然賦存量である 3.0mg/g を上回る。一方、土坑周辺の地山試料も全て天然賦存量を超える値を示し、土坑覆土試料と測定値に大きな違いが見られない。このことから、調査地周辺の土壌は、リン酸の天然賦存量が 3.0mg/g 以上であることが考えられる。

11 号土坑では、出土遺物から土坑墓の可能性が示唆されたが、腐植含量とリン酸含量の相関関係（図 66）をみると、リン酸は腐植集積に伴うとみられ、遺体埋納の痕跡を支持することは難しい。一方、15 号土坑と 16 号土坑は、地山試料と比較して、腐植含量とリン酸含量がともにやや高い傾向を示す。図 66 からは、腐植含量の増加に伴うリン酸の富化と捉えられるが、リン酸の増加が 11 号土坑に比べて顕著である。そのため、植物遺体を給源とした自然蓄積以外にも富化の原因が存在する可能性があるが、遺体埋納による富化とするにはリン酸の富化に対してカルシウムが付随しないため、後世の施肥などの影響も考慮する必要がある。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信 ,1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 . 農林水産省農林水産技術会議事務局編 ,28-36.

Bowen,H.J.M.,1979,Environmental Cemistry of Elements.［浅見輝男・茅野充男（訳）,1983, 環境無機化学 , 元素の循環と生化学 , 博友社 ,297p.］

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.,1976,SOILCHEMISTRY.［岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行（訳）,1980, 土壌の化学 . 学会出版センター ,309p.］

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

藤貫　正 ,1979, カルシウム . 地質調査所化学分析法 ,52,57-61.

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久 ,1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 . 農林水産省農林水産技術会議事務局編 ,23-27.

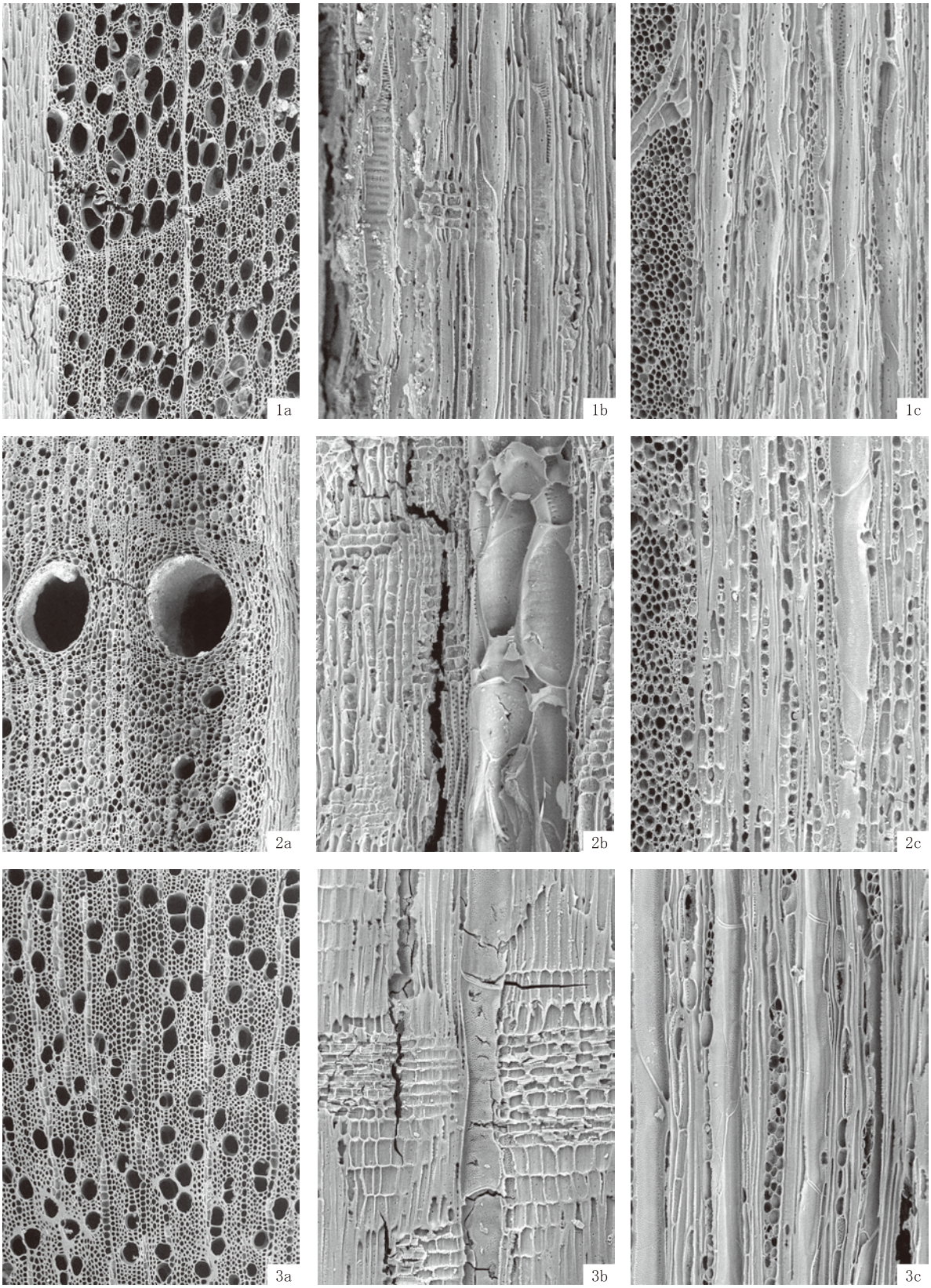
農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

ペドロジスト懇談会 ,1984, 土壌調査ハンドブック ,156p,

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

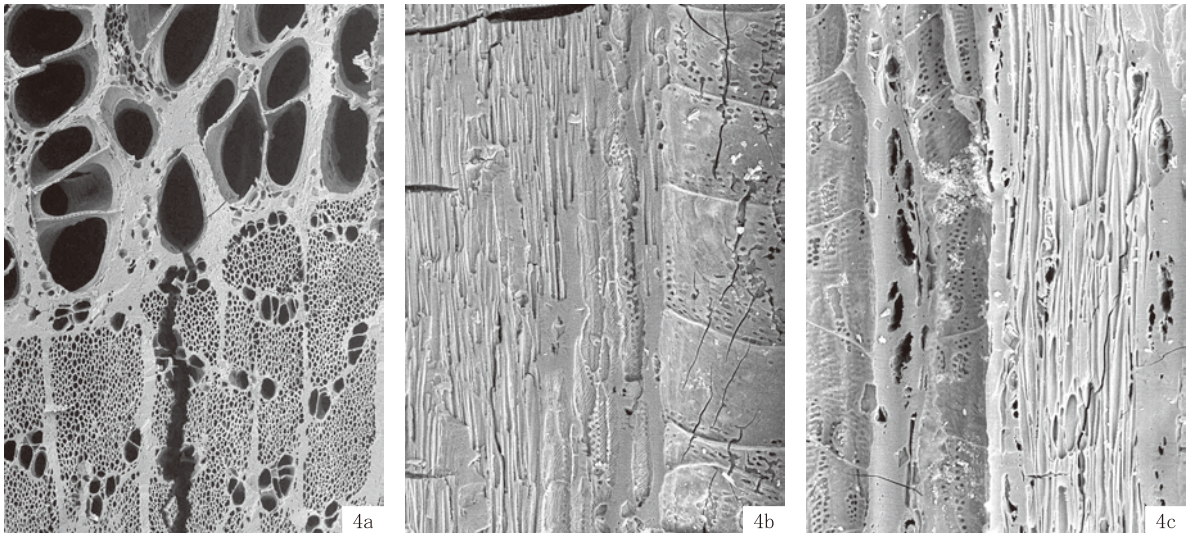
図版4 炭化材(1)



1. ブナ属(8号住居跡;炭1)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(4号住居跡;炭1)
3. ムラサキシキブ属(10号住居跡;炭1)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

図版5 炭化材(2)



4. ヤマグワ近似種(5号土坑;炭1)
a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b, c

第５章　総括

今回の三ノ側遺跡の調査では、奈良・平安時代（８世紀後半～９世紀前半）の竪穴建物跡 13 軒、ほぼ同時期に該当すると推測される掘立柱建物跡４棟、溝状遺構７条、奈良･平安時代～中世（８世紀後半～ 14 世紀ごろ）の土坑 129 基などを検出した。

ここでは出土数の多い土師器や竪穴建物跡の特徴についてまとめ、若干の考察を加えて遺跡全体の傾向を捉えることとする。

なお、時期の設定については、山梨県史における編年をもとに、段階的な変化が捉えやすい甲斐型の土師器坏を主な基準として行ったが、全体的に土師器坏の出土数が少ないので、その他の遺物や共伴する土師器甕の産地構成も判断基準としている。

第１節　土師器の特徴

１．土師器の産地について

三ノ側遺跡を含む都留市域に存在する奈良・平安時代の遺跡からは、甲府盆地で生産された土師器に加え、駿東型、在地系堀之内原タイプの土師器が多く出土する。この傾向は、特に奈良時代において顕著である。

今回の調査においても同様の傾向が見られ、大型の竪穴建物跡である４号竪穴建物跡からは比較的良好な一括資料が得られたため、土師器甕を中心に胎土分析を実施した（第４章第１節）。分析の結果、相模型と判断した土師器甕と堀之内原タイプの土師器甕の胎土組成に大きな差は認められず、ともに桂川流域の大月市付近よりも下流部に産地が推定された。

堀之内原タイプは、都留市の堀之内原遺跡出土の土器を基に提唱された都留市周辺に特有の土器型式で、色調が古代紫色もしくは肌色で、胎土に古代紫色の２～３mm 大の粒子を多量に含んでいる土師器である。整形方法の特徴としては、外面のヘラ削り及びナデ調整があげられ、ヘラ削りは長胴甕、ナデ調整は胴張甕に施される傾向がある。また、堀之内原遺跡での出土状況からはヘラ削りの長胴甕の方がより古い段階の型式となる傾向が認められる。整形方法や時期的な型式変化の特徴においても、堀之内原タイプの土師器甕は相模型の土師器甕に類似しており、今回の胎土分析から推定される土器の産地とともに、相模地域との繋がりの強さを示していると思われる。

２．土師器の時期別特徴について

４号竪穴建物跡を含む８世紀後半の竪穴建物跡からは、堀之内原タイプもしくは相模型、駿東型の土師器甕が多く出土したが、土師器坏に関してはほぼ甲斐型の土師器坏に統一されていた。このような状況は、８世紀後半の当地の集落が､甲府盆地以外の地域との地勢的な強いつながりを持ちながら､政治的には甲斐国の統制下にあったことを示していると考える。

９世紀前半になると竪穴建物跡から出土する土師器は甲斐型土器が大半を占めるようになり、甲斐国の統制力が強化されたことを窺わせる。また、煮炊具である甕の一般化から、甲府盆地方面からの人の流入あるいは政治的な投入があったのではないかと考えられる。

以下に､今回の調査で出土した土師器の特徴を産地ごとにまとめる。なお､胎土の特徴は､主に土器の断面（割れ口）の観察によるものである

甲斐型：坏・皿

明赤褐色～橙色の色調で、胎土に赤色・黒色粒子を少量含む。

８世紀後半の坏は、箱形で、外面の底部付近に丁寧なヘラ削り、内面はみこみ部に暗文が施される。底部は回

転糸切り後周囲をヘラ削りする。やや身の浅い盤状に近いものや内外面に磨きが見られるものが、８世紀後半の中でも古い段階に位置づけられる（４・７・13 号建物）。皿は存在しない。

９世紀前半の坏は、低径が縮小し、みこみ部の暗文が消滅する。口唇部は８世紀後半と同様で、外反や肥厚化しない。底部は全面をヘラ削りする（８・10・11 号建物）。内面に渦巻状の暗文が施された皿が見られる（10 号建物）。

10 世紀前半の坏・皿は、暗文がなくなり、口唇部が玉縁化する。墨書土器が見られるようになる（遺構外）。

甲斐型：甕

赤褐色～暗褐色の色調で胎土に石英や雲母を多く含む。

外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目や指頭痕が見られる。カマド周辺から多く出土し、完形に近い形まで復元できるものが多い。８世紀後半から９世紀前半にかけて顕著な差異は認められないが、９世紀前半の新しい段階のものは、頸部のくびれがなくなり、口縁部が立ち気味になる（８・10 号建物）。８世紀後半には、ロクロ整形の甕（２・３号建物）や甲斐型成立前のものと思われる器壁が分厚く刷毛目の彫りが深い長胴甕、球形で口縁部が薄く立ち上がる小型甕が見られる（４号建物）。

駿東型：甕

橙色～明褐色の色調でやや赤味を帯びるものもある。胎土は非常に緻密で石英をごく少量含むものもある。

８世紀後半では、甲斐型の土師器甕を上回るほどの量が出土しているが、９世紀前半にはほとんど見られなくなる。球胴もしくは胴張型で、頸部が「くの字」状に鋭く屈曲し、口縁部は開きながら立ち上がるが、わずかに内反しながら立ち上がるものと外反しながら立ち上がるものがある。外面の刷毛目は非常に目が細かく彫りは浅い。内面の刷毛目は外面同様目が細かいものと外面に比べてやや幅があり彫りの深いものが見られる。頸部から体部上半にかけて磨きが見られる。上部と下部を分けて製作してから接合しており、体部の中央からやや下方に接合部がはっきり残る。接合部は刷毛目が消え指頭痕や指でなでた痕跡が残る。

堀之内原タイプ・相模型：甕

赤褐色～にぶい橙色の色調で色の幅が広いが、全体的にくすんだ色調である。胎土は素地がぼそぼそしており、隙間（孔隙）が多く見える。暗赤褐色～赤色の礫を含む。礫の状態は、３～８mm ほどの礫を大量に含むものからほとんど含まないものまで様々ある。胎土分析を実施する前の段階では、ほぼこの礫の含有量で産地を推定し、礫を多く含むものを堀之内原タイプとした。なお、胎土分析によれば、この礫は安山岩もしくは凝灰岩が風化したものと考えられるとのことである。

８世紀後半では比較的多く出土しているが、単独の破片が多い。駿東型と同様に９世紀前半にはほとんど見られなくなる。外面の調整には、縦方向に大胆なヘラ削りが施される長胴型のものと、ヘラナデが施される長胴型や球胴型のものがある。長胴型の口縁は体部から口縁部へ緩やかに外反するものが多く（４号建物他）、ヘラ削りが施されるものには直線的にわずかに屈曲するものも見られる（３号建物）。球胴型のものは器壁が 1 cm 前後と厚く、体部から口縁部まで均一な厚みで整形される。頸部がカーブを描いて曲がり、口縁部はやや開いて立ち上がる。長胴型に比べて表面が均一にならされており、丁寧に作られている印象を受ける。球胴型のものとヘラ削りが施される長胴甕に礫が多く含まれ、ヘラ削りが施される長胴型のものほど色調が暗くなる傾向が見られる。

第２節　竪穴建物跡の特徴

１．竪穴建物跡の時期について

今回の調査で発見された竪穴建物跡の時期は、８世紀後半の 10 軒と９世紀前半の３軒に分かれる。さらにそれぞれの時期において、甲斐型の土師器坏の変化や土師器甕の産地構成から古段階と新段階に細分され、次のようになると考えられる。

８世紀後半（古）：１号～４号竪穴建物跡、７号竪穴建物跡、13 号竪穴建物跡
（新）：５号竪穴建物跡、６号竪穴建物跡、９号竪穴建物跡、11 号竪穴建物跡
９世紀前半（古）：11 号竪穴建物跡
（新）：８号竪穴建物跡・10 号竪穴建物跡

また、それぞれ各時期の中でも多少前後すると思われるが、４号竪穴建物跡と５号竪穴建物跡においては、遺構の距離が 20cm ほどしかないので、確実に同時には存在しなかったことがわかる。

２．竪穴建物跡の分布状況について

調査区全体図を見ると、竪穴建物跡は調査区の西側と東側に分かれて分布していることがわかる。この状況は掘立柱建物跡も同様である。調査区中央部分は南北に土坑群が分布しており、この辺りに竪穴建物跡は見られないことから、土坑群を境に西側と東側に居住区が設定されていたと推測される。

時期ごとの分布状況を見てみると、東側の居住区画ではすべての竪穴建物跡が８世紀後半のものとなり、西側では８世紀後半新段階のものが２軒、９世紀前半が３軒となる。東側では、大型の竪穴建物跡である４号竪穴建物跡を中心として配置される傾向が見られる。西側では、８世紀後半のものが北側に、９世紀前半のものが南側に位置している。また、調査区西壁や南壁にかかる竪穴建物跡が見られることから、さらに西側や南側に竪穴建物跡が分布していると推測される。調査区の南西側へ 100 mほど離れた地点には、昭和 56 年に都留市教育委員会が調査した地点があり、８世紀後半と 10 世紀前半の竪穴建物跡が発見されていることから、この地点との間にかけて建物跡が広く分布していると想定される。

３．竪穴建物跡の形状・規模について

竪穴建物跡の形状・規模は第９表のとおりである。形状には隅丸の方形と長方形が見られる。時期別に見てみると、８世紀後半の古段階に限って隅丸長方形のものが存在する。また、隅丸長方形のものは方位に関係なくカマドが設けられる壁側が長くなる傾向がある。

規模は４号竪穴建物跡が飛びぬけて大きい。時期別に見てみると、８世紀後半の古段階に比較的規模の小さい１・２号竪穴建物跡があり、４号竪穴建物跡を含め様々な規模のものが存在する傾向がある。

主軸を南北方向に設定して竪穴建物跡の向く方向を見てみると、角度にやや幅はあるが、全て南南西を向いて構築されている。掘立柱建物跡も同様の傾向にある。軸線を 90°振ると北側の桂川に並行しているので、桂川に向かって低くなる地形の傾斜に合わせたか、あるいは調査地点北側の国道 139 号部分に想定される古代道路に並行して建物が建てられたのではないかと推測される。また、この傾向は江戸時代の溝状遺構及び現代の周辺建物にも同様に見られる。

４．カマドについて

４号竪穴建物跡を除いて竪穴建物跡のカマド及びカマド周辺の床面上からは、溶岩礫が検出されており、カマドは溶岩礫を用いた石組みカマドであったと考えられる。６・７・11 号竪穴建物跡では石組みの両袖が残る。また、７号竪穴建物跡では、両袖の最上部にだけ細長い凝灰岩を用いるやや特殊な状況が認められた。４号竪穴建物跡には溶岩礫がほとんど見られず、建物の規模や出土遺物の量など他の建物跡とは性質が異なるため容易には判断できないが、カマドが人為的に破壊された痕跡が認められるため、カマド廃棄時に住居外へ持ち出された可能性が高い。カマドの奥壁にトンネル状の煙道を持つものは認められなかった。ほとんどのカマドからは灰白色粘土が大量に検出されている。建物跡が構築される地山はスコリアを多く含みザラザラして粘性が非常に弱いため、カマドを構築する際には他の地点で採取した灰白色粘土が選択的に用いられたと考えられる。この灰白色

粘土が部分的に赤味や紫色に変色していたことから、堀之内原タイプの土師器と同じ粘土ではないかと考え、土師器一括資料とともに胎土分析を行ったが、岩石組成からの類似性は認められなかった。

カマドには、竪穴の北壁に設けられる北カマドと東壁に設けられる東カマドが見られるが、北カマドが主流を占め、東カマドは調査区東側の中でも最も東寄りに位置する３・７・８号建物跡にのみ認められた。東カマドは調査区から南西へ 200 mほど離れた平成 13・14 年の都留市教育委員会よる調査地点（C・D地点）でも確認されている。

第９表 三ノ側遺跡竪穴建物跡一覧表

遺構名	位置（グリッド）	主軸	規模（m）			形状	柱穴	貼床	カマド		時期
			東西	南北	深さ				位置	構造	
1 号竪穴建物跡	K−7・8、L−8	N−24°−W	2.87	2.25	0.33	隅丸長方形	不明（外 1）	なし	北壁	石組み	8 世紀後半（古）
2 号竪穴建物跡	M−7・8	N−21°−W	2.75	2.45	0.19	隅丸方形	不明（床 1）	なし	北壁	石組み	8 世紀後半（古）
3 号竪穴建物跡	M−10、L−9・10	N−25°−W	2.76	3.78	0.48	隅丸長方形	不明（床 1）	なし	東壁	石組み	8 世紀後半（古）
4 号竪穴建物跡	N・O−8・9	N−24°−W	5.82	4.47	0.56	隅丸長方形	不明	なし	北壁	不明	8 世紀後半（古）
5 号竪穴建物跡	O−7	N−27°−W	3.2	不明	0.3	（隅丸方形）	不明	なし	北壁	（石組み）	8 世紀後半（新）
6 号竪穴建物跡	O−8・9、P−9	N−33°−W	3.29	3.43	0.57	隅丸方形	不明	なし	東壁	石組み	8 世紀後半（新）
7 号竪穴建物跡	O−10,P−9・10	N−17°−W	3.55	3.21	0.46	隅丸長方形	不明	なし	東壁	石組み	8 世紀後半（古）
8 号竪穴建物跡	B・C−6	N−26°−W	不明	3.0	0.42	（隅丸方形）	不明	なし	北壁	石組み	9 世紀前半（新）
9 号竪穴建物跡	A・B−9	N−11°−W	不明	3.82	0.62	（隅丸方形）	不明	なし	北壁	石組み	8 世紀後半（新）
10 号竪穴建物跡	D・E−6・7	N−19°−W	3.99	不明	0.25	（隅丸方形）	不明	なし	北壁	石組み	9 世紀前半（新）
11 号竪穴建物跡	C−9・10、D−9	N−21°−W	4.33	4.23	0.52	隅丸方形	竪穴外（壁２）	なし	北壁	石組み	9 世紀前半（古）
12 号竪穴建物跡	B・C−10・11	N−14°−W	3.49	3.17	0.48	隅丸方形	不明	なし	北壁	石組み	8 世紀後半（新）
13 号竪穴建物跡	J−11・12	N−22°−W	3.69	2.79	0.31	隅丸長方形	竪穴内	なし	北壁	石組み	8 世紀後半（古）

・［主軸］は比較を容易にするため全て南北方向を基準に計測した。
・［柱穴］には柱穴になりうるピットのおおまかな位置と数を（ ）内に記した。

今回の調査では、以上のような状況が認められた。三ノ側遺跡は、遺跡の推定範囲からも分かるとおり、非常に大規模な遺跡である。今回の調査においても、濃密とまでは言えないが、竪穴建物跡が広範囲にわたって存在することが確認された。平成 23 ～ 24 年度に山梨県埋蔵文化財センターが行った県立谷村工業高校地点の試掘調査の結果、奈良・平安時代の文化層が確認され、さらに東側へ遺跡の推定範囲が拡大されている。今後も、遺跡の全容解明に向けたさらなる資料の集積に期待したい。

また、今回の調査では４号竪穴建物跡から出土した産地の異なる土師器一括資料の胎土分析を実施し、詳細な岩石組成の情報を得ることができた。古代都留郡及び周辺地域の生産・流通の状況を検討するうえでの基礎的なデータとして活用されることを期待したい。

引用・参考文献

・神奈川考古同人会　1983『神奈川考古』第 14 号 シンポジウム奈良－平安時代土器の諸問題と周辺地域の様相－
・杉本悠樹　2008「古代甲斐国都留郡の様相」『山梨県立博物館 調査･研究報告２ 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
・都留市　1986『都留市史』資料編 地史・考古
・都留市　1988『都留市史』資料編 都留郡村絵図・村明細帳集
・都留市　1996『都留市史』通史編
・都留市教育委員会　2003『三ノ側遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第 12 集
・都留市教育委員会　2010『山梨県都留市内発掘調査報告書 平成 17 ～ 21 年度調査』都留市埋蔵文化財調査

報告書第 13 集
・奈良泰史　1980「『堀之内原 type』の提唱に関する覚書き」『山梨考古』 3　山梨県考古学協会
・ 日本考古学協会 2011 年度栃木大会実行委員会　2011「シンポジウムⅢ 古代社会の生業をめぐる諸問題」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会研究発表資料集』
・室伏　徹・平野　修　2004「大月遺跡について ‐ 都留郡家（衙）としての再検討 ‐ 」『山梨考古学論集』Ⅴ 山梨県考古学協会
・平野　修　2011『鷹の巣遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第 14 集 （財）山梨文化財研究所
・山梨県　1999『山梨県史』資料編 2 原始・古代 2
・山梨県　2004『山梨県史』通史編 1 原始・古代
・山梨県教育委員会　2012『滝沢遺跡（第 2 次)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 282 集
・八巻與志夫　1986「古代甲斐国の郷配置の基礎的操作」『山梨考古学論集』Ⅰ　山梨県考古学協会

写 真 図 版

調査区第 2 地点全景（東側上空から）

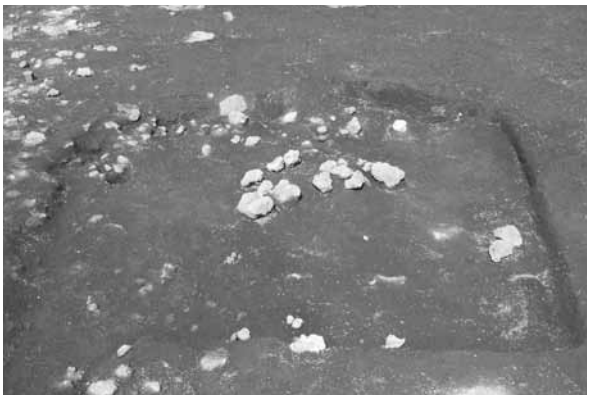
調査区第 3 地点全景（西側上空から）

写真図版２

１号竪穴建物跡遺物出土状況

１号竪穴建物跡完掘状況

１号竪穴建物跡カマド周辺遺物出土状況



２号竪穴建物跡完掘状況

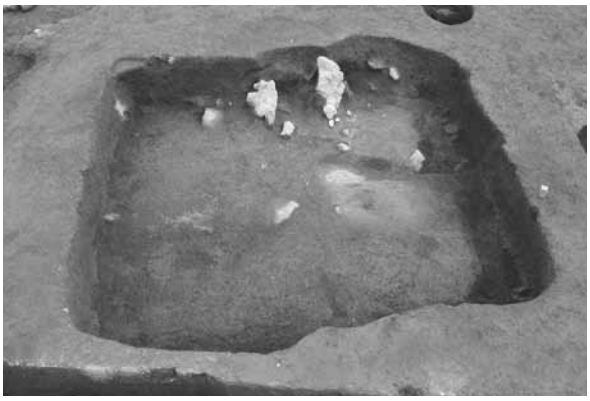
２号竪穴建物跡遺物出土状況

３号竪穴建物跡完掘状況

４号竪穴建物跡完掘状況

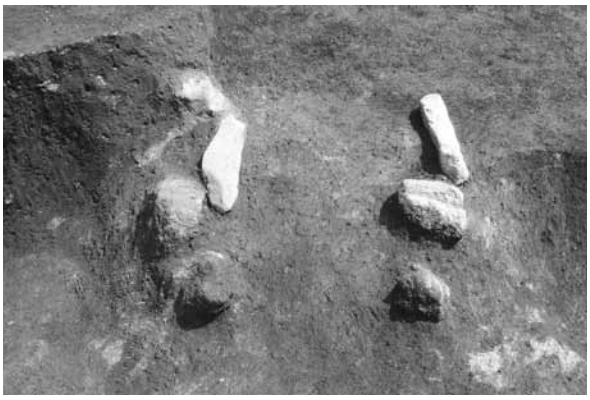
４号竪穴建物跡カマド周辺遺物出土状況

５号竪穴建物跡完掘状況



６号竪穴建物跡完掘状況

７号竪穴建物跡完掘状況



７号竪穴建物跡カマド検出状況

７号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

８号竪穴建物跡完掘状況

８号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

９号竪穴建物跡完掘状況

写真図版４

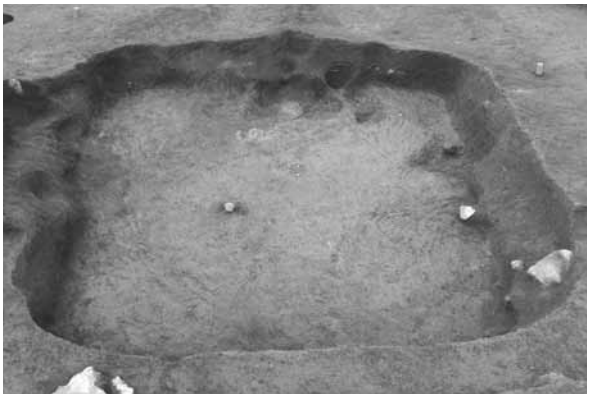
9 号竪穴建物跡溶岩礫検出状況

9 号竪穴建物跡遺物出土状況

9 号竪穴建物跡調査区壁断面

10 号竪穴建物跡完掘状況

10 号竪穴建物跡調査区壁断面



11 号竪穴建物跡完掘状況

11 号竪穴建物跡カマド検出状況

11 号カマド石組み検出状況

12 号竪穴建物跡完掘状況

12 号竪穴建物跡溶岩礫検出状況

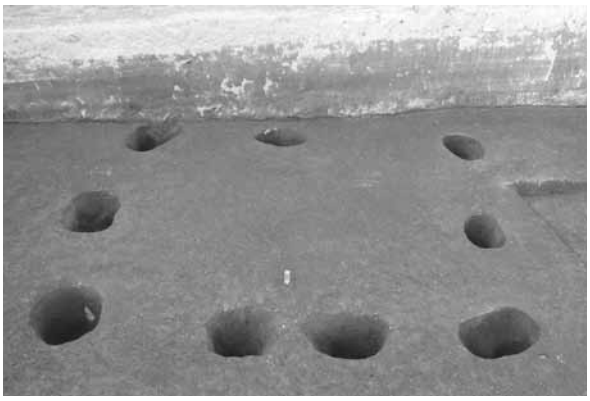
12 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

13 号竪穴建物跡完掘状況

1 号掘立柱建物跡

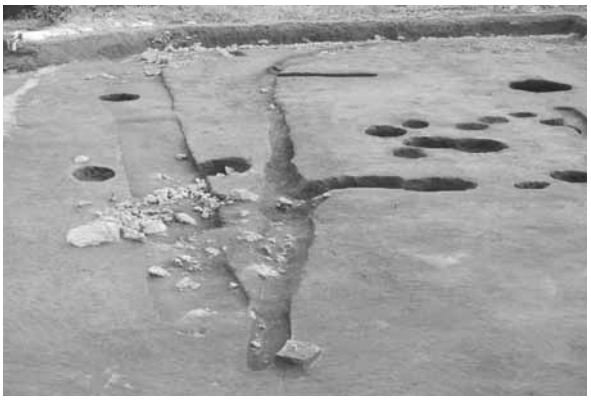
2 号掘立柱建物跡

3 号掘立柱建物跡



4 号掘立柱建物跡

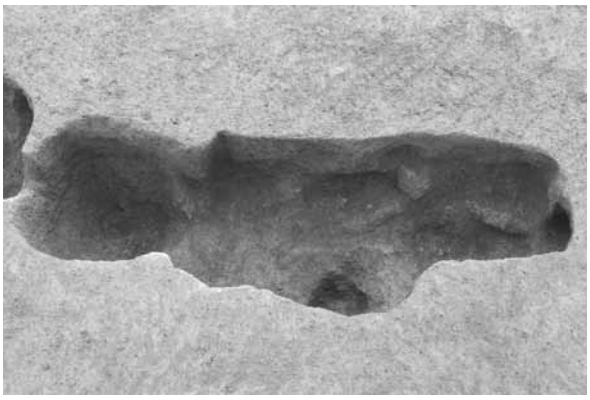
写真図版６



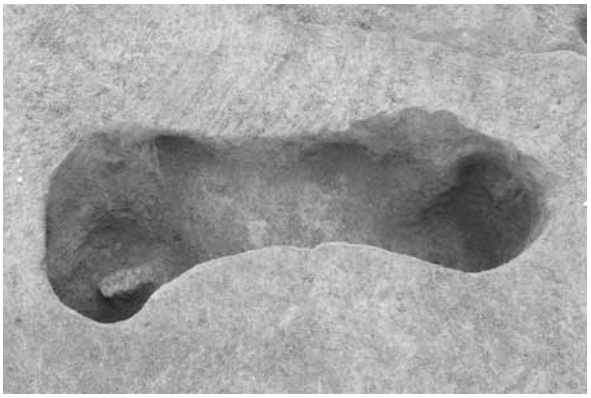
１号溝状遺構

１号溝状遺構・河川跡

河川跡近景



２号溝状遺構



３号溝状遺構

４号溝状遺構

５号溝状遺構

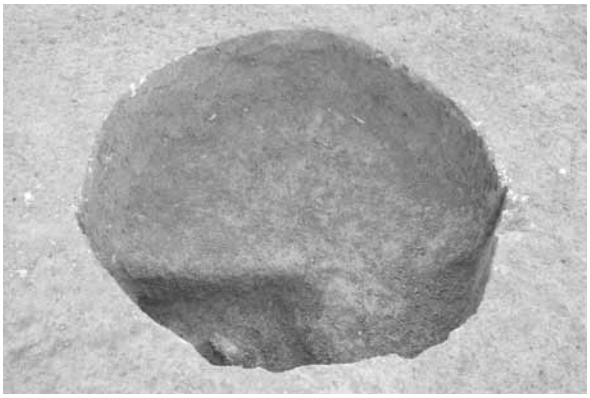
７号溝状遺構

5号土坑と周辺に露出する溶岩

11 号土坑遺物出土状況（１）

11 号土坑遺物出土状況（２）

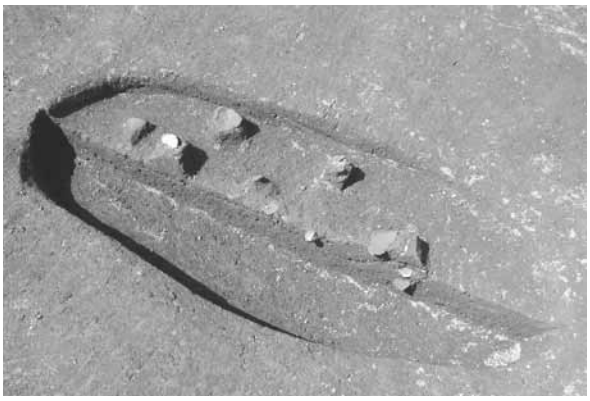
11 号土坑完掘状況



15 号土坑完掘状況

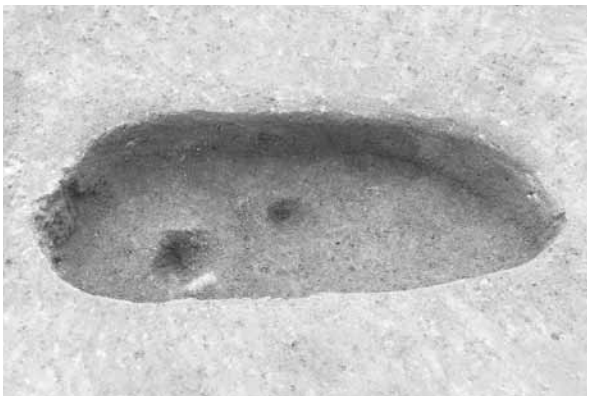
16 号土坑完掘状況

23 号土坑遺物出土状況



24 号土坑遺物出土状況

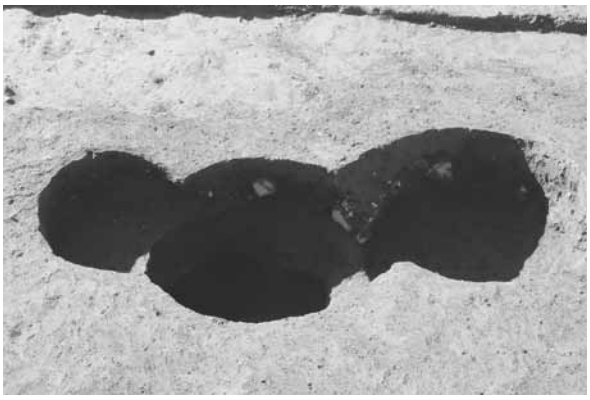
写真図版８



24 号土坑完掘状況

34 号土坑溶岩礫検出状況

79 号土坑



89・90・91 号土坑

115 号土坑

31・32 号土坑、Ⅱ層４～６号溝状遺構

Ⅱ層８・９号溝状遺構に切られる 35 号土坑

Ⅱ層 20 号溝状遺構

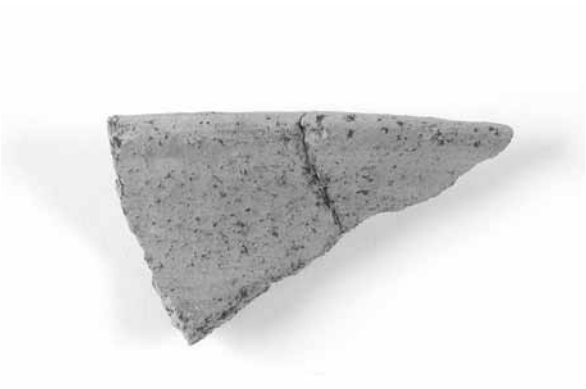
1号竪穴建物跡出土遺物（No. 6）

１号竪穴建物跡出土遺物（図版 No. １５）

２号竪穴建物跡出土遺物（No. 2）

２号竪穴建物跡出土遺物（No. 3）

２号竪穴建物跡出土遺物（No.11）



３号竪穴建物跡出土遺物（No. 6）

３号竪穴建物跡出土遺物（No. 7）

３号竪穴建物跡出土遺物（No.15）

4号竪穴建物跡出土甲斐型土師器坏

4号竪穴建物跡出土遺物（No.15）

4号竪穴建物跡出土遺物（No.17）

4号竪穴建物跡出土遺物（No.18）

4号竪穴建物跡（No.19）

4号竪穴建物跡出土遺物（No.35）

4号竪穴建物跡出土フイゴの羽口（No.107）

5号竪穴建物跡出土甲斐型土師器甕

5号竪穴建物跡出土遺物（No. 4）

5号竪穴建物跡出土遺物（No. 6）

6号竪穴建物跡出土遺物（No.13）

6号竪穴建物跡出土遺物（No.16）

7号竪穴建物跡出土遺物（No. 5）

7号竪穴建物跡出土駿東型土師器甕

8号竪穴建物跡出土遺物（No. 1）

8号竪穴建物跡出土遺物（No. 3）

写真図版12

8号竪穴建物跡出土遺物（No. 6）

9号竪穴建物跡出土遺物（No. 4）

9号竪穴建物跡出土遺物（No.11）

9号竪穴建物跡出土遺物（No.14）

10号竪穴建物跡出土遺物（No. 1）

10号竪穴建物跡出土遺物（No. 3）

10 号竪穴建物跡北東コーナー供伴遺物

11 号竪穴建物跡出土遺物（No. 1）

11 号竪穴建物跡出土甲斐型土師器甕

11号竪穴建物跡出土遺物（No. 7）

11 号竪穴建物跡出土遺物（No.25）

12 号竪穴建物跡出土遺物（No. 1）

12 号竪穴建物跡出土遺物（No. 3）

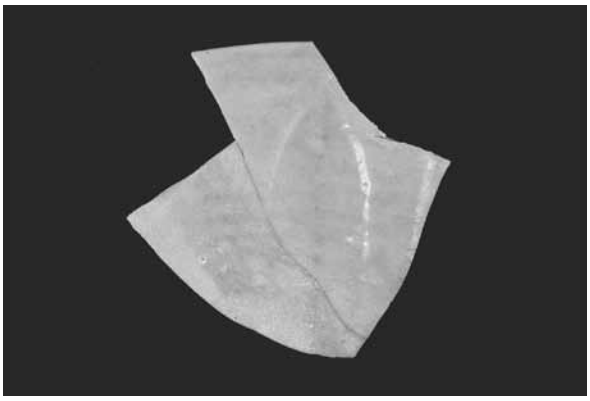
13 号竪穴建物跡出土遺物（No. 1）

13 号竪穴建物跡出土遺物（No. 2）

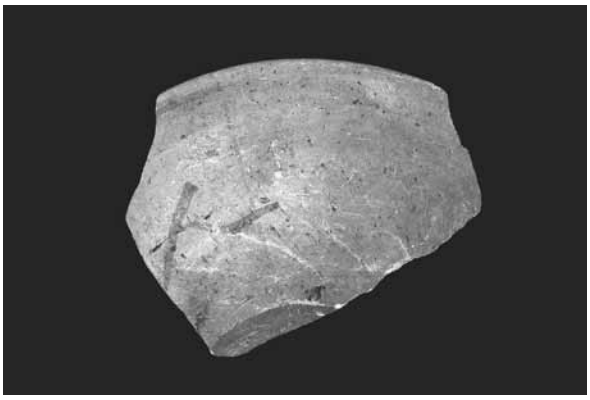
11 号土坑出土遺物（No. 1）

写真図版14

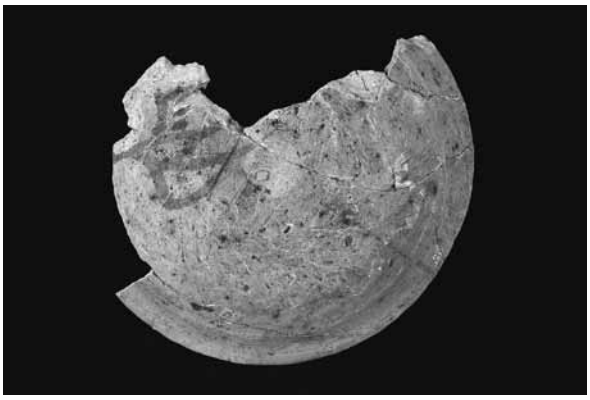
23 号土坑出土遺物（No. 1）



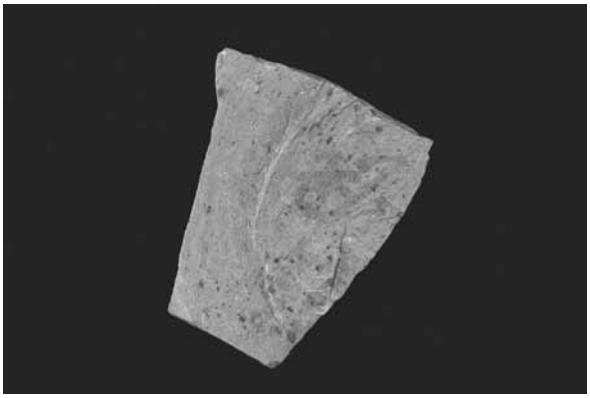
79 号・115 号土坑出土遺物（No. 1）



遺構外出土墨書土器（No. 1）



遺構外出土墨書土器（No. 2）



遺構外出土墨書土器（No. 3）

鉄製品

手鎌（1・4号竪穴建物跡出土）

鑿（遺構外出土）

報　告　書　抄　録

ふりがな	さんのがわいせき
書名	三ノ側遺跡
副題	県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 290 集
著者名	依田幸浩　加々美鮎実　パリノ・サーヴェイ株式会社
発行者	山梨県教育委員会・山梨県産業労働部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923　　ＴＥＬ 055 － 266 － 3016
発行年月日	2013 年 3 月 22 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さんのがわいせき	やまなしけんつるぐんかみやごちょうめ	19204	84	35°32′36″	138°54′03″	20110629～20111226	3,800㎡	記録保存調査
三ノ側遺跡	山梨県都留郡上谷五丁目							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ノ側遺跡	集落	奈良・平安・中世・近世	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・河川跡	土師器・須恵器・金属製品	土師器の胎土分析を実施

要約	古代甲斐国都留郡多良郷に推測される集落の発掘調査である。奈良時代後半から平安時代初頭にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出された。竪穴建物跡出土の土師器一括資料の胎土分析を実施し、遺跡周辺の生産・流通を検討するうえでの基礎的データを得ることができた。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 290 集

三　ノ　側　遺　跡

― 県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告 ―

印刷日　2013（平成 25）年 3 月 15 日
発行日　2013（平成 25）年 3 月 22 日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923
TEL 055-266-3016　FAX 055-266-3882
発　行　山梨県教育委員会・山梨県産業労働部
印　刷　株式会社峡南堂印刷所